キリストの
実物教訓
エレン・G・ホワイト

New Covenant Publications International Ltd. Japanese

版権©2020. 国際新しい契約の出版物。

無断で複写転載することを禁じます。本書のいかなる部分も弊社の許諾なく検索システムへ保存したり、 電子データ、 紙媒体、または録音などの方法で複写・ 転送することを禁じます。

この文書は、国際著作権法によって保護されています。この文書のいかなる部分も、いかなる形式でも複製、配布、翻訳、または送信することはできません。 または、電子的または機械的、コピー、記録、または保存を含む任意の手段 あらゆる情報の保存および検索システム。

式や手段によって。ISBN：359-2-85933-609-1

データカタログ

編集とデザイン：国際新しい契約の出版物。

イギリスで印刷。
初版 2020 年 5 月 26 日

New Covenant Publications International Ltd.,
Kemp House, 160 City Road, London, EC1V 2NX

ウェブサイトをご覧ください：www.newcovenant.co.uk

キリストの
実物教訓
エレン・G・ホワイト

天国は、畑に隠してある宝のようなものである。人がそれを見つけると隠しておき、喜びのあまり、行って持ち物をみな売りはらい、そしてその畑を買うのである。また天国は、良い真珠を捜している商人のようなものである。高価な真珠一個を見いだすと、行って持ち物をみな売りはらい、そしてこれを買うのである。

このページは意図的に空白になっています。

New Covenant Publications

International Ltd.

改革ブック、変換された心は

New Covenant Publications International Ltd.,
Kemp House, 160 City Road, London, EC1V 2NX

Email: newcovenantpublicationsintl@gmail.com

謝辞

この本を天の神にささげる

序文

新しい契約出版物国際は、天と地を結合し、愛の律法の永続性を強化する神の計画を読者に再接続します. ロゴ、契約の箱は、キリスト イエスと彼の人々と神の律法の中心性との間の親密さを表しています. 新しい契約とはこうだ - の書にあるとおりです "わたしは、わたしのおきてを彼らの心に刻みつける。そのため彼らは、わたしをあがめたいという気持ちになる。こうして、彼らは文字どおりわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。" (エレミヤ書 31:31-33) 確かに、新しい契約は償還を証明し、衰えのない闘争によって生まれ、血によって封印されます.

数え切れないほどの世紀のために、多くは真実を消し去るために計算され、かじり苦悩と不可解な弾圧を耐えてきました. 特に暗黒時代に,この光は非常に四面楚歌と人間の伝統と人気の無知によって隠されていました,世界の住民は知恵を軽蔑し、契約を犯していたの 増殖する悪との妥協の疫病は、多くの人生が不当に犠牲にされ、良心の自由を放棄することを拒否した、放逸な退化と悪魔的な非人道的な惨状を引 それにもかかわらず、失われた知識は、特に改革の時に復活した.

16世紀の改革の時代は、反改革に反映されるように、真実、根本的な変化とその結果としての乱流の瞬間を巻き起こしました. しかし、この巻を通じて、改革者や他の勇敢な開拓者の視点から、この特異な革命の否定できない意義を再発見する. 彼らの説明から、荒廃した戦い、そのような驚異的な抵抗と超自然的な介入の根底にある理由を理解することができます.

私たちのモットー："改革ブック、変換された心は、"重要な時代とその影響で構成される文学の明確なジャンルを、強調する. それはまた個人的な改革、再生および変形の緊急を共鳴させる. 翻訳の代理店によって結合されたグーテンベルク印刷機として、改革信仰の原則を広め、約500年前に、デジタル化されたプレスとオンラインメディア.

キリストの実物教訓

目次

第1章 キリストの実物教訓 6

第2章 種まきの話 14

第3章 神の力による成長 40

第4章 庭園の雑草 46

第5章 一粒のからし種のようなもの 51

第6章 自然界に働く神の力 55

第7章 パン種のようなもの 64

第8章 隠された宝物 70

第9章 高価な真珠 82

第10章 漁師の網 88

第11章 宝の倉の中の宝石 90

第12章 求めよ、そうすれば、与えられるであろう 100

第13章 神殿の中の2人の礼拝者 113

第14章 祈りの能力 126

第15章 この人は罪人たちを迎えて 142

第16章 本心に立ちかえった青年 155

第17章「ことしも、そのままにして置いてください」 167

第18章 道やかきねのあたりから招かれた客 174

第19章 人を赦す方法 191

第20章 愚かな金持ち 199

第21章「大きな淵がおいてあって」 205

第22章 言葉よりは行動 217

第23章 主のぶどう園 229

第24章 王の婚宴 251

第25章 タラントの正しい用い方 262

第26章 神と人に対する責任 301

第27章 わたしの隣人とはだれのことですか 310

第28章 恵みの報い 322

第29章 花婿を迎える準備 336

第1章 キリストの実物教訓

キリストのたとえの中には、キリストご自身がこの世界に対して持っておられた使命と、同じ原則を見ることができる。キリストは、わたしたちの性質をとって、わたしたちの間にお住みになった。それは、キリストが持っておられた神の性質と命とを、人間が知ることができるためであった。神性が、人性の中に啓示されたのである。目に見えない栄光が、人間の姿の中にあらわされた。人間は、未知のものを、すでに知っているものによって学ぶのである。天のものが、地上のものによって啓示された。神が、人間のかたちの中にあらわされた。キリストの教えにおいてもそのとおりであった。未知のことが、既知のことによって説明された。人々が一番よく知っている地上のことによって、神の真理が明らかにされた。 {COL 1193.1}

聖書にこう書いてある。「イエスはこれらのことをすべて、譬（たとえ）で群衆に語られた。……これは預言者によって言われたことが、成就するためである。『わたしは口を開いて譬を語り、世の初めから隠されていることを語り出そう』」（マタイ13：34、35）。自然のものが、霊的なものの媒介となった。自然界のものや、聴衆の人生経験が、み言葉の真理に結びつけられた。このように、キリストのたとえは、自然界から霊的な世界へと導き、人を神と1つにし、地を天と結合させる真理の鎖の環である。 {COL 1193.2}

キリストが自然のことを教えられた時、それは、ご自身の手が造って、ご自身が与えられた能力や機能について語っておられたのである。すべての造られたものは、初めの完全な状態にあった時、神の思想を表現していた。エデンの家庭にいたアダムとエバにとって、自然界は、神の知識に満ち、神の教訓にあふれたものであった。知恵は、彼らの目から入って、心に蓄えられた。彼らは、神の創造されたものによって、神と交わった。ところが、この清い夫婦が、至高者の律法をおかすや否や、神のみ顔の輝きが自然界の表面から去ってしまった。地球は、罪に損なわれてしまった。しかし、その破壊された状態にあ

っても、なお、美しいものが多く残っている。神の実物教訓は消し去られてはいない。正しく理解しさえすれば、自然は、その創造者について語るのである。{COL 1193.3}

キリストのおられたころには、こうした教訓が見失われていた。人々は、神のみわざである自然を見ても、神を認めることはほとんどできなくなっていた。人類の罪深さは、美しい世界の表面に黒衣をかぶせた。そして自然は、神をあらわすのでなくて、かえって、神をかくす障害物となってしまった。人々は、「創造者の代りに被造物を拝」んだ。こうして、異邦人の「思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからである」（ローマ1：25、21）。同様に、イスラエルの国でも、神の教えの代わりに、人間の教えが人々に強いられた。自然の中のものだけではなく、神を啓示するために与えられた犠牲制度と聖書自身までが、非常にゆがめられて、神を隠す手段とまでなっていた。{COL 1193.4}

キリストは、このようにして真理をおおい隠していたものを取り除こうとされた。キリストが来られたのは、罪が自然の上に投げかけた幕を開いて、万物が造られた時に反映することになっていた、霊的栄光をあらわすためであった。彼の言葉は、聖書の教えと同様に自然の教えをも、全く新しい姿のものとし、新しい啓示としたのである。{COL 1193.5}

イエスは、美しい野の花をつんでは、子供や青年にお与えになった。彼らが、天父のみ顔の光をうけて、若々しく輝くイエスの顔をながめていると、イエスは次のように教訓をお与えになった。「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい。〔自然のままの単純な美しさで〕働きもせず、紡ぎもしない。しかし、あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の1つほどにも着飾ってはいなかった」。イエスは、さらに続けて、「きょうは生えて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか

。ああ、信仰の薄い者たちよ」と言われて、尊い確証と教訓をお与えになった。 {COL 1193.6}

山上の説教のこのような言葉は、子供と青年だけでなく、他の者に向かっても語られた。それは、さまざまな心配と苦労にみち、失望と悲しみに沈んだ人々のいる群衆に向かって語られた。 {COL 1194.1}

「だから、何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらうな。これらのものはみな、異邦人が切に求めているものである。あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じである」とイエスは言われた。そして、彼は、まわりの群衆にむかって、両手をひろげて、「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」とおおせになった（マタイ6：28～33）。 {COL 1194.2}

こうしてキリストは、ご自分が野の花や草に託された使命を解き明かされた。彼は、わたしたちが、どの草花にも、そうしたメッセージを読むことを望んでおられる。キリストの言葉は、確信に満ちていて、神に対する信頼を強めずにはおかない。 {COL 1194.3}

キリストの真理に関する観念は、実に広く、その教えも各方面にわたったものであったので、自然界のあらゆる方面のものが、真理の例として用いられた。毎日、人々の目に触れる光景が、霊的真理に結びつけられたために、自然は、主のたとえによって装いを新たにした。 {COL 1194.4}

キリストは伝道を開始されたころ、真理を平易にお語りになった。それは、すべての聴衆が真理を理解して、救いにいたる知恵を得るためであった。しかし、真理は、多くの人の心の中に根をおろすにはいたらず、すぐに、取り去られた。「だから、彼らには譬で語るのである。それは彼らが、見ても見ず、聞いても聞かずまた悟らないからである。

……この民の心は鈍くなり、その耳は聞えにくく、その目は閉じている」とイエスは言われた（マタイ13：13～15）。 {COL 1194.5}

イエスは、人々が心の中に質問を起こすことを望まれた。彼は不注意な者の目をさまし、真理を示して、彼らの心に強い感銘を与えようとなさった。たとえを用いて教えることは、一般に行われていたことで、たとえによって語ることはユダヤ人ばかりでなくて、他国の人々の尊敬と注目をも引いた。キリストにとって、これ以上の効果的な方法は他になかった。もし聴衆が神に関することを知ろうと思えば、イエスの言葉を理解することができたはずであった。イエスは、真面目な質問をしてくる人には、いつも喜んで説明をなさったからである。 {COL 1194.6}

また、キリストが語ろうとされる真理に対して、人々の側では受けいれる準備もなければ、理解することさえできないことがあった。キリストがたとえを用いてお教えになったもう1つの理由は、これであった。また、その教えを人生の実際のできごとや経験や自然界と結びつけて、人々の注意を引き、深い感銘をお与えになった。キリストの教えの例としてあげられたものを、人々があとで見た時に、彼らは、天からの教師イエスの言葉を思い出した。こうして聖霊の働きに対して開かれている心には、救い主の教えの意味がますます明らかに示された。神秘的なことも明瞭になり、前には把握できなかったことも明白になった。 {COL 1194.7}

イエスは、すべての人の心に通じる道をおさがしになった。彼は、さまざまな例話をお用いになることによって、真理の種々な面のことを説明するばかりでなく、異なった聴衆に訴えられたのである。人々の日常生活の中から引かれた比喩に、人々は興味を持った。救い主の言葉に聞き入っていた人の中には、1人として、自分はかえりみられていないとか、忘れ去られているとか感じる者はなかった。どんなに卑しく、罪深い人であっても、同情と親切なひびきをもって語りかける主のみ声を、彼の教えの中に聞いたのである。 {COL 1194.8}

それから、イエスがたとえによってお教えになった理由が、ほかにもあった。彼の周りに集まった群衆の中には、祭司、ラビ、律法学者、長老、ヘロデ党の者、会堂の司、俗人、頑固者、または、野心家などがいて、なんとかして、イエスを訴える言いがかりを見つけようとしていた。彼らの手下どもは、毎日、イエスにつきまとって、民心を全く捕らえてしまったかと思われる主を罪に定めて、永久に沈黙させてしまう材料を手に入れようとしていた。救い主は、この人々の性 1195格をよく心得ておられて、彼らがサンヒドリンの議会に、イエスを告訴できるようなことは、何1つ言わないようにして、真理を説かれた。彼は、高い地位の人々の偽善と悪行をたとえによって責め、鋭く人の心を刺す真理を比喩的な言葉によって表現された。もしもイエスが直接人々に非難の言葉を言われたとするならば、彼らは耳を傾けるどころか、ただちに、イエスの伝道の働きを阻止したことであろう。 {COL 1194.9}

こうしてイエスは、スパイには、なんの手がかりも与えないでおきながら、真理を明らかにして、誤りをはっきり示されたので、真面目な人はイエスの教えによって啓発されるところが多かった。神の知恵と無限の恩恵とが、神の創造されたものによって明らかにされた。「神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは、天地創造このかた、被造物において知られていて、明らかに認められるからである」（ローマ1：20）。 {COL 1195.1}

救い主のたとえ話には、真の「高等教育」がなんであるかが示されている。キリストは、科学のどんな深い真理でも、人に説明することがおできになった。人類が、幾世紀もの努力と研究を重ねて、到達できるような神秘の扉を、開くこともおできになった。また、世界の終わりにいたるまでの思想のかてとなり、発明の刺激となる科学的提言をすることも、主には可能であった。しかし、彼はそうはされなかった。人々の好奇心を満たし、または世俗的な偉大さへの希望をいだかせて、野心を満足させるようなことは、何も言われなかった。キリストは、何をお教えになっても、人間の心を、無限の神の心に接触させるようになさった。神と、神のみ言葉、または、神の働きに関して、人間が述べた理論を

学ぶようには、少しも指導なさらなかった。彼は、神の創造の働きと神のみ言葉と、そして、神の摂理の中に示されている神をながめるよりにとお教えになった。 {COL 1195.2}

キリストは、抽象的理論はお扱いにならないで、品性の向上に必要なもの、神を知る能力を高め、善を行う力を増すものを扱われた。彼は、日常生活の行状とか、永遠に関する真理について語られたのである。 {COL 1195.3}

むかし、イスラエルの民の教育を指導したのは、キリストであった。神の戒めと定めとについて、主は、こう言われた。「努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語らなければならない。またあなたはこれをあなたの手にっけてしるしとし、あなたの目の間に置いて覚えとし、またあなたの家の入口の柱と、あなたの門とに書きしるさなければならない」（申命記6：7～9）。イエスは、この戒めをどうして守ることができるか、すなわち、神の国のおきてと原則の美しさと尊さを、どうすればあらわすことができるかを、その教えの中で示された。 {COL 1195.4}

主がイスラエルの民族をご自分の特別な代表者とするために訓練なさった時、住居として彼らにお与えになったのは、山地や谷間であった。彼らの家庭生活と宗教的行事とは、常に彼らを自然と神のみ言葉とに接触させた。そのように、キリストも弟子たちを湖畔や山腹、または原野や森林に導かれたので、弟子たちはお教えの中で引用される自然の事物を目の前に見ることができた。彼らは、こうしてキリストから学んだ知識を実際に活用して、主と協力して働いた。 {COL 1195.5}

わたしたちも、同様に、自然を通じて創造主を知らなければならない。自然という書物は、一大教科書であるから、神の品性について人に教えたり、いなくなった羊を神のおりに連れもどしたりするために、聖書とともに用いなければならないものである。神のみわざを研究すると、聖霊が人の心に確信を与える。この確信は、理論的推論から得られる

ものではない。しかし、神を知ることができないほどに心が暗くなり、神を見ることができないほどに目がくらみ、み声を聞くことができないほどに耳がにぶくなっていないかぎり、人は、その深い意味を理解し、み言葉の崇高な霊的真理に強い感銘を受けるのである。 {COL 1195.6}

このような自然からの直接の教訓を、何にもまして価値あるものとするのは、その単純さと純粋さである。自然からの教訓は、すべてのものに必要である。もともと、自然の美は、罪とそして、世の誘惑から人の心 1196を引き離して、純潔と平和と神へと向けさせるものである。とかく、学生の心は、いわゆる科学や哲学と名づけられている人間の学説や推論にとらわれる。学生は、親しく自然に接する必要がある。そして、自然の神も、キリスト教の神も、1つであることを学ばなければならない。自然界と霊界は一致していることを彼らに教えなければならない。彼らの目が見、手が触れるすべてのものを、品性建設の教訓としなければならない。こうして、彼らの知力は強められ、品性は啓発され、生活が全面的に高尚にされるのである。 {COL 1195.7}

キリストが、たとえ話を語られた目的は、安息日の目的と全く同じものであった。神のみ手のわざを見て、人間が神を認めるようになるために、神は、ご自分の創造の力を記念するものを、人間にお与えになった。 {COL 1196.1}

安息日は、自然の中に、創造主の栄光を見ることを、わたしたちにうながしている。そして、イエスが自然界の美とご自分の尊い教訓とを結合されたのも、そのことを願われたからである。わたしたちは、清い休みの日には、他のどんな日にもまさって、神が自然の中に書かれた使命を学ばなければならない。わたしたちも、救い主がたとえ話をお語りになった野原や森林、あるいは戸外の草花の中などで、たとえを研究しなければならない。自然のふところに近づけば近づくほど、キリストは、ご自分の臨在を明らかにわたしたちに示して、平和と愛の言葉をお語りになるのである。 {COL 1196.2}

キリストは、単に安息日ばかりでなく、普通の労働の日にも、教訓を結びつけられた。彼は、畑を耕し、種をまく人に、知恵をお与えになる。畑にあぜを作って種をまき、耕しては収穫を刈りとるということから、キリストの恵みがどのように人の心の中で働くかを学ぶように、主はお教えになる。こうして、どんな職業に従事し、どんな社会にいようとも、そこで神の真理を学ぶようにイエスは望まれる。そうする時、日常の雑事に心を奪われて、神を忘れることはない。 {COL 1196.3}

自然は常に、わたしたちの創造主であり、あがない主であるイエスを思い起こさせる。神の思いは、黄金の糸のように、わたしたちのすべての家庭の仕事や職業の中に一貫して見られるようになる。そして、わたしたちは、神のみ顔の栄光が、再び自然界の上に輝くのを見る。わたしたちは、天の真理を学び続けて、主の純潔なお姿へと成長し続けることであろう。こうして、わたしたちは、「主に教をうけ」る者となり、召されたそれぞれの場所で、「神のみまえにいる」ことであろう（イザヤ54：13、Ⅰコリント7：24）。 {COL 1196.4}

第2章　種まきの話

本章は、マタイ13：1～9、18～23、マルコ4：1～20、ルカ8：4～15に基づく{COL 1196.5}

種まきと種

キリストは、種まきのたとえによって、天国のことと、大いなる農夫であられる神が、神の民のために何をなさるかをお教えになった。農夫が畑に出て種をまくのと同じように、イエスは、真理という天からの種をまくためにこられた。イエスのたとえそのものが種であった。キリストの恵みに関する尊い真理は、たとえによってまかれた。種まきのたとえは、一見簡単なもののように思われるために、その真価が十分に認められていない。種を土地にまくことから、福音の種をまけば、人々を神に立ち帰らせるにいたることを考えることを、キリストは望まれた。小さい種のたとえを語られたのは、天の王である。そして、この地上の種まきを支配するのと同じ法則が、真理の種まきをも支配している。{COL 1196.6}

ガリラヤの湖畔には、イエスを見、彼の話を聞こうとする一団――熱心に何かを期待する群衆がすでに集まっていた。病人も敷物の上に横たわって、彼にいやしを求める時をいまかいまかと待っていた。罪深い人類の苦しみをいやすことは、神から与えられたキリストの権限であった。キリストは、病気をいやし、ご自分の周りに命と健康と平和とをふりまかれた。{COL 1196.7}

群衆は続々とやってきて、キリストの周りにつめよって、立つ場所すらなくなった。そこで、イエスは漁船の中の人々に声をかけて、彼を向こう岸にお連れするために、おいてあった舟に乗り、岸から少しこぎ出させて、そこから、岸辺にいる群衆にお話しになった。{COL 1197.1}

湖畔一帯は、美しいゲネサレの平野で、向こうには山々が見えていた。そして、山にも野にも忙しく働く農夫たちの姿が見え、種をまく人もあれば、すでに実った穀物のとり入れをしている人もあった。こうした光景を見ながら、キリストは言われた。{COL 1197.2}

「見よ、種まきが種をまきに出ていった。まいているうちに、道ばたに落ちた種があった。すると、鳥がきて食べてしまった。ほかの種は土の薄い石地に落ちた。そこは土が深くないので、すぐ芽を出したが、日が上ると焼けて、根がないために枯れてしまった。ほかの種はいばらの地に落ちた。すると、いばらが伸びて、ふさいでしまった。ほかの種は良い地に落ちて実を結び、あるものは100倍、あるものは60倍、あるものは30倍にもなった。」{COL 1197.3}

キリストの務めは、彼の時代の人々に理解されなかった。彼のこられた様子が、彼らの期待にそわなかったのである。主イエスは、ユダヤの制度全体の基礎であられたその荘重な儀式も、神の定めによるものであった。こうした儀式は、それが予表しているお方が、定められた時に来られるということを、人々に教えるためのものであった。ところが、ユダヤ人は、形式と儀式を重んじるのみで、その目的を見失っていた。伝説や言い伝え、人間の作った戒めなどは、神が人に伝えようと意図された教訓を人々から隠した。これらの格言と伝説は、真の宗教の理解と実行を妨げるものになった。そして、実在者なる神がキリストとなってこられた時、人々は、彼こそすべての典型の成就であり、すべての影の実体であることを認めなかった。彼らは、実体を拒んで古来からの典型や無益な儀式を固守した。神のみ子が来ておられたのに、彼らは、しるしを求めてやまなかった。「悔い改めよ、天国は近づいた」という使命に対して、彼らの求めたものは奇跡であった（マタイ3、2）。救い主の代わりに奇跡を求めた彼らには、キリストの福音は、つまずきの石であった。彼らは、メシヤが偉大なわざをなしとげてご自分がメシヤであることを証拠だて、地上の国々を打ち破ってメシヤ王国を建設するものと期待した。その期待に、キリストは種まきのたとえをもってお答えになった。神の国が発展していくのは、武力や暴力の干

渉によってではなくて、人の心に新しい原則を植えつけることによってである。 {COL 1197.4}

「良い種をまく者は、人の子である」（マタイ13：37）。キリストは、王としてではなく、種をまく者としておいでになった。国々を滅ぼすためではなくて、種をまくためにこられた。また、それは、世的勝利や国家的繁栄を弟子たちに示すためではなく、顔に汗して働き、どんな損失や失望にもめげずに、収穫を刈りとらなければならないことを教えるためであった。 {COL 1197.5}

パリサイ人は、キリストのたとえの意味を理解はしたが、その教訓を彼らは歓迎しなかった。彼らは、わざと解らないふりをした。この新しい教師が何を言おうとしているかは、一般の群衆にとってはなおさら、解らなかった。イエスの言葉は、彼らの心に不思議な感動を与えるとともに、彼らの野心を容赦なく砕いた。弟子たち自身でさえも、たとえの意味が解らなかったが、何か強く心を引かれるものがあった。彼らは、ひそかにイエスのところに来て、その説明を求めた。 {COL 1197.6}

キリストは、さらにはっきりとした教訓を彼らに与えようとしておられたので、弟子たちが説明を求めてくることを望んでおられた。イエスは、真面目な気持ちをもって、主を求めるすべての者に、み言葉の意味を明らかになさるのであるから、彼らにもそれと同じようにしてたとえを説明なさった。聖霊の光をいつでも心に受ける用意をしながら、神のみ言葉を研究する者は、決してその意味がわからないということはない。「神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう」（ヨハネ7：17）。真理を、さらに、はっきりと知りたいと願ってキリストのところに来る者は、みな教えを受けることができる。キリストは、彼らに天国の神秘をご説明になる。こうした神秘は、真理を知ろうと願う人には、必ずわかるのである。天からの光が、魂の宮にさしこんでくる。そして

、その光は、暗い道を照らすともしびのように、人々の前に輝きでるのである。 {COL 1197.7}

「種まきが種をまきに出て行った。」東の国々では、社会の状態が落ちつかず危険なことが多かった。人々は、城壁にかこまれた町の中に住んでいた。農夫たちは、城壁の外の仕事をするために、毎日、外へ出て行った。そのように、天来の種まく者であられたキリストは、種をまくために外へ出られた。彼は、平和な天の故郷（ふるさと）をあとにし、世界が造られる前から、天父とともに持っておられた栄光を捨てて、宇宙の王座を去られた。彼は、苦しみや試みにあう人間として、しかもただ1人で、涙とともに出て行き、この失われた世界のために、命の種をまき、ご自分の血をそそがれた。 {COL 1198.1}

キリストの僕たちも、同じように種をまくために出ていかなければならない。アブラハムは真理の種をまく者として招かれ、「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい」との命令を受けた（創世記12：1）。そして、彼は「行く先を知らないで出て行った」（ヘブル11：8）。使徒パウロもそうであった。彼は、神殿で祈っていた時、「行きなさい。わたしが、あなたを遠く異邦の民へつかわすのだ」という神の言葉に接した（使徒行伝22：21）。このように、キリストと結合する召しを受けた者は、彼に従うためにすべてを捨てなければならないのである。むかしからの友人に別れを告げ、人生の計画を放棄し、世の望みを断念しなければならない。そして、ただ1人、困苦と涙の中に自己を犠牲にして、種をまかなければならない。 {COL 1198.2}

「種まきは御言をまくのである。」キリストは、真理を世界にまくためにこられた、人類の堕落以来、サタンは誤りの種をまき続けてきた。サタンは、いつわりによって、まず人間を支配したのであるが、今もなお、同じ方法で、この地上の神の国をくつがえし、人々を自分の支配下におこうとしている。キリストは、天国からの種まく者として、真理の種をまくためにこられた。神の会議に座し、永遠の神の至聖所におられたお方は、まじりけのない真理の原則を人々に伝えることがおできであった。人類が堕落して以来、キリ

ストは、この世界に対する真理の啓示者であられた。「神の変ることのない生ける御言」である朽ちない種が、彼によって人々に伝えられた（Ⅰペテロ1：23）。エデンの園で、あの最初の約束の言葉を語られた時、キリストは、福音の種をまいておられたのである。しかし、この種まきのたとえは、特にイエスご自身の、人間の間での奉仕のことと、イエスが建設されたお働きに適用される。{COL 1198.3}

神の言葉は種である。どの種の中にも発芽力がある。種の中に植物の命が含まれている。そのように、神の言葉には命がある。「わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」（ヨハネ6：63）。「わたしの言葉を聞いて、わたしをつかわされたかたを信じる者は、永遠の命を受ける」とキリストは言われる（ヨハネ5：24）。神の言葉の中にあるすべての命令とすべての約束には、力、すなわち、神の命そのものが宿っている。それであるから、命令はなしとげられ、約束は果たされる。信仰によって、言葉を受け入れる者は、神の命と品性そのものを受けているのである。{COL 1198.4}

どの種も、その種類に従って実を結ぶ。正しい状況のもとに種をまけば、その中にある命が生えてくる。朽ちないみ言葉の種を、信仰によって心に受け入れると、神の品性と命に似た品性と命とが実るようになる。{COL 1198.5}

イスラエルの教師たちは、神の言葉の種をまいていなかった。真理の教師としてのキリストの働きは、当時のラビたちの働きとは、著しく異なっていた。彼らは、伝説や人間の理論や推論などを強調していた。人間がみ言葉について教えたり書いたりしたことを、み言葉そのものの代用にしたこともしばしばあった。彼らの教えには、魂を生かす力はなかった、キリストの教えと説教の主題は、神の言葉であった、イエスは質問する人に、「……と書いてある、聖書に何とあるか」「あなたはどう読むか」などとおおせになつ
1199た。興味をもった人があれば、それが友であろうと敵であろうと、彼はみ言葉の種をまかれた。道であり、真理であり、命であり、自ら生きた言葉であられるイエスは、聖書を指さして、「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」と言われた。「

モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた」（ヨハネ5：39、ルカ24：27）。{COL 1198.6}

キリストの僕たちも、これと同じ働きをしなければならない。今日も、むかしと同じように、神の言葉の重大な真理は無視されて、人間の理論や推論が重んじられている。福音の牧師と称する人々の中にも、聖書を全部神の霊感による言葉として信じない者が多い。ある学者がある部分を拒否すると、他の人が別の所を疑うといったありさまである。彼らは、自己の判断をみ言葉よりも重んじる。彼らの教える聖書は、彼ら自身の権威に基づく。聖書が神から与えられた信頼すべき書であるという事実は、かえりみられなくなった。こうして、不信の種がまき散らされ、人々は、何を信じてよいのかわからなくなる。心に思うことさえしてはならない信仰がたくさんある。キリストの時代のラビたちは、聖書に多くの不可解な解釈をほどこしていた。神のみ言葉が、彼らの行為を明らかに責めていたので、その力をそごうと試みた。それは、今日も同じである。{COL 1199.1}

神の言葉は、不可解で不明瞭なものであるかのように見せかけて、それを神の戒めに従わなくてもよい理由にしている。キリストは、当時のこうした習慣をお責めになった。彼は、神のみ言葉が、すべての者によって理解されるべきであることをお教えになった。キリストは、聖書が疑問の余地のない権威書であることを指摘されたが、わたしたちもそうすべきである。聖書は、無限の神の言葉であって、あらゆる論争の解決とすべての信仰の基礎であることを示すべきである。{COL 1199.2}

このように、聖書の力が奪われているために、人々の霊的生活が低下するにいたった。今日、多くの説教が講壇から叫ばれても、そこには、良心をさまし、魂に命を与えて神の力の現れを見ることができない。「道々お話しになったとき、また聖書を説き明してくださったとき、お互の心が内に燃えたではないか」と、聴衆は言うことができない（ルカ24：32）。多くの者が生きた神を求めて叫び、神の臨在をかわくように望んでいる。どんなにりっぱな哲学論も文学論も、心に満足を与えることはできない。人間の主張と思索

は、無価値である。神のみ言葉を人々に語ろう。これまで、伝説と人間の説と戒めばかりを聞いてきた人々に、心を新たにして、永遠の命にいたらせる神の声を聞かせよう。{COL 1199.3}

キリストが好んで語られた主題は、神の父親としての情深さとあふれる恵みであった。彼は、神の品性と神の律法の神聖さについて多く語られた。また、ご自分が、道であり、真理であり、命であると人々にいわれた。これが、キリストの牧師たちの主題でなければならない。イエスの中にあるがままの真理を伝えなさい。律法と福音が要求しているものを明らかにしなさい。キリストの克己と犠牲の生活、彼の謙遜と死、彼の復活と昇天、彼の天の宮廷での彼らのためのとりなし、「またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう」という、彼の約束などについて語りなさい（ヨハネ14：3）。{COL 1199.4}

間違った説について論議をしたり、福音の敵と争おうとする代わりに、キリストの模範に従いなさい。神の宝の倉の中からの新しい真理を取り出しなさい。「御言を宣べ伝えなさい。」「すべての水のほとりに種をまき」「時が良くても悪くても」「わたしの言葉を受けた者は誠実にわたしの言葉を語らなければならない。わらと麦とをくらべることができようかと、主は言われる。」「神の言葉はみな真実である。……その言葉には付け加えてはならない、彼があなたを責め、あなたを偽り者とされないためだ」（Ⅱテモテ4：2、イザヤ32：20、エレミヤ23：28、箴言30：5、6）。{COL 1199.5}

「種まきは御言をまくのである。」ここに、すべての教育の基礎となるべき大原則が示されている。「種は神の言葉である。」しかし、今日、神の言葉を捨ててしまった学校があまりにも多くある。ほかの科目 1200が、心を占領している。無神論的著書の研究が、教育の大部分を占めている。懐疑的思想が、教科書の中に織り込まれている。科学の研究の面でも、発見された事実の誤解、曲解が、人々を誤らせる。いわゆる科学的学説と神の言葉とを比較してみて、神のみ言葉を不確実な頼りないもののように思わせる。こうして、青年の心に疑惑の種がまかれ、それが試みの時に生えてくる。神の言葉を信じなくな

ると、魂に対する何の指導も保護もなくなる。青年たちは、神と永遠の命からかけ離れた道に引きこまれていく。{COL 1199.6}

今日、世界に罪悪がこのようにはびこったのは、主として、このことが原因であろうと思われる。神の言葉を無視すれば、人間の生来の悪い感情を制するみ言葉の力を拒んでしまうことになる。人は、肉に種をまき、肉から腐敗を刈り取る。{COL 1200.1}

また、知力の衰えと能率の低下の原因がここにある。神のみ言葉を捨てて、霊感をうけない人の著書を読むことによって、頭脳は、いじけ、低級になる。深遠な永遠の真理の原則に、心は触れなくなる。人間の理解力は、平常考えていることの理解にとどまるもので、限られた地上のことばかりに没頭していると、理解力は衰えて、やがては、伸びる力を失うにいたる。{COL 1200.2}

これは、みな、偽りの教育である。すべての教師は、霊感によって与えられた言葉の大真理に、青年の心を結びつけなければならない。これが現世と来世のために必要な教育である。{COL 1200.3}

これが科学の研究の妨げになるとか、教育の標準を低下させることになるとか、考えてはならない。神に関する知識は、天のように高く、宇宙のように広いものである。永遠の命に関する大きな主題の研究くらい、わたしたちを高尚にし、活気づけるものはない。青年たちは、神から与えられたこの真理を、理解しようと努めなければならない。そうすれば、その努力によって、彼らの知力は伸び、強くなるのである。み言葉を実行する生徒はだれでも、広々とした思想の分野に導かれ、朽ちることのない知識の富を手に入れることができる。{COL 1200.4}

聖書の探究によって受け得る教育は、救いの計画を体験的に知ることである。このような教育は、魂の中に神のみかたちを回復する。それは、誘惑に対して生徒の心を強固にし、この世界に対するキリストの恵みの働きを、キリストとともにするのに、適した者に

する。この教育は、彼を神の家族の一員とし、光の中にある聖徒たちの嗣業にあずからせる。 {COL 1200.5}

しかし、神聖なる真理をあつかう教師は、自分自身が経験によって知っていることしか教えることができない。「種まきは」、自分の持っている「種をまいた」のである。キリストは真理であられたから、真理をお教えになった。イエスご自身の思想と品性と体験とが、彼の教えの中に具体的に表現されたのである。彼の僕たちもそうでなければならない。み言葉の教師になりたいと思う者は、まず、体験によって、み言葉を自分のものとしなければならない。彼らは、キリストが彼らの知恵と義と聖とあがないになってくださるとは、どういうことかを知らなければならない。 {COL 1200.6}

神の言葉を人々に語る時に、こうだと思うとか、ああであろうなどと言ってはならない。「わたしたちの主イエス・キリストの力と来臨とを、あなたがたに知らせた時、わたしたちは、巧みな作り話を用いることはしなかった。わたしたちが、そのご威光の目撃者なのだからである」と使徒ペテロは言ったが、わたしたちもそう宣言しなければならない（Ⅱペテロ1：16）。またキリストに仕えるすべての牧師、教師は、愛された弟子ヨハネとともに、「このいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちは見て、そのあかしをし、かつ、あなたがたに告げ知らせるのである。この永遠のいのちは、父と共にいましたが、今やわたしたちに現れたものである」と言うことができなければならない（Ⅰヨハネ1：2）。 {COL 1200.7}

土――道ばた

この種まきのたとえが主として扱っている問題は、種のまかれた土地の状態が、種の成長にどんな影響を及ぼすかということである。このたとえによれば、キリストは実際にこう言っておられるのも同然である。つまり、あなたがたは、わたしの働きを批判的な目で 1201見て、あなたがたの考え通りにいっていないからといって、失望するのはよくない。あなたにとって1番大切なことは、あなたがわたしの使命をどう扱うかということで

ある。あなたがそれを受けるか拒むかによって、あなたの永遠の運命が決まるのである。{COL 1200.8}

主は道ばたに落ちた種を説明して言われた。「だれでも御国の言を聞いて悟らないならば、悪い者がきて、その人の心にまかれたものを奪いとって行く。道ばたにまかれたものというのは、そういう人のことである。」{COL 1201.1}

道ばたにまかれた種は、神の言葉が、不注意な人の心に落ちた場合をあらわしている。ちょうど、人や牛馬にふまれて道がかたくなっているように、心は世の売買と世の快楽や罪のために固くなっている。その人は、勝手気ままな罪深い生活に心を奪われて、「罪の惑わしに陥って、心をかたくな」にしている（ヘブル3：13）。霊的能力はまひしている。人々はみ言葉を聞いても理解せず、その言葉が自分たちにあてはまっているのを悟らない。彼らは、自分たちの必要も危険も自覚しない。彼らはキリストの愛に気づかない。そして、キリストの恵みの使命も、自分たちにはなんの関係もないもののように無視してしまう。{COL 1201.2}

鳥が道ばたの種をすぐに、ついばんでしまうように、サタンは、真理の種を魂から奪い去ろうとまちかまえている。サタンは、神の言葉が不注意な者の目をさまし、かたくなな心をくだくのを恐れている。サタンとサタンに属する悪天使たちは、福音が宣べ伝えられている集会の中に入っている。天使たちが、神のみ言葉によって、人々の心を動かそうとしている時に、敵は、なんとかして、そのみ言葉の力を失わせようと努めている。{COL 1201.3}

サタンは、さまざまな悪がしこい方法と熱心さをもって、神の聖霊の働きを妨げる。キリストが愛をもって魂を引き寄せようとなさると、サタンは、救い主を求めてくる者の心を他へそらし、世的な計画に没頭させようとする。また、批評非難の気持ちを起こさせ、疑惑と不信の心をいだかせる。説教者の用語や態度に聴衆が満足しないような場合は、その欠点ばかりが気になるようにしてしまうのである。こうして、彼らが必要としている

真理と、神の豊かな恵みも、なんらの永続的印象を心に残さないのである。 {COL 1201.4}

サタンには、多くの部下がいる。クリスチャンであると称しながら、真理の種を人々の心から奪い取って、サタンの手助けをしている者が多い。説教を聞いて帰って、家でそれを批評の材料にする者が多いのである。彼らは、普通の講演や政治演説の言葉を批評するのと同じように、説教を批評する。神からの言葉として受けるべき使命を、軽々しく茶化してしまう。牧師の品性のことから始めて、その動機と行動、または、教会員の行為に至るまで、無分別に話し合い、手厳しい判断を下し、人のうわさ話や悪口などを未信者のいる前で平気で言うのである。親は子供の聞いている所でよくこうしたことを言う。こうして、神の使者たちに対する尊敬と、彼らの語る使命に対する敬意とを失わせる。そして、多くの者は、神の言葉そのものをも、軽々しく扱うようになってしまうのである。 {COL 1201.5}

こうしていわゆるクリスチャン家庭で、無神論的教育を受ける者が多い。それなのに、親たちは、子供たちが福音に関心をもたず、聖書の真理を信じようとしないのを不思議に思うのである。また、彼らを道徳的、宗教的感化の中に育てることが、なぜこんなに困難なのであるかと思案する。しかし、子供たちの心をこんなに頑固にしたのは、自分たちであるのに、彼らは気づかない。良い種は、根をおろす土をみつけることができずにいる間に、サタンに奪い取られてしまうのである。 {COL 1201.6}

石地

「石地にまかれたものというのは、御言を聞くと、すぐに喜んで受ける人のことである。その中に根がないので、しばらく続くだけであって、御言のための困難や迫害が起ってくると、すぐつまずいてしまう。」 {COL 1201.7}

石地にまかれた種は、土がわずかしかないところに落ちた。すぐ芽は出たけれども、根が岩に妨げられて、成長にどうしても必要な養分をとることができ 1202ずに、やがて

枯れてしまう。わたしには信仰があると口先だけで言っている人の多くは、石地の聴衆である。地下に岩があるように、良いことをしたいという願いや大きな希望の下には、生来の利己心が横たわっている。自己愛が征服されていないのである。彼らは、罪がいかに恐ろしいものであるかを悟らず、罪の自覚によって心がくだかれていない。この種の人々はすぐに受け入れて、有望な改心者のように思われるけれども、彼らはほんの表面だけの宗教しか持っていないのである。 {COL 1201.8}

そうかといって、すぐにみ言葉を信じ、喜んでいる人なら必ずつまずくとも限ってはいない。マタイは、救い主の召しを受けた時に直ちに立って従った。神は、わたしたちが、神の言葉を聞くや否や、すぐに受けることを望んでおられる。たしかに、喜んで受けることは正しいのである。「罪人がひとりでも悔い改めるなら……大きいよろこびが、天にあるであろう」（ルカ15：7）。また、キリストを信じる魂にも喜びがあるのである。ところがたとえの中で、すぐ言葉を受け入れたといわれている人々は、その払うべき価を十分に見積もらない。彼らは、神の言葉が何を要求するものであるかを考慮しない。彼らは、人生のあらゆる習慣をみ言葉に照らしてみて、み言葉の支配に全く従うことをしない。 {COL 1202.1}

植物は、土の中に深く根をはって、目には見えないところで、植物の生命に栄養を与えている。クリスチャンもそれと同じである。霊的生命が養われるのは、魂が信仰によって、目には見えないが、キリストと結合することによってである。 {COL 1202.2}

しかし、石地の聴衆は、キリストに頼ろうとはせず、自分に頼るのである。自分たちの善行や時折りのよい心がけに頼り、自分を義とする心が強い。彼らは、主とその偉大な力によって強くなっていない。このような人は、キリストに連なっていないから、「その中に根がない」のである。 {COL 1202.3}

やけつく真夏の太陽は、穀物を丈夫に実らせるものであるが、根のないものを枯らしてしまう。そのように、「その中に根がないもの」は、「しばらく続くだけであって、御

言のために困難や迫害が起ってくると、すぐつまずいてしまう。」罪からの救いを求めるのではなくて、苦しみを避けるために、福音を受け入れる者が多くいる。宗教とは、困難や試練から人間を解放するものであるかのように思っているから、しばらくは喜んでいる。彼らは生活が平穏な間は、堅実なクリスチャンらしく見えるのである。しかし、はげしい誘惑に出会うと倒れてしまう。彼らは、キリストのために受ける恥辱に耐えることができない。神の言葉が、心に秘めた罪を指摘し、克己と犠牲を要求したりすると、彼らはつまずいてしまうのである。彼らの生活を徹底的に改革することは、あまりにも努力を要することなのである。彼らは、現在の不便や試練をながめて、永遠の実在のことを忘れてしまうのである。彼らは、イエスのもとを去っていった弟子たちと同じように、「これは、ひどい言葉だ。だれがそんなことを聞いておられようか」と言うのである（ヨハネ6：60）。 {COL 1202.4}

神に仕えていると言いながら、神に関する体験的知識を持っていない者が多い。神のみこころを行いたいという願いも、ただ一時の気まぐれによるもので、心が聖霊に深く感動したためではない。彼らの行動は、神の律法と一致していない。口ではキリストを救い主として信じると言いながら、キリストが彼らに罪に打ち勝つ力をお与えになることを信じない。彼らは、生きた救い主と個人的接触がなく、彼らの品性は、先天的、および後天的欠陥を示している。 {COL 1202.5}

聖霊は、力ある働きをなさるとばく然と認めることと、悔い改めを促す譴責（けんせき）者として、聖霊の働きを受け入れることとは、全然別のことである。多くの者は、自分たちが神から離れ、自己と罪との奴隷になっていることを自覚している。そして、改革しようと努力するのではあるが、自己を十字架につけない。 {COL 1202.6}

彼らは自分たちを全くキリストのみ手にまかせてみこころを行う力を神に求めようとしない。彼らは、神のかたちにかたどって形造られることを喜ばない。彼らはばく然と自

分たちの不完全さを認めはするが、自分たちの犯している罪をすてない。彼らが悪い行為を重ねるごとに古い利己心は勢力を増していくの 1203である。 {COL 1202.7}

こうした魂の救われる唯一の望みは、キリストがニコデモに対して言われた次のみ言葉を自分で理解することである。「あなたがたは新しく生まれなければならない。」「だれでも新しく生まれなければ、神の国を見ることはできない」（ヨハネ3：7、3）。 {COL 1203.1}

真の清めとは、神への奉仕に専心することである。これが真のクリスチャン生活の条件である。キリストは、何1つ保留しない献身、完全な奉仕を求めておられる。キリストは、心と思いと魂と力とをご要求になる。自己に執着していてはならない。自己のために生きる者は、クリスチャンではない。 {COL 1203.2}

愛が行為の原則でなければならない。愛が、天地間の神の政府の基本的原則である。そして、これがクリスチャンの品性の基礎となるべきものである。この愛のみが、クリスチャンを堅く立たせてささえるものである。これのみが、彼を試練と誘惑に勝たせるのである。 {COL 1203.3}

また、愛は、犠牲によってあらわされるものである。贖罪（しょくざい）の計画は、犠牲によって立てられた。しかも、その犠牲とは、とうてい測ることができないほど広く深く高いものであった。キリストは、わたしたちのためにすべてをお与えになったのであるから、キリストを信じる者は、あがない主のために、喜んですべてを犠牲にするのである。また、キリストに誉れと栄光を帰することを、まず第一のこととするようになるのである。 {COL 1203.4}

もし、わたしたちが、イエスを愛するならば、イエスのために生き、感謝のささげ物をし、イエスのために働くことは、何よりの楽しみとなる。主の働きは、やさしいのである。イエスのためならば、痛みも苦しみも犠牲も喜んで忍ぶのである。イエスが人々の救

いを熱望されたと同じように、わたしたちも魂を熱く愛し、イエスが魂に同情なさったようにわたしたちも感じるようになるのである。{COL 1203.5}

これがキリストの宗教である。ここまで達しないものは偽りものである。真理に関する単なる理論を唱え、弟子であることを表明するだけでは、魂を救い得ない。全くキリストのものでないとすれば、全然キリストに属していないのである。人々の意志が薄弱で、うつり気なのは、クリスチャン生活が中途半端だからである。自己とキリストの両方に仕えようとすることが、人を石地の聴衆にしてしまい、1度試練が襲ってくると、くずれ去ってしまうのである。{COL 1203.6}

いばらの中にまかれたもの

「また、いばらの中にまかれたものとは、御言を聞くが、世の心づかいと富の惑わしとが御言をふさぐので、実を結ばなくなる人のことである。」{COL 1203.7}

福音の種は、しばしば、いばらや毒草の中に落ちる。そして、人の心の中になんの道徳的変化も起こらず、以前の癖や習慣、あるいは、罪の生活が続くのである。サタンの性質が捨てられずに残っているならば、麦はふさがれてしまう。実を結ぶのは、いばらであって、麦は枯れてしまうのである。{COL 1203.8}

真理の尊い種を受けいれる準備が常にできている心の中にだけ、恵みは成長することができる。罪のいばらは、どの土地にでも育つのである。それは耕さなくてもよい。しかし、恵みは、注意深くつちかわれなければならない。とげやいばらは、いつでもすぐに生えてくるものであるから、常に、手を入れてきれいにしておかなければならない。もし、心が神の支配下になく、品性の向上と洗練のために聖霊が活動しないならば、古い習慣が生活の中に現れてくる。口では福音を信じると言ってみても、そう公言している福音によって清められていなければ、なんの役にもたたない。もし、彼らが罪に勝利していないならば、罪が彼らに勝利しているのである。ただ刈っただけで、根がぬかれていないならば

、いばらは、すぐに育って、ついには魂を、おおいかくしてしまうのである。 {COL 1203.9}

キリストは、魂を危険におとしいれるものを指摘された。マルコが記録しているように、キリストは世の心づかいと富の惑わし、その他いろいろな欲をあげられた。ルカは、生活の心づかいや富や快楽をあげた。こうしたものが、み言葉をふさぎ、霊的種の成長をはばむのである。魂は、キリストから栄養分を吸収しな 1204くなり、心の霊性が死んでしまうのである。 {COL 1203.1]0}

「世の心づかい」。ここに世の心づかいとあるが、これにまどわされない人は、どの階層の人にもない。貧しい者には、苦労や圧迫、欠乏と恐怖などの心配がある。金持ちは、財産を失いはしないかという心配に苦しむものである。キリストが野の花から学べといわれた教訓を忘れているクリスチャンが多い。彼らは、キリストの変わらぬご保護に頼らない。キリストは、人々が重荷をキリストにゆだねないために、その重荷を負うことがおできにならない。世のわずらいというのは、救い主に援助と慰めを求めるようにすべきものであるにもかかわらず、かえって、人々をキリストから引き離しているのである。 {COL 1204.1}

神のご用をするならば、豊かな実りを得ることができるにもかかわらず、金もうけに没頭している者が多い。事業に全力を尽くして、霊的方面のことをおろそかにするのはやむを得ないことのように思っている。こうして、彼らは神から離れていくのである。聖書には、「熱心で、うむことなく」と命じられている（ローマ12：11）。わたしたちは、助けを要している人々に、分け与えるために働くべきである。クリスチャンは、働かなければならない。また、商売もしなければならない。しかも、それを罪を犯さずにできるのである。ところが、多くの者は、事業に没頭してしまい、祈りのための時間や、聖書研究の時間や、神を求めて、神に仕える時間がないのである。時には、清めのことや天のことを渇望することもあるが、世の雑音から離れて、神の霊のおごそかな権威あるみ言葉に耳

を傾ける時間がないのである。永遠の事物はあとまわしにされ、世の事柄が第一のものとされている。これでは、み言葉の種が実を結ぶことは不可能である。世俗といういばらを育てるために、魂の生命が奪われているからである。{COL 1204.2}

また、これとは全く異なった目的をもって努力していながら、同じ誤りにおちいっている者が多い。彼らは、他人のために働いている。種々の仕事に追われ、責任も多く負っている。彼らは忙しさのために礼拝をする余裕がない。そして、祈りとみ言葉の研究によって神と交わることを怠っている。「わたしから離れては、あなたがたは何1つできないからである」と、キリストが言われたことを忘れている。彼らは、キリストから遠く離れて歩いている。そのために、彼らの生活には、キリストの恵みがあふれず、利己的性質があらわれてくるのである。彼らの奉仕は、最高位を望む野心や、くだかれていない心の粗暴なみにくい性質のために汚されている。クリスチャンの働きが失敗に終わるおもな原因がここにある。またこれが、実がわずかしか実らない原因でもある。{COL 1204.3}

「富の惑わし」。富を愛することは、人の心をとらえて惑わす力をもっている。世の財宝を持っている者は、とかく、彼らに富を得る力を与えるのが神であることを忘れる。「自分の力と自分の手の働きで、わたしはこの富を得た」と彼らは言う（申命記8：17）。彼らの富は、神に対する感謝の念を起こさせるどころか、かえって自己称揚の念を起こさせる。彼らは、神のおかげをこうむり、同胞に対して義務が負わされていることを忘れる。富は、神の栄光と人類向上のために用いるべきタラントであると考えずに、自己のために用いるものであると思う。富をこのように使用するならば、人間の中に神の性質を啓発させることにはならないで、サタンの性質を助長することになる言葉の種は、いばらの中でふさがれているのである。{COL 1204.4}

「快楽」。ただ自分の楽しみだけを追求するところの娯楽は危険である。すべて肉体を弱らせ、知力をくもらせ、霊的知覚をまひさせるような習慣は、「たましいに戦いをいどむ肉の欲」である（Ⅰペテロ2：11）。{COL 1204.5}

「その他いろいろの欲」。これらのものは、必ずしも何か罪深いものというわけではない。しかし、それは、神の国をさしおいて第1位におかれるもののことをいうのである。人の心を神から奪い去り、心の愛情をキリストから引き離すものは、なんであっても、魂の敵である。{COL 1204.6}

若い心という地

青少年の心が若い力にあふれ、発育盛りの時には、 1205自分の野心などのことばかりに心を奪われるという大きな誘惑がある。世の中の仕事が成一功すると、とかく、良心がにぶり、品性の真の価値を正しく評価することができなくなるものである。また周囲の状態が、それを助長するような時には、青少年は、ますます神のみ言葉に禁じられている方向に進んでいく。{COL 1204.7}

成長期にある子供たちを持った親の責任は、実に重大である。彼らは、子供たちに正しい感化を与えなければならない。そして、正しい人生観と人生の真の成功とはどんなものであるかを教えるように、研究しなければならない。ところが、そうではなくて、子供たちが世的な繁栄を得ることを第一にしている親が、なんと多いことであろう。子供たちの友だちを選ぶ時にも、みな、これを念頭においている。多くの親は、大都会に住んで、子供たちを上流の人々と交際させるのである。こうして世俗を愛する心と誇りを助長している。こうした雰囲気の中では、心も魂も萎縮してしまう。彼らは、人生の高貴な目標を見失ってしまう。神の子として永遠の嗣業を受ける特権は、世俗の利益に心を迷わされて捨ててしまったのである。{COL 1205.1}

子供たちの娯楽を好む心に、満足を与えることによって、彼らを幸福にしてやろうとする親が多い。彼らは、子供たちがスポーツに参加し、パーティーに出かけるのを許し、虚飾と自己満足のために、勝手に金を費やすままにさせている。快楽に対する欲求は、満たせば満たすほど、強烈になってくる。これらの青年たちの関心は、ますますスポーツに

奪われ、それが人生の大目的であるかのように思ってしまう。そして、怠惰、放縦の癖がつき、堅実なクリスチャンになる望みがなくなってしまう。{COL 1205.2}

また、真理のとりでででなければならない教会までが、人々の快楽追求心を助長しているのを見受ける。宗教的目的のために資金を募集するにも、多くの教会は、どんな手段に訴えるであろうか。{COL 1205.3}

それには、バザーとか、夕食会とか、小間物市とか、あるいは宝くじといった方法さえとられている。神を礼拝するためにささげられた場所が、こうして飲み食いや売買のためや、娯楽などのために汚されている。神の家に対する敬意と、神の礼拝に対する敬虔な態度とが青年たちの心から失われていくのである。自制の力は弱まる。我欲、食欲、外見の虚飾などは、強く人の心を捕らえ、彼らがほしいままな生活をしているうちに、ますます深みに落ちこんでいくのである。{COL 1205.4}

快楽と娯楽の追求は、都会を中心に行われている。都会のほうが便利なので、子供たちの住居を都会に選ぶ親が多くいるが、やがて彼らの期待は裏切られ、彼らがあやまちに気づいた時には、すでに遅すぎるのである。今日の都会は、急速にソドムとゴモラのようになっている。多くの休日は、怠惰を助長している。刺激の強いスポーツ、劇場、競馬、かけ事、酒、宴会などは、種々の欲情を極度に刺激する。青年たちは、このような風潮に感化されている。ただ自分の娯楽のみを追求する者は、潮のように寄せてくる誘惑に門を開いている。彼らは、社交上の歓楽や前後をわきまえない遊興にふけっている。こうした快楽を愛する人々との交際は、彼らの心を陶酔状態におとしいれている。彼らは、1つの道楽から次の道楽へと誘いこまれて、ついには、有用な生活を送りたいという希望も能力も失ってしまう。彼らの宗教的願望は冷えきって、霊的生活はやみに閉ざされる。人の心のけだかい能力と、人を霊的世界に結びつけるものとがことごとく低下してしまう。{COL 1205.5}

時には、こうしたことの愚かさを悟って悔い改める者もある。神は、彼らをお赦しになることに変わりはない。しかし、彼らは、自分自身の魂を傷つけ、一生の間、自分の身を危険にさらしてきたのである。彼らは、善悪に対して鋭敏な識別力をもっているべきなのに、その大半が破壊されて、聖霊の導きの声を認めたり、また、サタンの策略を見破ることができないまでに鈍くなった。危険にさらされた時、ともすると誘惑におちいり、神から離れてしまうのである。こうして、快楽を追求していく果ては、現世においても、また、来世においても破滅以外の何ものでもないのである。{COL 1205.6}

サタンが人の魂をおとしいれようとして、人生のゲームで打った手は、世の心づかい、富、快楽である。「世と世にあるものとを、愛してはいけない。もし、世 1206を愛する者があれば、父の愛は彼のうちにない。すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、持ち物の誇は、父から出たものではなく、世から出たものである」と警告されている（Ⅰヨハネ2：15、16）。「あなたがたが放縦や、泥酔、世の煩いのために、心が鈍」らないように、「よく注意していなさい」と、手にとるように人の心を読まれる方が言われるのである（ルカ21：34）。使徒パウロも聖霊に感じて書いている。「富むことを願い求める者は、誘惑と、わなとに陥り、また、人を滅びと破壊とに沈ませる、無分別な恐ろしいさまざまの情欲に陥るのである。金銭を愛することは、すべての悪の根である。ある人々は欲ばって金銭を求めたため、信仰から迷い出て、多くの苦痛をもって自分自身を刺しとおした」（Ⅰテモテ6：9、10）{COL 1205.7}

土地の準備

種まきのたとえ全体を通じて、種まきの結果がこのように相違しているのは、土地の状態いかんによるものであることを、キリストは示された。どの場合を見ても、種をまく人と種は同じである。神のみ言葉が、わたしたちの心と生活になんの効果もあらわさないとすれば、その原因は、わたしたちにあることを、こうして教えておられるのである。しかし、このような結果も、決してどうにもならないというものではない。確かに、わたし

たちは自分を変えることはできない。けれども、わたしたちには選択の力がある。そして、自分が将来、何になるかは、自分が決めるのである。道ばた、石地、いばらの地の聴衆は、いつまでもそのままでいる必要はないのである。神の聖霊は、常に、世のことに心を奪ってしまう迷夢から、わたしたちをさまし、永遠の富に対する願いを起こさせようと働かれる。人々が、神の言葉に無関心であったり、おろそかであったりするのは、聖霊を拒むからである。心がかたくなで、よい種が根をおろすことができず、悪がはびこって、よい種の成長をふさいでしまうのは、その人々自身の責任である。{COL 1206.1}

心の畑は、耕さなければならない。土地は、罪に対する真心からの悔い改めによって、くだかれなければならない。悪魔的毒草は、ぬかなければならない。いばらが一面に生えていた土地は、けんめいに努力してこそはじめて回復することができるのである。そのように、生まれながらの心の悪の傾向も、イエスの名と力によって、熱心に努力してこそ、打ち勝つことができるのである。神は、預言者によって命じておられる。「あなたがたの新田を耕せ、いばらの中に種をまくな。」「あなたがたは自分のために正義をまき、いつくしみの実を刈り取」れ（エレミヤ4：3、ホセア10：12）。神は、このようなことを、わたしたちのために成しとげようと望んで、わたしたちの協力を求めておられるのである。{COL 1206.2}

種をまく者は、人々が福音を受けるようになるために、彼らの心の準備をしなければならない。み言葉を人々に伝える伝道においても説教が多すぎて、人の心に真に接する時が少ないのである。失われた魂に個人的に働きかけなければならない。キリストの持っておられたような同情をいだいて、個人的に人に近づき、永遠の生命という大きな事柄に彼らの注意を呼び起こさなければならない。彼らの心はふみつけられた道のように固く、救い主について語ってもむだのように思われる場合がある。しかし、論理が動かし得ず、議論も説得する力がないと思われる時にも、個人的な奉仕のうちにあらわされるキリストの愛は、石の心をも和らげ、真理の種が根をおろすようになるのである。{COL 1206.3}

このようにして、種をまく者は、種がいばらにふさがれたり、または、土が浅いために枯れたりしないように、手入れをしていなければならない。まず、クリスチャン生活の出発点において、すべての信者に、その基本的原則を教えなければならない。ただキリストの犠牲によって救われたということだけでなくて、キリストの生活を自分の生活とし、キリストの品性を自分の品性にすべきであることをも教えなければならない。重荷を背負うことと、生まれながらの傾向に勝利すべきことを、すべての者に教えなければならない。キリストの自己犠牲にならい、キリストのよき兵卒として 1207苦難に耐えて、キリストのために働くことの幸福を、彼らに教えなければならない。 {COL 1206.4}

また、キリストの愛に頼って、すべての思いわずらいを主にゆだねることを学ばせ、主に魂を導く喜びを味わわせなければならない。失われた者に愛と関心を寄せることによって、彼らは、自己を忘れてしまうのである。世の快楽は、引き付ける力を失い、世の重荷も苦にならなくなる。真理の鋤（すき）はその任務を果たし、未開の土地を掘り起こすのである。こうしてただ、いばらの上の部分を切るばかりでなくて、それを根から引き抜いてしまうのである。 {COL 1207.1}

よい地に

種をまく者は、いつも失望ばかりを味わうのではない。救い主は、よい地に落ちた種についてお語りになった。これは、「御言を聞いて悟る人のことであって、そういう人が実を結び、100倍、あるいは60倍、あるいは30倍にもなるのである。」「良い地に落ちたのは、御言を聞いたのち、これを正しい良い心でしっかりと守り、耐え忍んで実を結ぶに至る人たちのことである。」 {COL 1207.2}

「正しい良い心」とたとえの中でいわれているのは、罪のない心のことではない。なぜなら、福音は失われた者に宣べ伝えられるからである。キリストも、「わたしがきたのは義人を招くためではなく、罪人を招くためである」といわれた（マルコ2：17）。それは、聖霊のささやきに従う正しい心の持ち主で、罪を告白して、神の憐れみと愛の必要を

感じる人のことである。また、真面目に真理を学び、それに従おうとする人である。よい心とは、信じる心のことで、神の言葉を信じる心である。信仰がなければ、み言葉を受け入れることができない。「神に来る者は、神のいますことと、ご自身を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである」（ヘブル11：6）。{COL 1207.3}

これは、「御言を聞いて悟る人のことであ」る。キリストの時代のパリサイ人は、見ることがないようにと目を閉じ、聞くことがないように耳をふさいでいたので、真理を悟ることができなかった。彼らは、自分たちの故意の無知と、ことさらに自分たちの目を盲目にした刑罰を受けなければならなかった。しかし、キリストは、弟子たちに、心を開いて教えを受け、快く信じるようにとお教えになった。彼らは、目で見、耳で聞いたことを信じたので、さいわいであると、主はいわれたのである。{COL 1207.4}

良い地の聴衆は、「それを人間の言葉としてではなく、神の言としてーー事実そのとおりであるが」ーー受けいれた（Ｉテサロニケ2：13）。聖書を自分に語りかける神の言葉として受けいれる人だけが、真に学ぶ者である。彼は、み言葉に強く心を打たれる、言葉は彼にとって生きた実在なのである。彼は、み言葉を受け入れるために心を開いて理解しようとする。コルネリオと彼の友人たちは、このような人々であった。そして、使徒ペテロに、「今わたしたちは、主があなたにお告げになったことを残らず伺おうとして、みな神のみ前にまかり出ているのです」と言った（使徒行伝10：33）。{COL 1207.5}

真理の知識が与えられるのは、知力がすぐれているからではない。それは、純粋な目的をもって、熱心にすがっていく単純な信仰によるのである。心を低くして神の導きを求める者に、天使は近づく。真理の豊富な宝を開くために、聖霊が彼らに与えられるのである。{COL 1207.6}

良い地の聴衆は、み言葉を聞いてそれをしまっておく。サタンとすべての悪天使たちも、彼らからみ言葉を奪い去ることはできない。{COL 1207.7}

ただ単に、み言葉を聞いたり、読んだりするだけでは十分でない。み言葉から恵みを受けたいと思う者は、示された真理についてよく瞑想しなければならない。わたしたちは、細心の注意と熱心な祈りとをもって、真理の言葉を深く考えつつ学び、み言葉の精神を体得しなければならない。 {COL 1207.8}

偉大でしかも純粋な思想をもって、わたしたちの心を満たすようにせよと、神は命じておられる。神は、わたしたちが、神の愛と憐れみを瞑想し、偉大な救済の計画の中にひめられた、神の驚くべきお働きを研究することを望んでおられる。そうすれば、わたし1208たちの真理に対する認識は、ますます明瞭になっていく。そして、純潔と明快な思想に対するわたしたちの願いがますます強まってくる。清い思想をいだき、純潔な雰囲気の中に宿っている魂は、聖書を研究して、神と交わることによって、変えられていくのである。 {COL 1207.9}

「実を結び」。み言葉を聞いて、それをたくわえている者は、服従という実を結ぶ。魂の中に受け入れた神の言葉は、よい行いとなってあらわれる。キリストのような品性と生活とが、その結果となってあらわれてくるのである。キリストは、ご自分について次のように言われた。「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」（詩篇40：8）。「それは、わたし自身の考えでするのではなく、わたしをつかわされたかたの、み旨を求めているからである」（ヨハネ5：30）。「『彼におる』と言う者は、彼が歩かれたように、その人自身も歩くべきである」と聖書にある（Ｉヨハネ2：6）。 {COL 1208.1}

しばしば、神のみ言葉は、人間の先天的、あるいは後天的性質、または、社会の習慣などと衝突することがある。けれども、良い地という聴衆は、み言葉を受け入れる時に、その一切の条件と要求とを受け入れるのである。そして、これまでの習慣や風習などを神の言葉に従わせるのである。彼にとって、有限で誤りやすい人間の命令などは、無限の神の戒めとは比較することができないほど全く無意味なものになってしまう。彼は、まっし

ぐらに、ただ永遠の生命のみを追い求め、どんな犠牲も迫害も死さえもいとわずに真理に従うのである。{COL 1208.2}

また、彼は、「耐え忍んで」実を結ぶのである。神のみ言葉を受け入れる者には、困難や試練がないというわけではない。しかし、苦難に臨んでも、真のクリスチャンは、動揺したり、疑惑をいだいたり、失望したりはしないのである。たとえ、事態がどのように発展するかをはっきりと見ることができず、神の摂理の目的を悟ることができないとしても、確信を投げすててはならない。そのような時には、主の情深い憐れみを思い起こして、わたしたちの思いわずらいを主にゆだね、忍耐して、主の救いを待たなければならない。{COL 1208.3}

戦いを経ることによって、霊的命は強められるのである。試練に耐えることによって、品性は堅固になり、霊の結ぶ美しい徳が養われる。信仰、柔和、愛といった美しい完全な実は、暴風と暗黒の中で最もよく成熟するものなのである。{COL 1208.4}

「農夫は、地の尊い実りを、前の雨と後の雨とがあるまで、耐え忍んで待っている」（ヤコブ5：7）。そのようにクリスチャンは、神の言葉が自分の生活の中で実るのを、忍耐して待たなければならない。わたしたちが聖霊によって与えられる美徳を祈り求める場合に、神は、わたしたちをそのような実を結ぶことができる環境におくことによって、わたしたちの祈りに答えてくださることが度々ある。しかし、わたしたちは、神の目的が理解できないで、うろたえてしまう。しかし、この成長と結実の過程を通らなければ、だれ1人として、このような実を結ぶことはできないのである。わたしたちのなすべき分は、神の言葉を受け入れて、それをしっかりと心に保ち、み言葉の支配に全く自分をゆだねることである。そうすれば、み言葉の与えられた目的が、わたしたちの中に完成されるのである。{COL 1208.5}

「もしだれでもわたしを愛するならば、わたしの言葉を守るであろう。そして、わたしの父はその人を愛し、また、わたしたちはその人のところに行って、その人と一緒に住

むであろう」とキリストは言われた（ヨハネ14：23）。わたしたちは、強く完全な神の意志に心を引きつけられてしまう。それは、わたしたちが、尽きない能力の源と生きたつながりを持つからである。わたしたちの信仰生活は、イエス・キリストに全く捕らえられてしまう。もはや、ありきたりの利己的生活は送らなくなり、キリストがわたしたちの内に住んでくださる。イエスの品性がわたしたちの中に再現される。このようにして、わたしたちは、聖霊の実を結び、「30倍、60倍、100倍」にもなるのである。 {COL 1208.6}

第3章 神の力による成長

本章は、マルコ4：26～29に基づく {COL 1209.1}

種まきのたとえは、さまざまな疑問を人々の心にいだかせることになった。聴衆の中には、キリストが地上に王国を建設なさらないことを悟った者もあったが、不思議な感に打たれ、とまどう者も多かった。キリストは、このような人々の当惑をごらんになった。そして、別のたとえをお用いになって、現世的王国の迷夢から覚めさせ、魂の中に働く神の恵みのことに人々の心を向けさせようとなさった。 {COL 1209.2}

「また言われた、『神の国は、ある人が地に種をまくようなものである。夜昼、寝起きしている間に、種は芽を出して育って行くが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。地はおのずから実を結ばせるもので、初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる。実がいると、すぐにかまを入れる。刈入れ時がきたからである。』」 {COL 1209.3}

「刈入れ時がきたから」かまを入れるのは、キリストにほかならない。最後の大いなる日に、地の収穫を刈り取るのは、キリストである。ところが、種をまく者は、キリストに代わって働く者を表している。「種は芽を出して育って行くが、どうしてそうなるのか、その人は知らない」といわれているが、神のみ子は、そうではない。キリストは、命ぜられた仕事をなおざりにして眠ったりなさらない。彼は、昼も夜も見守っておられるのである。種がどのように育つかを知らずにおられるのではない。 {COL 1209.4}

種のたとえは、神が自然界に働いておられることを示している。種の中には、神ご自身が植えつけられた発芽力がある。しかし、種をそのままにしておいたのでは、発芽する力はない。種の発芽を助けるために、人間の側でしなければならないことがある。人間は土を耕して肥料をほどこし、そして種をまくのである。また、畑の耕作もしなければならない。しかし、人間の力には限度がある。どんな能力と知恵をもってしても、種から作物

を発生させることはできない。人間は、力の限りを尽くしたあとでもなお、神の力に依存しなければならない。神は、種まきから収穫までの驚くべき段階を1つずつ、全能の力によって結びつけられたのである。 {COL 1209.5}

種には命があり、土には力がある。無限の力が昼となく夜となく活動していなければ、種は、実を結ばない。乾燥した原野にうるおいを与えるために、雨が降らなければならない。また、太陽は熱を与え、埋もれた種には電力が通じなければならない。創造主が植えつけられた命は、創造主だけが呼び起こすことができるのである。どの種の発芽も、どの植物の成長も、みな神の力によるのである。 {COL 1209.6}

「地が芽をいだし、園がまいたものを生やすように、主なる神は義と誉とを、もろもろの国の前に、生やされる」（イザヤ61：11）。自然界の種まきと霊の種まきは同じで、真理を教える者は、まず心の土地の用意をしてから種をまかなければならない。しかし、命を発生させる力は、神からだけくるのである。人間には限界があって、それ以上はどんなに努力してもむだである。わたしたちは、み言葉を宣べ伝えるのではあるが、魂を生きかえらせる力を与えることはできない。また、義を生じ賛美の声をあげさせることもできない。み言葉の宣教には、人力以上の力が働かなければならない。ただ神の霊によってのみ、み言葉は、生きた力を持つようになり、魂を造りかえて永遠の命に至らせる。キリストが弟子たちに印象づけようとなさったのは、このことであった。弟子たちの持っている力が、彼らの働きに成功をもたらすのではなくて、神の奇跡を行う力が、み言葉に力を与えることを、お教えになった。 {COL 1209.7}

種をまく者の働きは、信仰の働きである。彼は種の発芽と成長の神秘を、理解することはできない。しかし、彼は、作物を豊かに実らせてくださる神の力に信頼している。種をまくということは、家族の食糧となる尊い穀物を投げすてるようなものである。ところが、それが、さらに増加して返ってくることを信じて、 1210今あるものを地にまいてい

るだけである。そのようにキリストの僕たちも、まいた種が豊かに実ることを期待して働かなければならない。{COL 1209.8}

よい種は、しばらくの間は、冷淡で利己的な世俗を愛する心の中に置かれて、それが根をおろしている様子を外部からは見ることができないが、やがて、神の霊が魂の上に吹きかけられると、埋もれていた種から芽が生えてきて、神の栄光のために、実を結ぶようになるのである。わたしたちの一生の仕事の中でも、どれが実るようになるのかよくわからない。これであるか、あれであるかがわからない。しかしこれは、わたしたちの決定すべき問題ではない。わたしたちは、自分の本分を尽くして、結果を神にゆだねればよいのである。「朝のうちに種をまけ、夕まで手を休めてはならない。実るのは、これであるか、あれであるか、あるいは2つともに良いのであるか、あなたは知らないからである」（伝道の書11：6）。「地のある限り、種まきの時も、刈入れの時も、……やむことはないであろう」と神のお与えになったお約束は語っている（創世記8：22）。農夫は、この約束を信じて、土地を耕し、種をまくのである。わたしたちも、霊的な種まきを、これと同じようにすべきである。「このように、わが口から出る言葉も、むなしくわたしに帰らない。わたしの喜ぶところのことをなし、わたしが命じ送った事を果す」（イザヤ55：11）。「種を携え、涙を流して出て行く者は、束を携え、喜びの声をあげて帰ってくるであろう」（詩篇126：6）という、神の約束を信じて働かなければならない。{COL 1210.1}

種の発芽は、霊的命の発生を示し、作物の成長は、クリスチャンの成長の姿を美しく象徴している。自然界と同様に恩恵の世界でも、成長がみられなければ命があるとはいえない。作物は、成長するか、枯れるかのどちらかである。作物は、黙々と、人知れず、成長し続けるが、クリスチャン生活の成長もそれと同様である。成長中のどの段階においても、わたしたちの生命は完全であり得るのである。しかし、神がわたしたちのために備えられた目的を達成するためには、継続的に前進する必要がある。きよめは一生の仕事である。わたしたちの機会が増加するにつれて、経験も広くなり、知識も加わるのである。そ

して次第に重い責任を負うことができるようになり、特権が与えられるにつれて、ますます円熟するのである。{COL 1210.2}

苗木は、その生命を支えるために、神がお備えになったものを受けて、成長するのである。苗木は地中に根をおろし、日光を浴び、露や雨にうるおされる。空気中から生命を支える養分を受ける。それと同じように、クリスチャンも神がお備えになるものを受けて成長しなければならない。自分たちの無力を感じつつも、豊かな経験を得るために、与えられたすべての機会を活用しなければならない。苗木が地の中に根をおろすように、わたしたちは、キリストの中に深く根をおろさなければならない。また、苗木が太陽の光や露や雨を受けるように、わたしたちも、心を開いて、聖霊を受けなければならない。それは、「権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである」と万軍の主は言われる（ゼカリヤ4：6）。わたしたちの心がキリストを瞑想し続けているならば、主は、「冬の雨のように、わたしたちに臨み、春の雨のように地を潤される」のである（ホセア6：3）。主は、義の太陽のように上り、「その翼には、いやす力を備えている」（マラキ4：2）。わたしたちは、「ゆりのように花咲き」「園のように栄え、ぶどうの木のように花咲」くのである（ホセア14：5、7）。キリストをわたしたちの個人的救い主と仰いで信頼することによって、わたしたちは、すべてのことにおいて、わたしたちの頭であるキリストのように成長するのである。{COL 1210.3}

「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実ができる。」農夫が種をまき、作物の手入れをするのは、穀物を実らせるためである。飢えたものに食を与え、将来の収穫に備えて種をたくわえることを望むのである。そのように、天の農夫であるキリストも、ご自分の労苦と犠牲に対する報いとして収穫を期待なさるのである。キリストは、人々の心の中にご自分のかたちを再現しようとしておられ、現に彼を信じる者によって、このことが実現されているのである。クリスチャン生活の目的は、実を結ぶことである。すなわち、信 1211者の中にキリストの品性が再現され、それがまた他の人々の中に再現されるようになるためである。{COL 1210.4}

草木は、ただ自分のためだけに芽ばえ、成長し、実を結ぶのではなくて、「種まく者に種を与え、食べる者にかてを与える」ためである（イザヤ55：10）。そのように人は、自分だけのために生きるものではない。クリスチャンは、キリストの代表者として、他の魂を救うために、この世界に存在しているのである。{COL 1211.1}

自己中心の生活には、成長もなければ、実を結ぶこともない。もし、キリストを自分の救い主として信じたならば、自分を忘れて、他を助けようと努力するはずである。わたしたちは、キリストの愛と憐れみについて語り、負わせられるすべての義務を果たし、心には、救霊の責任を感じて、失われた者を救うために、力の限りを尽くさなければならないのである。{COL 1211.2}

もしも、わたしたちが、キリストの霊、すなわち、他に対する無我の愛と働きの精神を受けるならば、自然に成長して、実を結ぶのである。あなたの品性にはみ霊の実が熟し、信仰は増し加わり、確信は強固になり、愛は完成される。そして、すべての純真なこと、すべての尊ぶべきこと、すべての愛すべきことにおいて、ますますキリストのみかたちを反映するようになるのである。{COL 1211.3}

「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」である（ガラテヤ5：22、23）。この実は、決して滅びうせることがなく、永遠の命に至る収穫をもたらすのである。{COL 1211.4}

「実がいると、すぐにかまを入れる。刈入れ時がきたからである。」キリストは、ご自分の教会の中に、ご自身をあらわそうと熱望しておられる。キリストの品性が完全にキリストの民の中に再現された時に、彼らをご自分の所に迎えるために、主はこられるのである。{COL 1211.5}

主イエス・キリストの再臨を待ち望むばかりでなく、それを早めることが、すべてのクリスチャンの特権である（Ⅱペテロ3：12・文語訳参照）。キリストの名をとなえるすべての者が、神のみ栄えのために実を結ぶなら、福音の種は、どんなにすみやかに、全世

界にまかれることであろう。世界の最後の大収穫は、急速に熟すであろう。そして、この尊い実を集めるために、キリストはおいでになるのである。 {COL 1211.6}

第14章　庭園の雑草

本章は、マタイ13：24～30、37～43に基づく {COL 1211.7}

「また、ほかの譬を彼らに示して言われた、『天国は、良い種を自分の畑にまいておいた人のようなものである。人々が眠っている間に敵がきて、麦の中に毒麦をまいて立ち去った。芽がはえ出て実を結ぶと、同時に毒麦もあらわれた』。」 {COL 1211.8}

「畑は世界である」とキリストは言われた。しかし、わたしたちは、これを世界の中にあるキリストの教会を意味するものと解釈しなければならない。このたとえは、神の国と人類を救済する神の働きに関するものであり、これは、教会によって行われるものである。たしかに、聖霊は、全世界に行きわたり、いたる所で人々の心に働かれるのではあるが、わたしたちが熟して、神の倉に収められるようになるのは、教会の中においてである。 {COL 1211.9}

「良い種をまく者は、人の子である。……良い種と言うのは御国の子たちで、毒麦は悪い者の子たちである。」良い種は、神のみ言葉、すなわち真理によって生まれた人々を代表している。毒麦は、あやまり、すなわち、虚偽の原則がもたらした実、そのあらわれた結果である。「それをまいた敵は悪魔である。」毒麦の種をまいたのは、神でも天使でもない。毒麦は、常に、神と人類の敵である悪魔がまくのである。 {COL 1211.1]0}

東の国々では、復讐のために、種をまいたばかりの敵の畑に、一見麦と少しも変わらない毒麦をまいたりした。それが麦といっしょに成長して作物を損ない、畑の持ち主に迷惑と損害を与えた。同様にサタンは、キリストに対する敵意から、天国の良い麦の間に悪い種をまき散らすのである。サタンは、自分が種をまいておきながら、それを神のイエスのしわざのようにみせかける。悪魔は教会内に、キリストの名はとなえるが、キリストの品性を受け入れない者を入り込ませて、神のみ栄えを汚し、救いの働きを誤り伝えて、魂を危険におとしいれるのである。 {COL 1211.1]1}

キリストの僕たちは、教会の中に、真の信者と偽りの信者が混じっているのを見て、心を痛める。彼らは、教会を清めるために、なんとかしなければならないと考える。たとえにある主人の僕たちのように、今すぐにでも毒麦を引き抜こうと試みるのである。ところが、キリストは、「いや、毒麦を集めようとして、麦も一緒に抜くかも知れない。収穫まで両方とも育つままにしておけ」と言われるのである。 {COL 1212.1}

公然とした罪を犯して悔い改めない者は、教会から除外しなければならないことは、キリストが明らかに教えておられるところであるが、人の品性や動機までさばくことは、わたしたちにまかせられていないのである。キリストは、わたしたちの性質をよく知りぬいておられるから、こうしてさばくことはおまかせにならない。もしわたしたちがにせクリスチャンであると思う人々を教会から引き抜こうとするならば、必ず間違いをするにきまっている。キリストがご自分に引き寄せておられる大切な人々を、わたしたちは全く見込みのない者だと考える危険がある。わたしたちが、自分たちの不完全な判断に従って、これらの魂を扱おうとするならば、おそらく彼らの望みの綱を断ち切ってしまうことであろう。自分こそクリスチャンであると思っている者の多くが、最後には、量が不足していることに気づくことであろう。隣人たちからは、全然天国に入れるとは思われなかった人々が、多く天国に入ることであろう。人は外の形によって判断し、神は心を評価なさるのである。麦と毒麦とは、収穫までいっしょに成長する。そして、収穫というのは、恵みの時の終わりのことである。 {COL 1212.2}

救い主の言葉の中には、もう1つの教訓が教えられている。それは、驚くべき忍耐とやさしい愛が必要であるということである。毒麦の根と良い麦の根がからみ合っているように、偽りの兄弟も、真の弟子とかたく結びついている。そして、これらのにせ兄弟の正体がまだ十分にあらわされていない。もし彼らが教会から除外されるとすると、固く信仰にとどまるはずの者までが、そのためにつまずいてしまうのである。 {COL 1212.3}

このたとえの中で明らかに教えられていることは、人間や天使に対して、神ご自身がどのような取り扱いをされるかということである。サタンは欺く者である。サタンが天で罪を犯した時に、忠実な天使たちでさえ、彼の品性を見ぬくことはできなかった。そのために、神は、直ちにサタンを滅ぼされなかったのである。もし、滅ぼしてしまわれたならば、聖天使たちは、神の義と愛とを認めることはできなかったことであろう。神の慈愛に対する疑惑は、悪の種のように、罪と悲しみの苦い実を結んだことであろう。このようなわけで、悪の創始者は滅ぼされることなく、その品性を十分にあらわす期間が与えられた。神は、幾世代に及ぶ長い悪の活動をながめて、心を痛め、カルバリー山上で、イエスという無限の賜物をお与えになった。こうして、サタンがどんなに誤ったことを伝えても、人々が、それに惑わされないようになさった。毒麦を引きぬけば、必ず大切な麦まで引きぬいてしまう危険があるからである。わたしたちも、天地の主がサタンに対して忍耐なさるように、兄弟に対して忍耐深くあるべきではなかろうか。 {COL 1212.4}

教会内にクリスチャンの名に値しない人々がいるからといって、世の人々がキリスト教の真理を疑ってもよいという理由にはならない。また、クリスチャンもにせ兄弟がいるからといって失望すべきではない。初代教会はどうであったであろうか。アナニヤとサッピラは、弟子たちの仲間に入っていたのである。魔術師のシモンもバプテスマを受けた。パウロを去ったデマスも、信者であると思われていた。イスカリオテのユダは、使徒の1人に数えられていた。あがない主は、魂を1人でも失うことを望まれないのである。イエスとユダとの経験は、かたくなな人間の性質をイエスがどれほど忍ばれたかを示すために記録された 1213ものである。主は、わたしたちにも、ご自分と共に忍ぶことを命じておられる。にせ兄弟は、世の終わりに至るまで教会の中に残るであろうと主は言われるのである。 {COL 1212.5}

こうしたキリストの警告があったにもかかわらず、毒麦を引きぬこうとした人々があった。悪い行いをしたと思われた人々を罰するために、教会は政権の援助を求めた。既定の教理と異なった意見をいだいた者は、投獄、拷問、死刑などの刑に処せられた。しかも

こうしたことが、キリストの承認のもとに行動すると言っていた人々の扇動によって行われた。しかし、彼らにこのような行動をさせるのは、キリストのみ霊ではなくて、サタンの霊である。これが、世界を自分の支配下におくための、サタン自身の方法である。教会が、このようないわゆる異端者に対して取った処置は、神に対する誤解を人々にいだかせることになったのである。 {COL 1213.1}

キリストのたとえは、わたしたちが人をさばいたり、罰したりしないで、へりくだった気持ちを持って、自己過信におちいらないことを戒めている。畑にまかれた種が全部よい麦ではない。ただ教会の中にいるだけで、その人がクリスチャンだという証拠にならない。 {COL 1213.2}

毒麦は、青葉のうちは、麦とよく似ている。ところが畑が色づいて収穫時になると、価値のない雑草は、穂がよく熟して、その重みで頭を下げる麦とは少しも似ていない。敬虔の形をした罪人は、しばらくキリストの真の弟子の間に混じっている。そしてクリスチャンとよく似ているために、多くの人をあざむくのであるが、しかし、世界の収穫の時には、善と悪との間には、なんの類似もないのである。その時、教会には加わったが、キリストにつながっていない者は、明白にわかるのである。 {COL 1213.3}

毒麦は、麦の間で成長し、同じように太陽の光や雨に浴すことが許された。しかし、収穫の時には、「その時あなたがたは、再び義人と悪人、神に仕える者と、仕えない者との区別を知るようになる」とある（マラキ3：18）。天の家族とともに住む価値のある者がだれであるかを決定するのは、主ご自身である。主は、各自の言葉と行為によって、おさばきになる。口で言うことには、なんの値うちもない。運命を決定するのは、品性である。 {COL 1213.4}

やがて毒麦が、全部、麦になる日が来るということを、救い主は教えておられない。麦と毒麦とは、収穫、すなわち、世の終わりまでいっしょに成長する。そして、毒麦は束ねて、火に焼かれ、麦は神の倉に収められるのである。「そのとき、義人たちは彼らの父

の御国で、太陽のように輝きわたるであろう。」「人の子はその使たちをつかわし、つまずきとなるものと不法を行う者とを、ことごとく御国からとり集めて、炉の火に投げ入れさせるであろう。そこでは泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう。」 {COL 1213.5}

第5章　一粒のからし種のようなもの

本章は、マタイ13：31、32、マルコ4：30～32、ルカ13：18、19に基づく {COL 1213.6}

キリストの教えに耳を傾けていた群衆の中には、パリサイ人がたくさんいた。イエスをメシヤであると認める者が、群衆の中にわずかしかいないのを、彼らは軽べつの目で見ていた。そして、この見栄えのしない教師が、どうしてイスラエルを世界の主権を握った国家にすることができるであろうかと心の中で疑った。富も権力も地位も持つことなくして、どうして新しい王国を建設することができるであろうか。キリストは、彼らのこのような考えをすばやく読みとって、彼らにお答えになった。 {COL 1213.7}

「神の国を何に比べようか。また、どんな譬で言いあらわそうか。」神の国になぞらえることができるものは、この地上の政府のどこにも見いだすことはできなかった。また、一般の社会制度の中にも、神の国の象徴になるものはなかった。「それは一粒のからし種のようなものである。地にまかれる時には、地上 1214のどんな種よりも小さいが、まかれると、成長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が宿るほどになる。」 {COL 1213.8}

種の中の胚種は、神が種の中に植えつけられた生命の原則によって成長するのである。種の発育は、全く人間の力によるものではない。キリストの王国でもそれと同様である。それは、新創造である。その発達の原則は、世界の諸国を支配している原則とは正反対のものである。地上の政府は、武力によって目的を達し、戦争によって領土を保持する。しかし、新しい国の建設者は、平和の君である。聖霊は、おそろしい猛獣によって地上の王国を象徴したが、キリストは「世の罪を取り除く神の小羊」である（ヨハネ1：29）。暴力をつかって良心を強いることは、小羊の政策ではない。ユダヤ人は、この世の王国の建設と同じ方法で、神の国が建てられることを期待し、正義をおし進めるためには、外的

手段に訴えて、いろいろな策を講じたのである。しかし、キリストは、人の心に原則をお植えになるのである。真理と義とを植えることによって、誤りと罪に対抗なさるのである。 {COL 1214.1}

キリストがこのたとえを語られた時に、からしの木があちこちに生えているのが見え、周りの草や穀類などよりも高くのびて、その枝が軽く風にゆれていた。鳥は枝から枝に飛び回り、その茂みの中でさえずっていた。ところが、このように大きくなった植物の種はといえば、種の中でも最も小さいものの1つであった。それは、最初、若芽を出す。その強い生命力にあふれた芽は、ますます茂って、大きな木になるのである。そのようにキリストの王国も、最初のうちは、取るに足らない微々たるもののように思われた。それを地上の国々に比較するならば、最も小さいもののように見えた。この世の支配者たちは、キリストの王権の主張をあざ笑った。しかし福音の王国の命は、キリストの弟子たちにゆだねられた偉大な真理の中にひそんでいた。しかも、その成長はなんと早く、その感化はなんと広い範囲にまで及んだことであろう。キリストがこのたとえを語られた時には、この新王国を代表したものは、少数のガリラヤの漁夫たちに過ぎなかった。彼らはまた、貧しかったので、このような少数の無学な弟子たちの仲間には加わるものではないと、強く主張する人々もあった。ところが、からし種は、成長してその枝を全世界に広げることになっていた。当時の民衆の心を満たしていた世界的国家の栄光が消え去ったあとにも、キリストの国は存続して、偉大な感化力を地のすみずみにまで及ぼすことになるのである。 {COL 1214.2}

このように、人の心の中の恵みの働きも、初めは、小さいのである。わずか1つの言葉、人の魂にさし込むひとすじの光、といった感化が、新しい生命の出発になるのである。いったい、だれがその結果を測り知ることができるであろうか。 {COL 1214.3}

からし種のたとえは、キリストの王国の成長のことばかりでなくて、その成長の各段階において、このたとえの中で述べられていることがくり返されるのである。神は、各時

代の神の教会に、その時、その時にふさわしい特別の真理と特別の仕事をお与えになった。世の知者、学者にはかくされた真理が、幼児のような謙遜な者にあらわされた。真理は自己犠牲を要求する。戦いもあれば、勝利も得なければならない。初めのうち、支持者の数は少なく、世の偉大な人々や俗化した教会からは、反対され、軽べつされた。キリストの先駆者ヨハネはどうであろうか。彼は、ユダヤ民族の誇りと形式主義を恐れることなく責めた。また、ヨーロッパに福音を伝えたパウロとシラスはどうであろうか。彼らは、天幕作りであった。彼らが仲間とともに、トロアスからピリピに船出した時に、彼らの任務は、人の目にもつかない小さいことに思われた。また、「すでに老年」となって、鎖につながれたパウロは、カイザルの家の者にキリストを説いた。ローマ帝国の異教主義と戦った少数の奴隷と農民たちに目を向けて見よう。また、世の知恵の作り出した傑作ともいうべき大教会に対抗したマルチン・ルターを見てみよう。彼は皇帝や法王の面前で、「わたしはここに立つ。わたしはこうせざるを得ない。神よ、わたしをお助けください」と叫んで、神の言葉に堅く立った。ジョン・ウェスレーは、彼の時代の形式主 1215義、肉欲主義、無神論のただ中にあって、キリストとキリストの義を説いた。彼は、異教の世界の悲惨な状態に心を痛め、キリストの愛の使命を彼らに伝える特権が自分に与えられることを願った。ところが、教会の指導者は、「若者よ、すわりたまえ。神が異教徒の改心を望まれるなら、神は、何もわれらの助けを受けずとも、それをなさるであろう」と言ったのである。{COL 1214.4}

現代の大宗教家たちは、幾世紀も前に真理の種を植えた者をほめたたえて、その記念碑を建てる。ところが、そうする一方、彼らは今日、その同じ種から生じてきたものをふみにじることが多いのではないだろうか。「モーセに神が語られたということは知っている。だが、あの人が〔キリストにつかわされた使者はキリストを代表している〕どこから来た者か、わたしたちは知らぬ」という叫びが依然としてくり返されている（ヨハネ9：29）。初期におけると同様に、現代に対して特別に与えられた真理は、教会の権威者の

所に見いだされるのではない。それは、これといった学識も知恵もないけれども、神のみ言葉を信じる男女の所にあるのである。{COL 1215.1}

「兄弟たちよ。あなたがたは召された時のことを考えてみるがよい。人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くはなく、身分の高い者も多くはない。それだのに神は、知者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選び、有力な者を無力な者にするために、この世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち、無きに等しい者を、あえて選ばれたのである」（Ⅰコリント1：26～28）。「それは、あなたがたの信仰が人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためであった」（Ⅰコリント2：5）。{COL 1215.2}

からし種のたとえは、この最終時代において勝利のうちに輝かしい成就を見るのである。小さな種が木になるのである。最後の警告使命が、「あらゆる国民、部族、国語」に宣べ伝えられ（黙示録14：6～14）、「その中から御名を負う民を選び出され」る（使徒行伝15：14）。そして、地は神の栄光によって照らされるのである（黙示録18：1）。{COL 1215.3}

第6章　自然界に働く神の力

家庭でも、学校でも、この種まきと種の成長とから、尊い教訓を子供たちに教えることができる。青少年には、自然の中に神の力が働いていることを認めさせなければならない。そうすれば、彼らは、目では見ることができない祝福を、信仰によって受けることができる。神は驚くべきお働きによって、大きな家族の必要を満たしておられることを知り、それとともに、神と協力する方法がわかってくると、もっと神を信じることができるようになり、彼ら自身の日常生活の中に、もっと神の力を自覚するようになる。{COL 1215.4}

神は、地球を造られたのと同様に、神の言葉によって、種を創造なさったのである。神は、み言葉によって種に成長する力と、繁茂する力をお与えになった。神は、言われた、「『地は青草と、種をもつ草と、種類にしたがって種のある実を結ぶ果樹とを地の上にはえさせよ。』そのようになった。……神は見て、良しとされた」（創世記1：11、12）。今でも、種を成長させているのは、この言葉である。太陽の光をめざして、種からもえ出る緑の葉は、1つ1つ主のみ言葉の奇跡的力を物語っている。「主が仰せられると、そのようになり、命じられると堅く立った。」{COL 1215.5}

「わたしたちの日ごとの食物を、きょうもお与えください」と祈ることを、キリストは弟子たちにお教えになった。そして、野の草花を指さして、「野の草でさえ、神はこのように装って下さるなら、あなたがたに、それ以上よくしてくださらないはずがあろうか」と保証されたのである（マタイ6：11、30）。キリストは、この祈りに答えるため、また、この保証を果たすために、絶えず働いておられるのである。人間に衣服や食物を与えるために、目に見えない力が、人間のために常に活動を続けている。一見、捨て去られたように思われる種を生きた植物にするために、主は、いろいろな 1216方法をお用いになる。そして、豊かな収穫をもたらすために必要なものを、適当にお与えになる。詩篇の記者は、美しく次のようにそのことを歌っている。{COL 1215.6}

「あなたは地に臨んで、これに水をそそぎ、 {COL 1216.1}

これを大いに豊かにされる。 {COL 1216.2}

神の川は水で満ちている。 {COL 1216.3}

あなたはそのように備えして {COL 1216.4}

彼らに穀物を与えられる。 {COL 1216.5}

あなたはその田みぞを豊かにうるおし、 {COL 1216.6}

そのうねを整え、夕立をもってそれを柔らかにし、 {COL 1216.7}

そのもえ出るものを祝福し、 {COL 1216.8}

またその恵みをもって年の冠とされる。 {COL 1216.9}

あなたの道にはあぶらがしたたる。」 （詩篇65：9～11） {COL 1216.1]1}

物質の世界は、神の支配のもとにある。自然界は、自然の法則に従っている。万物は、創造主のみこころを語り、また行っている。雲、日光、露、雨、風、嵐などはみな、神の支配のもとにあって、神の命令には絶対に従う。「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実」と麦が成長していくのは、それが神の法則に従っているからである（マルコ4：28）。穀物の苗は、神の働きに逆らわない。であるから、季節がめぐってくるにつれて成長するのである。それなのに、神のかたちに造られ、理性と言語が与えられた人間だけが、神の賜物に対する感謝もあらわさず、みこころにも従わないということがあってよかろうか。理知をもった人間だけが、世界に災いをおよぼしてよいであろうか。 {COL 1216.1]2}

人間の命を支えることに貢献することは、みな神と人間とが力を合わせることによって得られる。種をまく人間の手のわざがなければ、収穫はあり得ない。一方、日光、雨、露、雲などによる神の力が働かないなら、作物は実らない。これは、どんな事業や、どん

な研究でも、また、どんな分野でも同様である。さらに、霊的な事柄、品性の形成、クリスチャン活動の各部門においても同じことが言える。そこには、わたしたちのなすべき仕事があるとともに、それに神の力が結びつかなければならない。そうでないと、わたしたちの努力は、全く無に帰してしまうのである。{COL 1216.1]3}

霊的事柄であろうと、物質的事柄であろうと、人間がなにかをなしとげるためには、創造主との協力が必要なことを忘れてはならない。わたしたちは、神の支えによって生きていることを、どうしても自覚しなければならない。わたしたちはあまりにも人間に信頼し、人間の作り出したものに頼りすぎる。神が喜んで与えようとしておられる神の力に、わたしたちはほとんど信頼していない。「わたしたちは神の同労者である」（Ⅰコリント3：9）。人間が分担することは、ごくわずかな部分である。しかし、キリストの神性と結ばれることにより、キリストの力が与えられて、すべてのことをすることができるのである。{COL 1216.1]4}

種が次第に穀物に成長していくことは、子供の教育のよい実物教訓である。「初めに芽、つぎに穂、つぎに穂の中に豊かな実」がみのる。このたとえを語られたイエスが、小さい種をつくり、それに活力を与え、その成長の法則をお定めになった。しかも、たとえが教える真理は、イエスご自身の生活の中に生きた現実となってあらわれていた。彼は、肉体においても、霊性においても、植物が示している成長の法則に従っておられた。そして、世のすべての青年たちも、その通りに従うことを望んでおられる。キリストは、天の主権者であり、栄光の王であられたにもかかわらず、ベツレヘムの赤子となり、しばらくの間、母の腕の中のか弱い幼児となられた。成長しては、従順な子として家業に従事し、大人の知恵ではなく、子供にふさわしい知恵をもって語り、行動された。また、親を敬い、親のいいつけを守ってよく手助けをし、子供の能力に応じたことをなさった。しかし、キリストは、その成長のどの段階においても完全で、罪のない人として、単純な、かざり気のない美徳をもっておられたのである。聖書には、彼の少年時代のことが次のように記録されている。「幼な子は、ますます成長して強くなり、知恵に満ち、そして神の恵みが

その上にあった」。イエスの青年時代については、「イエスはますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された」と書いてある（ルカ2：40、52）。{COL 1216.1]5}

ここに、親と教師がどんな働きをすべきかが教えられている。彼らは、青年たちの性質をよく育てて、それぞれの成長の段階で、あたかも、花園の花が自然に開くように、その時期にふさわしい、自然の美を発揮するように導かなければならない。{COL 1217.1}

自然のままのかざり気のない子供たちが、一番人を引き付ける。子供たちを特別あつかいにしたり、子供の言った小ざかしい言葉を彼らの面前で、また言ったりするのは、賢明ではない。彼らの容貌や言葉や行動をほめそやして、虚栄心をあおってはならない。また、高価な衣服を着せたり、はでな服装をさせてはならない。こういうことは、子供の心に高慢な気持ちを起こさせ、友だちの心にはしっと心を起こさせる。{COL 1217.2}

子供は、子供らしく無邪気に教育すべきである。彼らは、簡単な家事の手伝いや、その年令にふさわしい楽しみや経験で満足するように、訓練しなければならない。子供時代はたとえの芽に相当する。芽には芽独特の美しさがある。無理に彼らを大人びたませたものにすることはない。子供時代のはつらつさと美しさをできるだけ長く保たせたいものである。{COL 1217.3}

小さい子供たちでも、その年令に相当した宗教経験をもって、クリスチャンになることができる。神が子供たちに期待しておられるのは、それだけである。彼らに霊的なことを教えなければならない。子供たちが、キリストの品性にならって品性を築くことができるように、親は、あらゆる機会を活用しなければならない。{COL 1217.4}

自然界の神の法則によれば、原因があれば、必ず結果が生じるということである。収穫によって、何がまかれたかがわかる。なまけ者は自分のした仕事にせめられる。収穫が、彼のなまけたことの証拠となる。霊的なことでも同じである。その働きの結果をみて、

すべての働き人の忠実さがはかられる。どんな仕事をしたか、勤勉であったかなまけたかは、収穫を見ればわかる。永遠の運命も同じようにして、決定されるのである。{COL 1217.5}

どの種でも、まいた種の実を刈り取る。人生においても同じである。わたしたちは、すべて、憐れみ、同情、愛などの種をまかなければならない。なぜなら、まいたものの実を刈り取るからである。また、利己主義、利己心、自尊などの性質やわがままな行動には、すべて、それ相当の収穫がある。利己的な生活をして、肉の種をまく者は、その結果として滅びを刈り取るのである。{COL 1217.6}

神は、人を滅ぼすようなかたではない。滅びにおちいる者は、自分で自分を滅ぼすのである。良心の警告をかえりみない者は、不信の種をまいて、必ず、その収穫を刈り取るのである。むかし、パロは、神の最初の警告をしりぞけて、強情の種をまいたために、強情の収穫を刈り取った。これは、何も神が彼を無理に信じられない者になさったのではなかった。パロのまいた不信の種がそれ相当の実を結んだのである。こうして、彼の抵抗は続き、ついに、エジプトの国は全く荒れ果て、パロの長子と、エジプト全国民の長子がことごとく冷たいしかばねとなり、パロの全軍が馬と戦車もろともに、海底に沈んでしまうことになったのである。「人は自分のまいたものを、刈り取ることになる」というみ言葉がいかに真実であるかを、パロの生涯は、恐ろしいばかりに示したのである（ガラテヤ6：7）。人々が、このことを自覚しさえすれば、どんなに種をまくことに注意することであろう。{COL 1217.7}

まかれた種が収穫をもたらし、それがまたまかれて、収穫はさらに増し加わっていく。わたしたちと他人との関係においても、この法則があてはまる。どの行為、どの言葉も実を結ぶ種である。情け深い心からの親切、服従、自己犠牲などの行為は、他の人々の心の中に再び生え出て、それが彼らによって、また、他の人々の心の中にまかれるのである。同様に、ねたみ、悪意、争いなどは、「苦い根」となって生え、多くの人を汚すのであ

る（ヘブル12：15）。そして、この「多くの人」は、どれだけ多数の人々を毒することであろう。こうして、善と悪の種まきは、現世ならびに永遠 1218にわたって続くのである。 {COL 1217.8}

霊的なことであろうが、物質界のことであろうが、物惜しみせずに施すことが、このたとえの中で教えられている。「すべての水のほとりに種を」まく者は、幸福であると主は言われる（イザヤ32：20）。「わたしの考えはこうである。少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる」（Ⅱコリント9：6）。すべての水のほとりにまくことは、神の賜物を絶えず人々に分かつことを意味する。それは、神の働きであろうが、人類の必要であろうが、援助が必要な所に分かち与えることなのである。ところが、与えたからといって、自分が貧しくなることはない。 {COL 1218.1}

「豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる」からである。種をまく者は、種をまいて増やす。神の賜物を忠実に人々に分かつ者も同様である。彼らは分かつことによって、自分たちの祝福を増し加えるのである。神は、彼らが、人々に与えることができるように、十分なものを約束しておられる。「与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう。人々はおし入れ、ゆすり入れ、あふれ出るまでに量をよくして、あなたがたのふところに入れてくれるであろう」（ルカ6：38）。 {COL 1218.2}

種まきと収穫には、これよりもっと多くのことが含まれている。わたしたちが神から与えられた物質的祝福を人々に分け与えると、人々は、わたしたちの心の中に愛と同情があふれているのを見て、神に賛美と感謝の念をいだくのである。こうして、心の畑は、霊的真理の種を受け入れる用意ができる。種をまく者に種をお与えになる神は、種を芽生えさせ、永遠の命に至る実を結ばせてくださるのである。 {COL 1218.3}

種まきの話によってキリストは、ご自分をわたしたちの贖罪のために犠牲になさることを示された。「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。し

かし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」と言われた（ヨハネ12：24）。このように、キリストの死は、神の国のために実を結ぶことになる。命は、植物界の法則と同じように、イエスの死の結果として与えられるものである。{COL 1218.4}

キリストとともに働く者として、実を結ぶことを願う者は、すべてまず地に落ちて死ななければならない。世界の必要という畑のうねの中に、自分の命をまかなければならない。利己心と自己中心主義を殺さなければならない。しかし、この自己犠牲の法則は自己保存の法則でもある。地に埋もれた種は、実を結び、それがまたまかれる。こうして、収穫は増えていく。農夫は、まくことによって、穀物を保存するのである。そのように、人生においても、与えることは、生きることである。保存される命とは、神と人との奉仕のために、おしげもなくささげられる命である。この世においてキリストのために、その命を犠牲にした者は、それを保って、永遠の命に至るのである。{COL 1218.5}

種は、新しい生命にもえ出るために死ぬのである。ここに復活のことが教えられている。神を愛する者は、みな、天のエデンにおいて再び生きるのである。墓の中に横たえられ、朽ちてゆく者について、神は言われるのである。「朽ちるものでまかれ、朽ちないものによみがえり、卑しいものでまかれ、栄光あるものによみがえり、弱いものでまかれ、強いものによみがえる」と（Ｉコリント15：42、43）。{COL 1218.6}

以上は、種をまく者と種という自然の生きたたとえから学ぶ、数多い教えの2、3にすぎない。親や教師がこのことを教える場合、その教訓を実際的なものにしなければならない。子供たちに土を耕させ、種をまかせなさい。そして、子供たちに仕事をさせながら、親や教師たちは、心もまた畑であることを説明することができる。そこにはよい種や悪い種をまくことができ、畑と同じように、真理の種をまくために耕さなければならないことを説明することができる。種をまく時には、キリストの死について教え、芽が出た時には、復活の真理について教えることができる。植物が成長するにつれて、自然と霊の種まきとを比較し 1219ながら教訓を続けて教えることができる。{COL 1218.7}

青年にも、同じようにして教えなければならない。彼らに土を耕すことを教えなければならない。どの学校にも耕作の土地があるとよい。こうした土地は、神ご自身の教室であると思わなければならない。また、自然界は、神の子供たちが研究すべき教科書とみなさなければならない。そして、そこから得た知識を心のかてとすることができるのである。 {COL 1219.1}

土地を耕し、地ならしをすることによって、常によい教訓を学ぶことができる。新しい開拓地に移って行って、すぐに収穫を得ようと期待する人はいない。土地を切り開いて種をまくまでにするには、熱心に励んで忍耐深く努力しなければならない。人の心の中の霊的働きもこれと同じである。土地を耕して恵みを受けようとすれば、心の中に神の言葉をもって出て行かなければならない。そうすれば、心の畑が聖霊のなごやかな感化によってしずめられて、砕かれることであろう。土地のために熱心に努力しなければ収穫は得られない。心の畑も同じである。神の霊の働きによって、清めと訓練を受けてこそ、はじめて神の栄光のために実を結ぶことができるのである。 {COL 1219.2}

時たま思い出したように耕したくらいでは、土地は地の物を生じるものではない。注意深く、毎日世話をしなければならない。度々、土地を深く耕して、雑草に作物の栄養を奪われないようにしなければならない。まく者も耕す者も、収穫の準備をする。そうすれば、だれ1人畑に出て、不作を嘆く必要はない。 {COL 1219.3}

このようにして、土地を耕して、自然からの霊的教訓を学ぶ者には、主からの祝福が与えられる。土地を耕す時に、どんな宝がでてくるかは、人にはわからない。経験の豊かな人から得られる教えや、知者から受ける知識を軽んじてはならないのであるが、自分自身で教訓を集めることが必要である。土地を耕すことは、魂の教育となるのである。 {COL 1219.4}

種を発芽させて、昼も夜もこれを見守り、成長する力をお与えになるのは、わたしたちの創造主、天の王である。神は、今なお、神の子供たちに深い関心を寄せて守っておら

れるのである。地上の種をまく者が、わたしたちの現世の命を支えるために種をまいている時、天の種をまく者、キリストは、永遠の命に至る実を結ぶ種を魂の中にまかれるのである。 {COL 1219.5}

第7章　パン種のようなもの

本章は、マタイ13：33、ルカ13：20、21に基づく {COL 1219.6}

ガリラヤの預言者イエスの言葉を聞こうとして集まった人々の中には、多くの教養ある人や有力者がいた。湖畔でお教えになるイエスを取り巻いている群衆に、不思議な目をみはる者も、彼らの中にはいた。大群集の中には、社会の各層の人々が集まっていた。貧者、無知な者、ぼろを着たこじき、いかにも悪人らしい強盗、障害のある人、放蕩者、商人、ひま人など、地位の高低も、貧富の差別もなく、すべての者が、キリストの言葉を聞こうとして、つめ寄っていた。教養のある人々は、この不思議な群衆をながめて、神の国とは、このような人々によって成り立っているのであろうか、との疑問をいだいた。救い主は、再び、たとえによってお答えになった。 {COL 1219.7}

「天国は、パン種のようなものである。女がそれを取って3斗の粉の中に混ぜると、全体がふくらんでくる。」パン種は、ユダヤ人の間では、よく罪の象徴に用いられていた。過越の祭りの時には、心から罪を捨て去るとともに、家の中からすべてのパン種を取り除くように指示されていた。キリストは、「パリサイ人のパン種、すなわち彼らの偽善に気をつけなさい」と警告を発せられた。なお、使徒パウロも、「悪意と邪悪とのパン種」ということを述べている。しかし、救い主のこのたとえにおいては、パン種は天国をあらわすために用いられている。それは、神の恵みの人を生かす力、同化する力を説明しているのである。 {COL 1219.8}

どんなに汚れ、堕落した人であっても、この力の及ばないところまで落ち込んではいない。どんな人でも、聖霊に服従するならば、新しい生命の原則が植えつけられ、失われた神のみかたちが人類の中に回復されるのである。 {COL 1219.9}

しかし、人間は、意志の力によって、自分を変えることはできない。人間には、この変化を起こさせる力がない。パン種――全く外部からのもの――が、粉の中に入れられない限り、希望する変心が起こらないのである。{COL 1220.1}

そのように、罪人が、栄光の王国にふさわしい者とされる前に、神の恵みを受けなければならない。世のどんな教育も文化も、堕落した罪の子を、天の子とすることはできない。どうしても神からの更新力が必要である。この変化は、聖霊によってのみもたらされる。すべて救われることを望む者は、地位の高低、貧富の差別なく、聖霊の力に従わなければならない。{COL 1220.2}

パン種が、粉の中に混ぜられるとそれが内部から働き出すように、神の恵みが、人の生活を変化させるのは、心を新たにすることによってである。単なる外的変化だけでは、わたしたちを神と調和させるのに不十分である。人々は、種々の悪習慣を改め、心を入れかえて、クリスチャンになろうと望むのであるが、それでは、出発点が誤っているのである。まず始めるべきところは、心なのである。{COL 1220.3}

信仰を口で表明することと、心の中に真理を持っていることとは、全く別のことである。単に真理を知っているだけでは、十分ではない。真理の知識はもっていても、心の思いは依然として変わらないことが多い。心が改まり、清まらなければならないのである。{COL 1220.4}

神の戒めは、従うべきものであるという、単なる義務の観念をもって守ろうとする人は、服従の喜びを味わうことができない。このような人は、従っていないのである。神の戒めは、人間生来の傾向に反するもので重荷であると感じるようでは、クリスチャン生活を送っていないことが解るのである。真の服従は、内部に秘められた原則が、外にあらわれ出ることである。それは、義と神のおきてを慕う愛から発するのである。あらゆる義の本質は、わたしたちのあがない主に対する忠誠である。この忠誠心が、わたしたちに、正

しいことであるからという理由で正しい行いをさせ、善行は、神が喜ばれることであるからという理由で義を行わせるのである。{COL 1220.5}

聖霊による改心という大真理は、キリストがニコデモに言われた言葉に示されている。「よくよくあなたに言っておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない。……肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である。あなたがたは新しく生れなければならないと、わたしが言ったからとて、不思議に思うには及ばない。風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこから来て、どこへ行くかは知らない。霊から生れる者もみな、それと同じである」（ヨハネ3：3～8）。{COL 1220.6}

使徒パウロも、聖霊に感じて書いている。「しかるに、あわれみに富む神は、わたしたちを愛して下さったその大きな愛をもって、罪過によって死んでいたわたしたちを、キリストと共に生かしーーあなたがたの救われたのは、恵みによるのであるーーキリスト・イエスにあって、共によみがえらせ、共に天上で座につかせて下さったのである。それは、キリスト・イエスにあってわたしたちに賜わった慈愛による神の恵みの絶大な富を、きたるべき世々に示すためであった。あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた自身から出たものではなく、神の賜物である」（エペソ2：4～8）。{COL 1220.7}

粉の中に混ぜられたパン種は、目で見ることはできないが、粉全体を発酵させてしまう。そのように、真理のパン種もだれにも気づかれないうちに、徐々に魂を変えていくのである。生まれながらの傾向が、なごやかに静められる。新しい思想、新しい感情、新しい動機が植えつけられる。キリストの生涯が、新しい品性の標準になる。精神は一変し、その人の能力は、新しい方向に向かって行動を起こす。これは、何も新しい能力が与えられるのではなくて、すでに持っている能力が清められるのである。良心が目覚める。こうして、神のために奉仕するにふさわしい品性の特質が与えられるのである。{COL 1220.8}

しばしば、次のような疑問が起こる。では、神の言葉を信じると言っている人の、言葉にも、精神にも、品性にも改革が見られないのは、いったいどうしたことであろうか。自分がよく考えて計画したことに対する反対があったりすると、がまんできずに、ついに短気を起こし、するどい激しい言葉を口にする者が多いのはなぜであろうか。また、彼らの生活には、世俗の人が持っているのと同じ利己心、放縦、短気、はげしい言葉がみられる。彼らは、真理を全く知らないかのように、世人と同じ傷つきやすい誇り、同じ生来の傾向、同じ品性のゆがみをもっている。というのは、彼らが悔い改めていないからである。彼らは真理のパン種を持っていない。パン種は、まだその仕事を始める機会がないのである。彼らの先天的および後天的な悪への傾向が、パン種の改変力に屈服していないのである。彼らの生活は、キリストの恵みに欠けていることと、品性を改変するキリストの力を信じていないことをあらわしている。 {COL 1221.1}

「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである」（ローマ10：17）。聖書は、品性を改変する大きな能力である。「真理によって彼らを聖別して下さい。あなたの御言は真理であります」とキリストは祈られた（ヨハネ17：17）。神の言葉を学んで従うならば、それは、心の中で活動を始め、すべての清くない性質を征服する。また、聖霊が降下して、罪を指摘する。すると、心の中に生じた信仰は、キリストに対する愛によって活動しはじめ、体も心も魂も、すべてをキリストのかたちに一致させるのである。こうして神は、み心を行うためにわたしたちをお用いになるのである。与えられた力は、内から外へと作用して、わたしたちに伝えられた真理を他に伝えさせるのである。 {COL 1221.2}

神のみ言葉の真理は、人間が持っている大きな必要を満たすもので、信仰によって魂を改心させるものである。これは、あまりにも崇高な原則であるから、日常生活にあてはめるには、清く、神聖すぎるものであると考えてはならない。こうした真理は、天にまで達し、永遠に及ぶものでありながら、その生きた感化は、人間経験の中に織り込まれなけ

ればならないものである。それは人生の大事、小事を問わず、どんな事の中にも染みとおって行かなければならない。 {COL 1221.3}

真理のパン種が心に入ると、欲望を制し、思想を清め、性質を美しくする。知力と精神力を活発にする。感情と愛情も豊富にされる。 {COL 1221.4}

こうした原則に従おうとする人を、世は不思議に思う。利己的で金を愛する人々は、この世の富、名誉、快楽を得ることだけを目的にして生きている。彼らは永遠の世界のことを考えの中に入れていない。しかし、キリストに従う者は、それらのことに心を奪われてはならない。彼は、キリストのために苦しみにあい、自分を犠牲にする。それは、この世の中で、希望もなくキリストもない魂を救うという、大きな仕事を支えるためである。世は、このような人を理解することができない。しかし、彼は永遠の実在をながめている。人をあがなう力をもったキリストの愛が、彼の他のすべての動機を支配して、世の腐敗に染まらないように守るのである。 {COL 1221.5}

神の言葉は、人間家族の間のすべての交わりを清めるものでなければならない。真理のパン種は、競争心や野望をいだいて、自分を第一にしようとする心を起こさせない。天からの真の愛は、利己的でもなければ、変わりやすいものでもない。人の称賛に左右されるものでもない。神の恵みを受けた人の心は、神に対する愛と、キリストが身代わりになって死なれた人々に対する愛とにあふれる。人に、自分を認めさせようと努力することもない。人々が、自分を愛し喜ばせるからとか、また、自分の価値を認めるから、その人々を愛するというのではなくて、彼らがキリストによってあがなわれた者であるという理由に基づいて、彼らを愛するのである。自分の動機や言行がどんなに誤解され、悪く言われても、それにこだわることなく、平静に自分の道を進んでいくのである。彼らは、親切と同情の念、へりくだった思いを持つとともに、希望に満たされ、常に神の憐れみと愛とに信頼している。 {COL 1221.6}

使徒も、「むしろ、あなたがたを召して下さった聖なるかたにならって、あなたがた自身も、あらゆる行い 1222において聖なる者となりなさい。聖書に、『わたしが聖なる者であるから、あなたがたも聖なる者になるべきである』と書いてあるからである」と勧めている（Ｉペテロ1：15、16）。キリストの恵みは、人の性質や声の調子を支配するはずである。兄弟間の礼儀正しい、やさしい思いやりや、親切な励ましの言葉などが恵みの働きの結果としてあらわれてくる。このような家庭には、天使が宿るのである。その生活からは、かぐわしい香りが放たれ、清い香りのように、神の前に上っていく。愛は、親切、柔和、忍耐、寛容となってあらわされる。 {COL 1221.7}

人の容貌も変わる。キリストを愛してその戒めを守る人々の顔には、彼らの心の中に住んでおられるキリストが輝き出る。そこに真理が書かれている。美しい天の平和があらわされる。そして、人間の愛を越えた柔和がいつもあらわされるのである。 {COL 1222.1}

真理のパン種は、人を全く一変させて、荒々しい人を洗練し、粗野な人を柔和にし、利己的な人を物おしみしない人にする。不純なものは清められ、小羊の血によって洗われる。心と魂のすべての能力が、パン種の生命力によって、神の生命と調和するのである。人性をもった人間が、神の性質にあずかる者となる。こうして人間が、すぐれた完全な品性をもつようになって、キリストがあがめられることになる。こうした変化が起こる時、天使は賛美の声をあげ、神とキリストは、彼らが神のかたちに変えられたことを喜ばれるのである。 {COL 1222.2}

第8章　隠された宝物

本章は、マタイ13：44に基づく {COL 1222.3}

「天国は、畑に隠してある宝のようなものである。人がそれを見つけると隠しておき、喜びのあまり、行って持ち物をみな売りはらい、その畑を買うのである。」 {COL 1222.4}

むかしは、宝が、よく強盗に盗まれたりした。また、国の統治者が変わるごとに、財産に重税が課せられた。その上、国土は、いつも敵軍の侵入にさらされていた。そのようなわけで、金持ちは、どこかに財産を隠しておかなければならなかった。隠し場所としては、土の中が一番安全であると思われたので、宝を土の中に隠す風習があったが、その大切な場所がわからなくなってしまうことがよくあった。所有主が死んだり、投獄、追放などによっていなくなってしまうと、せっかく彼が苦心して蓄えた宝は、幸運な発見者の手に入るのであった。こうしてなんの役にも立たない土地から、古い貨幣や金銀の装飾品などが発見されることは、キリストの時代には、まれではなかったのである。 {COL 1222.5}

ある人が農地を借り受けて、牛に畑を耕させていると、ふと隠されていた宝を掘り当てた。彼は、宝を発見するなり、自分がすばらしい幸運をつかんだことを知った。彼は、黄金をそのまま、元の隠し場所へもどして、家に帰り、全財産を売り払って、宝の隠されている畑を買うのである。家族も、隣人も、彼の気が狂ったのではないかと思う。彼らは、その畑を見ても、荒地になんの価値も認めない。しかし、本人は何事もよく承知の上である。そして、土地の所有権を手に入れると、自分のものになった宝を発見するために、その土地全体を捜すのである。 {COL 1222.6}

このたとえは、天の宝の価値と、それを獲得するためには、どんな努力をしなければならないかを教えている。畑の中に宝を発見した人は、隠された宝を手に入れるためには

、ただちに全財産を売り払い、どんな努力をもおしまない。そのように、天の宝を見いだした者は、真理の宝を手にするためには、どんな努力をもいとわず、どんな犠牲も高価すぎるとは思わないのである。 {COL 1222.7}

たとえの中の宝の隠された畑は、聖書のことで、福音は、宝である。神の言葉の中ほど、金鉱が縦横に走り、宝に満ちているものは、他のどこにもないのである。 {COL 1222.8}

どのように隠されているか

福音の宝は、隠されているといわれている。自己を高く評価し、むなしい哲学思想に心を奪われた高慢な者には、贖罪の計画の美と力と神秘とを認めることができない。彼らは目があっても見ず、耳があっても聞かず、知力はあっても隠された宝を認めないのである。 {COL 1223.1}

時には、宝の隠されている場所の上を通ることもあろう。足の下に高価な宝が隠されているとはつゆ知らず、疲れて木の陰に腰をおろして休んだりすることもあろう。ユダヤ人がちょうどそのようなありさまであった。ヘブル人には、真理が黄金の宝のように、託されていた。天にあるものにかたどって定められたユダヤの制度は、キリストご自身が制定なさったものであった。贖罪の大真理が、型や象徴の中におおい隠されていた。それにもかかわらず、キリストがおいでになった時に、彼が、こうしたすべての象徴の指示していたお方であることを、ユダヤ人は認めなかった。彼らは、神の言葉を持っていた。しかし、むかしながらの伝説や、聖書に対する人間的解釈のために、イエスの説かれる真理がおおい隠された。そして、聖書の霊的意味を見ることができなかった。彼らの前には、あらゆる知識の宝庫が開かれていたのに、それに気づかなかった。 {COL 1223.2}

神は、神の真理を、人から隠したりなさらない。彼らは、自分で、それをわかりにくくしているのである。キリストは、ご自分がメシヤである証拠をユダヤ人に十二分にお与えになった。彼の教えは、人々の生活に決定的変化を要求した。もし彼らがキリストを受

けいれるならば、彼らが尊重している人間の教えと伝説、利己的で不敬虔な習慣を捨てなければならなかった。永遠に変わらない真理を受けいれるには、犠牲を払わなければならなかった。このようなわけで、彼らは、キリストを固く信じることができるように、神から与えられた最も確かな証拠を、拒んでしまった。彼らは、旧約聖書を信じると公言しながら、キリストの生涯と品性とがどんなものであるかがしるされている聖書の証しを、認めなかった。もしそれを認めるとすれば、彼らも悔い改めなければならず、先入観も捨てなければならなかった。彼らは、それを恐れたのである。福音の宝であり、道であり、真理であり、命であるお方が彼らの中におられたにもかかわらず、彼らは天からの最大の賜物を拒んでしまったのである。{COL 1223.3}

「しかし、役人たちの中にも、イエスを信じた者が多かったが、パリサイ人をはばかって、告白はしなかった。会堂から追い出されるのを恐れていたのである」（ヨハネ12：42）。彼らは疑いもなく、イエスが神の子であることを信じたけれども、イエスに対する信仰を告白することは、彼らの野望と相いれなかったのである。彼らには、天の宝を彼らの物とさせるだけの信仰がなかった。彼らは世の宝を求めていたのである。{COL 1223.4}

今日も、人々は、熱心に地上の宝を求めている。彼らの心は、利己心と野心に満たされている。世の富と名声、権力を得るために、人間の教えや伝説、人間の戒めなどを、神の戒め以上に重んじるのである。神の言葉の宝は、このような人からは隠されているのである。{COL 1223.5}

「生れながらの人は、神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」（Ⅰコリント2：14）。{COL 1223.6}

「もしわたしたちの福音がおおわれているなら、滅びる者どもにとっておおわれているのである。彼らの場合、この世の神が不信の者たちの思いをくらませて、神のかたちで

あるキリストの栄光の福音の輝きを、見えなくしているのである」（Ⅱコリント4：3、4）。 {COL 1223.7}

宝の価値

救い主は、人々が利益のために熱心に働いて、永遠の世界を見失っているのをごらんになって、この誤った状態を正そうとなさった。主は、なんとかして人の心をまひさせるまどわしの力を破ろうとして、声を大にして、「たとい人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか、また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか」 1224と言われた（マタイ16：26）。彼は、堕落した人類が忘れてしまった天上の世界を彼らに示して、その永遠の実在を彼らが認めるように望まれた。彼は、言葉では言い表せない栄光に輝く無限の神の戸口にまで、彼らを導いて、そこにある宝をお見せになった。 {COL 1223.8}

この宝の価値は、金銀にまさり、地のどんな富にも比べることはできない。 {COL 1224.1}

「淵は言う、『それはわたしのうちにない』と。 {COL 1224.2}

また海は言う、『わたしのもとにない』と。 {COL 1224.3}

精金もこれと換えることはできない。 {COL 1224.4}

銀も量ってその価とすることはできない。 {COL 1224.5}

オフルの金をもってしても、 {COL 1224.6}

その価を量ることはできない。 {COL 1224.7}

尊い縞めのうも、サファイヤも同様である。 {COL 1224.8}

こがねも、玻璃（はり）もこれに並ぶことができない。 {COL 1224.9}

また精金の器物もこれと換えることができない。 {COL 1224.1]0}

さんごも水晶も言うに足りない。 {COL 1224.1]1}

知恵を得るのは真珠を得るのにまさる。」 {COL 1224.1]2}

（ヨブ28：14～18） {COL 1224.1]3}

これが聖書の中に発見される宝である。聖書は、神がお与えになった大教科書であり、大教育者である。真の科学の基礎は、ことごとく聖書の中に含まれている。聖書の研究によって、あらゆる方面の知識を得ることができる。特に、科学中の科学である、救いの科学が、この中に含まれている。聖書は、はかり知れないキリストの富の隠された鉱山である。 {COL 1224.1]4}

真の高等教育は、神の言葉を学んで、それに従うことによって得られる。神の言葉を学ばず、神にも、天国にも、人の心を向けさせない書物によって行われる教育は、教育の名をはずかしめるものである。 {COL 1224.1]5}

自然には驚くべき真理がひそんでいる。天、地、海のどこにも真理が満ちあふれている。こうした自然がわたしたちの教師である。自然は、天からの知恵と永遠の真理の言葉をわたしたちに語りかける。 {COL 1224.1]6}

しかし、堕落した人間はそれを悟らない。罪が人の視覚をくもらせたので、自分の力だけでは、自然を神以上の力あるものと考えるほかない。神の言葉を受け入れない者は、どんな正しい教えに接しても深い感銘を受けることはできない。彼らは、自然の教訓をあまりにもゆがめて考えているために、自然は、かえって人の心を創造主から引き離すことにさえなるのである。 {COL 1224.1]7}

天来の教師の知恵よりも、人間の知恵のほうがすぐれたものであると思っている者が多い。また、神の教科書は、時代おくれで、古くさく、興味がないもののようにみなされている。しかし、聖霊によって命を与えられた者は、そうは思わない。彼らは、貴重な宝を見つけて、自分の持ち物を全部売り払って、宝の隠されている畑を買うのである。彼ら

は、世の著名な筆者の論説を記した書物の代わりに、世界最高の著者であり、最も偉大な教師であるイエスの言葉を選ぶのである。イエスは、わたしたちのために、その命をお与えになったのである。わたしたちは、イエスによって、永遠の命を受けることができるのである。 {COL 1224.1]8}

宝を無視した結果

神によらなくても、すばらしい知識を学ぶことができるものであると、サタンは人々に思わせている。サタンは、アダムとエバを巧みにあざむいて、神に反逆させてしまった。まずサタンは、神の言葉に対する疑いを彼らにいだかせ、そして、その代わりに別の思想を与えている。サタンは、今日もなお、エデンで行ったのと同じ方法で、人々を欺いている。無神的著者の思想を教育の中に織り込む教師は、神への不信と律法にそむこうとする気持ちを、青年の心の中に植えつけているのである。ところが、彼らは、そのようなことには全然気づかず、どんな結果になるかも自覚していないのである。 {COL 1224.1]9}

学校のあらゆる課程を修め、大学課程も修了してのちも、全力をあげて知識の獲得に努力する学生もあるであろう。ところが、ただそれだけで、神に関しては、なんの知識もなく、自分を支配している法則にも従わなければ、ただ自滅の道を行くほかない。そのよ1225うな人は、いつの間にか悪習慣のとりことなり、自尊と自制の力を失い、重大な事柄の判断を誤り、身も心も考えなしに粗末に扱うようになる。そして、ついに悪習慣のために破滅におちいってしまうのである。これでは、幸福をつかむことはできない。清く健全な原則に従って生活をしないために、心の平和がかき乱される。そして、長年の熱心な勉強もむだになってしまう。この学生は、自分を破滅させてしまった。彼は、心身の力を正しく用いなかったために、体の宮を破壊した。そして、現世と来世の破滅を招いた。このような人は、世的宝を得ていた時に、宝を所有していると思っていた。しかし、聖書をすてたために、何より尊い宝を犠牲にしてしまった。 {COL 1224.2]0}

宝の探究

わたしたちは、神の言葉を研究の課題としなければならない。子供たちは、聖書の真理に従って教育しなければならない。これは尽きることのない宝である。ところが、人々がその宝を見いだすことができないのは、それを自分のものとするまで捜さないためである。実に多くの人々が、真理に関する推測だけで満足している。ただ表面だけの研究に満足して、すべての重要なことを知りつくしたと思い込んでいる。熱心に努力することは、神のみ言葉の中で、隠された宝を掘り出すことであるといわれているが、彼らは、自分たちでそうするには、あまりにもなまけ者で、人の言った言葉を真理だとうのみにする。ところが、人間の作り話は信頼できないばかりか、危険である。それは、神のおられるべきところに、人間をおき、「主がこう仰せになる」とあるべきところに、人間の言葉を持ってくるのである。 {COL 1225.1}

キリストは真理である。キリストの言葉は真理であって、そこには表面に表れた以上の深い意味がこめられている。すべてキリストの言われたことは、一見、見栄えはなかったが、その外見に似合わぬ価値があった。聖霊によって心を開かれた者は、これらの言葉の価値を悟り、たとえ、これらが隠された宝であっても、真理の宝石であることを認める。 {COL 1225.2}

神の言葉は、人間の理論や思索によっては、とうてい理解することはできない。自分は哲学がわかると思っている人々は、知識の倉を開き、教会を異端から守るためには、自分たちの説明がどうしても必要だと考える。ところが、このような説明が、かえって、誤った理論と異端を持ちこむ結果になった。人は、込み入っていると思われる聖句をなんとかして説明しようと努めたが、それは、明瞭にしようとしてかえって解りにくくしてしまったのである。 {COL 1225.3}

祭司やパリサイ人たちは、神の言葉に彼らの解釈をつけて、偉大なことをしているように思っていた。しかし、キリストは、「あなたがたがそんな思い違いをしているのは、

聖書も神の力も知らないからではないか」と言われた（マルコ12：24）。また、あなたがたは「人間のいましめを教として教え」ていると、お責めになった（マルコ7：7）。彼らは、神の言葉の教師であり、それに精通しているはずであったにもかかわらず、み言葉の実行者ではなかった。サタンが、彼らの目をくらましていたために、言葉の真の意味を悟ることができなかった。 {COL 1225.4}

今日、多くの人がこれと同じことをしている。多くの教会が、この罪に陥っている。今日のいわゆる知者、学者といわれる人々が、昔のユダヤ人の教師たちと同じ経験をくり返す危険が多分にある。彼らが、神の言葉を偽って解釈するために、人々は、このような誤った思想にまどわされて、暗黒の中に閉ざされてしまう。 {COL 1225.5}

聖書は、伝説とか人間の思索などといった薄暗い光のもとで読む必要はない。聖書を人間の伝説や想像によって説明することは、あたかも、太陽の前に、たいまつをかざすようなものである。神の清い言葉は、地上のたいまつの微光によって照らされる必要はない。聖書それ自体が光であり、神の栄光のあらわれである。聖書と比べるならば、どんな光もその輝きがあせてしまうのである。 {COL 1225.6}

とはいうものの、聖書は、熱心に研究し、精密に調べるべきものである。なまけ者が真理の明確な理解を持つようになることはあり得ない。この世の中のど 1226んな幸福も、熱心に耐え忍んで努力することなしに得られるものではない。どんな事業においても成功をおさめようとすれば、物事をしようとする意志と、必ず実がみのるという確信とがなければならない。霊的知識も、熱心な努力なしに得られるものではない。真理の宝を見いだそうと願う者は、鉱夫が地中に隠された宝を掘るように、自分で掘っていかなければならない。中途半端なことではだめである。老いも若きも、神の言葉を読むだけでなくて、隠してある宝のように、祈りとともに真理を探究し、全心を打ちこんで研究することが大切である。こうする人々は、必ず報いられる。それは、キリストが理解力を深めてくださるからである。 {COL 1225.7}

わたしたちの救いは、聖書の中の真理を知ることにかかっている。わたしたちがこの知識を持つことは、神のみこころである。尊い聖書を、飢えかわくように、さぐり、調べなさい。ちょうど、鉱夫が金鉱を発見するために、地中深くさぐるように、神の言葉を調べなさい。あなたの神との関係と、あなたに対する神のみこころとを確かめるまでは、決して探究をやめてはならないのである。「わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあげよう。父が子によって栄光をお受けになるためである。何事でもわたしの名によって願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう」と、キリストは言われた（ヨハネ14：13、14）。{COL 1226.1}

敬神の念が厚く、才能のある人々でさえ、永遠に実在するお方があるのを知りながらも、見えるもののために、見えないものの栄光がさえぎられて、理解できないことがよくあるものである。隠された宝の探究に成功しようとする者は、世の物を追求する以上の熱心さをもって追求しなければならない。その愛情と、力量のすべてを探究のためにささげなければならない。{COL 1226.2}

また、不服従のために、聖書から学び得るはずのばく大な知識の扉が閉ざされてしまうことがある。理解するということは、神の戒めに服従することである。聖書は、人間の偏見と嫉視（しっし）に応じて変えられるべきものではない。聖書は、謙遜に真理の知識を求め、真理に従おうとする人だけが理解することができるのである。{COL 1226.3}

わたしは、救われるために、何をすべきかと、あなたは、おたずねになるであろうか。それでは、あなたは、まず研究に入るにあたって、先入観、すなわち自分のもっている先天的、後天的な考えを捨てなければならない。自分の意見を支持する目的で、聖書を探究するならば、決して真理を発見することはできない。主は、いったい、なんと言っておられるかということを学ぶために、探究しなければならない。探究しているうちに、強く心に感銘を受け、たとえ、自説が真理と一致していないことがわかっても、それに合わせようとして、真理を曲解せずに、与えられた光を受け入れなければならない。神の言葉の

中から驚くべきものを見ることができるように、心を開かなければならない。 {COL 1226.4}

キリストを世の救い主として信じるためには、よく磨かれた知力がなければならない。そして、その知力は、天の宝を見わけて、その真価を認め得る心に支配されたものでなければならない。この信仰は、悔い改めと心の変化とも切り離すことができない。信仰を持つことは、発見された福音の宝に含まれているすべての義務とともに、福音を受けいれることである。 {COL 1226.5}

「だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」（ヨハネ3：3）。人間はいろいろと推測したり想像したりはできても、信仰の目がないならば、宝を見ることはできない。キリストは、このはかり知れない尊い宝を、わたしたちのために確保するために、その生命をお与えになったのである。しかし、キリストの血を信じる信仰による新生が伴わないならば、それは滅び行く魂にとって、罪の赦しにも宝にもならないのである。 {COL 1226.6}

神の言葉の真理を理解するためには、聖霊の光に照らされなければならない。太陽が暗黒を追いやって、光を降り注ぐのでなければ、自然界の美を見ることができない。そのように、神の言葉という宝も、義の太陽の輝かしい光によってあらわされなければ、認めることはできない。 {COL 1226.7}

無限の愛と慈悲によって、天から送られた聖霊は、キリストに絶対的信仰をいだいているすべての者に、神に関することを啓示する。聖霊は、魂の救いに関する重大な真理を、人の心に強く印象づける。こうして生命の道は、踏み誤ることができないほど明らかにされるのである。 {COL 1226.8}

わたしたちが聖書を研究する時には、神の聖霊の光がみ言葉を照らし、わたしたちがみ言葉の宝を認めて、理解できるようになることを祈り求めなければならない。 {COL 1227.1}

探究の報い

もうこれ以上、わたしには学ぶべき知識はないなどと、だれも考えてはならない。人間の知力には限界があり、人間の著作は学び尽くすことができるであろう。しかしどんなに高く、深く、広く想像をたくましくしてみても、神を見極めることはできない。わたしたちの理解を越えた彼方に、無限が横たわっている。わたしたちは、ただ、神の栄光と、神の無限の知恵と知識とのほんのかすかな光を、垣間見たに過ぎない。ちょうど、地下には金鉱が豊富に隠されていて、それを掘り当てる人がでてくるのを待っているのに、わたしたちは、その鉱山のほんの表面だけを掘っていたようなものである。わたしたちは、ますます深く掘り下げなければならない。そうすると、みごとな宝を発見することができる。真の信仰によって、神の知識が人間の知識となるのである。 {COL 1227.2}

キリストの精神をもって、聖書を探究する者には、必ず報いが与えられる。人が幼児のようにすなおな態度で教えを受け、神に絶対的に服従するならば、神の言葉の中に真理を見いだすことができる。人々が従順になる時に、神の政府の計画を理解することができるようになるのである。探究者の前には、天上の世界の美と栄光とがますます輝かしく開かれることであろう。その時、人類は、現在とは全く変わったものとなることであろう。というのは、真理の探究は、人間を高めるからである。贖罪、キリストの受肉、キリストの贖罪の犠牲などの神秘は、現在のようなばく然としたものではなくなる。このような問題に対して、わたしたちは、更に理解を深めるばかりでなく、その真価をより高く評価することができるようになる。 {COL 1227.3}

キリストが、父なる神に祈られた祈りの中に、わたしたちが忘れてはならない教訓が教えられている。それは「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります」と言われた言葉である（ヨハネ17：3）。これが真の教育である。これが、人に力を与えるものである。神と、神がっかわされたイエス・キリストを体験によって知ることは、人間を神のみ姿に変える

のである。これは、人を自己を治めるものにする。低い性質の衝動と欲望とは、高度の意志の力に支配されるようになる。そして、それは、また、彼を神の子すなわち、天国の相続人とし、無限の神との交わりに入れ、宇宙の豊富な富を開いて見せるのである。{COL 1227.4}

これが、神の言葉の探究によって得られる知識である。そして、この宝は、それを得ようとしてすべてをささげる者なら、だれにでも見いだすことができるものである。{COL 1227.5}

「しかも、もし知識を呼び求め、{COL 1227.6}

悟りを得ようと、あなたの声をあげ、{COL 1227.7}

銀を求めるように、これを求め、{COL 1227.8}

かくれた宝を尋ねるように、これを尋ねるならば、{COL 1227.9}

あなたは、主を恐れることを悟り、{COL 1227.1]0}

神を知ることができるようになる。」（箴言2：3～5）{COL 1227.1]2}

第9章　高価な真珠

本章は、マタイ13：45、46に基づく {COL 1227.1]3}

救い主は、贖罪愛によって与えられる幸福を、高価な真珠にたとえておられる。イエスは、良い真珠を捜している商人のたとえを語り、「高価な真珠1個を見いだすと、行って持ち物をみな売りはらい、そしてこれを買うのである」とお教えになった。実はキリストご自身が、高価な真珠である。彼の中に天の父の栄光がすべて集められ、神の徳が満ち満ちているのである。彼は、父なる神の栄光の輝きであり、神の本質の真の姿である。神の属性の栄光が、彼の品性にあらわされている。聖書のどのページも神の光に輝いている。キリストの義は、純粋な白真珠のように、しみも傷もない。どんな人間の技術をもってしても、この偉大で尊い神の賜物を、それ以上にすぐれたものにすることはできない。それには、1つとして傷がない。キリストの中には「知恵と知識との宝が、いっさい隠されている」（コロサイ2：3）。キリストは、「わたしたちの知恵となり、義と聖とあがないとになられたのである」（Ⅰコリント1：30）。キリストの中には、現世だけでなく、来世の人間の魂の必要とかわきを満たすものが、すべて備わっているのである。あがない主は、実に高価な真珠である。他のものは、全く比較にならないほど価値がないのである。 {COL 1227.1]4}

キリストは、「自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった」（ヨハネ1：11）。光が世のやみを照らしたのに「やみはこれを悟らなかった」（ヨハネ1：5／改訳参照）。しかしながら、すべての者が、天からの賜物に無関心であったのではない。たとえにある商人は、真心から真理を求める種類の人々を代表していた。文学、科学、あるいは異教の諸宗教の中に、魂の宝を熱心に求めていた人々が、いろいろな国にいた。ユダヤ人の中にも、彼らの中に欠けていたものを求めている者があった。彼らは、形式的な宗教には満足せず、霊的で、心を高尚にするものを渇望していた。キリストに選ばれた弟子たちは、この種の人々であった。コルネリオやエチオピヤの宦官は、前に述べた人々に

属していた。彼らは、天からの光が与えられるのを渇望して祈っていた。そして彼らは、キリストがおいでになった時に、喜んで信じたのである。 {COL 1228.1}

たとえでは、真珠を、賜物としてあつかっていない。商人は、持ち物を全部売って、それを買ったのである。キリストは、聖書の中では、賜物であると教えられているから、これは、どうしたことであろうと疑念をいだく人も多いことであろう。キリストは、たしかに賜物であることにちがいないが、それは、キリストに身も心も魂も全くささげる者に対してだけ与えられる賜物である。わたしたちは、自分をキリストにささげ、キリストのすべてのご要求に喜んで従う生活をしなければならない。わたしたちのいっさい、わたしたちの才能も力量もことごとく主のものであるから、それを主のご用にささげなければならない。自分を全く主にささげる時に、キリストは、天のあらゆる宝とともに、ご自身をわたしたちにお与えになる。わたしたちは、高価な真珠を所有するのである。 {COL 1228.2}

救いは無償で与えられる賜物であるが、また売買されるものでもある。神の恵みの支配下にある市場で高価な真珠は、金なく価なくして売買されるものであるといわれている。だれでも、この市場て、天の財宝を手に入れることができる。真理の宝庫は、万人に開かれている。「見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた」と主はおおせになる。この門の通路を守る剣はない。門からも、門の内側からも、来たれという声が聞こえる。「そこで、あなたに勧める。富む者となるために、わたしから火で精錬された金を買え」と救い主のみ声は、しきりにやさしく訴えているのである（黙示録3：8、18）。 {COL 1228.3}

キリストの福音は、すべての者が持つことのできる祝福である。どんなに貧しい人でも、どんなに富んでいる人でも、同じように救いを買うことができる。これは、どんなに地上の富を積んでも買えるものではない。喜んで神に従い、わたしたちを、キリストご自身があがなわれた所有としてキリストにささげることによって、得られるのである。どん

な高等教育を受けても、ただそれだけで、神に近づくことはできない。パリサイ人は、物質的に霊的にあらゆる特権をもっていて、「自分は富んでいる、豊かになった、なんの不自由もない」と誇っていたが、実は、「みじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸な者であることに気がついていない」（黙示録3：17）。キ 1229リストは、彼らに高価な真珠を提供なさったが、彼らはそれを侮り、受け入れなかった。そこで、「取税人や遊女は、あなたがたより先に神の国にはいる」と主はおおせになったのである（マタイ21：31）。 {COL 1228.4}

救いは、人間の努力によって得られるものではない。しかし、この世界のいっさいをなげうつほどの熱誠さと忍耐をもって、求めなければならないものである。 {COL 1229.1}

わたしたちは、高価な真珠を求めなければならないが、それは、この世の市場やこの世の方法によるのではない。支払うべき価は、金や銀ではない。金銀は神のものである。自分は物質的に、霊的に恵まれた立場にあるから、救いを得られると思ってはならない。神は、あなたが心から服従することを求めておられる。罪を捨てよとおおせになるのである。「勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちょうど、わたしが勝利を得てわたしの父と共にその御座についたのと同様である」とキリストは言われるのである（黙示録3：21）。 {COL 1229.2}

ある人々は、つねに、天の真珠を求めているように見えるけれども、彼らは、自分たちの悪習慣を全く放棄していない。彼らは、キリストが彼らの中に生きてくださるために、自己に死ぬことをしない。彼らが高価な真珠を見いだすことができないのは、そのためである。彼らは、まだ、汚れた野心や世の快楽を愛する心に勝利していない。彼らは、キリストにならって十字架をとって、克己と犠牲の道を歩かない。九分通りクリスチャンではあるが、完全なクリスチャンになっていない。天国に近いようではあるが、天国に入る

ことはできない。完全ではなくて、九分通り救われていることは、九分通り失われていることではなくて、完全に失われていることである。{COL 1229.3}

良い真珠を捜している商人のたとえには、二重の意味がある。それは、天国を求める人々に適用されるばかりでなくて、キリストがご自分の失われた嗣業である人類をさがしておられることにも当てはまる。良い真珠をさがす天からの商人、キリストは、失われた人類の中に高価な真珠を見られた。キリストば堕落した人間に、贖罪の可能性をお認めになった。サタンとの戦いの場となっていたが、愛の力によって救われた人々の心のほうが、まだ堕落しない者よりは、はるかにあがない主にとって尊いのである。神は人類を汚れた無価値なものとは思われない。神はキリストの中にあるものとして、人類をながめ、贖罪愛によって、回復の望みのあるものとしてお認めになる。神は、この真珠を買い求めるために、宇宙のすべての富を提供なさったのである。イエスは、その見いだした真珠を、ご自分の冠にまたはめ込まれる。「彼らは冠の玉のように、その地に輝く」（ゼカリヤ9：16）。「彼らは……わたしの者となり、わたしの宝となる」（マラキ3：17）。{COL 1229.4}

キリストが、高価な真珠である。そして、この天の宝を持つ特権がわたしたちに与えられている。これが、わたしたちの瞑想の課題でなければならない。良い真珠の価値を人に啓示するのは、聖霊である。聖霊の力が与えられる時は特別に、人々が天の宝を求めて発見する時である。キリストの時代には、福音を聞いた者が多くあったけれども、彼らの心は偽りの教えに惑わされていた。そしてガリラヤから出た教師が、神からつかわされたお方であることを認めなかった。ところがキリストの昇天後、キリストが仲保者としての職につかれたことが、聖霊の降下によって示された。ペンテコステの日に、聖霊が与えられた。キリストの証人たちは、復活の救い主の能力を宣言した。天の光は、キリストの敵にあざむかれた人々の暗い心を照らした。今や、彼らはイエスが「イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与えるために、……導き手とし救主として」上げられたのを知った（使徒行伝5：31）。彼らは、イエスが無限の宝を手にして、立ち帰るすべての反逆

者たちに与えようとして、天の栄光に包まれておられるのを見た。使徒たちが父のひとり子の栄光について語った時、3000人が悔い改めた。彼らは、自分たちが、なんと罪深く汚れているかに気づき、キリストを彼らのよき友、あがない主として見ることができるようになった。キリストは、人々の上に注がれた聖霊の力によって高 1230められ、あがめられた。信者たちは、自分たちが滅びないで永遠の命を得るために、屈辱と苦難と死にあわれたのは、この方であることを、信仰によって悟った。聖霊によって与えられたキリストの啓示は、彼らをキリストの力と威光とに触れさせた。彼らは、信仰の手を伸ばして、「わたしは信じます」と言ったのである。 {COL 1229.5}

こうして、復活なさった救い主の喜ばしい知らせは、地の果てまでも伝えられた。教会は、全地から集まる改宗者の群れで満ち、信者は、悔い改めを新たにし、罪人もクリスチャンと共に、高価な真珠を求めた。「彼らの中の弱い者も、その日には、ダビデのようになる。またダビデの家は神のように、彼らに先だつ主の使のようになる」という預言は成就したのである（ゼカリヤ12：8）。すべてのクリスチャンは、お互いの中に、神の憐れみと愛のみかたちを認めた。皆は1つの事を考え、1つの目的に徹し、すべての人の思いも1つになった。信者の唯一の願いは、キリストに似た品性をあらわし、キリストの王国の拡張のために働くことであった。「信じた者の群れは、心を1つにし思いを1つにして、……使徒たちは主イエスの復活について、非常に力強くあかしをした。そして大きなめぐみが、彼ら一同に注がれた」（使徒行伝4：32、33）。「そして主は、救われる者を日々仲間に加えて下さったのである」（使徒行伝2：47）。キリストの霊が、全会衆を活気づけていた。それは彼らが、高価な真珠を発見したからであった。 {COL 1230.1}

このような光景は、もう1度大きな力をもって再現される。ペンテコステの日の聖霊の降下は、はじめの雨であった。しかし、後の雨は、いっそう豊かに降りそそぐことであろう。聖霊は、わたしたちが聖霊を求めて、受けることを待っておられる。聖霊の力によって、キリストの完全なみかたちが、もう1度、あらわれなければならない。人々は、高価な真珠の価値を認めて、使徒パウロとともに、「しかし、わたしにとって益であったこれ

らのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。わたしは、更に進んで、わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている」と言うであろう（ピリピ3：7、8）。{COL 1230.2}

第10章　漁師の網

本章は、マタイ13：47～50に基づく {COL 1230.3}

「また天国は、海におろして、あらゆる種類の魚を囲みいれる網のようなものである。それがいっぱいになると岸に引き上げ、そしてすわって、良いのを器に入れ、悪いのを外へ捨てるのである。世の終りにも、そのとおりになるであろう。すなわち、御使たちがきて、義人のうちから悪人をえり分け、そして炉の火に投げこむであろう。そこでは泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう。」 {COL 1230.4}

網をおろすことは、福音を宣べ伝えることである。福音の宣教は、よい人も悪い人も教会の中に集める。福音の働きがすむと、さばきが分離の働きをなし終える。キリストは教会内にいる偽兄弟のために、真理の道がどんな非難を受けるかを、知っておられた。世は、また、偽信者の矛盾した生活を見て、福音をののしることであろう。キリストの名をとなえながら、聖霊に支配されていない者が多いのを見て、クリスチャンでさえつまずくことであろう。こういう罪人が教会の中にいるのだから、神は、自分たちの罪もお赦しになるであろうと、一般の人々も考える危険があった。そこで、キリストは、将来の幕を上げて、人間の運命を決定するのは、人の占めている地位ではなくて、その品性であることを見なさいとお命じになるのである。 {COL 1230.5}

毒麦のたとえもこの網のたとえもともに、悪人が全部神に立ち帰る時のこないことを明らかに教えている。麦と毒麦とは、収穫の時まで一緒に育つのである。よい魚も悪い魚も、一緒に岸に上げられて、最後のより分けが行われるのである。 {COL 1230.6}

次に、これらのたとえは、審判の後には、恩恵の期間がないことを教えている。福音の働きが終わると、直ちによいものと悪いものが区別され、それぞれの運命が永遠に決定されるのである。 {COL 1230.7}

神は、どんな人でも滅びることを望まれない。「主なる神は言われる、わたしは生きている。わたしは悪人の死を喜ばない。むしろ悪人が、その道を離れて生きるのを喜ぶ。あなたがたは心を翻せ、心を翻してその悪しき道を離れよ。……あなたはどうして死んでよかろうか」（エゼキエル33：11）。聖霊は、恵みの期間の続く限り、生命の賜物を受けるように、人々に訴えられるのであるから、滅びるままに取り残されるのは、神の訴えを拒んだ者だけである。罪は宇宙を破壊する悪であるから、滅ぼさなければならないと、神は言われる。罪に執着する者は、罪とともに滅びるのである。 {COL 1231.1}

第11章　宝の倉の中の宝石

本章は、マタイ13：51、52に基づく {COL 1231.2}

キリストは、人々を教えると同時に、弟子たちを将来の働きのために教育しておられた。イエスの教えの中には、常に弟子たちに対する教訓が含まれていた。イエスは、網のたとえを語られたあとで、「あなたがたは、これらのことが皆わかったか」と彼らにおたずねになった。彼らは、「わかりました」と答えた。そこでイエスは、もう1つのたとえをお語りになって、今お教えになった真理を聞いた者の責任をお示しになった。「それだから、天国のことを学んだ学者は、新しいものと古いものとを、その倉から取り出す一家の主人のようなものである。」 {COL 1231.3}

一家の主人は、手にした宝をただしまっておくのではない。彼は、他に与えるために宝を持ち出す。宝は用いることによって増加するのである。この主人は、新しい宝や古い宝を持っている。そのように、弟子たちに与えられた真理は、世界に宣べ伝えるべきものであることを、キリストはお教えになった。そして、真理の知識も人に伝えれば伝えるほど増加するのである。 {COL 1231.4}

福音の使命を心に受け入れた者は、みな、その使命を他の人々に宣べ伝えたいと願うものである。天から与えられたキリストの愛は、どうしても表さなければならない。キリストを着た者は、聖霊が1歩ずつ導いてくださったことを振りかえって、その経験を語るのである。すなわち、自分が神と、神のおつかわしになったイエス・キリストとを知ろうとして、飢えかわいたことや、聖書研究の成果や祈りや自分の経験した魂の苦悩のことを話す。そして、キリストが、「あなたがたの罪はゆるされた」と言われたことを語る。だれでも、このようなことを秘密にしておくことはできない。キリストの愛に満たされた者は、隠しておかない。主が自分を聖なる真理の保管者にして下さったその度合に応じて、他の人々にも同じ祝福を与えようと望む。そして、彼らが神の豊かな富を人々に語れば語

るほど、キリストの恵みがますます彼らに与えられる。彼らは、幼児のような素直な心で、真心から服従する。彼らの魂は、清めを慕い求める。そして、真理と恵みの宝が、ますます、彼らにあらわされるようになる。そして、それが全世界に伝えられる。 {COL 1231.5}

真理の大宝庫とは、神の言葉、すなわち、文字に書かれた聖書、自然という書、そして神が人間の生活をお導きになる経験の書をいうのである。キリストの僕たちが引き出すべき宝は、ここにある。真理の探究にあたっては、人間の知恵や偉大な人物に頼ることをしないで、神に信頼すべきである。人の知恵は、神にとっては愚かなものである。主は、ご自分がお定めになった方法によってすべての探究者に、ご自分のことをお示しになるのである。 {COL 1231.6}

もし、キリストの弟子が、キリストの言葉を信じて、それを実行するならば、どんな自然の研究でも理解できないものはない。どんなものでも、人に真理を伝えるためのよい手段となる。キリストの学校の生徒はみな、自然科学という宝庫から知識を得なければならない。自然の美を瞑想し、耕作や、木々の繁茂、あるいは天と地と海に満ちている驚異の中に秘められている教訓を学ぶならば、真理について、新しい観点を持つようになる。また、神が人を扱われる不思議な方法、人の生涯の中に見られる神の知恵と神の思慮深さなども、また、豊かな宝の倉であることがわかる。 {COL 1231.7}

しかし、神の知識が堕落した人類に最も明らかにあらわされたのは、聖書においてである。これは、キリストの無尽蔵の富の宝庫である。 {COL 1232.1}

神の言葉とは、旧約聖書と新約聖書の両方をさしている。どちらが欠けても完全ではない。キリストは、旧約聖書の真理も新約聖書の真理と同様に、価値があることを言明なさった。キリストは、今日、あがない主であると同様に、世の始めからのあがない主であられたのである。イエスが、人性によって神性をおおってこの世に来られる以前に、福音

の使命はすでに、アダム、セツ、エノク、メトセラ、ノアによって伝えられたのである。アブラハムはカナンで、ロトはソドムで使命を伝えた。{COL 1232.2}

こうして、どの時代においても、忠実な使者たちは、来たるべきキリストのことを宣べた。ユダヤの犠式制度は、キリストご自身がお定めになったものであった。キリストこそユダヤ人の犠牲制度の基礎で、彼らの全宗教制度の偉大な実体である。犠牲がささげられた時に流された血は、神の小羊の犠牲をさし示していた。典型的ささげ物は、すべて、キリストによって成就した。{COL 1232.3}

家長たちに示されたキリスト、犠牲制度に象徴され、律法に描かれ、預言者によって啓示されたキリストが、旧約聖書の宝である。キリストの生涯、死、復活、それに、聖霊によってあらわされたキリストが、新約聖書の宝である。父の栄光の輝きであられるわたしたちの救い主は、旧約であると同時に新約でもあられる。{COL 1232.4}

使徒たちは、預言者たちが予告したキリストの生涯と死と、キリストのとりなしの証人として、出て行くべきであった。キリストの謙遜、その純潔と聖潔、その比類なき愛が、彼らの伝えた主題であった。しかも、福音を完全に宣べ伝えるためには、キリストの生涯とその教えの中にあらわされたことばかりでなくて、救い主について旧約の預言者が予告し、犠牲制度に象徴されていたことについても、語らなければならなかった。{COL 1232.5}

キリストは、その教えの中で、ご自分が初めにお教えになった古い真理や、家長と預言者を通じて、ご自分がお語りになった真理をお教えになった。ところが今度は、その真理に新しい見方をお与えになった。すると、その意味がなんと異なって見えたことであろう。イエスが説明なさると、光と霊性がみなぎるのであった。そして、主の御約束によって、弟子たちには、聖霊が与えられ、悟りが開かれて、神の言葉が常に彼らの前に明らかにされるのであった。彼らは、新しい美に包まれた真理を、人々に伝えることができた。{COL 1232.6}

エデンの園で贖罪の最初の約束が語られてから、キリストの生涯、品性、とりなしの働きが、人々の研究題目であった。しかし、聖霊に感じた人は、みなこれらの主題を新鮮な光に照らして説き明かした。贖罪の真理には、絶えず発展し拡張する能力が伴っている。真理は、古いとは言っても、常に新しく、さらに大きな栄光と能力とを、真理の探究者にあらわすのである。{COL 1232.7}

真理には、どの時代でも新しい発展があった。つまり、時代ごとに、その人々のための特別な神からの使命があった。古い真理はみな重要である。新しい真理は古い真理から切り離されたものでなく、古いものの解明である。古い真理を理解して始めて、新しい真理を悟ることができる。キリストが弟子たちにご自分の復活の真理を示して、「モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしるしてある事どもを、説きあかされた」（ルカ24：27）。真理を新たに解き明かすことによって、輝く光が古いものをいっそう輝かしくする。新しい光を拒んでなおざりにする人は、実は、古いものを持っていない。それは、彼にとって、生きた力を失った、むなしい形式と化してしまうのである。{COL 1232.8}

人々の中には、旧約聖書の真理は、信じて教えるけれども、新約の方は拒否するという人がある。しかし、彼らはキリストの教えを拒否することによって、家長や預言者たちの語ったことをも信じないことを示している。「もし、あなたがたがモーセを信じたならば、わたしをも信じたであろう。モーセは、わたしについて書いたのである」とキリストはおおせになった（ヨハネ5：46）。従って、彼らが、どんなに旧約聖書を説いても力がないのである。{COL 1233.1}

また、わたしたちは福音を信じて、福音を説いていると主張しながら、同様のあやまちにおちいっている人々が多い。彼らは、キリストが「この聖書は、わたしについてあかしをするものである」と言われた旧約聖書を、無視している（ヨハネ5：39）。旧約を拒むことは、事実上、新約を拒むことである。この2つは切り離すことのできない統一体で

ある。だれでも福音を説かないで、神の律法を正しく語ることはできない。また、律法をはなれた福音を説くこともできない。律法は、福音の具体的表現であって、福音は、律法の解説である。律法は根であって、福音は、律法のかんばしい花であり、その結ぶ実である。 {COL 1233.2}

旧約聖書は、新約聖書を照らし、新約聖書は旧約聖書に光を投げかける。両者ともに、キリストによってあらわされた神の栄光の啓示である。どちらも、真理を示していて、熱心な探究者にたえず新しい意義深さを啓示する。 {COL 1233.3}

キリストにある真理、また、キリストによって与えられる真理は、無尽蔵である。聖書の探究者は、ちょうど泉の深みをながめていると、それがますます深く広がっていくように思えるのと同じである。人類の罪のあがないのために、み子をお与えになった神の愛の神秘は、とうてい現世では理解できない。あがない主のこの地上のわざは、人間がどんなに想像してみても、探り得ない崇高な課題である、人間がどんなに知力を働かせてこの神秘を解こうとしても、いたずらに疲労するだけである。どんなに勤勉な研究者でも、自分の前には、無限な大海がなおも果てしなく続いているのを悟ることであろう。 {COL 1233.4}

イエスのうちにある真理は、経験することはできるが、説明することはできない。その高さ、広さ、深さは、人間の知識を超越している。わたしたちの想像力をどんなに働かせたとしても言語に絶する愛のあらましを、ただかすかに見ることができるにすぎない。これは、天のように高い愛である。そしてすべての人類に神のかたちを押すために、この地上に降ったのである。 {COL 1233.5}

ところが、この神の憐れみについて、わたしたちが知り得る範囲のものは、みな悟ることができる。これは、謙遜な悔いた心の者に示される。神がわたしたちのために、どんな犠牲を払われたかをわたしたちが知るにつれて、神の憐れみ深さを理解することができる。謙遜な心で神の言葉を探れば、贖罪という大主題が、わたしたちの研究課題として開

かれる。この大主題は、わたしたちかながめればながめるほど輝きを増し、熱望すれば熱望するほど、高く深くその偉大さを増していくのである。 {COL 1233.6}

わたしたちの命は、キリストの生命と結びつかなければならない。わたしたちは、常にキリストから受け、天から降った生きたパンであるキリストを食べ、いつも新鮮に、豊かに、清水という宝を注ぎ出す泉の水を、飲まなければならない。いつも、主を目の前にあおいで、主に感謝と賛美をささげているならば、わたしたちの信仰生活は常に新鮮さを保つことができる。わたしたちの祈りは、ちょうど友人と語るように、神との会話のかたちになり、神は、わたしたちに個人的に、神の神秘について語りかけてくださるのである。わたしたちは、しばしば、尊いイエスの臨在を身近に感じることがある。 {COL 1233.7}

昔、神がエノクと語られた時のように、神がわたしたちに近づかれると、わたしたちの心中も燃えるのをおぼえる。こうしたことが本当に、クリスチャンの経験となる時に、そのクリスチャン生活には、純真、謙遜、柔和、心の低さなどが著しくなり、接するすべての人に、彼がイエスと共にあって、イエスから学んだ者であることを感じさせるのである。 {COL 1233.8}

こうした経験の持ち主にとって、キリスト教は、生きた浸透力のある原則であって、生きて働く霊的活力であることがわかるであろう。そこには、新鮮さと能力があり、永遠の青春の歓喜がある。神の言葉を受ける心は、水が蒸発してしまう池とか、せっかくの清水を保つことのできない、破れた水槽のようなものではない。その冷たい水は、つきない泉からわき出る山間の渓流のように、しぶきをあげて岩から岩へ飛び散って流れて、疲れた者やかわいた者、重荷にあえぐ者を元気づける。 {COL 1234.1}

このような経験こそ、真理を教える者がキリストの代表者となる資格そのものなのである。キリストの教えの精神は、その人の話や祈りに、力と率直さを与える。彼のキリストに関する証しは、偏狭な無気力なものではなくなる。牧師は、くり返し、くり返し、同

じ説教をしたりしない。彼の心は、聖霊の光に常に照らされていることであろう。 {COL 1234.2}

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者には、永遠の命があり、……生ける父がわたしをつかわされ、また、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者もわたしによって生きるであろう。……人を生かすものは霊であって、……わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である」とキリストは言われた（ヨハネ6：54～63）。 {COL 1234.3}

わたしたちが、キリストの肉を食べ、彼の血を飲むならば、わたしたちの伝道の働きの中に、永遠の命の要素が見られることであろう。わたしたちの心の中には、気のぬけた使い古した考えなどはなくなり、活気のない眠い説教もなくなる。たとえ古い真理を語ったとしても、今までと違った新しい見方をする。真理を新たに認めるのであるから、その明白なことと力とは、すべての者が感じることができるのである。このような牧師の指導のもとに聖霊の力を感じることができれば、躍動する新しい命に満たされるのを感じることであろう。心の中に、神の愛の炎が燃え上がり、理解力も活発になってきて、真理の美と荘厳さに打たれるのである。 {COL 1234.4}

たとえの中のこの忠実な主人は、青少年の教育にあたる人をあらわしている。彼が神の言葉を宝として尊重しているなら、常に新しい美と新しい真理を引き出すことであろう。教師が神に信頼して祈るならば、キリストの霊が彼の上に臨み、聖霊は彼を用いて人々の心に働いてくださる。聖霊は教師の心に希望と勇気を満たす。そして、彼の頭に満ちている聖書の思想などがみな、その指導のもとにある青年たちに伝えられる。 {COL 1234.5}

霊感の言葉によって教師の心の中にわき起こった天からの平和と喜びの泉は、大きな川の流れとなって彼に連なるすべての者を祝福するのである。聖書は、生徒にとって、たいくつな書物ではなくなる。賢明な教師のもとで、み言葉はますます楽しいものとなる。

それは、命のパンとなって、いつまでも古びない。聖書の新鮮さと美しさとは、青少年をしっかりと引き付けることであろう。それは、あたかも太陽が地を照らし、絶えず光と暖かさを与えてもなお、尽きないようなものである。 {COL 1234.6}

人々に教えを与える聖霊は、神の言葉の中に宿っている。新しい、尊い光がみ言葉の各ページから輝き出ている。み言葉の中に真理があらわされている。どの言葉、どの文章をとってみても、それが魂に呼びかける神の声のように、輝かしく折にかなったふさわしいものになるのである。 {COL 1234.7}

聖霊は、青年に語りかけることを愛しておられて、神の言葉の宝と美とを彼らが発見することを望んでおられるのである。大教師の語られた約束は、彼らの心をしっかりと捕らえ、彼らの魂を霊的力によって活気づける。人々は、豊かに実を結び、神に関する知識をさらに深めていき、誘惑に対しても防壁を持つようになる。 {COL 1234.8}

真理の言葉は、ますますその重大性を増し、これまで夢想さえしなかった意味深さをもったものとなる。み言葉の美と富とは、人の心と品性を変える力を持っている。天からの愛の光は、霊感となって人々の心の上に注がれる。 {COL 1234.9}

聖書は、研究するにつれてますます理解が深まるものである。聖書のどこを開いて見ても、そこに神の 1235無限の知恵と愛とがあらわされているのを見いだすのである。 {COL 1234.1]0}

ユダヤ制度の意義は、まだ一般に十分に理解されていない。その儀式や象徴の中に意味深い真理が予表されていた。その神秘を開くかぎが、福音である。贖罪の計画を知ることによって、その真理を理解することができる。このような驚くべき主題を理解することは、わたしたちが考えているよりは、はるかに大きな特権である。わたしたちは、神の深遠さを理解しなければならない。本当に悔いた心の持ち主が、神の言葉を調べ、神のみが与え得る知識の長さ、広さ、深さ、高さがもっと与えられるように、祈り求める時に示される真理は、天使でさえ、知ろうと願っているものである。 {COL 1235.1}

世界の歴史が終末に近づくに従って、最後の時代に関する預言は、特に研究すべきである。新約聖書の最後の書には、理解しなければならない真理が満ちている。サタンは、多くの人々の目をくらましている。であるから、彼らは、黙示録を研究しないでいい言いわけならなんでも歓迎してきた。しかし、キリストは、そのしもべヨハネによって終末時代の状態を描かせ、「この預言の言葉を朗読する者と、これを聞いて、その中に書かれていることを守る者たちとは、さいわいである」とおおせになった（黙示録1：3）。{COL 1235.2}

「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストを知ることであります」とキリストは言われるのである（ヨハネ17：3）。わたしたちが、この知識の価値を認めないのは、どうしてであろうか。なぜこのような驚くべき真理が、わたしたちの心を燃やし、くちびるをふるわせ、全身に深い感動を与えないのであろうか。{COL 1235.3}

神は、神の言葉をわたしたちにお与えになった。これは、わたしたちの救いに必要な真理がみな、与えられたことを示している。こうした命の泉から水をくんだ者は、数えきれないほどあるけれども、水はつきる様子もない。同様に多数の者が主をながめつつ、その同じみかたちに変えられていった。彼らがキリストの品性について語り、キリストと彼らとがいかに重大な関係によって結ばれているかを話す時、彼らの心は燃えるのである。しかしながら、こうした探究者は、このような崇高で神聖な主題を探りつくしたわけではない。{COL 1235.4}

さらに、多数の人々が救済の神秘の探究にあたってよいのである。キリストの生涯とその使命の特徴とを瞑想し、真理の発見のため努力すればするほど、より明らかな光が輝くのである。新たな探究が行われる度に、これまでの啓示になかったさらに興味深いものを見るのである。研究の課題は、無尽蔵である。キリストの受肉、キリストの贖罪の犠牲と仲保の働きに関する研究は、勤勉な生徒の永遠の研究課題となることであろう。そして

、彼らは、無限の年月にわたって、大空を仰ぎみながら、「確かに偉大なのは、この信心の奥義である」と叫ぶことであろう（Ｉテモテ3：16）。{COL 1235.5}

もしわたしたちが光を受けさえしたならば、この世で理解できたはずのものを、永遠の世界において学ぶであろう。贖罪という主題は、あがなわれた人々がその全能力をあげて永遠に学び続ける主題となるであろう。かつて、キリストが弟子たちに示そうとなさったけれども、彼らが不信仰であったため、理解することができなかった真理を、彼らは悟ることであろう。キリストの完全さと栄光に関して、常に新しい思想が永遠にわいてくることであろう。忠実な一家の主人は、新しいものと古いものとを、いつまでもつきることなくその倉から取り出すのである。{COL 1235.6}

第12章 求めよ、そうすれば、与えられるであろう

本章は、ルカ11：1～13に基づく {COL 1235.7}

キリストは、わたしたちに与えるために、父なる神から絶えずお受けになった。「あなたがたが聞いている言葉は、わたしの言葉ではなく、わたしをつかわされた父の言葉である」と、主は言われた（ヨハネ 123614：24）。「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであ」る（マタイ20：28）。イエスは、自分のためではなく、他の人々のために、生き、考え、そして祈られた。イエスは、毎朝神との交わりに幾時間かを過ごしたあとで、人々に天の光を与えるために出ていかれた。イエスは、日毎に聖霊の新しいバプテスマをお受けになった。神は、新しい1日の早くからイエスの目を覚まし、彼の心とくちびるに恵みをそそがれた。それは、彼が人々に分け与えるためであった。彼の言葉は、天の宮廷から新たに与えられた。それは、生活に疲れ、しいたげられている人々に、イエスが折にかなった言葉をおかけになるためであった。「主なる神は教をうけた者の舌をわたしに与えて、疲れた者を言葉をもって助けることを知らせ、また朝ごとにさまし、わたしの耳をさまして、教をうけた者のように聞かせられる」（イザヤ50：4）。 {COL 1235.8}

キリストの弟子たちは、彼の祈りと、そして神との交わりの習慣とに強い感銘を受けた。イエスからしばらく離れていた彼らは、ある日、イエスが熱心に祈っておられる姿を見つけた。イエスは、彼らの帰って来たことには、気づかれないかのように、声をあげて、祈っておられた。弟子たちは、深い感銘を受けた。イエスが祈りを終えられると、彼らは、「主よ、……わたしたちにも祈ることを教えてください」と叫んだ。 {COL 1236.1}

それに答えて、キリストは、山上の教えの中でお与えになった主の祈りをくり返し、続いて、1つのたとえをお語りになって、教訓の意味を明らかになさった。 {COL 1236.2}

「そして彼らに言われた、『あなたがたのうちのだれかに、友人があるとして、その人のところへ真夜中に行き、「友よ、パンを3つ貸してください。友だちが旅先からわたしのところに着いたのですが、何も出すものがありませんから」と言った場合、彼は内から、「面倒をかけないでくれ。もう戸は締めてしまったし、子供たちもわたしと一緒に床にはいっているので、いま起きて何もあげるわけにはいかない」と言うであろう。しかし、よく聞きなさい、友人だからというのでは起きて与えないが、しきりに願うので、起き上がって必要なものを出してくれるであろう。』」 {COL 1236.3}

ここで、キリストは、この哀願者を、与えるために求めている人として描かれた。この人は、どうしてもパンを手に入れなければならない。さもないと、道に行き暮れた旅人の必要を満たすことができない。彼の隣人は、煩わされることを好まないが、彼は、願うことを止めないのである。彼は、この友人をなんとかして助けたいと思っている。ついに、彼がしきりに願ったことによって、求めていたものを与えられることになるのである。{COL 1236.4}

それと同様に、弟子たちは、神からの祝福を祈り求めなければならなかった。キリストは群衆を養われたことと、それからご自分が天から下ってきたパンであるという説教によって、弟子たちがキリストの代表者となるためには、何をすべきであるかをお教えになった。彼らは、命のパンを人々に与えなければならなかった。この働きを彼らにお与えになったイエスは、彼らの信仰がさまざまな試みにあうことを知っておられた。彼らは、予期しない事態にしばしば陥って、人間の力なさを痛感させられることであろう。また、命のパンに飢えた魂がやってきても、みずからの欠乏と無力を感じることもあろう。彼らはまず自分が霊の食物を受けなければならなかった。そうしなければ、彼らには、何も人に与えるものがない。しかし、彼らは、ただ1人の魂でも、食を与えずに去らせてはならなかった。キリストは、食糧の源泉がどこであるかを示された。折悪しく、真夜中に友人の来訪を受けた人は、その友をしりぞけなかった。客に出すものは何もなかったが、食物をもっている隣人のところへ行って、しきりに願い求めて、必要なものを手に入れた。神は

、飢えた者に食物を与えるために、神の僕たちを送り出された。そして、神がご自分の働きのために送り出された人々の必要を、お満たしにならないということがあるだろうか。{COL 1236.5}

たとえの中のこの利己的な隣人は、神の性質をあらわしたものではない。ここでは、比較でなく、対照によって教訓が教えられている。自分本位の隣人は、休息が妨げられないために、切なる願いを聞き入れる。しかし、神は与えることを喜ばれる。神は憐れみ1237に満ちたお方で、信じて神に来る者の願いを聞こうと切望しておられる。神がわたしたちにお与えになるのは、わたしたちが他に奉仕するためである。そして、その奉仕によって神のようになるためである。{COL 1236.6}

「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。すべて求める者は得、捜す者は見いだし、門をたたく者はあけてもらえるからである」とキリストは言われる。{COL 1237.1}

救い主は続いて言われる。「あなたがたのうちで、父であるものは、その子が魚を求めるのに、魚の代りにへびを与えるだろうか。卵を求めるのに、さそりを与えるだろうか。このように、あなたがたは悪い者であっても、自分の子供には、良い贈り物をすることを知っているとすれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊を下さらないことがあろうか。」{COL 1237.2}

キリストは、わたしたちが、神をますます信頼するようになるために、神を新しい名、すなわち、人の心に最も親愛の情をいだかせる名で呼ぶことをお教えになった。彼は無限の神を、わたしたちの父と呼ぶ特権をわたしたちにお与えになった。神に向かい、また人の前で用いるこの父よという呼び名は、わたしたちの神に対する愛と信頼のしるしであると同時に、神のわたしたちに対する保護と、神とわたしたちとの関係を保証するものである。わたしたちが、神の恵みや祝福を求める時にこう呼びかけることは、神の耳に音楽

のようにひびくのである。こうして、神を父と呼ぶことは、少しも出すぎたことでないことを示すために、主は、このことについてくり返してお教えになった。主は、わたしたちが、この名称によくなれるようにお望みになるのである。 {COL 1237.3}

神は、わたしたちを神の子供たちとみなしておられる。神はわたしたちを冷淡な世からあがなって、王族の1人とし、天の王の息子、娘としてくださった。わたしたちは、子供が地上の親を信頼する以上の強い信頼感をもって神に信頼するようにと、神は招いておられる。親は子供を愛する。しかし、神の愛は、人間の愛がとうてい及び得ないほど大きく、広く、深いものである。それは測り知ることができないものである。世の親が自分の子供には、良い贈り物をすることを知っているとすれば、天の父はなおさら、求めて来る者に聖霊をくださらないことがあろうか。 {COL 1237.4}

祈りについてキリストが教えられたことは、注意深く考えてみなければならない。祈りには、天上の科学が隠されている。そしてイエスのこのたとえには、すべての者が知らなければならない原則が、明らかに示されている。すなわち、祈りの真の精神とはなんであるかということと、神にお願いをする時には、どうしても忍耐が必要なことを神は教えておられる。そして、神は喜んで祈りに耳を傾け、祈りに答えてくださることを、保証なさるのである。 {COL 1237.5}

わたしたちの祈りは、ただ自分の利益のみを求める利己的な願いであってはならない。わたしたちは、与えるために求めるべきである。キリストの生活の原則が、わたしたちの生活の原則でなければならない。「彼らが真理によって聖別されるように、彼らのためわたし自身を聖別いたします」とキリストは、弟子たちについて言われた（ヨハネ17：19）。キリストがあらわされたのと同じ献身、同じ自己犠牲、神のみ言葉に対する同じ服従が、彼の僕たちの中にあらわれなければならない。わたしたちが世におかれている任務は、自己に仕えて自己を喜ばせることではなくて、罪人を救うために神と協力して、神に栄光を帰することである。わたしたちは、他の人々に分かつことができるように、神に

祝福を求めなければならない。受ける能力は、分かつことによってのみ維持することができる。周りにいる人々に与えないでいて、天の宝を受け続けることはできない。 {COL 1237.6}

たとえの中の哀願者は、何度も断わられたけれども、簡単にあきらめなかった。そのように、わたしたちの祈りも、常に速答があるとは思われない。しかし、祈りはやめるべきものではないと、キリストはお教えになる。祈りは、神を変えるものではない。祈りは、わたしたちを神に一致させるものである。わたしたちが、神に願っている時に、神は、わたしたちの側に自己反省と、罪の悔い改めの必要があることを認め 1238られる場合もあろう。そのような時に、神は、わたしたちにさまざまな試練と、恥辱をお与えになる。そして、聖霊がわたしたちを通してお働きになるのを、妨げているものがなんであるかをお示しになる。 {COL 1237.7}

神の約束が実現されるためには、条件がある。そして、祈りは、義務を行うことの代わりにはならない。キリストは言われる。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。」「わたしのいましめを心にいだいてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう」（ヨハネ14：15、21）。祈りの時に、こうした条件に従わないでいて、神の約束が果たされることを求める者は、神を侮辱する者である。彼らは、キリストの名を唱えていれば、神の約束が実現するものと思っているが、キリストを信じていることと、キリストを愛していることをあらわす行為を示さないのである。 {COL 1238.1}

父なる神に受けいれられる、条件にかなっていない人がたくさんいる。わたしたちは証書になんと書いてあるかをよく調べてみなければならない。わたしたちが神に近づくことができるのは、この約束の言葉である。もし、わたしたちが従わないでいれば、それは、支払いの条件にかなわないでいながら、小切手の現金引き替えを、主に求めることであ

る。わたしたちは、これがあなたのお約束ですから、これを、実現してくださいと祈る。しかし、それでは、神ご自身のみ名の汚れになるのである。{COL 1238.2}

「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう」というのが約束である（ヨハネ15：7）。{COL 1238.3}

「もし、わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである。『彼を知っている』と言いながら、その戒めを守らない者は、偽り者であって、真理はその人のうちにない。しかし、彼の御言を守る者があれば、その人のうちに、神の愛が真に全うされるのである」とヨハネも言っている（Ⅰヨハネ2：3～5）。{COL 1238.4}

キリストの弟子たちへの最後の戒めの1つは、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」ということである。わたしたちは、この戒めに従っているであろうか、それとも、世知にたけた、クリスチャンらしくない性質をあらわしているであろうか。もし何かの点で、他人の心を痛め、傷つけたならば、その過失を告白して、和解を求めなければならない。これは、信仰をもって神の祝福を求めつつ、神のみ前に出るためにしなければならない準備である。{COL 1238.5}

主に祈り求める者が、とかく見過ごしやすいことがもう1つある。それは、わたしたちが、神のみ前に正直であったかどうかという点である。主は、預言者マラキによって次のように言われる。「あなたがたは、その先祖の日から、わが定めを離れて、これを守らなかった。わたしに帰れ、わたしはあなたがたに帰ろうと、万軍の主は言われる。ところが、あなたがたは『われわれはどうして帰ろうか』と尋ねる。人は神のものを盗むことをするだろうか。しかしあなたがたは、わたしの物を盗んでいる。あなたがたはまた『どうしてわれわれは、あなたの物を盗んでいるのか』と言う。10分の1と、ささげ物をもってである」（マラキ3：7、8）。{COL 1238.6}

神はすべての祝福の与え主であられる。その神が、わたしたちのすべての所有の一部を要求なさる。これは、神が、福音の宣教を維持なさる費用としてあてられる。こうして、受けたものを神にお返しすることによって、わたしたちは、神の賜物に対する感謝をあらわす。しかし、神ご自身のものを自分の所に保留しているならば、どうして神の祝福を求めることができようか。もしわたしたちが、この地上のものに不忠実な管理者であるならば、どうして、天のものをゆだねられることを期待することができようか。祈りに答えがない理由はここにあるのではなかろうか。 {COL 1238.7}

しかし、主は憐れみ深く、わたしたちを快く赦し、こう言われる。「わたしの宮に食物のあるように10分の1全部をわたしの倉に携えてきなさい。これをも 1239ってわたしを試み、わたしが天の窓を開いて、あふるる恵みをあなたがたに注ぐか否かを見なさい……。わたしは食い滅ぼす者を、あなたがたのためにおさえて、あなたがたの地の産物を滅ぼさないようにしよう。また、あなたがたのぶどうの木が、その熟する前に、その実を畑に落すことのないようにしよう。……こうして万国の人は、あなたがたを祝福された者ととなえるであろう。あなたがたは楽しい地となるからであると、万軍の主は言われる」（マラキ3：10～12）。 {COL 1238.8}

神のその他の要求もみな同じである。神がお与えになる賜物は、みな服従が条件となっている。神は神と力を合わせる者のために、あふれる祝福を天に備えておられる。神に従う者は、すべて、確信をもって、神の約束の成就を求めることができるのである。 {COL 1239.1}

しかし、わたしたちは、神に対する堅い不動の信頼を示さなければならない。主はわたしたちの信仰を試み、心の願いが純粋なものであるかどうかをためすために、時には祈りに対する応答をお延ばしになることもある。わたしたちは神のみ言葉に従って求めたのであるから、神の約束を信じ、この祈りは必ず聞きとどけられることを確信して、祈り続けなければならない。 {COL 1239.2}

1度だけ求めよ、そうすれば、与えられるであろうと、神は、言っておられない。神は求めよと命じておられる。根気よく祈り続けなさい。求め続けることは、祈るその人をもっと熱心にし、求めているものに対する願いを更に増大する。キリストは、ラザロの墓で、マルタに次のように言われた。「もし信じるなら神の栄光を見るであろう」と（ヨハネ11：40）。{COL 1239.3}

しかし、生きた信仰を持たない者が多い。彼らがなぜ、もっと神の力を見ることができないかは、それに起因している。彼らが弱いのは、不信仰の結果である。彼らは、神が彼らのために働いてくださることよりも、自分自身の働きの方を信じている。彼らはなんでも自分で処理しようとする。いろいろ考えてはみるが、ほとんど祈ることをせず、神に対する真の信頼に欠けている。自分では信仰があるように思っているが、それは、一時の衝動にすぎない。彼らは、自分たちの必要、あるいは神が、喜んで与えようとしておられることを認めないために、主のみ前に彼らの願いを述べつつ、耐え忍ぶことをしないのである。{COL 1239.4}

わたしたちの祈りは、夜中にパンを求めた友人のように、熱心に忍耐強く求め続けなければならない。熱心に不屈の精神をもって祈れば祈るほど、キリストとわたしたちの霊的結合は親密になる。信仰が増すにつれて、受ける恵みも増すのである。{COL 1239.5}

わたしたちのすべき分は、祈って、信じることである。目を覚まして祈っていなさい。目を覚まして、祈りをお聞きになる神と協力しなさい。「わたしたちは神の同労者である」ことを覚えていなさい（Ｉコリント3：9）。あなたの祈りに調和して語り行動しなさい。試練が来た時に、あなたの信仰が真実のものであるかを証明するか、それとも、祈りが単なる形式であるかがわかるのでは、格段の違いである。{COL 1239.6}

めんどうな事が起こり困難に直面した場合、人間に助けを求めてはならない。何事も神に頼らなければならない。困難なことについて他人に話しても、それは、自分を弱めこ

そすれ、それを聞いた人にはなんの力にもならない。わたしたちの霊的弱さというどうすることもできない重荷を、彼らに負わせるだけである。わたしたちは少しも誤りたもうことのない無限の神の力を、受けることができるにもかかわらず、誤りやすい有限な人間の力に頼ろうとしているのである。 {COL 1239.7}

わたしたちは、知恵を求めて、何も地の果てまで行く必要はない。神は、そば近くにおられる。成功するか否かは、あなたが今持っている能力とか、または、将来の能力によるものではない。それは、主があなたのために何をなし得るかということによる。わたしたちは、人間のできることには、信頼をおかないで、信じるすべての魂のために、神がおできになることに、もっともっと信頼をおかなければならない。神は、あなたが信仰によって、神に頼ることを望んでおられる。神は、あなたが、神に大きなことを期待することを望んでおられるのである。神は、霊的なものと同様に、この世のものに対する理解をも与えようと望んでおられる。神は、知性を鋭敏にすることがおできになる。 1240また、手腕と技巧とを与えることがおできになる。あなたの才能を大いに働かせて、神に知恵を祈り求めなさい。そうすれば、知恵は与えられるであろう。 {COL 1239.8}

キリストのみ言葉を、あなたの保証としてかたく信じなさい。主はみもとに来たれとお招きになったのではなかったか。決して失望落胆の言葉を言ってはならない。さもないと、大きな損失をするであろう。もしあなたが困難や圧迫に遭遇した時、その表面だけを見て、つぶやいたりすると、あなたの信仰が病的で薄弱なことをあらわしてしまう。あなたの信仰が、あたかも絶対無敵であるかのように語り、行動しなさい。神は豊かな資源の持ち主である。神は世界を所有しておられる。信仰をもって、天を仰ぎなさい。光と権力と能力の持ち主をながめなさい。 {COL 1240.1}

真の信仰は、どんなに年月がたち、また、どんな苦労があってもゆるがない快活さ、主義に対する忠実さと忍耐強さを持ち続ける。「年若い者も弱り、かつ疲れ、壮年の者も疲れはてて倒れる。しかし主を待ち望む者は新たなる力を得、わしのように翼をはって、

のぼることができる。走っても疲れることなく、歩いても弱ることはない」（イザヤ40：30、31）。{COL 1240.2}

他人を助けたいと望みながらも、与えるべき霊的能力も光も、自分にはないと感じる者がたくさんいる。そのような人は、恵みの座に来て彼らの願いを述べるとよい。聖霊を求めなさい。神は、そのすべてのお約束を保証しておられる。聖書を手に持って、わたしは、あなたのおっしゃったとおりにいたしました。「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう」とあなたはお約束なさいました、と言いなさい。{COL 1240.3}

わたしたちは、キリストの名によって祈るだけではなくて、聖霊に感じて祈らなければならない。「御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さるからである」と言われているのは、そのことを説明している。このような祈りを神は喜んで聞いてくださるのである（ローマ8：26）。{COL 1240.4}

熱心に力をこめて、キリストの名によって祈るならば、そのような熱心さをもって祈ること自体が、「求めまた思うところのいっさいを、はるかに越えて」、神がわたしたちの祈りに答えようとしておられることの神の保証なのである（エペソ3：20）。{COL 1240.5}

「なんでも祈り求めることは、すでにかなえられたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになるであろう」（マルコ11：24）。「わたしの名によって願うことは、なんでもかなえてあげよう。父が子によって栄光をお受けになるためである」とキリストは言われた（ヨハネ14：13）。愛された弟子ヨハネは、聖霊の感動によって、次のように確信をもって明言している。「わたしたちが神に対していだいている確信は、こうである。すなわち、わたしたちが何事でも神の御旨に従って願い求めるなら、神はそれを聞きいれて下さるということである。そして、わたしたちが願い求めることは、なんでも聞きいれて下さるとわかれば、神に願い求めたことはすでにかなえられたことを、知るのである」（

Ⅰヨハネ5：14、15）。そこであなたの願いを、イエスの名によって、父なる神に切に願い求めなさい。神はイエスの名を尊ばれるのである。{COL 1240.6}

み座の周りにあるにじは、神が真実であって、変化とか回転の影とかいうもののない保証である。わたしたちは、神に対して罪を犯し、神の恵みに浴すことができない者になった。それにもかかわらず、「み名のために、われわれを捨てないでください。あなたの栄えあるみ位をはずかしめないでください。あなたがわれわれにお立てになった契約を覚えて、それを破らないでください」という驚くべき祈りの言葉を神ご自身が、わたしたちの口に入れてくださったのである（エレミヤ14：21）。わたしたちが、自己の無価値なことと罪とを告白して、みもとに近づくならば、神は、わたしたちの叫びに耳を傾けると神ご自身がお約束になった。神がわたしたちに言われた言葉が成就するためには、神の栄えあるみ位がかけられているのである。{COL 1240.7}

キリストを象徴したアロンと同じように、わたしたちの救い主は、聖所の中で、神の民のすべての名を、胸の上にかけておられるのである。わたしたちの大祭司は、わたしたちに、神を信頼することを促して、わたしたちに言われた励ましの言葉を全部覚えておられる。彼は、ご自分の契約をお忘れにならない。{COL 1240.8}

すべて神を捜し求める者は、見いだすであろう。すべて門をたたく者は、あけてもらえるであろう。めんどうをかけないでくれ。もう戸は閉めてしまった。今更、戸は開けたくないなどと、神は仰せにならない。あなたを助けることはできないとは、だれにも言われない。夜中に、飢えた魂にパンを与えるために求める者は、必ずその願いが聞かれるのである。{COL 1241.1}

たとえの中で、旅人のためにパンを求めた人は、「必要なもの」を与えられたのである。果たして、わたしたちが他に分け与えるために神からいただくのは、どれほどの量であろうか。それは、「キリストから賜わる賜物のはかりに従って」与えられるのである（エペソ4：7）。人が同胞をどのように扱うかを、天使は、非常な関心をもってながめて

いる。天使たちは、キリストが表されたのと同じ精神を、人があやまちを犯している者に示すのを見ると、その人のそばに走り寄って、魂にとって生命のパンであるみ言葉を思い起こさせて語らせる。「神は、ご自身の栄光の富の中から、あなたがたのいっさいの必要を、キリスト・イエスにあって満たして下さるであろう」（ピリピ4：19）。あなたの証しが純粋で真実のものであれば、神はそれを永遠の命の力に満ちあふれたものにしてくださる。あなたは、主の言葉を、真実と義とをもって話すようになる。 {COL 1241.2}

まず、密室でよく祈ってから、人々のために個人的努力を始めなければならない。というのは、救霊の科学を理解するためには、大きな知恵が必要だからである。人に語る前に、キリストと交わりなさい。天の恵みの座において、人々に奉仕をする準備をしなさい。 {COL 1241.3}

あなたの心が、かわいているように神を慕い、生ける神を慕ってくだかれるようにしよう。キリストの生涯は人間がもし神の性質を持つならば、一体何ができるかを示した。キリストが神からお受けになったものはみな、わたしたちも持つことができるものである。だから求めて受けることにしよう。ヤコブのような不屈の信仰と、切に求めてやまぬエリヤの精神をもって、神の約束なさったことが全部与えられるように求めなさい。 {COL 1241.4}

あなたの心が、栄光に輝く神のことについての思いで満たされるようにしなさい。あなたの生活を、イエスの生涯にしっかりと結びつけなさい。やみの中から光が照りいでよと仰せになった神は、イエス・キリストの顔に輝く神の栄光の知識を明らかにするために、あなたの心を照らしてくださる。聖霊は、神に関することを明らかに示し、従順な者に生きた力を与えるのである。キリストは、あなたを、無限の神の門口に導いてくださるのである。あなたは、幕のかなたの栄光を見ることができる。そして、いつも生きていて、わたしたちのためにとりなしておられるお方の十分な力を、人々にあらわすことができるのである。 {COL 1241.5}

第13章　神殿の中の2人の礼拝者

本章は、ルカ18：9～14に基づく {COL 1241.6}

「自分を義人だと自任して他人を見下げている人たちに対して」キリストは、パリサイ人と取税人のたとえを語られた。パリサイ人は礼拝をするために宮に上るが、それは自分が赦しを受けなければならない罪人であることを認めたからではなく、自分を正しいと思い、神の賞賛を受けようと思うからである。彼は、自分の礼拝を、何か神の前に自分をよく思われるようにする行為でもあるかのように考える。また、他の人々にも、自分を信心深い人間のように思わせていた。彼は神からも人からも、よく思われようとする。彼の礼拝は、私利私欲から出たものであった。 {COL 1241.7}

そして、彼は、自己称賛の念に満ちでいる。それが態度にも、歩きぶりにも、祈りにもあらわれている。「わたしに近づいてはならない。わたしはあなたとは別の人間だから」と言わぬばかりに、彼は他の人々から離れて立って、「ひとりで」祈る。全く自己に満足しきって、神も人もともに自分に満足してくれるものと考える。 {COL 1241.8}

「神よ、わたしはほかの人たちのような貪欲な者、不正な者、姦淫をする者ではなく、また、この取税人のような人間でもないことを感謝します」と彼は言う。彼は神の聖なる品性によらず、他の人の品性によって、自分の品性を評価したのである。彼の心は神を離れて人に向けられていた。彼の自己満足の原因がここにある。 {COL 1242.1}

彼は、自分の善行をこまごまと述べて、「わたしは1週に2度断食しており、全収入の10分の1をささげています」と言う。パリサイ人の宗教は魂になんの変化も起こさない。彼は、品性が神に似てくることや、愛と憐れみの心を求めようとしない。ただうわべだけの宗教に満足している。彼の義は、自分の義、つまり、彼自身の行いの結果であり、人間の標準によって評価されたものである。 {COL 1242.2}

だれでも自分は正しいと自認する者は、他を軽べつする。パリサイ人は他人を標準にして自分を評価するように、自分を基準にして他をさばくのである。彼の義は、人々の義によって評価されるから、人々が悪ければ悪いほど、対照的に彼のほうが正しく見えるのである。こうした自分を義とする精神をもつと、他を非難するようになる。「ほかの人たち」は、神の戒めを犯していると宣言する。こうして、彼は、兄弟を訴える者であるサタンの精神をあらわすのである。この精神をもっているならば、神との交わりに入ることができない。彼は神の祝福を受けないで、自分の家に帰っていく。{COL 1242.3}

取税人も、他の礼拝者とともに宮へ上ったけれども、彼は人々と一緒に礼拝する価値はないと考えて、彼らから離れて1人になった。彼は、はるか遠くに立って、「目を天にむけようともしないで、胸を打ち」、深い悲しみと自己嫌悪の情をあらわした。彼は、神に対して罪を犯している自分が、罪深く汚れていることを感じた。彼は周りの者から、憐れみをうけることさえ期待することはできなかった。人々は彼を軽べつしていた。また、自分を神に推賞するようななんの功績も持たないことを知って、絶望のあまり、「神様、罪人のわたしをおゆるしください」と叫んだ。彼は自分を他人と比較しなかった。彼は罪の意識に圧倒され、神の前に自分がたった1人で立っているような気がした。彼の唯一の望みは、赦しと和らぎが与えられることであった。彼の唯一の嘆願は、神の憐れみを受けることであった。そして、彼は祝福を受けた。「神に義とされて自分の家に帰ったのは、この取税人で」あったとキリストは言われた。{COL 1242.4}

パリサイ人と取税人とは、神を礼拝するために来る2種類の人を代表している。そして、その人々を、この世界に生まれてきた最初の2人の子供たちがよく代表している。カインは、自分を義であると考え、感謝のささげ物をもってきただけであった。カインは、罪の告白をしなかった。彼は憐れみの必要も認めなかった。ところが、アベルは、神の小羊を予表した血をもってきた。アベルは、自分が罪人であり、失われた人間であることを認めて神のところにきた。彼の何よりも望んだものは、なんのいさおしもなくして与えられる神の愛であった。神はアベルのささげ物をお受け入れになったが、カインとカインのさ

さげ物は、お認めにならなかった。神に受け入れられる第一の条件は必要感をもつこと、つまり、自分の欠乏と罪とを自覚することである。「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである」（マタイ5：3）。{COL 1242.5}

パリサイ人と取税人とが代表している2種の人々のことについては、使徒ペテロの生涯がその両方のよい実例になっている。ペテロは、弟子になった初めは自分の強さをほこっていた。自分自身の評価によれば、彼もパリサイ人と同じように、「ほかの人たちのようではないと考えた。キリストはあの裏切りの夜、弟子たちに警告を発して、「あなたがたは皆、わたしにつまずくであろう」と言われたが、その時も、ペテロは「たとい、みんなの者がつまずいても、わたしはつまずきません」と確信にみちて言った（マルコ14：27、29）。ペテロは、自分の危険な状態を知らなかった。彼をおとしいれたのは自己過信であった。彼は、自分の力で誘惑に対抗できると思っていたけれども、わずか数時間後に試練がきた時に、ののしりと誓いの言葉とともに主を拒んだのである。{COL 1242.6}

ペテロは、にわとりの鳴く声を聞いて、キリストの言葉を思い起こし、自分がなんということをしたかに恐れおののいて振り返って、主の方を見た。ちょうどその瞬間、キリストもペテロをご覧になった。そしてそのまなざしは悲痛な表情ではあったが、そこにペテロに対する憐れみと愛とが混じっていた。ペテロは、それを悟って外に出て激しく泣いた。彼の心をくだいたのはキリストのその時の表情であった。ペテロはここで人生の転換期に立っていた。そして彼は心から罪を悲しんで悔い改めた。彼は、取税人のように真心から悔い改めた。そして、取税人が受けたと同じ神の憐れみを受けた。キリストのみ顔が、彼に赦しの確証を与えたのである。{COL 1243.1}

こうして、ペテロの自己過信はうせた。彼は、2度と高慢な言葉を口に出さなくなった。{COL 1243.2}

キリストは、復活後、3同もペテロを試みられた。「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」と言われた。ペテロは、もはや兄弟たち以

上に、自分を高めてはいなかった。彼は自分の心を読むことができるお方に訴えて、「主よ、あなたはすべてをご存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになっています」と言ったのである（ヨハネ21：15、17）。 {COL 1243.3}

こうして彼は主の任命を受けた。これは、彼がこれまでゆだねられていたものよりは、はるかに広く、熟練を要するものであった。キリストは、彼に羊や小羊を飼うように命じられた。救い主が命を捨てて、お救いになった魂を指導するようペテロにゆだねられたことは、主がペテロを信任して弟子に復帰させられた最大の証拠であった。かつては、落ちつきがなく、高慢で自己過信に満ちていた弟子が、落ちついた心の砕けた者になり、主の克己と自己犠牲にならい、キリストの苦しみにあずかる者となった。そして、キリストが栄光の王座につかれる時には、ペテロも、主の栄光にあずかる者となるのである。 {COL 1243.4}

ペテロを失敗におとしいれ、パリサイ人を神との交わりに入れさせなかったその罪が、今日、幾千という人を滅びにおとしいれている。高慢とうぬぼれほど神がおきらいになるものはなく、また人の魂を危険にさらすものはない。あらゆる罪の中で、これほど絶望的でどうにもならないものはない。 {COL 1243.5}

ペテロの失敗は、瞬間的でなく、徐々に起こった。自己を過信して、救われたものと思い込んでいるうちに、1歩1歩と堕落の道をたどり、ついには、主を拒否するようになった。わたしたちも天国に入るまでは、もはや自分は試練に負ける心配はないと感じたり、自信をもったりすることは安全ではない。救い主を受け入れた者は、たとえどんなに真面目な改心者であっても、わたしたちは救われている、と言ったり、また、感じたりするようにその人々に教えてはならない。これは、誤解を招きやすい。もちろん、わたしたちは、すべての者に希望と信仰とをいだくように教えなければならない。しかし、自らをキリストにささげ、キリストに受けいれられたことを知ってもなお、わたしたちは、誘惑の手のとどかないところにいるわけではない。「多くの者は自分を清め、自分を白くし、か

つ練られるでしょう」と神の言葉にしるされている（ダニエル12：10）。試練を耐え忍ぶ人だけが、命の冠を受けるのである（ヤコブ1：12）。{COL 1243.6}

人がまず初めにキリストを受けいれ、心に確信をいだき始め、自分は救われたのだという時に、自己に依存する危険がある。彼らは自分の弱さと神の力がいつでも必要なことを忘れやすい。彼らはそのようなすきにつけこまれてサタンの誘惑に負け、ペテロのように罪の深みに沈んでしまう。「だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい」と忠告されている（Ⅰコリント10：12）。常に自分に依存せずに、キリストに信頼することが唯一の安全な方法である。{COL 1243.7}

ペテロは自分の品性の欠点を知り、キリストの能力と恵みの必要なことを学ばなければならなかった。主は、彼が試練にあわないようにすることはおできにならなかったが、試練に敗北しないように救うことがおできになった。ペテロがもしキリストの警告に聞き従っていたならば、彼は目をさまして祈っていたことであろう。また、彼の足がつまずかないように、恐れおののきつつ歩んでいたことであろう。そうすれば、彼は神の助けによって、サタンに負けることはなかったであろう。{COL 1243.8}

ペテロが倒れたのは、うぬぼれのためであった。そして、彼がまた立ち上がるようにしていただいたのは、悔い改めとへりくだった思いを持つことによってであった。このような経験が記録されているのを見て、悔い改める罪人はみな勇気づけられる。ペテロははなはだしい罪におちいったけれども、主に見捨てられたのではなかった。「わたしはあなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈った」というキリストの言葉が、彼の心に刻まれていた（ルカ22：32）。ペテロははげしい良心の呵責に苦しめられた時にも、この祈りとキリストの愛と憐れみに満ちたお顔を思い出して、希望をいだくことができた。復活後、キリストは、ペテロをお忘れにならなかった。天使は女たちに次のように言っている。「今から弟子たちとペテロとの所へ行って、こう伝えなさい。イエスはあなたがたより先にガリラヤへ行かれる。……そこでお会いできるであろう」（マルコ16：7）

。救い主はペテロの悔い改めをお受け入れになった。主は罪をお赦しになる方である。{COL 1244.1}

こうして、ペテロを救った同じ憐れみが、試練におちいったすべての魂にさし伸べられている。人に罪を犯させ、そのまま、絶望と恐怖の中に放任して、赦しを求めることを恐れさせるのは、サタンの特別の策略である。しかし神は、「わたしの保護にたよって、わたしと和らぎをなせ、わたしと和らぎをなせ」と言っておられるのであるから、何を恐れることがあろうか（イザヤ27：5）。わたしたちの弱さを助けるための備えは、十分に整っている。そして、キリストに来るようにとのあらゆる招きが与えられている。{COL 1244.2}

キリストは、ご自分のさかれた体を提供して、神の嗣業を買いもどされた。これは人間にもう1度機会を与えるためであった。「そこでまた、彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなしておられるので、彼によって神に来る人々を、いつも救うことができるのである」（ヘブル7：25）。キリストは彼の清い生涯、服従の生活、カルバリーの十字架の死とによって、失われた人類のためにとりなしをされた。そして、今わたしたちの救いの君は、単なる嘆願者としてではなくて、戦いに打ち勝った勝利者として、わたしたちのために、とりなしをなさるのである。彼のささげ物は完全なものである。そして、主は、わたしたちをとりなすお方として、神の前で、ご自身の汚れなき功績と神の民の祈りと告白と感謝を盛った香炉を持って、ご自分が制定なさったお勤めをしておられる。これらは、キリストの義の香りとともに、芳しい香りとなって神の前に上る。このようなささげ物はことごとく神に受け入れられる。あらゆる罪は赦されておおわれるのである。{COL 1244.3}

キリストは、わたしたちの身代わりであると同時に保証人となることを約束しておられて、どんな人でもおろそかになさらない。主は人類が永遠の滅びにおちいろうとしているのを見るに忍びず、人類のために死に至るまでご自分の魂を注ぎ出されたのである。主

は、自己を自ら救うことができないことを認めたすべての魂に、憐れみと同情をよせられるのである。{COL 1244.4}

主はおののきつつ嘆願する者を、必ず助け起こしてくださる。主は、贖罪によって、つきることのない道徳的能力をわたしたちのために備えてくださったから必ずこの力をわたしたちのために用いてくださる。{COL 1244.5}

主は、わたしたちを愛しておられるから、わたしたちは、罪も悲しみもともに主の足もとにおけばよい。イエスのお顔のどの表情もまたどの言葉も、すべて主に対する信頼を起こさせる。主はみ心のままにわたしたちの品性をお造りになる。単純な信頼のうちに自分を全く主にゆだねる魂に対しては、サタンがどんなに全勢力をあげて来ても、とうてい勝利することはできない。「弱った者には力を与え、勢いのない者に 1245は強さを増し加えられる」（イザヤ40：29）。{COL 1244.6}

「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。」「ただあなたは自分の罪を認め、あなたの神、主にそむい」たことを言いあらわせと、主は言われる。「わたしは清い水をあなたがたに注いで、すべての汚れから清め、またあなたがたを、すべての偶像から清める」（Ⅰヨハネ1：9、エレミヤ3：13、エゼキエル36：25）。{COL 1245.1}

しかし、わたしたちが罪を赦され、平和を与えられるためには自分を知らなければならない。つまり、わたしたちを悔い改めに至らせる知識がなければならない。パリサイ人には、罪の自覚がなかった。聖霊は、彼を動かすことができなかった。パリサイ人の魂は、自分の義というよろいをまとっていたので、天使の手が放つ鋭い矢も、それをさし通すことができなかった。キリストは、罪人であることを自覚した人だけをお救いになれるのである。彼は、「囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ」るために来られたのである（ルカ4：18）。しかし、「健康な

人には医者はいらない」（ルカ5：31）。わたしたちは、自分たちの真の状態を知らなければならない。そうでなければ、キリストの助けが必要なことを感じないことであろう。わたしたちは、自分たちの危険について知らなければならない。そうでなければ、避難所にのがれることもないことであろう。わたしたちは自分たちの傷の痛みを感じなければならない。そうでないと、いやしを求めないことであろう。{COL 1245.2}

「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、なんの不自由もないと言っているが、実は、あなた自身がみじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸な者であることに気がついていない。そこで、あなたに勧める。富む者となるために、わたしから火で精錬された金を買い、また、あなたの裸の恥をさらさないため身に着けるように、白い衣を買いなさい。また、見えるようになるため、目にぬる目薬を買いなさい」と神は言われる（黙示録3：17、18）。火で精練された金といわれているのは、愛によって働く信仰である。これだけが、わたしたちを神と調和させるものである。わたしたちが、どんなに活動して、どんなに多くの仕事をしても、愛がなく、キリストの心に宿っていたような愛がないならば、天国の一員となることはできないのである。{COL 1245.3}

人間は、自分で、自分の過ちをさとることはできない。「心はよろずの物よりも偽るもので、はなはだしく悪に染まっている。だれがこれを、よく知ることができようか」（エレミヤ17：9）。わたしたちは心に思ってもいないことなのに、いかにも心が貧しいかのように表現してみることができる。また、心の貧しさを神に訴えながら、自分がどんなに謙遜で義に富んでいるかを誇ることができる。本当に自分を知る方法は、ただ1つしかない。それは、キリストをながめることである。人々が自分の義を誇るのは、キリストを知らないからである。神がどんなに清く、尊い方であるかを瞑想することによって初めて、わたしたちは、自分がどんなに弱く貧しく、またどんな欠点があるかを、そのまま見るようになる。わたしたちも、他のすべての罪人と同様に、自分の義の衣をまとって、堕落と絶望の中に沈んでいることを悟る。もし、わたしたちが救われたとするならば、わたし

たち自身の善行によるのではなくて、全く神の無限の恵みによるものであることを知ることであろう。 {COL 1245.4}

取税人の祈りが聞かれたのは、彼が手を伸ばして全能の神にしっかりとすがる信頼を示したからである。取税人にとって自分というものは、恥辱以外の何ものでもなかった。すべて神を求める者は、これと同じでなければならない。哀れな嘆願者はすべての自己過信を否定する信仰によって、無限の能力を自分のものとしなければならない。 {COL 1245.5}

外見上どんなにりっぱに律法を守ってみても、それは単純な信仰と全的自己否定の代わりにはならない。しかし、人間は、自分で自分をむなしくすることはできない。ただキリストが働いてくださることに同意することができるに過ぎない。そうすれば魂は次 のように言うようになろう。わたしは弱いのです。そして少しもキリストに似ていません。このようなわたしですが、どうぞお救いください。主よ、わたしの心をお受けください。わたしはこれをささげることはできません。これは、あなたのものです。どうぞ清く保ってください。これを、わたしが保っていることはできません。どうぞ、わたしを練り、形造り、清い聖なる雰囲気の中に引き上げて、あなたの豊かな愛の流れが、わたしを通って流れ出るようにしてください。 {COL 1245.6}

この自己否定は、クリスチャン生活の出発において行うばかりでなくて、天に向かって前進するごとに、新たにしなければならないものである。わたしたちの行う善行は、すべて、わたしたちの外からの力によるものである。であるから、常に励んで神を仰ぎ、絶えず、心をくだいて罪を告白し、神のみ前に心を低くする必要がある。わたしたちは、絶えず自己を捨て、キリストに頼ることによってのみ、安全に歩くことができる。 {COL 1246.1}

わたしたちが、イエスに近づき、主の品性の純潔さを明らかに認めれば認めるほど、罪がどれほどはなはだしく恐ろしいものであるかを悟り、自己を称揚する気持ちにはなれ

なくなる。清い者として神に認められるほどの人は、自分の善良さを誇ったりはしない。使徒ペテロは、キリストの忠実な僕となって、天からの光と力を受ける大いなる光栄に浴した。彼は、キリストの教会の建設に活動的な役割を果たした。しかし、ペテロは、あの不名誉な恐るべき経験を忘れることができなかった。ペテロの罪は赦された。しかし、ペテロは自分をつまずかせた品性の弱さに対しては、キリストの恵みによらなければ救われないことを知った。彼は、自分には、何1つ誇り得るものがないことを認めた。 {COL 1246.2}

使徒にしても、預言者にしても、自分には罪がないと主張した者は1人もいない。神に最も近く生活した人、知りつつ罪を犯すよりは、むしろ生命を犠牲にした人、また、神からの特別の光と力とを与えられた人は、みな、自分たちの性質の罪深いことを告白している。彼らは、肉に信頼をおかず、自分たちの義を誇らず、キリストの義に絶対の信頼をおいた。キリストをながめる者もみな、そうなるのである。 {COL 1246.3}

クリスチャンの経験が進むにつれて、悔い改めも深まっていく。「その時あなたがたは自身の悪しきおこないと、良からぬわざとを覚えて、その罪と、その憎むべきこととのために、みずから恨む」と主が言っておられるのは、主がお赦しになった人々、すなわち主がご自分の民としてお認めになった人々に対してである（エゼキエル36：31）。「わたしはあなたと契約を立て、あなたはわたしが主であることを知るようになる。こうしてすべてあなたの行ったことにつき、わたしがあなたをゆるす時、あなたはそれを思い出して恥じ、その恥のゆえに重ねて口を開くことがないと、主なる神は言われる」とおおせになる（エゼキエル16：62、63）。その時、わたしたちは、口を開いて、自己をほめない。わたしたちのこうした力は、ただキリストによって与えられることを悟る。そして使徒パウロの告白をわたしたちの告白とするようになる。「わたしの内に、すなわち、わたしの肉の内には、善なるものが宿っていないことを、わたしは知っている」（ローマ7：18）。「しかし、わたし自身には、わたしたちの主イエス・キリストの十字架以外に、誇りとするものは、断じてあってはならない。この十字架につけられて、この世はわたしに対

して死に、わたしもこの世に対して死んでしまったのである」（ガラテヤ6：14）。{COL 1246.4}

この経験に調和して、次の命令が与えられている。「恐れおののいて自分の救の達成に努めなさい。あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされるところだからである」（ピリピ2：12、13）。神は約束を実行しないのではなかろうか、または忍耐と同情に欠けているのではなかろうかと、心配せよとは言っておられない。それよりもあなたは、自分の意志をキリストの意志に従わせているかどうか、また、あなたの先天的および後天的性質が、自分の生活を支配していないかどうかをよく考えなければならない。{COL 1246.5}

「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神で」ある。偉大な働き人であられる主とあなたの魂との間に自己をさしはさんでいないか、また、神があなたによって完成しようと望んでおられる大目的を利己的な意志によって、さまたげてはいないかを注意すべきである。わたしたちは自己の力にたより、キリストのみ手を離して、主のお導きを仰がずに人生の旅路を歩こうとすることのないように気をつけなければならない。{COL 1246.6}

誇りとうぬぼれを助長するものは、ことごとく避けなければならない。であるから、お互いにへつらったり、ほめそやしたりすることがないように注意すべきである。へつらうことは、サタンのすることである。サタンは責め訴えることと同様にへつらうこともする。こうして、魂を滅ぼそうとしている。だから、人を称賛する者は、サタンに使われている手下である。キリストのために働く者は、自分をほめる言葉を避けなければならない。自己を見えないところにしまおう。ただキリストのみを称賛すべきである。「わたしたちを愛し、その血によってわたしたちを罪から解放し」てくださったお方にすべての目が向けられ、すべての人の賛美の声がささげられなければならない（黙示録1：5）。{COL 1247.1}

主を恐れる者の生活は、悲しい、いんうつな生活ではない。キリストのない生活こそ、顔つきを憂うつにし、人生を嘆きと悲しみに満ちた生涯とするのである。うぬぼれと自己主義にみちている者は、キリストとの生きた個人的交わりを持つ必要を感じない。まだ岩なるキリストの上に落ちていない心は自分の完全さを誇る。人々は、威厳の保てる宗教を欲する。彼らは、自分たちのさまざまな性質を持ったまま、ゆうゆうと歩ける広い道を望む。彼らの利己的で人々にもてはやされ、ほめられることを好む気持ちが、救い主を心からしめ出すことになり、キリストのないところは、いんうつと悲哀の場所となってしまう。キリストが魂の中に住んでくださるならば、それは喜びの泉となる。神を受け入れる者はすべて、神の言葉の主題が喜びであることを悟るのである。 {COL 1247.2}

「いと高く、いと上なる者、とこしえに住む者、その名を聖ととなえられる者がこう言われる、『わたしは高く、聖なる所に住み、また心砕けて、へりくだる者と共に住み、へりくだる者の霊をいかし、砕けたる者の心をいかす』」（イザヤ57：15）。 {COL 1247.3}

モーセが神の栄光を見たのは、彼が岩の裂け目に隠れた時であった。わたしたちも裂かれた岩なるキリストの中にかくれる時に、キリストはご自分の裂かれたみ手をもって、わたしたちをおおってくださるのである。そして、わたしたちは、主がその僕たちに言われることを聞くことができるのである。神は、モーセにあらわされたと同じように、わたしたちにも、「あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まことの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者」としてご自分をあらわしてくださることであろう（出エジプト34：6、7）。 {COL 1247.4}

贖罪の働きには、とうてい人間の考え及ばない重要さが含まれている。「『目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた』のである」（Ｉコリント2：9）。罪人がキリストの力に引きつけられて、高く掲げられた十字架のそばにいき、そこにひれ伏す時に、新しい創造が

行われるのである。彼は、キリスト・イエスにあって新しく造られた者となる。聖なる神もこれ以上何もお求めにならない。神ご自身が「イエスを信じる者を義とされるのである」（ローマ3：26）。そして、「義とした者たちには、更に栄光を与えて下さったのである」（ローマ8：30）。罪のゆえに受けた恥辱と堕落は、たしかに大きなものであったが、贖罪の愛による光栄とほまれとは、更に大きいのである。神のみかたちに一致しようと努力する人類には、豊かな天の宝とすぐれた力が与えられて、堕落したことのない天使たちよりもさらに高い地位におかれることになるのである。 {COL 1247.5}

「イスラエルのあがない主、 {COL 1247.6}

イスラエルの聖者なる主は、 {COL 1247.7}

人に侮られる者、民に忌みきらわれる者…… {COL 1247.8}

『もろもろの王は見て、立ちあがり、 {COL 1247.9}

もろもろの君は立って、拝する。 {COL 1247.1]0}

これは真実なる主、イスラエルの聖者が、 {COL 1248.1}

あなたを選ばれたゆえである』。」 {COL 1248.2}

（イザヤ49：7） {COL 1248.3}

「おおよそ、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるであろう。」（ルカ18：14） {COL 1248.4}

第14章　祈りの能力

本章は、ルカ18：1～8に基づく {COL 1248.5}

キリストはここで再臨のすぐ前の時代のことと、信者たちの経なければならない危機について語っておられた。そこで特にその時のことについてたとえを語り、「失望せずに常に祈るべきことを」教えられた。 {COL 1248.6}

「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わぬ裁判官がいた。ところが、その同じ町にひとりのやもめがいて、彼のもとにたびたびきて、『どうぞ、わたしを訴える者をさばいて、わたしを守ってください』と願いつづけた。彼はしばらくの間きき入れないでいたが、そののち、心のうちで考えた、『わたしは神をも恐れず、人を人とも思わないが、このやもめがわたしに面倒をかけるから、彼女のためになる裁判をしてやろう。そうしたら、絶えずやってきてわたしを悩ますことがなくなるだろう』。」そこで主は言われた、「この不義な裁判官の言っていることを聞いたか。まして神は、日夜叫び求める選民のために、正しいさばきをしてくださらずに長い間そのままにしておかれることがあろうか。あなたがたに言っておくが、神はすみやかにさばいてくださるであろう。」 {COL 1248.7}

ここに描かれている裁判官は、正義を重んぜず、人の苦しみをなんとも思わない人であった。彼は熱心に訴えるやもめの願いもなかなか聞かなかった。この女は幾度となく、冷淡に扱われては裁判所から追い返されていた。裁判官は、このやもめの訴えが正当なものであることを認めていたから、すぐにでも彼女を救うことができたのであるが、そうはしなかった。彼は自分の威力を示したかったのである。こうして、彼はやもめの願い求めることを容易に聞き入れないでいることに、みずから満足感を味わっていた。しかし、彼女は失望も落胆もしなかった。彼女は裁判官のこのような冷酷無情な仕打ちにもひるむことなく、嘆願しつづけたので、裁判官はついに彼女の訴えを聞くことになった。「わたしは神をも恐れ蛍人を人とも思わないが、このやもめがわたしに面倒をかけるから、彼女の

ためになる裁判をしてやろう。そうしたら、絶えずやってきてわたしを悩ますことがなくなるだろう」と彼は言った。彼は自分の体面を保つためと、自分が不正で片寄った裁判をする人であるという世評を受けないために、しつこく訴えるやもめの願いを聞き入れたのである。 {COL 1248.8}

「そこで主は言われた、『この不義な裁判官の言っていることを聞いたか。まして神は、日夜叫び求める選民のために、正しいさばきをしてくださらずに長い間そのままにしておかれることがあろうか。あなたがたに言っておくが、神はすみやかにさばいてくださるであろう』。」キリストは、ここではこの不義な裁判官と神とを著しく対照しておられる。裁判官は、やもめがあまりにくどいので、もう彼女にわずらわされないようにという単なる利己的考えから、やもめの願いを聞いた。彼はあわれみも同情もなかった。やもめの不幸に心を痛めたのでもなかった。ところが、神を求める者に対する神の態度は、これとはなんと違っていることであろう。神は欠乏と困難の中にある者の願いを限りない憐れみをもってかえりみてくださるのである。 {COL 1248.9}

裁判官に正しい裁きを求めた女は、夫と死に別れて、たよるあてもなく、失った財産をとりもどす手段もなかった。人間は罪のために神との関係を断たれてしまった。人間には自分で自分を救う方法がない。しかし、わたしたちはキリストにあって、天の父に近づくことができる。神は、ご自分がお選びになったものを、大切になさるのである。彼らこそ、神のみ名を賛美するためと、世界の暗黒の中で光を輝かすために、 1249暗やみから驚くべきみ光の中に招き入れられた者である。不義な裁判官は、彼に救いを願い求めたやもめに特別の考慮を払ったわけではなかった。しかし、哀願して止まないやもめにわずらわされないために、その敵から救ってやった。ところが、神は、神の子供たちを限りなく愛しておられるのである。神がこの地上の教会ほどに、愛を注がれるものは他にない。 {COL 1248.1]0}

「主の分はその民であって、ヤコブはその定められた嗣業である。主はこれを荒野の地で見いだし、獣のほえる荒れ地で会い、これを巡り囲んでいたわり、目のひとみのように守られた」（申命記32：9、10）。「あなたがたにさわるものは、彼の目の玉にさわるのであるから、あなたがたを捕らえていった国々の民に、その栄光にしたがって、わたしをつかわされた万軍の主は、こう仰せられる」（ゼカリヤ2：8）。{COL 1249.1}

「どうぞ、わたしを訴える者をさばいて、わたしを守ってください」というやもめの祈りは、神の子らの祈りを代表している。サタンこそ、彼らを訴える大敵である。サタンは「われらの兄弟らを訴える者、夜昼われらの神のみまえで彼らを訴える者」である（黙示録12：10）。サタンは、絶えず神の民を偽って訴え、あざむき滅ぼそうとしている。キリストが、このたとえの中で弟子たちに祈るように教えられたのは、サタンと彼の手下の勢力から救われることである。{COL 1249.2}

ゼカリヤの預言には、サタンが神の民を訴えるのに対し、キリストが神の民の敵に対抗して立っておられることが示されている。「時に主は大祭司ヨシュアが、主の使の前に立ち、サタンがその右に立って、これを訴えているのをわたしに示された。主はサタンに言われた、『サタンよ、主はあなたを責めるのだ。すなわちエルサレムを選んだ主はあなたを責めるのだ。これは火の中から取り出した燃えさしではないか。』ヨシュアは汚れた衣を着て、み使の前に立っていた」と預言者は言っている（ゼカリヤ3：1～3）。{COL 1249.3}

ここで、神の民は、さばかれている罪人として描かれている。大祭司ヨシュアは、大きな苦難を受けている民に、神の祝福が与えられることを祈り求めている。ヨシュアが、神に嘆願しているのに対し、彼の右には、サタンが彼の敵対者として立っている。サタンは、神の子供たちを非難し、できれば彼らを絶望におとしいれようとしている。彼は、神の民の悪行と欠点を神の前に述べたてる。また、彼らの過失や失敗を指摘して、キリストの前に彼らの品性をあばいて、大きな苦しみをなめている彼らの所に、キリストからの助

けがのべられないように望んでいる。ヨシュアは神の民の代表として、汚れた衣を着て罪を責められている。ヨシュアは、民の罪を自覚して失望している。サタンは、ヨシュアに罪を思い起こさせ、絶望におとしいれる。しかし、サタンの攻撃がどんなにはげしくても、彼はなお嘆願者として立ちつづける。{COL 1249.4}

サタンが他を訴えることを始めたのは、天においてであった。人類が堕落して以来、訴えることがサタンの仕事であった。そして、世界歴史が終末に近づくにしたがって、特別な意味において、これが彼の仕事になる。彼は、時の短いのを知っているから、人をあざむいて滅びにおとしいれるために、全力を尽くすのである。彼は、地上にいる一団の人々が、弱く罪深い人々であるにもかかわらず、神の律法を敬っているのを見て怒りをいだくのである。サタンは、彼らが神に従うことができないようにしようとしている。サタンは、彼らにはなんの価値もないことを喜び、すべての者をおとしいれて、神から引き離そうと、あらゆる策をめぐらしている。彼は神を非難するとともに、この世界で憐れみと愛、同情と赦しの精神を心にいだいて、神のみこころを行おうと努力するすべての者を責め、非難するのである。{COL 1249.5}

神の力が神の民のためにあらわされるごとに、サタンは怒りをいだく。神が神の民のために働かれるごとに、サタンの部下たちは以前に倍した力をもって、彼らの滅びを図る。サタンは、キリストに信頼する者を1人残らずねたむのである。サタンのねらっていることは、人間をそそのかして、悪を行わせることである。そして、それに成功すると、その責任を全部、誘惑された人間のせいにすることである。サタンは、人々の汚れた衣、不完全な品性を指摘する。また、彼らの弱さと愚かさや、忘恩の罪やキリストに似ていないことなど、彼らがあがない主のみ栄えを汚したことを指摘する。そして、こうしたことはすべて、サタンが彼らを、自分の思いのままに滅ぼしてよい理由であると主張するのである。サタンは、また人々の心に、自分たちはもう救われる見込みがなく、彼らの汚れは、とうてい洗い清められ得ないものであるというように思わせて、恐怖におとしいれようと

している。こうして、サタンは人々の信仰を失わせて、全く自分の誘惑のとりことし、神に反逆させようとしているのである。{COL 1249.6}

神の民は、サタンの告訴に対して、自分の力では返す言葉がない。自分を振りかえってみれば、絶望するほかはない。しかし、彼らは助け主なるキリストの助けを仰ぎ、あがない主の功績にすがるのである。「こうして、神みずから義となり、さらに、イエスを信じる者を義とされるのである」（ローマ3：26）。神の子供たちは、神がサタンの非難を沈黙させ、彼の策略を失敗に終わらせてくださることを確信して、神に叫び求める。「どうぞ、わたしを訴える者をさばいてください」と彼らは祈る。そして、キリストは、大胆に訴えてくるサタンを、十字架の大議論によって沈黙させられるのである。{COL 1250.1}

「主はサタンに言われた、『サタンよ、主はあなたを責めるのだ。すなわちエルサレムを選んだ主はあなたを責めるのだ。これは火の中から取り出した燃えさしではないか』」と。サタンが神の民を暗黒に閉じこめて、滅ぼそうとする時、キリストはみ手を下される。彼らは、罪を犯しはしたが、キリストが彼らの罪の重荷をご自分の魂の上にせおってくださった。そしてイエスは人類を、火の中から燃えさしのように取り出された。イエスは、ご自分の人性によって人と結合され、また、ご自分の神性によって、無限の神と1つに結ばれておられる。助けが、滅びようとする魂にさしのべられた。敵は責められたのである。{COL 1250.2}

「ヨシュアは汚れた衣を着て、み使の前に立っていたが、み使は自分の前に立っている者どもに言った、『彼の汚れた衣を脱がせなさい』。またヨシュアに向かって言った、『見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう』。わたしは言った、『清い帽子を頭にかぶらせなさい』。そこで清い帽子を頭にかぶらせ、衣を彼に着せた。」そして、天使は、万軍の主の権威をもって、神の民を代表しているヨシュアと厳粛な契約をかわした。「あなたかもし、わたしの道に歩み、わたしの務を守るならは、わたし

の家をつかさどり、わたしの庭を守ることができる。わたしはまた、ここに立っている者どもの中に行き来することを得させる。」すなわち神のみ座の周りの天使の間にさえ行き来できるのである（ゼカリヤ3：3～7）。{COL 1250.3}

神の民には欠点があるにもかかわらず、キリストは、彼の保護の対象である彼らから、お離れにならない。キリストは彼らの衣を変える力を持っておられる。キリストは彼らの汚れた衣をとり除き、悔い改めて信じる者の上に、彼ご自身の義の衣を着せ、天の記録の彼らの名の所に、赦されたことを書いてくださる。キリストは、天の宇宙の前で、彼らをご自分のものとして告白なさる。彼らの敵サタンは、訴える者、欺く者であることが暴露される。神は、ご自分の選民のために正義を行われる。{COL 1250.4}

「どうぞ、わたしを訴える者をさばいて、わたしを守ってください」という祈りは、ただサタンだけにあてはまるのでなくて、サタンにそそのかされて、神の民を悪く言い、誘惑し、滅ぼそうとする人々にもあてはまる。神の戒めに従う決心をした者は、下からの権力に支配された敵のあることを、経験によって知らされる。こうした敵が至るところでキリストを陥れようとした。彼らがどんなにしつこくキリストにつきまとったかは、だれも知ることができない。キリストの弟子たちも、主と同じように、絶えず誘惑にあわなければならない。{COL 1250.5}

聖書には、キリストの再臨直前の世界の状態が描かれている。使徒ヤコブは、貪欲と圧制とが世にはびこることをしるしている。「富んでいる人たちよ。よく聞きなさい。……あなたがたは、終りの時にいるのに、なお宝をたくわえている。見よ、あなたがたか労働者たちに畑の刈入れをさせながら、支払わずにいる賃銀が、叫んでいる。そして、刈入れをした人たちの叫び声が、すでに万軍の主の耳に達している。あなたがたは、地上でおごり暮し、快楽にふけり、『ほふらるる日』のために、おのが心を肥やしている。そして、義人を罪に定め、これを殺した。しかも彼はあなたがたに抵抗しない」（ヤコブ5：

1～6）。これが、今日の状態である。あらゆる圧迫と搾取とによって巨大な富の蓄積が行われる一方、飢えた人類の叫びが神の前に上っていくのである。{COL 1250.6}

「公平はうしろに退けられ、正義ははるかに立つ。それは、真実は広場に倒れ、正直は、はいることができないからである。真実は欠けてなく、悪を離れる者はかすめ奪われる」（イザヤ59：14、15）。この言葉は、キリストの地上の生涯で成就した。キリストは、神の戒めに忠実に従われた。そして、神の戒めの代わりに人々が尊重していた伝説や人間の戒めを、退けられた。そのために、キリストは憎まれ、迫害された。歴史はくり返す。人間のおきてと伝説は神の戒めよりも尊ばれ、神の戒めに忠誠をつくす者は、恥辱と迫害を受ける。キリストは忠実に神にお仕えになったために、安息日を破る者、神を汚す者であると非難を受けられた。キリストは悪魔につかれた者と呼ばれ、また、ベルゼブルであるとの攻撃を受けられた。彼に従う者もこれと同様の非難を受け、悪く言われるのである。こうして、サタンは、彼らを罪におとしいれて、神の名を汚そうと望んでいる。{COL 1251.1}

神を恐れず、人を人とも思わないような裁判官のことをキリストが語られたのは、そのようなことが当時行われていた裁判であったからである。そして、間もなくキリストご自身の裁判の時にも、この通りのことが実際に行われることを示されたのである。また、わたしたちが逆境におちいった時に、世の為政者や裁判官が、どんなに頼りにならないものであるかを、各時代の神の民に悟らせようと望まれた。神の選民はしばしば役人の前に立たされる。これらの役人は、神の言葉の指導と勧告に従わず、清めも受けず、生まれつきのままの衝動に従って行動する。{COL 1251.2}

キリストは、不正な裁判官のたとえによって、どうするべきかを、わたしたちにお教えになった。「まして神は、日夜叫び求める選民のために、正しいさばきをしてくださら」ないことがあろうか。わたしたちの模範であるキリストは、自己の弁護や逃れる手段をはかることは、何もなさらなかった。イエスは、ご自分を神におゆだねになった。そのよ

うに、キリストの弟子たちは、人を責め、非難し、暴力に訴えてまで、自分の身の安全を図ろうとしてはならない。 {COL 1251.3}

理解に苦しむ試練がやってきても、心の平和をかき乱してはならない。どんな不正な取り扱いを受けても、腹を立ててはならない。わたしたちは、復しゅう心をいだくことによって自分を傷つける。わたしたちは神に対する自己の信頼を失い、聖霊を悲しませる。わたしたちの側には、証人、天からの使者が与えられていて、この証人が、わたしたちのために、敵に立ち向かってくださる。彼は、わたしたちを義の太陽の光で包む。サタンは、これを通りぬけられない。サタンは、この聖なる光の防壁を越えることができない。 {COL 1251.4}

世は、ますます悪化して行くのであるから、自分には、なんの困難も起こらないと楽観することは、だれもできない。実は、こうした困難そのものが、わたしたちを至高者の会見室に導き入れる。わたしたちは、無限の知恵を持っておられる主の勧告を、求めればよいのである。 {COL 1251.5}

「悩みの日にわたしを呼べ」と主は、言っておられる（詩篇50：15）。神は、わたしたちが、自分たちの悩みと欠乏とを神に申し上げ、上からの助けの必要なことをわたしたちが神に訴えることを、神は勧めておられる。また神は、常に祈るようにお命じになる。困難なことが起こった時にはすぐに、熱心な祈りを心から神にささげなければならない。わたしたちは、しきりに願うことによって、神に対するわたしたちの強い信頼をあらわす。わたしたちのこうした必要感が、熱心に神に祈りをささげさせ、そして天の父は、わたしたちの嘆願を聞いて心をお動かしになる。 {COL 1251.6}

信仰のために恥辱と迫害を受ける者は、ともすると自分たちは、全く神から見捨てられたかのように思いがちである。人間の見地からすれば、彼らは少数である。見たところ、敵の方が優勢である。しかし彼らは良心に従わなければならない。彼らのために苦し

1252みにあい、悲しみとなやみをになわれた主は、彼らをお捨てになったのではない。{COL 1251.7}

神の子供たちは、無防備のまま放置されてはいない。祈りは、全能のみ手を動かす。祈りは、「国々を征服し、義を行い、約束のものを受け、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、……他国の軍を退かせた」。こうして、信仰のために殉教した人のことを聞くと、それがどんなことを意味したかを知るのである（ヘブル11：33、34）。{COL 1252.1}

もし、わたしたちが、神のご用のために自分をささげているならば、神は、なんの備えもなさらないような所へ、わたしたちを置かれることはない。わたしたちがどのような境遇にあっても、導き手であられる主がわたしたちをお導きくださる。どんな問題であっても主は確実な相談相手である。また、どんな悲しみ、死別のなげき寂しさの中にあっても、同情にあふれた友なるイエスがわたしたちとともにおられる。無知のために足を踏みすべらすようなことがあったとしても、キリストはわたしたちを、おすてにはならない。「わたしは道であり、真理であり、命である」と言われる主のみ声が、はっきりと聞こえてくる（ヨハネ14：6）。「彼は乏しい者をその呼ばわる時に救い、貧しい者と、助けなき者とを救う」（詩篇72：12）。{COL 1252.2}

主のみもとに近づき、主のご用を忠実に果たす者によって、主はあがめられるのであると、主は言われる。「あなたは全き平安をもってこころざしの堅固なものを守られる。彼はあなたに信頼しているからである」（イザヤ26：3）。全能のみ手は、わたしたちを前へ、そして更に前へと導こうとして、のべられている。主は、前進せよ、わたしはあなたを助けると言っておられる。あなたが求めることとその求めたものが与えられることとは、わたしの名の栄えになるのである。あなたが、つまずくのを待ち設けている者の前で、わたしはあがめられるのである。彼らはわたしの言葉が勝利のうちに果たされるのを見るであろう。「また、祈のとき、信じて求めるものはみな与えられるであろう」（マタイ21：22）。{COL 1252.3}

悩み苦しみにあう者はすべて、神を呼び求めるとよい。冷酷な人々に頼ることをしないで、創造主に、あなたの求めを申し上げなさい。砕けた心をもって、神に来る者は、だれ1人しりぞけられることはない。心からの祈りは、決して消えてしまうものではない。天の聖歌隊の賛美を受けておられる神は、弱々しい人間の叫びをも聞かれる。わたしたちが、部屋の中で心の願いを申し上げたり、あるいは、道を歩きながら祈ったりすると、その言葉は宇宙の王のみ座にまで達する。それはだれの耳にも聞こえないであろうが、消え去ってしまったり、忙しい仕事に取りまぎれて、なくなったりしない。何ものも、人の心の願いを消し去ることはできない。祈りは街頭の騒音や群衆の混雑をこえて、天の宮廷へと上っていく。わたしたちが語りかけているのは、神である。そして、神は、わたしたちの祈りを聞かれるのである。 {COL 1252.4}

自分にはなんの価値もないと感じる人も、神に自分の願いをゆだねるのをためらってはいけない。世の罪のために、キリストを与えることによって、ご自分をお与えになった神は、すべての魂の責任をご自分で負われたのである。「ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、御子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか」（ローマ8：32）。わたしたちを励まし力づけるために与えられたこうした恵み深いみ言葉を、神が成しとげてくださらないことがあろうか。 {COL 1252.5}

キリストは、ご自分の嗣業である神の選民をサタンの手の中からあがない出すことを、何よりも望んでおられる。しかし、わたしたちが、サタンの外部的な権力から救われるに先だって、サタンの内部的な力から救われなければならない。 {COL 1252.6}

そこで世俗心や利己心、粗野でキリストにふさわしくない性質を清めるために、主は、試練がやってくることをお許しになる。苦難の大水が押しよせてくるのは、わたしたちが、神と、神がつかわされたイエス・キリストを知り、汚れからの清めを熱望するようになるためである。こうした試練を経ることによって、さらに清く聖なる者となり、幸福に

なるためである。わたしたちが試みの炉に入る時、魂はしばしば利己心の 1253ために暗くなる。しかし、その厳しい試練を忍耐するならば、神の性質を反映して出てくるのである。神が苦難を送られた目的が果たされたとき、「あなたの義を光のように明らかにし、あなたの正しいことを真昼のように明らかにされる」（詩篇37：6）。{COL 1252.7}

神の民のささげる祈りを、神がお聞きにならないという恐れは全くない。わたしたちは、誘惑や試練にあった時に、失望落胆におちいり、熱心に祈りつづけなくなってはいけない。{COL 1253.1}

救い主は、スロ・フェニキヤの女をあわれまれた。イエスは彼女の悲しみを見て心をお痛めになった。彼女の祈りが聞きとどけられた確証をただちに与えようと望まれたが、弟子たちに教訓を与えるために、しばらく彼女の悲痛な叫びをお聞きにならないふりをされた。ところが彼女は、イエスを信じる固い信仰をあらわした。キリストは、スロ・フェニキヤの女を賞賛し、彼女の願い求めていた尊い恵みを与えてお帰しになった。弟子たちは、この教訓をいつまでも忘れなかった。そして、不屈の祈りが、どのような結果をもたらしたかについて記録を残したのである。{COL 1253.2}

この母親に、これほどの求めてやまぬ心を起こさせたのは、キリストご自身であった。裁判官の前で訴えるやもめに、勇気と決意を与えたのもキリストであった。又、幾世紀もの昔、ヤボクの渡し場で、不思議な格闘の際に、ヤコブに同じ不屈の信仰を与えたのもキリストであった。こうして、ご自身が人の心にお植えになった確信に対して、主は必ず報いをお与えになったのである。{COL 1253.3}

天の聖所におられる裁判官は、正しいさばきを行われる。彼は、ご自分のみ座を取りかこむ天使たちよりも、罪の世の誘惑にさらされている人類との交わりをお喜びになる。{COL 1253.4}

今全宇宙の関心がこの小さな地球に向けられている。それは、キリストが地球の住民の魂のために、無限の価を払われたからである。世のあがない主は、天と地とを結びつけ

るのに天使たちをお用いになる。主にあがなわれた者が、この地上にいるからである。昔、天使たちがアブラハムやモーセと共に歩いて語ったように、今もなお、彼らは、地上を訪れる。大都会の忙しい活動の中に、街頭や市場に群がっている群集の中に、また、人生は金をもうけ、遊戯にふけり、楽しむことだと考えて、永遠の世界のことは、考えようともしない人々の中にさえ、神はなお、守護者や聖天使たちをお送りになる。このような目には見えない使者たちが、人々のすべての言葉と行いを見守っている。どのような事業あるいは、快楽のつどいの中にも、またはどのような礼拝のつどいの中にも、そこには目に見える聴衆のほかに、別の聴衆がある。時には天使たちが見えない世界をおおっている幕を開いて見せる。そして、わたしたちの心を、あわただしい生活から転じて、すべての言行を見守っている目に見えない証人たちのことを考えさせようとしている。 {COL 1253.5}

わたしたちは、天使の来訪が、なんの目的のためであるかを、よく知らなければならない。わたしたちが、どんな仕事をしていても、天使たちの協力と保護が与えられていることを思わなければならない。目にこそ見えないが、光と力の軍勢が、神の約束を信じて、これを自分のものとする柔和で心のへりくだった者の保護にあたる。ケルビムとセラピム、力にすぐれた天使たち、万の幾万倍、千の幾千倍もの天使たちが、キリストの右に立っている。これは、「すべて仕える霊であって、救を受け継ぐべき人々に奉仕するため、つかわされた」のである（ヘブル1：14）。 {COL 1253.6}

これらの天の使いたちによって、人の子らの言葉と行いがもれなく記録されている。神の民に対する残酷と不正行為、悪人の権力によって、神の民に加えられた苦痛もみな天に記録されるのである。 {COL 1253.7}

「まして神は、日夜叫び求める選民のために、正しいさばきをしてくださらずに長い間そのままにしておかれることがあろうか。あなたがたに言っておくが、神はすみやかにさばいてくださるであろう。」 {COL 1253.8}

「だから、あなたがたは自分の持っている確信を放棄してはいけない。その確信には大きな報いが伴っているのである。神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは、忍耐である。『もうしばらくすれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない』」（ヘブル10：35～37）。「見よ、農夫は、地の尊い実りを、前の雨と後の雨とがあるまで、耐え忍んで待っている。あなたがたも、主の来臨が近づいているから、耐え忍びなさい。心を強くしていなさい」（ヤコブ5：7、8）。{COL 1253.9}

神の忍耐は驚くばかりである。罪人に恵み深い訴えかなされている間に、神の義もまた長く待っている。しかし、「義と正とはそのみくらの基である」（詩篇97：2）。「主は怒ることおそく」とあるが、「力強き者、主は罰すべき者を決してゆるされない者、主の道はつむじ風と大風の中にあり、雲はその足のちりである」（ナホム1：3）。{COL 1254.1}

世の人々は、大胆に神の律法を犯すようになった。神が長く忍んでおられるために、人々は、神の権威を踏みにじった。彼らは、互いに、競って、神の嗣業である人々を圧迫し残酷に扱った。「神はどうして知り得ようか、いと高き者に知識があろうか」と彼らは言うのである（詩篇73：11）。けれども、彼らには越えられない一線が画されている。定められた限界に彼らが達する時が近づいてきた。今すでに、彼らは、神の忍耐の限界を越えようとしている。それは、神の恵みと憐れみの限界である。主は、み手を下してご自分の名誉を擁護し、神の民を救い出し、不義が増し加わるのをおさえられる。{COL 1254.2}

ノアの時代の人々は神の律法を無視し創造主を記念するものは、地から全く消え去ったかと思われた。人々の罪があまりにはなはだしくなったために、主は洪水によって、罪深い地の住民たちを一掃なさった。{COL 1254.3}

いつの時代でも、主はご自分の働かれる方法を人々にお知らせになった。危機が迫ってくると、主はいつもご自分をあらわされ、サタンの計画が実行されるのをとどめるために手を下された。神は、国家であろうと、家族であろうと、あるいは個人の場合であろうと、主の介入がいっそう明らかにわかるように、事態が危機におちいるのをお許しになる。こうして律法を擁護し、正しいさばきを行われるイスラエルの神の存在が明らかにされたのである。 {COL 1254.4}

現在は、罪悪が世にあふれて、最後の大危機が近いことを告げている。神の律法が全世界的に無視され、神の民がその同胞からの圧迫と迫害を受けるようになるその時に、主が介入なさるのである。 {COL 1254.5}

「さあ、わが民よ、あなたのへやにはいり、あなたのうしろの戸を閉じて、憤りの過ぎ去るまで、しばらく隠れよ。見よ、主はそのおられる所を出て、地に住む者の不義を罰せられる。地はその上に流された血をあらわして、殺された者を、もはやおおうことがない」と主がわれる時が近づいている（イザヤ26：20、21）。今、クリスチャンであると言いながら、貧者からだまし取ったり圧迫したり、やもめや孤児から奪ったりする人がある。神の民の良心を自分たちの思いのままにできないからといって、悪魔のような憎しみをいだく人々がいる。しかし、神は、こうしたことをすべておさばきになる。「あわれみを行わなかった者に対しては、仮借のないさばきが下される」（ヤコブ2：13）。やがて、彼らは、全地の裁判官の前に立って、神の嗣業である民の肉体と魂とを苦しめたことについて申し開きをしなければならない。彼らは、今、神の働きをしている人々を偽って訴え、あざけることであろう。神を信じる人々を牢獄に入れ、鎖につなぎ、流刑や死刑に処することであろう。しかし、このよりなすべての苦痛と悲嘆に対して、彼らは神に申し開きをしなければならない。神は彼らの罪に2倍の罰をお与えになる。神は、刑罰を下す天使たちに向かって、背教した教会の象徴であるバビロンについて言っておられる。「彼女の罪は積り積って天に達しており、神はその不義の行いを覚えておられる。彼女がしたと

おりに彼女にし返し、そのしわざに応じて2倍に報復をし、彼女が混ぜて入れた杯の中に、その倍の量を、入れてやれ」（黙示録18：5、6）。{COL 1254.6}

インド、アフリカ、中国、海の島々などから、あるいはいわゆるキリスト教国で圧迫を受けていろ幾百万の人々から、痛ましい叫び声が神の前に上っているその叫びは必ず近いうちに聞かれる。神はこの世界の道徳的腐敗をお清めになる。それはノアの時のような洪水ではなくて、だれも消すことのできない火の 1255海によってである。{COL 1254.7}

「その時あなたの民を守っている大いなる君ミカエルが立ちあがります。また国が始まってから、その時にいたるまで、かつてなかったほどの悩みの時があるでしょう。しかし、その時あなたの民は救われます。すなわちあの書に名をしるされた者は皆救われます」（ダニエル12：1）。{COL 1255.1}

屋根裏の部屋、あばらや、牢獄、処刑台、山々、荒野、地のほら穴、海の洞窟の中から、キリストは、ご自分の子供たちをお集めになる。地上にあって、彼らは貧しく、なやみ苦しんだ。また、サタンの偽りの要求に従わなかったために、恥辱をこうむって墓に下っていった者が、幾百万とあった。こうして、神の子供たちは、地上の裁判官によっては極悪の犯罪人であると宣告された。しかし、「神はみずから、さばきぬし」になられる時が近い（詩篇50：6）。その時に地上の判決はくつがえされる。「その民のはずかしめを全地の上から除かれる」（イザヤ25：8）。すべての者に白い衣が与えられる（黙示録6：11）。「彼らは『聖なる民、主にあがなわれた者』ととなえられ」る（イザヤ62：12）。{COL 1255.2}

神の子供たちは、どのような苦難にあったにせよ、どのような損失を受けたにせよ、またどのような迫害をこうむったにせよ、あるいはまた、この世の生命を失ったにしても、そのとき、必ず十分な報いを受けるのである。彼らは、「御顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、御名がしるされている」（黙示録22：4）。{COL 1255.3}

第15章　この人は罪人たちを迎えて

本章は、ルカ15：1～10に基づく {COL 1255.4}

「取税人や罪人たち」が、キリストの周りに集まってくると、律法学者たちは、つぶやいて、「この人は罪人たちを迎えて一緒に食事をしている」と言った。 {COL 1255.5}

ユダヤ人はこのように非難することによって、キリストが罪深く汚れた人々と交わることを好み、彼らの罪深さをご存じないのだと遠回しに言った。律法学者たちは、イエスに失望した。イエスはご自分の品性の清いことを主張しながら、律法学者たちと交わらず、その教え方にも同調しないのはなぜであろうか。イエスが少しももったいぶらないで、どの階級の中にも入って働かれるのはなぜであろうか。もし、彼が真の預言者であれば、律法学者と同じ意見をもち、取税人や罪人を、当然彼らの受けるべき冷淡な取り扱いをするはずであると彼らは考えた。こうした社会の保護者たちは常にイエスと争いながらも、イエスの生活の清らかさに畏敬と自責の念をいだいていた。しかし、社会から見捨てられた人々に、彼がこのような明らかな同情を示されたことを怒った。彼らは、イエスの方法を承認しなかった。彼らは、自分たちが教育と教養にすぐれた宗教家であると自認していたが、キリストの摸範によって、彼らの利己心が暴露された。 {COL 1255.6}

彼らを怒らせたもう1つのことは、これまで律法学者たちを軽べつして、会堂には来たこともなかった人々が、イエスの周りに群がり、彼の言葉に魅せられたように聞き入っていることであった。律法学者やパリサイ人は、彼の清らかなみ前に立つと心を責められるばかりであるのに、どういうわけで、取税人や罪人は、イエスに引き付けられたのであろうか。 {COL 1255.7}

彼らは、その理由が、「この人は罪人たちを迎えて」と彼らがあざけりながら発した言葉そのものにあることを知らなかった。イエスの所に来た魂は、自分たちのような者の

ためにも、罪の穴から逃れる道があることを、イエスの前に来た時に感じた。パリサイ人は、ただ、彼らをあなどり、とがめるだけであった。{COL 1255.8}

しかし、キリストは、長く父の家から離れていたとはいえ、父のみ心から忘れ去ることのできない神の子供たちとして、彼らをお迎えになった。そして、彼らが悲惨と罪の中にあること自体が、特別に神の憐れみの対象になる理由であった。彼らが神から遠ざかっていればいるだけ、彼らに対する熱望も大きく、彼らの救いのために大きな犠牲を、神は払われるのである。{COL 1255.9}

イスラエルの教師たちは、これをみな、自分たちが保管者で解釈者であると誇っていた聖書から、学ぶことができたはずであった。罪を犯したダビデは、「わたしは失われた羊のように迷い出ました。あなたのしもべを捜し出してください」と書いたのではなかったか（詩篇119：176）。ミカも罪人に対する神の愛を記して、「だれかあなたのように不義をゆるし、その嗣業の残れる者のためにとがを見過ごされる神があろうか。神はいつくしみを喜ばれるので、その怒りをながく保たず」といった（ミカ7：18）。{COL 1256.1}

道に迷った羊

この時、キリストは、聴衆に聖書の言葉を思い起こさせようとはなさらなかった。主は、彼ら自身の経験にふれてお話しになった。ヨルダン川の東に広がっている高原地方には、牧草がたくさん生えていた。そして、谷間や、山林などにはよく羊が迷い込んでしまって、羊飼いが苦心して羊をさがし出しては連れもどしていた。イエスの周りの群衆の中には、羊飼いや、牧畜に投資している人々がいたから、イエスのたとえは、だれにでもよくわかった。「あなたがたのうちに、100匹の羊を持っている者がいたとする。その1匹がいなくなったら、99匹を野原に残しておいて、いなくなった1匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか。」{COL 1256.2}

人々からさげすまれるこれらの魂は、神の財産であるとイエスは言われた。彼らは、創造と贖罪とによって神のものであって、神の前に価値あるものである。羊飼いは羊を愛して、その中の1匹でも道に迷ったのが解ると、じっとしてはいられない。神は、これとは比べものにならない無限の愛をもって、世から捨てられた魂を愛されるのである。人は、神の愛を拒み神から離れ、他の主人を選ぶこともできよう。 {COL 1256.3}

しかし、彼らは、依然として、神の所有であり、神は彼らをご自分のものとして回復しようと望まれる。「牧者がその羊の散り去った時、その羊の群れを捜し出すように、わたしはわが羊を捜し出し、雲と暗やみの日に散った、すべての所からこれを救う」と言われる（エゼキエル34：12）。 {COL 1256.4}

たとえの中の羊飼いは、1匹の羊、すなわち、数として最少のものをさがしに出かけた。そのように、道に迷った魂がただ1人であったとしてもキリストは、その人のためにおなくなりになられたはずであった。 {COL 1256.5}

おりから迷い出た羊は、動物の中で一番無力なものである。羊は自分で帰ってくることができないから、どうしても羊飼いがさがしに行かなければならない。神から離れ去った魂もそれと同じである。神の愛の助けが差し伸べられなかったならば、彼も道に迷った羊と同様に無力で、神に帰る道を見いだすことはできなかったのである。 {COL 1256.6}

羊が1匹いなくなったことを知った羊飼いは、おりの中に安全に入っている羊の群れをながめて、少しも驚いた様子もなく、「ここに99匹いる。迷った1匹をさがしに行くのはたいへんだ。そのうちに帰ってくるだろう。おりの戸を開けておいて入れるようにしておこう」などとは言わない。1匹が迷い出たことを知るや否や、羊飼いはそれを悲しんで心配しだす。彼は、何度も羊を数えなおす。いよいよ1匹が迷ったことが明らかになると彼は眠ることができない。99匹をおりに残して、道に迷った羊をさがしに出る。夜は暗く、嵐ははげしい。道がけわしくなるにつれて、羊飼いの不安はつのり、ますます熱心に捜

し求める。彼は、道に迷っている1匹の羊を見いだすために全力をつくすのである。{COL 1256.7}

やっとのことで遠方から羊のかすかななき声が聞こえた時に、羊飼いはどんなに安心したことであろう。彼は、そのなき声をたよりに、自分の身の危険もかえりみないで、けわしい坂をよじ上って、絶壁の頂上まで行く。こうして捜しているうちに、なき声はいよいよ弱まり、今にも死にそうになっているのがわかるが、ついに、彼の努力は報いられ、いなくなった羊が見いだされる。{COL 1256.8}

さて、彼は、その羊に向かって、お前は、ずい分わたしにやっかいをかけたといってしかったりはしない。むちでかりたてようともしない。また、おりに引いていこうともしない。彼は、喜びのあまり、ふるえる羊を肩にのせる。もし、傷ついていたりすると、しっかり自分の胸にだきしめて、自分の心臓の温もりで、元気づけてやろうとする。羊飼いは捜索がむだにおわらなかったことを感謝して、羊をおりまでかかえて帰るのである。{COL 1256.9}

さて、羊飼いが羊をつれず、悲しんで帰ってくる光景がここに描かれていないことは感謝である。このたとえでは、失敗ではなくて、成功、すなわち見いだした喜びが語られている。これは、神のかこいからさ迷い出た羊は、たとえ1匹であっても見過ごしにされたり、救われないままに捨てて置かれたりすることはないという保証である。キリストは、あがないにあずかろうとして服従するすべての者を、腐敗の穴と罪のいばらから救ってくださる。{COL 1257.1}

悪を行って絶望におちいっている魂も、勇気を出さなければならない。多分、神は罪を赦して、神の前に出ることを許してくださるであろうなどと考えてはならない。すでに神は、第一歩をふみ出されたのである。あなたが神にそむいた時に、神はあなたを求めて捜しに出られたのである。羊飼いのようなやさしい心で神は、99匹をあとに残して、さ迷い出た1匹を捜すために荒野へ出ていかれた。彼は、傷ついて、死ぬばかりになってい

る魂を愛の腕にいだいて、喜び勇んで安全なおりにかかえてこられるのである。 {COL 1257.2}

罪人は、神の愛に浴するためには、まず悔い改めなければならないと、ユダヤ人は教えていた。彼らの見解によると、悔い改めは、人間が神の恵みを得るための努力なのである。パリサイ人たちが、驚きと怒りをもって、「この人は罪人たちを迎えて」と叫んだのは、このような考え方からであった。悔い改めた者以外は、彼に近づかせてはならないと、彼らは考えていたのである。しかし、この迷い出た羊のたとえでは、救いが与えられるのは、わたしたちが神を求めるからではなくて、神がわたしたちをお求めになるからであるとキリストは教えておられる。「悟りのある人はいない、神を求める人はいない。すべての人は迷い出」た（ローマ3：11、12）。神に愛していただくために、わたしたちが悔い改めるのではなくて、わたしたちが悔い改めに至るために、神がわたしたちに愛をあらわしてくださるのである。 {COL 1257.3}

ついに迷い出た羊を、連れて帰ることができた時、羊飼いの感謝の気持ちは、楽しい喜びの歌となって表現された。彼は、友人や隣人を呼び集めて、「わたしと一緒に喜んでください。いなくなった羊を見つけましたから」と言った。そのように、羊の大牧者なるイエスが迷い出た者を見いだされる時、天と地とは、感謝と喜びの歌を歌うのである。 {COL 1257.4}

「罪人がひとりでも悔い改めるなら、悔改めを必要としない99人の正しい人のためにもまさる大きいよろこびが、天にあるであろう。」あなたがた、パリサイ人は、自分たちを天の寵児（ちょうじ）であると思っていると、キリストは言われた。あなたがたは、自分自身の義で安全であると思っている。あなたに悔い改める必要がないとするならば、わたしは、あなたに用がないということを知ってもらいたい。自分の貧しさと罪深さを感じるこのような魂こそ、わたしが救うために来たその人々なのである。あなたがたが軽べつするこのような失われた魂に、天の使いたちは関心を持っている。あなたがたは、これら

の魂の1人がわたしの側に加わると、つぶやき、あざけるが、天使たちは、喜んで、天の宮廷で勝利の歌をひびかせる。{COL 1257.5}

神にそむいた者が滅ぼされると、天において喜びがあると律法学者たちは言い伝えていたが、神にとって滅ぼすことは、異常な行為であることをイエスは教えられた。神の創造された魂の中に、神のかたちが回復されるのを、全天は喜ぶのである。{COL 1257.6}

罪の中に深く沈んだ者が、神に帰ろうとすると、人々から批判と疑いの目で見られるものである。彼の悔い改めは純粋であろうかなどと疑ったり、「あの人はしっかりしていない。長く続くとは思わない」とささやいたりする人がある。このような人は神の働きでなくて、兄弟を訴える者であるサタンの働きをしている。悪魔は、彼らの批判によって、その魂を失望落胆させて、神から、さらに遠くへ追いやろうとしている。悔い改める罪人は、1人の道に迷った者が立ち帰る時に天でどんな喜びがあるかをよく考えて、神の愛に安んじ、どんなことがあっても、パリサイ人の軽べつや不信の目に失望してはならない。{COL 1257.7}

律法学者たちは、キリストのたとえが、取税人や罪人にあてはまることを理解したけれども、これはさらにもっと広い意味をもったものであった。キリストは、この道に迷った羊によって、個々の罪人だけでなくて、反逆して、罪に傷ついたこの世界をも描かれた。この地球は、神が統治しておられる広い宇宙の1原子に過ぎない。しかし神の日にはこの道に迷った1匹の羊である堕落した小さな世界は、おりからさ迷い出ない99匹にまさって、尊いのである。天の宮廷の愛された司令官、キリストは、この失われた1つの世界を救うために、その高い地位からくだり、天の父とともにもっておられた栄光をお捨てになった。彼は天の罪なき世界、すなわち、彼を愛していた99匹をあとにして、この世界に来られて、「われわれのとがのために傷つけられ、われわれの不義のために砕かれたのだ

」（イザヤ53：5）。神はいなくなった羊をまた迎え入れる喜びのために、み子を与えるとともに、ご自分をお与えになった。{COL 1258.1}

「わたしたちが神の子と呼ばれるためにはどんなに大きな愛を父から賜わったことか、よく考えてみなさい」（Ｉヨハネ3：1）。また、キリストは、「あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました」と言われた（ヨハネ17：18）。すなわち、「キリストのからだなる教会のために、キリストの苦しみのなお足りないところを……補」うのである（コロサイ1：24）。キリストに救われた者は、みな、キリストのみ名のもとに、失われた人々のために働くように召されている。イスラエル人は、この働きをおろそかにしたが、今日、キリストの弟子であると公言している者も、おろそかにしてはいないであろうか。{COL 1258.2}

読者よ。あなたは、さ迷い出た者を、何人さがしあてておりに連れもどしたことであろうか。見込みもなく、見栄えもないと思われる人々に背を向けることは、キリストがさがしておられる魂をないがしろにすることであるのを、自覚しておられるだろうか。あなたが、彼らをかえりみないその時こそ、おそらく彼らがあなたの同情を一番必要としている時である。どの礼拝集会の時にも、休息と平安を求める魂がいる。彼らは見たところ、不真面目な生活を送っているようではあるが、聖霊の働きに無感覚でいるわけではない。彼らの中にも、キリストに導かれる人が多くいることであろう。{COL 1258.3}

もし、道に迷った羊をおりにつれてこないならば、それはそのまま死んでしまう。そのように救いの手がさしのべられないために、滅びてしまう魂がたくさんある。誤りにおちいった人々は、かたくなで無謀とさえ思えるであろう。しかし、彼らにも他の人々と同様の機会が与えられたならば、その人々よりはるかに気高い品性と、世に役立つ大きな才能を持つことができたかもしれない。天使たちは、これらのさ迷う人々をあわれんでいる。天使は泣いているのに、人の目は涙にぬれもせず、心は固く戸を閉ざしてあわれもうともしないのである。{COL 1258.4}

ああ、誘惑や過ちにおちいった人々への真心からの深い同情が、なんと欠けていることであろう。もっともっと自己を捨てて、もっとキリストの精神がほしいものである。{COL 1258.5}

パリサイ人は、キリストのたとえが彼らへの譴責（けんせき）であることを知った。キリストは、主のお働きに対する人々の批判に耳をかすことをせず、彼らが取税人や罪人をおろそかにしていることを譴責なさった。キリストは、彼らが主に対して心を閉じてしまわないように、公然とは彼らをお責めにならなかった。しかし、イエスのたとえは、神が彼らに要求なさる働きであるにもかかわらず、その大切な働きを彼らが怠っていることを彼らに示した。もしも、このイスラエルの指導者たちが真の牧羊者であったなら、彼らは羊飼いの仕事をしたことであろう。彼らは、キリストの愛と憐れみとをあらわし、イエスと一致して、主の働きをしたことであろう。彼らがこうしなかったことは、彼らの信心が偽りであったことを証拠立てだ。{COL 1258.6}

さて、キリストの譴責を拒んだ者は多かったが、キ 1259リストの言葉によって罪を悟った者もあった。キリストが昇天なさったあとで、このような人々に聖霊が下った。そして、彼らは弟子たちと1つになって、道に迷った羊のたとえの中で教えられたこの大切な仕事にあたったのである。{COL 1258.7}

なくした銀貨

キリストは、迷った羊のたとえを語られたあとで、もう1つのたとえを語って言われた。「また、ある女が銀貨10枚を持っていて、もしその1枚をなくしたとすれば、彼女はあかりをつけて家中を掃き、それを見つけるまでは注意深く捜さないであろうか。」{COL 1259.1}

パレスチナの貧しい人の家は、大抵一部屋だけで、普通は窓もない暗い部屋であった。それに、部屋の中を掃くことはまれであったので、床に落ちた銀貨は、すぐにちりやほ

こりの中に埋まってしまって、それを見つけるためには、昼間でも、あかりをつけて、よく気をつけて掃かなければならなかった。 {COL 1259.2}

花嫁の結婚の時の持参金は、普通、何枚かの銀貨になっていて、彼女は、それを何よりも大切な宝としてしまっておいて、自分の娘に譲ることにしていた。もしも、その中の1枚でも紛失すると、たいへんな災難とみなされた。また、なくなったものが発見されたときの喜びも非常なもので、近所の女たちもともに喜ぶのであった。 {COL 1259.3}

「見つけたなら、女友だちや近所の女たちを呼び集めて、『わたしと一緒に喜んでください。なくした銀貨が見つかりましたから』と言うであろう。よく聞きなさい。それと同じように、罪人がひとりでも悔い改めるなら、神の御使たちの前でよろこびがあるであろう。」 {COL 1259.4}

このたとえも、前のと同じように、何かがなくなったけれどもさがしにさがした末に、発見することができて大きな喜びがあったという。しかし、この2つのたとえは異なった種類の人々をあらわしている。道に迷った羊は、迷っていることを知っている。羊は羊飼いとおりを離れて、自分で元のところへもどれないでいる。これは、自分が神から離れて、行きづまり、恥辱とはげしい誘惑の中にいることを自覚する人々を代表している。ところがなくなった銀貨は、罪過と罪との中に失われた状態にありながら、それを自覚していない人々をあらわしている。彼らは、神から離れているが、それを知らない。彼らの魂は危険にさらされているのに、それに気づかず、全く無関心でいる。キリストは、神のご要求に無関心な人々でさえ、神は憐れみ深くお愛しになることを、このたとえの中で教えておられる。わたしたちは、彼らをさがし出して、神につれもどさなければならない。 {COL 1259.5}

羊は、おりからさ迷い出て行った。それは、荒野かまたは山で道に迷ったのである。銀貨は、家の中でなくなった。すぐ近いところにありながら、よく捜さなければ見つけることができなかった。 {COL 1259.6}

このたとえは、家庭の者に対する教訓である。家庭では、よく家族の者の魂がおろそかに扱われがちである。その中には、神から遠ざかっている者もあろう。ところが、こうして神からゆだねられた賜物の1人でさえ、家族の中で見失うことがないように気をつけている者はごくまれである。 {COL 1259.7}

銀貨は、ちりやほこりの中に落ちていても、銀貨であることに変わりはない。銀貨には価値があるから、さがすのである。そのように、どんなに堕落していても、人の魂は、神のみ前には尊い価値がある。貨幣には、統治者の像と記号が刻まれているように、人類には、創造の始めから、神のかたちと記号とが刻まれていた。そして、今こそ罪の影響によって神のかたちが損なわれて薄らいだとはいえ、まだその記号がかすかながらすべての魂に残っている。神は、魂を回復して、神ご自身のかたちを再び魂に押して、正しく、聖なるものにしようと望んでおられる。 {COL 1259.8}

たとえの中の女は、なくなった銀貨をけんめいになってさがした。彼女は、あかりをつけて、家を掃き清めた。銀貨を捜すのにじゃまになるものは、残らず取り除いた。ただ1枚だけがなくなったのであるが、彼女は発見するまで捜すことをやめなかった。そのように家庭の中に、もしも1人でも神から離れた者があるならば、その回復のために全力を尽くさなければならない。ほかの家族の者もみな、深く自分を反省して、日常の行為を吟味しなければならない。その魂の悔い改めの妨げになるものがなかったか、彼の取り扱いに過ちがなかったかを考えなければならない。 {COL 1259.9}

もしも家庭の中に1人でも、自分の罪深い状態を自覚しない者があるならば、両親は、それをそのままにしておいてはならない。あかりをつけよう。神の言葉を探り、その光によって家にあるすべての物をよくさぐって、なぜこの子が失われたかをよく考えることにしよう。両親は、自分の心を反省してみて、日常の習慣や行為について考えてみなければならない。子供たちは、神の嗣業であるから、こうした神の財産の取り扱い方の責任を、神の前で問われるのである。 {COL 1260.1}

遠い外国の伝道地で、働くことを熱望する父親や母親がよくある。また、家庭の外で、クリスチャン活動を活発に行っていながら、自分たちの子供には、救い主と救い主の愛について、何も教えない親たちが多い。子供たちをキリストに導くという仕事は、牧師や安息日学校の教師にゆだねている親たちが多い。しかし、それでは、神からゆだねられた責任をおろそかにしていることになる。子供たちをクリスチャンにするために教育と訓練を与えることは、親たちが神に対して行うことができる最高の奉仕なのである。忍耐強く励んで、一生の間たゆまず努力しなければならない。この任務を怠ることによってわたしたちは不忠実な管理人になってしまう。このような怠慢に対して、どんな弁解も神はお許しにならない。{COL 1260.2}

とはいうものの、このような怠慢におちいっていた者も失望してはならない。銀貨をなくした女は発見するまで捜した。そのように、愛と信仰と祈りによって、親たちは家族の者のために働き、ついには、喜びつつ神のところへきて、「見よ、わたしと、主のわたしに賜わった子たち」と言うことができるようにしよう（イザヤ8：18）。{COL 1260.3}

これこそ、真の家庭の伝道であって、伝道の働きをされる者も、する者も共に大きな利益を受ける。わたしたちは、家族の者のために忠実に働いて初めて、教会の中の仕事をする資格が与えられる。もし忠実であれば、わたしたちも、彼らと共に永遠に生きることができる。わたしたちは、家族の者に対していだいているのと同じ関心を、キリストにある兄弟姉妹に対して示さなければならない。{COL 1260.4}

そして、神は、わたしたちがこのような経験によって、更に広く他の人々のために働くようになろことをご計画になった。わたしたちの同情心が範囲を広め、愛が増加するにつれて、どこにでも、なすべき仕事を見いだすことができるようになる。神の一大人類家族は、世界的なものであるから、だれ1人見過ごしてはならない。{COL 1260.5}

わたしたちはどこにいようと、そこには、失われた銀貨が発見されるのを待っている。わたしたちは、それを捜しているであろうか。わたしたちは、毎日、宗教に無関心な人々に会っている。彼らと会話をかわしたり、お互いに行き来したりしている。そういう時わたしたちは、彼らの霊的幸福に関心をもっていることを示しているであろうか。キリストを罪からの救い主として彼らに紹介しているであろうか。わたしたち自身の心がキリストの愛に熱していて、その愛のことを人々に語るであろうか。もしそうしていないとするならば、やがて神のみ座の前に立つ時に、これらの魂、しかも永遠に失われた魂と、どうして顔を合わせることができよう。 {COL 1260.6}

いったい、だれが1人の魂の価値を評価できるであろうか。もしその価値を知りたいと思うならば、ゲッセマネへ行って、血の大きなしずくのような汗を流して苦しまれたキリストと、苦悩を共にするとよい。そして、十字架にかけられた救い主を見ることである。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」というあの絶望の叫びを聞き、傷ついた頭、刺された脇、さかれた足を見なければならない。そして、キリストは、ここで、すべてのものを失う危険を冒しておられたことを忘れてはならない。わたしたちの贖罪のために、天そのものが危機におちいったのである。十字架の下に立って、キリストはただ1人の罪人のためでさえ、その命をおすてになったのだということを考える時、初めて、1人の魂の価値を正しく 1261評価することができる。 {COL 1260.7}

もし、あなたがキリストと親しく交わっていれば、どの人にも価値があることを認めるようになる。キリストがあなたに対していだかれたと同じ深い愛を、あなたも他の人々にもいだくようになる。そうしてこそ初めて、キリストが身代わりになってなくなられた人々を追いやるのではなくて、引き寄せることができ、反感をいだかせるのではなくて、引き付けることができる。もし、キリストが個人的に努力されなかったならば、だれ1人として、神に引きもどされる者はなかったことであろう。 {COL 1261.1}

わたしたちが、魂を救うことができるのも、この個人的な働きによってである。このような滅びゆく人々を見る時に、何知らぬ顔をして、じっと安んじているわけにはいかない。彼らの罪が大きく、みじめさが深刻であればあるだけ、彼らを回復させようとする努力も熱烈で、愛のこもったものとなることであろう。悩み苦しむ者や、神に罪を犯している者、または、罪の重荷に圧倒されている人々に何をすべきかがわかるであろう。またあなたは、彼らに心から同情することができて、援助の手をさしのべるようになることであろう。あなたの信仰と愛の腕の中に彼らをかかえてキリストのみもとに彼らを連れてくることであろう。そして、彼らを温かく見守って励まし、彼らに対するあなたの同情と信頼を示して、彼らがかたく立って動かされることがないようにすることであろう。 {COL 1261.2}

このような働きには、天のすべての使いたちが常に協力しようとしている。全天の資源は、失われた者を救おうとする人々が、いつでも自由に使用できるように提供されている。天の使いたちは、どんなに軽率で、どんなにがんこな人にでも、あなたが近づくことができるように助けを与える。そして、道に迷った者が1人でも神のところに連れもどされると、天全体が歓喜の声をあげる。セラピムやケルビムは、金の立琴をかきならし、人の子らに対する神の憐れみといつくしみに対して、神と小羊をほめたたえるのである。 {COL 1261.3}

第16章　本心に立ちかえった青年

本章は、ルカ15：11～32に基づく {COL 1261.4}

道に迷った羊、なくなった銀貨、そしてこの放蕩息子のたとえは、神からさ迷い出た者に対する神の憐れみ深い愛を明らかに示している。彼らは、神にそむいたけれども、神は彼らをその悲惨な状態のままにしておかれない。敵の巧みな誘惑にさらされているすべての者に対して、神は、情けと憐れみに満ちておられる。 {COL 1261.5}

放蕩息子のたとえでは、かつては天の父の愛を知っていたにもかかわらず、敵の誘惑のとりこになっている者に対する神のお取り扱いが示されている。 {COL 1261.6}

「ある人に、ふたりのむすこがあった。ところが、弟が父親に言った、『父よ、あなたの財産のうちでわたしがいただく分をください』。そこで父はその身代をふたりに分けてやった。それから幾日もたたないうちに、弟は自分のものを全部とりまとめて遠い所へ行」った。 {COL 1261.7}

この弟は、父の家の束縛をきらった。彼は、自分の自由が制限されているものと思った。彼は、自分への父親の愛情と配慮を誤解した。そして、彼は自分のかってな生活をしようと決心した。 {COL 1261.8}

この青年は、父に尽くすべきことがあるのを認めようともせず、感謝もあらわさない。ところが、父の財産を受けるべき子としての特権は、主張する。彼は父の死後に与えられるべき遺産を、今手にすることを欲した。彼は、現在の快楽に熱中して、将来のことを考えなかった。 {COL 1261.9}

彼は、父からの財産を譲り受けると、父の家から離れた「遠い所」へ行った。金は豊富にあるし、思うままに行動する自由もあるので、自分のかねての念願がかなったと思って、得意になっていた。そこには、だれ1人として、それはあなたのためにならないから

、してはいけないとか、これは正しいことだから、しなさ 1262いとか言う人はいなかった。彼を罪の深みに沈ませる悪友もいて、彼は、ついに「放蕩に身を持ちくずして財産を使い果した。」 {COL 1261.1]0}

聖書に、「自ら知者と称しながら、愚かにな」る人々のことが書いてある（ローマ1：22）。たしかに、たとえの中の青年は、ちょうど、そのような人であった。彼が自分かってに父親から要求した財産は、すべて遊女たちに費やしてしまった。彼の青年時代という宝も浪費してしまった。人生の尊い年月、知性の力、青年時代の希望に満ちた幻、霊的向上心などのすべてが、欲望の炎の中で燃やしつくされたのである。 {COL 1262.1}

そこへひどいききんが起こって、彼は食べることにも困り始め、その地方のある人に身を寄せたところ、その人は、彼を畑にやって豚を飼わせた。ユダヤ人にとって、これは、最も卑しく下等な職業であった。自分の自由を誇っていた青年は、今や、自分が奴隷になってしまったことを悟った。彼は「自分の罪のなわにつながれる」最悪のどれいであった（箴言5：22）。彼の心を夢中にさせていた世の華麗さは、消え去って、鎖の重さを身に感じるようになった。放蕩息子は、ききんにおそわれた外国の畑の中にすわって、豚のほかにはただ1人の友もなく、豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいと思うほどになった。彼の全盛時代に彼の周りに群がって散々飲み食いした遊び友だちで、彼を助けに来た者は1人もなかった。彼の宴楽の喜びは、今は、もうどこへ行ったのか。彼は良心の声を静め、知覚をまひさせて、はかない幸福感に酔っていた。しかし、彼は、すでに金も使い果たし、食べるものもなく、誇りも傷つけられてしまった。道徳性は萎縮し、意志は薄弱になり、高尚な感情はどこかへ消え去ったようである。これでは、全く人間として最もみじめな者といわなければならない。 {COL 1262.2}

これは、また、なんとよく罪人の状態を描写していることであろう。神に愛され、祝福にとりかこまれていながら、放縦と罪深い快楽に心を奪われた罪人は、なんとかして神から離れ去ることを願う。感謝の心を失った息子のように、当然受けるべき権利として、

神の祝福を受けることを主張する。そして、神の恵みを当然のことのように受けて、感謝もしなければ、愛の奉仕もしない。カインが住む所を求めて、神の前を去っていったように、また放蕩息子が、「遠い所」へさまよっていったように、罪人は、神を忘れてほかに幸福を求めるのである（ローマ1：28）。{COL 1262.3}

外観がどんなものであろうと、自己を中心にしている人の生活は、浪費である。だれでも神を離れて生きようとするならば、自分の財産を浪費するのである。すなわち貴重な年月を浪費し、思いと心と魂の力を浪費し、自分を永遠の破産者にしようとしている。自分を満足させるために神から離れていく者は、富の奴隷である。天使との交わりのために創造された人の心が、この世的で肉欲的なことのために用いられるまでに堕落してしまった。自己のために生きることは、ついに、こうした結末となるのである。{COL 1262.4}

もしも、あなたがこのような生活を選んだなら、パンでないもののために金を費やし、満足を与えないもののために労しているのである。やがて、自分の堕落した状態を認める時がやってくる。遠国でただ1人、自分のみじめさを感じ、絶望の果て、「わたしはなんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか」と叫ぶようになる（ローマ7：24）。預言者は、「おおよそ人を頼みとし肉なる者を自分の腕とし、その心が主を離れている人は、のろわれる。彼は荒野に育つ小さい木のように、何も良いことの来るのを見ない。荒野の、干上がった所に住み、人の住まない塩地にいる」と言ったが、これは万人の認める真理をあらわした言葉である（エレミヤ17：5、6）。神は、「悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さる」が、太陽や雨を受けないようにする力が人にはある（マタイ5：45）。そのように、義の太陽が輝き、恵みの雨がすべての人々の上に豊かに注がれているのに、神から離れて、「荒野の、干上がった所に住」むこともできる。{COL 1262.5}

神の愛は、今でも神から離れて生きる人の上に注がれ、神はなんとかしてその人を、父の家へ引き返そうと働きかけてくださる。放蕩息子は悲惨な状態に神の愛は、今でも神から離れて生きる人の上に注がれ、神はなんとかしてその人を、父の家へ引き返そうと働きかけてくださる。放蕩息子は悲惨な状態におちいって初めて、「本心に立ちかえっ」た。今まで彼を捕らえていたサタンの欺まんの力から解放された。彼は、この苦しみが自分自身の愚かさの結果であることをさとり、「父のところには食物のあり余っている雇人が大ぜいいるのに、わたしはここで飢えて死のうとしている。立って、父のところへ帰」ろうと言った。放蕩息子は、実にあわれむべき状態であったけれども、父の愛を確信して望みをいだくことができた。放蕩息子を家へ引きつけたのは、この愛であった。そのように、神の愛の確証が、罪人を神に帰らせることになるのである。 {COL 1263.6}

「神の慈愛があなたを悔改めに導く」のである（ローマ2：4）。神の愛の憐れみとなさけという黄金の鎖が、危険におちいったすべての魂にのべられている。「わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた」と主は言われるのである（エレミヤ31：3）。 {COL 1263.1}

放蕩息子は、自分の罪を告白しようと決心した。父のところへ行って、「わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません」と言おうとする。しかし、父親の愛に対する彼の認識が乏しかったことが、「どうぞ、雇人のひとり同様にしてください」という言葉にあらわれている。 {COL 1263.2}

青年は、豚の群れと豆がらをあとにして、家路に向かう。弱り果ててふるえ、飢えのために気も遠くなりながら、彼は、ひたすら家路を急いでいく。今は彼のぼろをおおいかくすものは何もないが、あまりにもみじめなので、恥も外聞もあったものではない。かつては、子であったところへ、召し使いの地位を求めるために急いでいくのである。 {COL 1263.3}

昔、意気揚々となんの深い考えもなく父の家を出た青年は、それが父の心にどんな痛みと寂しさを残したかを夢想だにしなかった。非道な仲間たちと踊ったり、騒いだりしていた時に、それが自分の家庭にどんな暗い影を投げたかは考えてもみなかった。ところが、今、疲労のため痛む足どりで、彼が家路をたどる時にも、彼の帰りを待ちわびている人があるのを彼は知らないのである。放蕩息子が、「まだ遠く離れていたのに」、父は彼の姿を認めた。愛は、すばやく発見する。長年の罪の生活のために変わり果てた姿であっても、父の目から子を隠すことはできなかった。父は「哀れに思って走り寄り、その首を」しっかりと温かく抱きしめたのである。 {COL 1263.4}

父は、他人が軽べつの目で、ぼろをまとった息子のあわれな姿をあざわらうことを許さない。父は、自分の肩から、巾広いりっぱな上衣をぬいで、息子のやつれた体にかけてやる。すると青年は、悔い改めの涙にむせんで、「父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかっても、罪を犯しました。もうあなたのむすこと呼ばれる資格はありません」と言ったが、父は息子をしっかりと抱いて、家へ連れて入った。召し使いの地位を求める言葉をいう機会はなかった。彼は、息子なのである。家の最上のものをもって優遇しなければならない人である。そして、召し使いや女中たちが尊敬して仕えなければならない人なのである。 {COL 1263.5}

父は召し使いたちに言いつけた、「『さあ、早く、最上の着物を出してきてこの子に着せ、指輪を手にはめ、はきものを足にはかせなさい。また、肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。食べて楽しもうではないか。このむすこが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから。』それから祝宴がはじまった。」 {COL 1263.6}

放蕩息子は、かつての落ちつかない若者だった時には、父親を厳格で恐ろしい人のように考えていた。ところが今は、その考えがなんと変わったことであろう。そのように、サタンに欺かれている者は、神を厳格苛酷な方のように思う。神は、罪人を厳しく見張っていて、責める方であって、真に正当な理由がない限り、助けを与えようともしなければ

、迎えいれてくださらないものと、彼らは考える。また、彼らは、神の律法を、人間の幸福を制限するもの、重苦しいくびきと見なして、それから逃れようと望む。しかしながら、キリストの愛によって、目が開かれた者は、神が憐れみ深いお方であることを悟る。神は横暴で残酷な方ではなくて、悔いて帰る子を、だきかかえようとして待っ 1264ている父のような方であると知ることができる。罪人は、詩篇記者とともに、「父がその子供をあわれむように、主はおのれを恐れる者をあわれまれる」と言うようになる（詩篇103：13）。 {COL 1263.7}

このたとえでは、放蕩息子の愚かな行いに対しては、なんの非難や侮辱の言葉も言われていない。息子は、過去が許され、忘れられ、永久に消し去られたことを感じる。同様に神は、罪人に対してこう言われる。「わたしはあなたのとがを雲のように吹き払い、あなたの罪を霧のように消した」と（イザヤ44：22）。「わたしは彼らの不義をゆるし、もはやその罪を思わない」（エレミヤ31：34）。「悪しき者はその道を捨て、正しからぬ人はその思いを捨てて、主に帰れ。そうすれば、主は彼にあわれみを施ざれる。われわれの神に帰れ、主は豊かにゆるしを与えられる」（イザヤ55：7）。「主は言われる、その日その時には、イスラエルのとがを探しても見当らず、ユダの罪を探してもない」（エレミヤ50：20）。 {COL 1264.1}

これは神が悔い改める罪人を快く受け入れてくださることの、なんと尊い確証であろう。読者よ。あなたは、自分勝手な道を選んで来たであろうか。神からさ迷い出ていったことであろうか。あなたは、罪の実を食べようとすると、それがあなたのくちびるの上で灰にかわってしまうことに気づかれたであろうか。今や、財産は使い果たし、人生の計画は挫折し、希望も消え、ただ1人、心寂しく座しているであろうか。これまで長くあなたの心に語りかけていたけれども、あなたが一向に耳をかそうとしなかった、まぎれもないあのみ声が、今明瞭に聞こえてくる。「立って去れ、これはあなたがたの休み場所ではない。これは汚れのゆえに滅びる。その滅びは悲惨な滅びだ」（ミカ2：10）。あなたの天

の父の家に帰りなさい。「わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから」と言って、神はあなたを招いておられるのである（イザヤ44：22）。{COL 1264.2}

自分がもっと善良になり、神の前に出るにふさわしい者となるまでは、キリストに近づくべきではないという敵のささやきに耳を傾けてはならない。それまで待っているとすれば、いつまでも主の所に来ることはできない。もし、サタンが、あなたの汚れた衣を指さすならば、「わたしに来る者を決して拒みはしない」というイエスの約束をくりかえしなさい（ヨハネ6：37）。イエス・キリストの血がすべての罪から清めると敵に言いなさい。ダビデの祈りをあなたの祈りとして言いなさい。「ヒソプをもって、わたしを清めてください、わたしは清くなるでしょう。わたしを洗ってください、わたしは雪よりも白くなるでしょう」（詩篇51：7）。{COL 1264.3}

立って、あなたの天の父に帰りなさい。神は、遠くからあなたを迎えてくださる。あなたが悔い改めて、1歩神に向かって進むならば、神は、永遠の愛の腕にあなたをいだこうと走りよられるのである。神の耳は、悔い改めた魂の叫びを聞くために開かれている。人の心が、まず神を求め出したその瞬間を、神は、ご存じである。どのようにためらいがちの祈りであっても、どのようなひそかな涙であっても、どのようなか弱い切なる心の願いであっても、必ず神の霊がそれを迎えに出られるのである。キリストから与えられる恵みは、祈りが口から出て、心の願いが述べられるその以前にすでに、人の心に働いている恵みに合流する。{COL 1264.4}

天の父は、罪に汚れた衣をあなたから脱がせてくださる。ゼカリヤの美しい比喩的預言の中で、大祭司ヨシュアが汚れた衣を着て、主の使いの前に立ち、罪人を代表している。そして、主からみ言葉があった。「『彼の汚れた衣を脱がせなさい』。またヨシユアに向かって言った、『見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう。』……そこで清い帽子を頭にかぶらせ、衣を彼に着せた」（ゼカリヤ3：4、5）。そのように神は、あなたに「救いの衣」を着せ、「義の上衣」をまとわせてくださる（イザヤ

61：10）。「たとい彼らは羊のおりの中にとどまるとも。はとの翼は、しろがねをもっておおわれ、その羽はきらめくこがねをもっておおわれる」（詩篇68：13）。{COL 1264.5}

神は、あなたを祝宴の家に連れて行き、あなたの上に愛の旗をひるがえしてくださる（雅歌2：4）。「あなたがもし、わたしの道に歩」むならば、「ここに立っている者どもの中に行き来することを得させる」神のみ座のまわりの聖天使たちの間にさえ立たせると、神は言われるのである（ゼカリヤ3：7）。{COL 1264.6}

「花婿が花嫁を喜ぶように、あなたの神はあなたを喜ばれる」（イザヤ62：5）。「彼はあなたのために喜び楽しみ、その愛によってあなたを新にし、祭の日のようにあなたのために喜び呼ばわられる」（ゼパニヤ3：17）。こうして天と地は、天の父の喜びの歌に声を合わせる。「このむすこが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから。」{COL 1265.1}

救い主の語られたたとえのこの所までには、喜ばしい光景の調和を乱す不調和音は、どこにも見られない。しかし、キリストは、ここでもう1つの分子について語られた。放蕩息子が帰って来た時に、「兄は畑にいたが、帰ってきて家に近づくと、音楽や踊りの音が聞えたので、ひとりの僕を呼んで、『いったい、これは何事なのか』と尋ねた。僕は答えた、『あなたのご兄弟がお帰りになりました。無事に迎えたというので、父上が肥えた子牛をほふらせなさったのです』。兄はおこって家にはいろうとしなかった。」この兄は父とともに失われた者のことを心配し、その帰りを待っていたのではなかった。それだから、迷い出た者が帰って来ても、父とともに喜ばないのである。{COL 1265.2}

楽しい音も、彼の心になんのうれしさも感じさせない。1人の僕に祝宴の理由を聞いたが、その答えを聞いて、彼はねたましく思った。そしていなくなっていた兄弟を家に入って歓迎しようとしないのである。放蕩息子に示された父の愛を、自分に対する侮辱と考えるのである。{COL 1265.3}

父が出て来て兄をいさめる時に、彼の心の高慢さと悪意に満ちていることがあらわされる。彼は、自分の父の家の生活を無報酬の労働であると言い、それを、今帰った息子に小ざれた愛と、卑劣にも比較する。彼は、息子としてではなくて、召し使いとして働いて来たことを明らかにする。父とともに住むというつきぬ喜びにひたっていなければならないその時に、彼の心は、その慎重な生活から得られる利益のことを考えていた。彼の言うことによれば、罪の快楽を見合わせたのもそのためであった。もし、この弟が父からこのような賜物を受けるとするならば、自分は不当の扱いをされたのだと兄は考える。彼は、弟が親切にされているのを快く思わない。また、もし自分が父の立場にあれば、放蕩息子を家に入れたりしないことを明らかに示す。兄は帰って来た弟を自分の弟として認めないばかりか、冷淡に弟をさして、「あなたの子」というのである。 {COL 1265.4}

それでも、父はやさしく彼を扱って言う、「子よ、あなたはいつもわたしと一緒にいるし、またわたしのものは全部あなたのものだ」。あなたの兄弟がさ迷い歩いていたこの年月の間、あなたは、わたしと交わる特権をもっていたではないか。 {COL 1265.5}

父の家では子供たちの幸福のためになるものであれば、なんでもおしみなく与えられていた。子は、賜物とか、報酬とかを考える必要はなかった。「わたしのものは全部あなたのものだ。」あなたはただわたしの愛を信じ、そして、おしみなく与えられる賜物を受ければよいのである。 {COL 1265.6}

1人の息子が、父の愛を認めないで、しばらくの間、家から離れていた。ところが、その息子が今帰って来た。そして、喜びの潮がすべての心配事を洗い流してしまう。「このあなたの弟は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだ。」 {COL 1265.7}

兄は、自分のみにくい忘恩の精神に気づいたことであろうか。弟は、どんなに悪いことをしたとしても、なお、自分の弟であることに変わりがないことを悟ったであろうか。兄は、そのねたみとがんこさを悔い改めたであろうか。それについて、キリストは何も言

われなかった。なぜなら、このたとえは、なお現実に演じられていたからである。そして、その結末は、聴衆のこれからの決定いかんにかかっていたからである。 {COL 1265.8}

この兄は、キリストの時代の悔い改めないユダヤ人を代表していた。そして、また、いわゆる取税人や罪人を軽べつするところの各時代のパリサイ人をもさしている。彼らは、自分たちが、ひどい罪におちいっていないと言って、自分を義とする精神に満ちている。キリストは、これらのとがめ立てする人々に対して、彼らの側に立ってお語りになった。たとえの中の兄のように、彼らは、神からの特別の特権にあずかっていた。彼らは、神の家の子であるととなえてはいたが、実は雇い人の精神をもっていた。彼らは、愛の動機からではなくて、報酬を望んで働いていた。神は、彼らの目には、厳しい主人と思えた。彼らは、キリストが取税人や罪人を招いて、恵みの賜物を惜しみなくお与えになるのを見た。ところがこれは、ラビたちが、難行苦行によってのみ与えられることを願っていた賜物であったので、彼らはここでつまずいた。放蕩息子が帰って来たということで、天の父は喜びに満ちておられるのに、彼らの心には、ただしっとの思いが起こるばかりであった。 {COL 1265.9}

たとえの中で、父が兄をいさめたことは、パリサイ人に対する天のやさしい訴えの言葉であった。「わたしのものは全部あなたのものだ。」それは報酬ではなくて、賜物である。それは、放蕩息子と同じようにしてもらえるものである。わたしたちもなんの功績もなく、天の父の愛の賜物としてのみ、受けることができるのである。 {COL 1266.1}

自分を義とすることによって人は、神を誤り伝えるばかりでなくて、兄弟を冷たく批判するようになる。利己的でしっと深い兄は、ことごとに弟に目をつけて、その行動を批判し、ほんの些細なことまで非難した。兄は、あらゆるあらさがしをして、責めとがめた。 {COL 1266.2}

こうして、兄は彼が許し得ないことを正当化しようと努めた。今日も同じことをしている者がたくさんいる。魂が、人生における最初の誘惑の大水の中で苦闘しているのを、彼らは、かたくなな態度でかたわらからながめて、つぶやき責める。彼らは、神の子であるととなえても、サタンの精神をその行動にあらわしている。これらの兄弟を訴える人々は、兄弟に対する彼らの態度によって、神が彼らに祝福を与え得ないところに自分たちをおくのである。{COL 1266.3}

「わたしは何をもって主のみ前に行き、高き神を拝すべきか。燔祭および当歳の子牛をもってそのみ前に行くべきか。主は数千の雄羊、万流の油を喜ばれるだろうか」と絶えずたずねている人が多い。「人よ、彼はさきによい事のなんであるかをあなたに告げられた。主のあなたに求められることは、ただ公義をおこない、いつくしみを愛し、へりくだってあなたの神と共に歩むことではないか」（ミカ6：6～8）。{COL 1266.4}

「悪のなわをほどき、くびきのひもを解き、しえたげられる者を放ち去らせ、すべてのくびきを折る、……自分の骨肉に身を隠さないなど」こそ、神の喜ばれる奉仕なのである（イザヤ58：6、7）。あなたが、自分は、ただ天の父の愛のみによって救われた罪人であることを認めた時に、罪に悩む人々をやさしくあわれむことができる。そして、あわれな人や、悔い改めた人を、ねたんだり、責めたりしなくなる。利己という氷が、あなたの心からとけ去って、初めて、神の心と1つになり、失われた者の救いを神と共に喜ぶようになるのである。{COL 1266.5}

確かに、あなたは、自分が、神の子であると表明している。もしそれが事実であるなら、「死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった」のは、「あなたの弟」である。神が、彼を子としてお認めになるのであるから、彼はあなたと最も密接な関係によって結ばれている。このような関係を拒むならば、それはあなたが神の家族の子ではなくて、雇い人であることを示しているのである。{COL 1266.6}

たとえ、あなたが失われた者を迎えなくても、その喜びの宴は続けられる。そして回復された者は、天の父のそばに座し、天の父の働きにあずかる。多く赦された者は、多く愛するのである。しかし、あなたは、外の暗きに出されるであろう。「愛さない者は、神を知らない。神は愛である」（Ⅰヨハネ4：8）。{COL 1266.7}

第17章 「ことしも、そのままにして置いてください」

本章は、ルカ13：1～9に基づく {COL 1267.1}

キリストは、お教えになった時、審判の警告と恵みの招待とを結合なさった。「人の子が来たのは、人のいのちを滅ぼすためではなく、それを救うためである」と主は言われた（ルカ9：56・詳訳聖書）。「神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである」（ヨハネ3：17）。神が義と審判を行われるのに対して、キリストは、どんな憐れみ深いお働きをなさるものかが、この実を結ばない、いちじくの木のたとえに示されている。 {COL 1267.2}

キリストは、すでに神の国の到来について、人々に警告してこられた。そして、人々の無知と無関心を鋭く譴責された。彼らは、天候を予報する空のしるしは、早く読みとったが、キリストのお働きをはっきり指示した時のしるしは、見分けなかった。 {COL 1267.3}

現代の人々が、自分たちは天の愛顧を受けているもので、叱責の言葉は、人にあてられたものだと決めているように、その当時の人々もそうであった。聴衆は、つい先ごろ、大きな騒ぎを引き起こした事件をイエスに告げた。ユダヤの総督ピラトの取った処置が、人々を怒らせた。エルサレムに民衆の暴動が起こり、ピラトは暴力によってこれを鎮圧しようとした。ある時などは、ピラトの兵卒たちが神殿の境内におしいり、犠牲をほふっていたガリラヤの巡礼者たちを、数人切り殺したことがあった。ユダヤ人は、この災難を、被害者たちの罪に対する天のさばきとみなした。この暴力行為について語った者らも、心ひそかに満足感をいだいてこう言った。自分たちの幸運は、彼らがガリラヤ人よりすぐれていて、ガリラヤ人より多く神の恵みを受けている証拠であると考えた。彼らは、これらの人々が刑罰を受けるのは当然であると疑いもなく考えたから、イエスがこの人々をとがめる言葉を聞くものと期待した。 {COL 1267.4}

キリストの弟子たちは、主の意見を聞くまでは、あえて自分たちの考えを言わなかった。主は、人間が限られた判断力によって、他人の品性を批判し、罰を与えたりすることについて、明らかな教訓をかねてから与えておられた。しかし、彼らは、キリストがこの人々を、他の人よりも罪深いと非難されることを期待した。彼らは、イエスの答えを聞いて、大いに驚いた。{COL 1267.5}

群衆に向きなおって、救い主は、「それらのガリラヤ人が、そのような災難にあったからといって、他のすべてのガリラヤ人以上に罪が深かったと思うのか。あなたがたに言うが、そうではない。あなたがたも悔い改めなければ、みな同じように滅びるであろう」と言われた。これらの驚くべき災難は、彼らの心をへりくだらせるために、また、彼らが罪を悔い改めるようになるために起こった。刑罰の嵐は近づいている。そしてそれはキリストの中にかくれ家を見いだしていないすべての者の上に、まもなく吹き荒れようとしている。{COL 1267.6}

イエスは、弟子たちと群衆に向かって語っておられた時、預言的な眼をもって将来を見、軍勢に包囲されたエルサレムを見ておられた。イエスは選ばれた町に向かって進軍する外国人の足音を聞き、包囲攻撃をうけて幾千の者が死んでゆくのをごらんになった。多くのユダヤ人が、あのガリラヤ人たちと同じように、犠牲をささげている最中に、神殿の庭で殺された。個人にのぞんだ災難は、同様に罪深い国家に対する神よりの警告であった。「あなたがたも悔い改めなければ、みな同じように滅びるであろう」とイエスは仰せになった。彼らのために猶予の日がしばらく与えられていた。彼らが平和をもたらす道を知る時が、彼らのためになお残っていた。{COL 1267.7}

イエスは続いてお語りになった、「ある人が自分のぶどう園にいちじくの木を植えて置いたので、実を捜しにきたが見つからなかった。そこで園丁に言った、『わたしは3年間も実を求めて、このいちじくの木のところにきたのだが、いまだに見あたらない。その

木を切り倒してしまえ。なんのために、土地をむだにふ 1268さがせて置くのか』」。{COL 1267.8}

キリストの聴衆は、キリストの言葉を間違って適用することはできなかった。かつてダビデはイスラエルのことを、エジプトからたずさえ出されたぶどうの木として歌った。イザヤは、「万軍の主のぶどう畑はイスラエルの家であり、主が喜んでそこに植えられた物は、ユダの人々である」と書いていた（イザヤ5：7）。救い主がこられた時代の人々は、主のぶどう園――主の特別な保護と祝福の囲い――の中にあるいちじくの木によって代表されていた。{COL 1268.1}

主の民に対する神の御目的、また、彼らの前途にある輝かしい可能性は、次のように美しく表現されていた。「こうして、彼らは義のかしの木ととなえられ、主がその栄光をあらわすために植えられた者ととなえられる」（イザヤ61：3）。ヤコブは臨終に際し、御霊の霊感のもとに、最愛の子ヨセフについて語った、「ヨセフは実を結ぶ若木、泉のほとりの実を結ぶ若木。その枝は、かきねを越えるであろう。」更に彼は語った、「あなたの父なる神はあなたを助け」、全能者は「上なる天の祝福、下に横たわる淵の祝福……をもって、あなたを恵まれる」（創世記49：22、25）。そのように、神は生命の井戸のそばに、よいぶどうの木としてイスラエルをお植えになった。神はそのぶどう園を「土肥えた小山の上に」つくられた。彼は「それを掘りおこし、石を除き、それに良いぶどうを植え」た（イザヤ5：1、2）。{COL 1268.2}

「良いぶどうの結ぶのを待ち望んだ。ところが結んだものは野ぶどうであった」（イザヤ5：2）。キリストの時代の人々は、彼らの時代の前のユダヤ人よりもはるかに敬虔な態度を示していた。しかし彼らは神のみ霊の美しい徳性にはさらに欠けていた。ヨセフの生涯を香り高いものとし、美しいものとした品性の尊い実は、ユダヤの国の内には見られなかった。{COL 1268.3}

神はみ子をつかわして、実を求められたが、何も見いだされなかった。イスラエルは地をふさぐものであった。それが存在するということはのろいであった。ぶどう園の実りの多い木が、占めるべき場所をそれがふさいでいたからであった。それは神が与えようとされた祝福を、世から奪った。イスラエル人は国々の中に神を誤って表した。彼らは単に無用であるばかりか、明らかにじゃま物であった。彼らの宗教の大半は、人を迷わせ、救うどころかかえって破滅に陥れるものであった。 {COL 1268.4}

たとえの中でぶどう園の園丁は、もし実を結ばないでいるならば、その木は切り倒されるという宣告に、なんの疑問ももっていない。しかし彼は、実を結ばない木に対して主人が関心を持っていることを知っており、自分も同じ関心をもっている。彼にとって木が成長し、多くの実を結ぶのを見ることぐらい大きな喜びは他にない。彼は主人の希望に答えて言った、「ことしも、そのままにして置いてください。そのまわりを掘って肥料をやって見ますから、それで来年実がなりましたら結構です。」 {COL 1268.5}

園丁はこれほど見込みがない木なのに、そのために働くことを拒んでいない。彼はなおいっそう、骨折ってみようとする。環境をもっとも良いものにしてやり、あらゆる心づかいを惜しみなく与えようとする。 {COL 1268.6}

ぶどう園の主人と園丁は、いちじくの木に同じ関心をもっている。同様に父なる神とみ子は、選民を愛する点で一体となっておられた。こうして、キリストは、ますます多くの機会があなたがたに与えられるのだと聴衆に語っておられた。彼らが義の木となり、世界の祝福のために実を結ぶようになるために、神の愛が考え出すことができるすべての方法が実施されるはずであった。 {COL 1268.7}

イエスはたとえの中で、園丁の働きの結果についてはお語りにならなかった。主のお話はここでとぎれた。その結論は、主のみ言葉を聞いた時代の人々の態度にかかっていた。「もしそれでもだめでしたら、切り倒してください」という厳粛な警告が、彼らに対して与えられた。最終的な宣告が発せられるかどうかは、その人々次第であった。怒りの日

は近づいていた。ぶどう園の主人は、すでにイスラエルをおそった災害によって、実を結ばない木の破滅について、憐れみ深い警告を前もって発しておられたのである。 {COL 1268.8}

その警告は、時代をくだって現代のわたしたちにま 1269で響いてくる。ああ、軽はずみな人よ。あなたは主のぶどう園の実を結ばない木ではないだろうか、破滅の宣告が、まもなくあなたに向かって発せられるのではないか。あなたはどれほど長く主の恵みを受けてきたか。どんなに長く主は、あなたが愛をもって応えるのをじっと待ってこられたか。主のぶどう園に植えられ、園丁の注意深い保護を受けて、なんという大きな特権をあなたは受けていることか。どんなにしばしば情け深い福音のおとずれが、あなたの心を震わせたことか。あなたはキリストの名を名乗り、外面的にはキリストの体である教会の一員である。しかしあなたは、偉大な愛のみ心との生きたつながりを自覚していない。主の命の潮は、あなたに流れてない。「みたまの実」である主の品性の美しい徳性は、あなたの中にみられない。 {COL 1268.9}

実を結ばない木は、雨と日光と園丁の世話を受けている。土から栄養を吸収している。しかし実のない大枝が地面を暗くし、実を結ぶべき木がその影のために繁茂できないようになっている。同様にあなたに惜しげなく与えられた神の賜物は、世界になんの祝福をももたらさない。あなたは他の人に与えられるはずの特権を、彼らからうばっているのである。 {COL 1269.1}

あなたはおぼろげながら、自分が地をふさぐものであることを感じている。しかし神は、その大いなる憐れみによって、あなたを切り倒されなかった。神はあなたを冷たく見ておられるのではない。神は顔をそむけてなんの関心をももたず、あなたを滅びるままにしておかれるのではない。神は幾世紀も前にイスラエルに叫んで言われたように、あなたを見て叫ばれる、「エフライムよ、どうして、あなたを捨てることができようか。イスラエルよ、どうしてあなたを渡すことができようか。……わたしはわたしの激しい怒りをあ

らわさない。わたしは再びエフライムを滅ぼさない。わたしは神であって、人ではないからである」（ホセア11：8、9）。憐れみ深い救い主は、あなたについてこう言っておられる。「ことしも、そのままにして置いてください。そのまわりを掘って肥料をやって見ますから。」 {COL 1269.2}

キリストは猶予の期間を長くなさった。また、なんという不屈の愛をもってイスラエルのために働かれたことであろう。十字架上で、「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」とキリストは祈られた（ルカ23：34）。キリストの昇天後、福音はまずエルサレムで宣教された。そこで聖霊が注がれた。そこで最初の福音教会は、よみがえられた救い主の力をあらわした。そこでステパノーー「彼の顔は、ちょうど天使の顔のように見えた」（使徒行伝6：15）ーは証しを立て、その生命をささげた。こうして、天が与えることができるすべてのものが与えられた。「わたしが、ぶどう畑になした事のほかに、何かなすべきことがあるか」とキリストは言われた（イザヤ5：4）。そのように、あなたのためのキリストのご配慮とお働きはおとろえるどころか、かえって強くなっているのである。更に彼はこう言われる、「主なるわたしはこれを守り、常に水をそそぎ、夜も昼も守って、そこなう者のないようにする」（イザヤ27：3）。 {COL 1269.3}

「実がなりましたら結構です。もしそれてもだめでしたら。」ーー {COL 1269.4}

神の力に応答しないでいると心はかたくなになって聖霊の感化にもはや感じなくなってしまう。その時、次の言葉が語られるのである、「その木を切り倒してしまえ。なんのために、土地をむだにふさがせて置くのか」。 {COL 1269.5}

今日、神はあなたを招いておられる。「イスラエルよ、あなたの神、主に帰れ。……わたしは彼らのそむきをいやし、喜んでこれを愛する。……わたしはイスラエルに対しては露のようになる。彼はゆりのように花咲き、ポプラのように根を張り、……彼らは帰っ

てきて、わが陰に住み、園のように栄え、ぶどうの木のように花咲き、……あなたはわたしから実を得る」（ホセア14：1～8）。 {COL 1269.6}

第18章　道やかきねのあたりから招かれた客

本章は、ルカ14：1、12～24に基づく {COL 1270.1}

救い主は、あるパリサイ人の宴会の客となっておられた。救い主は貧しい人の招待も、金持ちの招待も同様にお受けになった。そしてその場その場の光景を、真理に結びつけてお教えになるのが常であった。ユダヤ人の間では、国家的宗教的な祝祭日には聖なる祝宴がもよおされた。彼らにとってそれは永遠の命の賜物の象徴であった。大宴会が開かれて、そこに、自分たちはアブラハム、イサク、ヤコブと共に座し、異邦人は外に立って、物ほしそうな目つきでながめているというような話を、彼らは好んでしたものであった。キリストは今、大宴会のたとえによって、ご自身が与えようと望んでおられる警告と教訓をお教えになった。ユダヤ人は、現世と来世の両方の神の賜物を、自分たちだけで独占しようと考えた。彼らは、異邦人に対する神の憐れみを否定していた。そのような時にキリストは、神の国の招きと、憐れみの招待を拒んでいるのは、実に彼らであることをお示しになった。彼らが軽んじた招待は、彼らが軽べつしていた者たち、重い皮膚病にかかった人をさけるかのようにいみきらっていた者たちに与えられることを、イエスはお示しになった。 {COL 1270.2}

このパリサイ人は、宴会に客を選ぶにあたって、自分の利己的な関心を念頭においていた。そこでキリストは彼に言われた、「午餐または晩餐の席を設ける場合には、友人、兄弟、親族、金持の隣り人などは呼ばぬがよい。恐らく彼らもあなたを招きかえし、それであなたは返礼を受けることになるから。むしろ、宴会を催す場合には、貧しい人、障害のある人、足の不自由な人、盲人などを招くがよい、そうすれば、彼らは返礼ができないから、あなたはさいわいになるであろう。正しい人々の復活の際にはあなたは報いられるであろう。」 {COL 1270.3}

キリストは、かつてモーセによってイスラエルに与えられた教えを、ここにくりかえしておられる。彼らの宴会の時には、「他国人と、孤児と、寡婦を呼んで、それを食べさせ、満足させなければならない」と主はお命じになった（申命記14：29）。{COL 1270.4}

こうした集会は、イスラエル人に実物教訓となるべきであった。人々は、このように真の親切の喜びを教えられて、その1年の間、親しい人に先たたれた者や、貧しい者のために世話をすべきであった。また、これらの宴会には広い教訓が含まれていた。イスラエルに与えられた霊的祝福は、彼らのためだけではなかった。神は、彼らが世に分け与えることができるように、彼らに命のパンをお与えになったのである。{COL 1270.5}

彼らはこの働きをなしとげなかった。キリストの言葉は彼らの我欲に対する譴責であった。パリサイ人はキリストの言葉を不快に思った。彼らの1人は、話題を他に向けようとして、信心深げに「神の国で食事をする人は、さいわいです」と言った。この男は。神の国に確実に入れるという、大きな確信をもって語った。彼の態度は、救われるための条件を満たさないでいて、キリストによって救われたと喜ぶ者の態度と同じであった。彼の精神は、「わたしは義人のように死に、わたしの終わりは彼らの終りのようでありたい」と祈った時のバラムの心と同じであった（民数記23：10）。このパリサイ人は、自分が天にふさわしいかどうかは考えないで、自分の望んでいる天での楽しみだけを考えていた。彼の言葉は宴会の客の心を彼らの実際の義務という主題からそらそうとする意図からでたものであった。彼は、現在の生活を素通りして、はるかかなたの義人の復活の時のことを考えさせようとしたのである。{COL 1270.6}

キリストはうわべを装っている名の心をお読みになった。そして彼に目を留め、彼らが今もっている特権の性質と価値をお示しになった。主は将来の祝福にあずかるためには、今この時に、彼らがなさなければならないことがあることをお示しになった。{COL 1270.7}

「ある人が盛大な晩餐会を催して、大ぜいの人を招いた」と主は語られた。宴会の時が来たので、主人は招いた客に僕をつかわして、「さあ、おいでください。もう準備ができましたから」と2度目の伝言を言わせた。ところが不思議なことにみな無関心であった。「みんな一様に断りはじめた。最初の人は、『わたしは土地を買いましたので、行って見なければなりません。どうぞ、おゆるしください』と言った。ほかの人は、『わたしは5対の牛を買いましたので、それをしらべに行くところです。どうぞ、おゆるしください』、もうひとりの人は、『わたしは妻をめとりましたので、参ることができません』と言った。」 {COL 1270.8}

言いわけをした者のうち、だれ1人として実際にその必要があってそう言ったのではなかった。土地を「行って見なければなりません」と言った男は、それをすでに買っていたのである。彼が早く行ってそれを見たいということは、彼の関心が買ったものにすっかり奪われていたということのためである。牛も同様に購入済みであった。それを調べるというのは、買った当人の興味を満足させるにすぎないことであった。第三の言いわけは理由らしいものさえない。招かれた客が妻をめとったという事実は、宴会に出ることを少しもさまたげるものではない。彼の妻も同様に歓迎されるにちがいないのである。しかし彼は、自分の楽しみの計画をもっていた。そして彼にとってはその方が、出席いたしますと言った宴会よりもっと望ましいものであった。彼は、その主人の宴会よりは、他の社交のほうが楽しいことを知っていた。彼は断りを言わず、断りの礼を尽くす風さえしなかった。「わたしはできません」という言葉は、「わたしは行こうと思っていない」という本当の気持ちのおおいでしかなかった。 {COL 1271.1}

口実は、皆心が他のことに奪われていたことを示す。招かれた客は、他の興味に心が奪われて夢中であった。彼らは、行きますと約束した招待を破棄して、彼らの無関心によって、気高い主人を侮辱した。 {COL 1271.2}

キリストは大宴会のたとえによって、福音が提供する祝福を例示された。ごちそうとはキリストご自身にほかならない。彼は天から下ってきたパンである。彼から救いの川が流れでるのである。主の使者たちは、救い主の来臨をユダヤ人にのべ伝えた。彼らは「世の罪を取り除く神の小羊」としてキリストを示した（ヨハネ1：29）。神はお備えになった宴会において、天が与え得る最大の賜物――見積もることもできない賜物を彼らに提供された。神の愛は大宴会をもうけ、くちない富を供給された。キリストは、「それを（天から下ってきた生きたパンを）食べる者はいつまでも生きるであろう」と仰せになった（ヨハネ6：51）。{COL 1271.3}

しかし福音の宴会の招待を受けるためには、まずキリストとその義を受けるという1つの日的を第1にして、世俗的関心をその次にしなければならない。神は人間のためにすべてをお与えになった。であるから、神は神のための奉仕を、地上のどんな利己的な心づかいよりも先にすることを人にお求めになる。神は二分された心をお受けにならない。この世の愛情に没頭している心を、神にささげることはできない。{COL 1271.4}

この教訓はすべての時代のためである。わたしたちは、神の小羊が行かれるところには、どこへでも従うべきである。主の導きを選び、主の友となることを、世の友の交わり以上に大切にしなければならない。キリストは、「わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりもむすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない」と仰せになった（マタイ10：37）。{COL 1271.5}

キリストの時代には多くの者は、家庭の食卓で日ごとのパンをさく時、「神の国でパンを食べる者はさいわいである」という言葉をくりかえした。しかしキリストは、無限の価を払って備えられた食卓に、客を招いて来ることがどんなにむずかしいかをお示しになった。こうしてキリストのみ言葉を聞いた人々は、自分たちが憐れみ深い招待を軽んじたことを知った。彼らの心を奪っていたのは、世の所有物や、富や、楽しみであった。彼らは一斉に言いわけをし始めた。{COL 1271.6}

今日も同じである。人々は、いろいろな言いわけをして宴会への招待を断ったのであるが、それは福音の招待を拒む言いわけを網羅している。人々は福音の要求することに耳を傾けることによって、彼らの現世の有望に思われるものを危険にさらすことはできない1272と主張する。彼らは、永遠の事物より現世の利益のほうを重要視する。彼らが神から受けた祝福そのものが、彼らの魂を創造主とあがない主から引き離すじゃま立てをする。彼らは、彼らの現世の利益追求を妨げられたくないので、憐れみの使者に向かってこう言う。「きょうはこれで帰るがよい。また、よい機会を得たら、呼び出すことにする」（使徒行伝24：25）。他の人々は、神の召しに従う時、彼らの社会的関係の中で起こると予想される困難を言い出す。彼らは、彼らの肉親や友人たちと仲たがいになることはできないと言う。こうして彼らは、彼らがたとえの中に描かれている人物の1人にほかならないことを、証明する。宴会の宅であるお方は彼らの見えすいた口実を、ご自身の招待に対する侮辱であるとみなされるのである。{COL 1271.7}

「わたしは妻をめとりましたので、参ることができません」と言った男は、大多数の人々を表している。神の召しに心を留めないのを自分の妻や夫のせいにする者が多くいるのである。「わたしの妻が反対するので、わたしはわたしの確信する義務に従うことができません。彼女の影響で、わたしはそうすることができないようになっています」と夫は言う。妻は、「さあ、おいでください。もう準備ができましたから」との恵み深い招きを聞く。すると彼女は、「『どうぞ、おゆるしください』わたしの夫は憐れみの招待を断っています。彼は仕事がやりかけだと言っています。わたしは夫といっしょに行かなければなりません。ですからまいることができません」と言うのである。子供たちの心は感銘を受ける。彼らは行きたいと思う。しかし彼らは父母を愛している。両親が福音の招待に気を留めないので、子供たちは行ってはならないと思う。彼らもまた、「どうぞおゆるしください」と言う。{COL 1272.1}

この人々は皆、家庭内に分裂がおこるのを恐れて救い主の招待を断るのである。彼らは神に従うことを拒むことによって、家庭の平和と幸福を確保したと考えている。しかし

これは思い違いである。利己的な種をまく者は、利己的な収穫を刈り取らなければならない。彼らはキリストの愛を拒むことによって、人間の愛に純潔と堅固さを与えることができる唯一のものを拒んでいるのである。彼らは天国を失うのみならず、天国を犠牲にしてまで得ようとしたものを真に楽しむことすらできなくなるのである。{COL 1272.2}

たとえでは、宴会の主人はその招待がどのようにあしらわれたかを知り、「おこって僕に言った、『いますぐに、町の大通りや小道へ行って、貧しい入、体の不自由な人、目の見えない人、足の悪い人などを、ここへ連れてきなさい』」。{COL 1272.3}

主人は彼の賜物をさげすんだ人々を捨てて、満たされない階級、家も土地ももっていない人々を招待した。彼は貧しく飢えている者、与えられた賜物を喜んでうける者を招待した。キリストは「取税人や遊女は、あなたがたより先に神の国にはいろ」と言われた（マタイ21：31）。人々に相手にされず、顔をそむけられるようなみじめな人々ではあっても、しかし彼らは、神の注目と愛を受けられないほど低く、みじめになりさがってはいない。キリストは心配にやつれ、疲れ、しえたげられている人間が、ご自身のもとに来ることを切望される。{COL 1272.4}

キリストは他のどこにも見いだすことができない光と、喜びと、平和を彼らに与えたいと望まれる。手のつけようのない罪人こそ、主の深く、熱い憐れみと愛の対象なのである。主は彼らをご自身に引き付けようとして、聖霊をつかわし、やさしく切々と訴えられるのである。{COL 1272.5}

貧しい者や、盲人につかわされた僕は、主人に報告した。「『ご主人様、仰せのとおりにいたしましたが、まだ席がございます』。主人が僕に言った、『道やかきねのあたりに出て行って、この家がいっぱいになるように、人々を無理やりにひっぱってきなさい』」。ここでキリストは、ユダヤ教の境界をこえて、世界の大通り、小道に福音の働きがなされることを指摘された。{COL 1272.6}

この命令に従ってパウロとバルナバは、ユダヤ人にこう言明した。「『神の言は、まず、あなたがたに語り伝えられなければならなかった。しかし、あなたがたはそれを退け、自分自身を永遠の命にふさわしからぬ者にしてしまったから、さあ、わたしたちはこれから方向をかえて、異邦人たちの方に行くのだ。主はわたしたちに、こう命じておられる、「わたしは、あなたを立てて異邦人の光とした。あなたが地の果までも救をもたらすためである」』。異邦人たちはこれを聞いてよろこび、主の御言をほめたたえてやまなかった。そして、永遠の命にあずかるように定められていた者は、みな信じた」（使徒行伝13：46～48）。{COL 1272.7}

キリストの弟子によって宣布された福音の使命は、世界に対する主の初臨の布告であった。それは、主を信じる信仰による救いのよい知らせを、人々にもたらした。それは、主の民をあがなうために栄光の中に来られる主の再臨をさし示し、信仰と服従によって光の中にある聖徒の嗣業に共にあずかる望みを、人々の前に示したのである。この使命は、今日人々に与えられている。今は、それに、間近に迫っているキリストの再臨の布告が、結びつけられている。キリストご自身が、再臨について語られたしるしは成就した。神のみ言葉によってわたしたちは、主が戸口におられることを知ることができる。{COL 1273.1}

黙示録の中でヨハネは、キリストの再臨の直前に、福音が宣布されることを預言している。彼は1人の天使が「中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った、『神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである』」（黙示録14：6、7）。{COL 1273.2}

この預言によると、さばきとそれに付随した警告の使命のあとに、天の雲にのって人の子が来られることがのべられている。さばきの使命の宣布は、キリストの再臨が近いことを知らせている。そしてこの宣布は、永遠の福音と呼ばれている。このようにしてキリ

スト再臨のことを説教して、その切迫を告げることが福音使命の本質的部分であることが示されている。{COL 1273.3}

終末時代には、快楽と金銭を求めて人々は、現世の利益追求にその心を奪われると聖書は言明している。彼らは永遠の実在に盲目となる。「人の子の現れるのも、ちょうどノアの時のようであろう。すなわち、洪水の出る前、ノアが箱舟にはいる日まで、人々は食い、飲み、めとり、とつぎなどしていた。そして洪水が襲ってきて、いっさいのものをさらって行くまで、彼らは気がつかなかった。人の子の現れるのも、そのようであろう」とキリストは仰せになった（マタイ24：37～39）。{COL 1273.4}

今日も同じである。人々はあたかも、神も、天国も、来世もないかのように、利益と自己中心的放縦な生活を追い求めている。ノアの時に、悪を行っている人々の目をさまし、悔い改めをうながすために、洪水の警告が発せられた。同様にキリストの切迫した来臨の使命は、世俗のことに心を奪われている者の、覚醒をうながすために計画された。それは彼らの目を覚まして永遠の実在を意識させ、彼らが主の宴会への招待に心を留めるために与えられたのである。{COL 1273.5}

福音の招待は全世界にーー「あらゆる国民、部族、国語、民族」ーー与えられるべきである（黙示録14：6）。警告と憐れみの最後の使命は、栄光をもって全地を照らすべきである。それはあらゆる階級の人々、富める者、貧しい者、高貴な者、卑賤（ひせん）な者に行きわたらなければならない。キリストは、「道やかきねのあたりに出て行って、この家がいっぱいになるように、人々を無理やりにひっぱってきなさい」と仰せになる。{COL 1273.6}

世界は、福音の欠乏のために滅びつつある。神のみ言葉のききんがくる。人間の言い伝えを混ぜないでみ言葉を説教する者はほとんどいない。人々は聖書を手にしているけれども、神が彼らのために聖書の中に備えてくださった祝福を受けていない。主は、人々に

ご自身の使命を伝えるために、僕たちをお召しになった。罪の中に滅びつつある者に、永遠の命の言葉を伝えなければならない。{COL 1273.7}

キリストは、道や垣根のあたりに出て行けとの命令によって、主のみ名によって奉仕の召しを受けたすべての者の働きをお定めになった。全世界は、キリストの教役者の畑である。人類家族全体が彼らの会衆である。主は恵みのみ言葉が、すべての魂に深い感銘を与えることを望んでおられる。{COL 1273.8}

このことは大部分個人的な働きによってなしとげなければならない。これがキリストの方法であった。キリストの働きは大部分個人的な面談によってなされた。主は、1人の聞き手に、心からの配慮をお持ちになっていた。しばしばその1人の魂が、イエスから聞いた話を数千の人々に伝えたのである。{COL 1274.1}

わたしたちは、人々が自分のところにくるまで待っていてはならない。わたしたちは人々がいるところへ出ていって、彼らをさがし求めねばならない。み言葉が講壇から説教された時、働きは始まったばかりである。こちらからもっていかなければ、福音に接することができない人々が、おびただしくいるのである。{COL 1274.2}

宴会への招待は、初めにユダヤ人に与えられた。彼らは人々の間で教師、指導者として立つように召された人々であった。キリストの来臨を予言する預言の書を、その手に持つ人々であった。そしてキリストの使命を予表する象徴的儀式が、彼らにゆだねられた。もし祭司たちや民がその召しに応じたならは、彼らは世界に福音の招待を与える働きのために、キリストの使者たちと1つになったにちがいない。他の人々に与えるために、真理が彼らに送られたのである。彼らがその召しを拒んだ時、それは貧しい人、障害のある人、盲人、歩けない人に送られた。取税人や罪人たちはその招待を受け入れた。福音の召しが異邦人に送られる時にも、その伝えられる方法は同じである。使命はまず「大通りに」与えられる。つまり世の働きに活発に従事している人々、民の教師や指導者に与えられる。{COL 1274.3}

主の使者は、このことを心に留めておくべきである。群れの牧者たち、神によって立てられた教師たちは、その招待に応じなければならない。社会の上層階級に属する者を、やさしい愛情と兄弟に対するような心づかいをもって捜し出すべきである。実業家、責任ある高い地位にいる人々、大きな発明の才や、科学的知識をもつ人々、天才とよばれている人々、現代に対する特殊な真理をまだ知らない福音の教師たちーーこれらの人々がます最初に招待を聞くべきである。このような人々をまず招待しなければならない。 {COL 1274.4}

金持ちのためになすべき働きがある。彼らに、天の賜物をゆだねられた者としての責任を自覚させる必要がある。生ける者と死人をさばかれるお方に弁明しなければならないことを、彼らに考えさせる必要がある。金持ちには神を恐れつつ愛をもって働きかけなければならない。多くの場合、金持ちは自分の富にたより、自分の危険を感じない。彼の心の目は、朽ちない価値を持つ者に引き付けられる必要がある。「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」と言われた真の慈愛の権威を、彼らは認めなければならない（マタイ11：28～30）。 {COL 1274.5}

教育、富、名声をもった高い地位にある人々は、自分の救いの重要さについて語りかけられることはほとんどない。多くのキリスト教の働き人たちは、これらの階級に近づくことをためらっている。しかしそのようなことではいけない。もしだれかがおぼれていたら、彼が弁護士、あるいは商人、あるいは判事であるからといって、わたしたちは、彼が死んでいくままに放っておいてよいだろうか。崖から飛び降りようとしている人を見たら、その人の地位や職業がどうあろうと、わたしたちはすぐに彼を引き戻すであろう。わたしたちは、魂の危機にある人々に警告することを、ためらってはならない。 {COL 1274.6}

見たところ世俗のことに没頭しているからといって、なおざりにしてはならない。高い社会的地位にある多くの者は深い悲しみをもっており、虚栄にあきている。彼らは自分たちにない平安を渇望している。社会の最上層の階級にも、救いを求めて飢えかわいている者がある。キリストの愛によって和らげられた心と親切な態度で、主の働き人たちが個人的に彼らに近づくならば、多くの者が助けを受けることであろう。 {COL 1274.7}

福音使命の成功は博学な講話、雄弁な論証、深い理論によるものではない。それは命のパンを渇望している魂に、使命を平易に語り、それを適合することにかかっている。「わたしは救われるために、何をすべきでしょうか」――これが魂の求めである。 {COL 1274.8}

最も単純でささやかな方法によって、幾千という人々の心にふれることができる。世の最も才能のある男女と見られている人々、最も知能のすぐれた人々は、世の人が自分の一番興味をもつ事柄について自然に話すのと同様に、神を愛する人が神の愛について話すその単純な言葉に、新鮮な感動をうけることがよくあるのである。 {COL 1275.1}

時々、よく準備され、研究された言葉が少しも感化を与えないことがある。しかし自然の単純さで語られた神の息子、娘の、真実で正直な話は、キリストとその愛に対して長く閉じられて来た心の扉を、開く力を持つのである。 {COL 1275.2}

キリストのために働く者は、自力で働くのではないことを心得ていなければならない。神の救いの力を信じて、神のみ座をしっかりつかむべきである。まず祈りによって神と相撲を取り、そしてその後で神がお与えになったすべての才能を用いて働くべきである。聖霊が与えられ、彼の力となってくださる。奉仕の天使は彼のそばにいて、人々の心を感動させる。 {COL 1275.3}

もしエルサレムの指導者や教師たちが、キリストのお教えになった真理を受け入れていたならば、彼らの町はどんなにかすばらしい伝道の中心地となったことであろう。背信したイスラエル人は改心したであろうし、主のためにおびただしい大軍が集められたこと

であろう。そして彼らは、なんと速やかに全世界に福音を伝えることができたことであろう。 {COL 1275.4}

同様に今、感化力を持ち、大きな能力を持つ有用な人々が、キリストに導かれるならば、彼らによってどんなにすばらしい働きがなしとげられることであろう。倒れた者は助けおこされ、捨てられた者は集められ、救いのおとずれは遠く、広く伝えられる。招待は速やかに発せられ、主の食卓に客が集められる。 {COL 1275.5}

とはいえ、わたしたちは貧しい階級の人々を無視して、すぐれた才能のある人々だけを考えてはならない。キリストは使者たちに、小道や垣根のあたりに行って、貧しく身分の低い人々の所へも行くようにお教えになった。大都市の裏町や小道に、田舎の人通りの少ない小道に、教会とのつながりもなく、寂しく、神は自分たちをお忘れになったと感じている家族や孤独な人々ーーそれは母国を離れた外国人かもしれないーーがいる。彼らは、救われるために何をしなければならないかを知らない。多くの者は罪の中に沈んでいる。多くの者は悩んでいる。彼らは苦痛、欠乏、不信、失望に圧倒されている。心身のあらゆる種類の病気が、彼らを苦しめている。彼らは苦悩が取り去られ、慰められることを切望している。サタンは、彼らを誘惑して、肉欲と快楽に慰めを求めさせる。これは、彼らを破壊と死に至らせるものである。サタンは食べようとすれば、口もとで灰に変わるソドムのりんごを彼らにさし出している。彼らはかてにもならぬもののために金を費やし、飽きることもできないもののために労しているのである。 {COL 1275.6}

キリストがこられた目的は、こうした苦しむ人々を救うためであることをわたしたちは知らなければならない。彼らに向かってキリストは、次のように招いておられる。「さあ、かわいている者はみな水にきたれ。金のない者もきたれ。来て買い求めて食べよ。あなたがたは来て、金を出さずに、ただでぶどう酒と乳とを買い求めよ。……わたしによく聞き従え。そうすれば、良い物を食べることができ、最も豊かな食物で自分を楽しませる

ことができる。耳を傾け、わたしにきて聞け。そうすれば、あなたがたは生きることができる」（イザヤ55：1～3）。{COL 1275.7}

神は、わたしたちが旅人や、世から捨てられた者や、道徳力を失った貧しい人々を顧みるようにと特別な命令を与えられた。宗教には全く無関心に見える多くの者が、心の底では、休みと平安を求めている。彼らは罪の非常な深みに沈んでいるけれども、彼らを救うことができるのである。{COL 1275.8}

キリストの僕は、主の模範に従うべきである。主はあちらこちら歩まれた時、苦しむ者を慰め、病気の者をいやされた。そして、その後で、主の王国の偉大な真理を彼らの前に示されたのである。これが主に従う者の働きである。肉体の苦しみを除いてやる時、あなたは魂の欠乏のために働く道を見いだすのである。あなたは高くあげられた救い主をさし示すことができ、回復の力をもつ唯一のお方であられる大いなるいやし主の愛を、告げることができる。{COL 1275.9}

さ迷い出て、失望しているあわれな者に、絶望する必要はないと語りなさい。彼らは過ちにおちいり、正しい品性を築かなかったけれども、神は彼らを回復することを喜び、人々を救いに入れることを喜ばれる。神はサタンにつかれていた一見全く望みのない者を救って、恵みの支配をうける者とすることをお喜びになる。神は不従順の者の上に下る怒りから彼らを救うことをお喜びになる。すべての人のためにいやしと清めが備わっていることを彼らに告げなさい。主の食卓には、彼らの座る場所がある。主は、喜んで彼らを迎えようとして待っておられるのである。{COL 1276.1}

小道や垣根のあたりに行く者は、彼らが働きかけなければならない、これまでと全く異なった種類の人々に出会う。そこには、与えられたすべての光に従って生活し、知っている最良の方法で神に仕えている人々がいる。それでも彼らは、自分たちと、その周囲の人々のために、まだまだ大きな働きが行われなければならないと感じている。神をもっと知りたいと彼らは切に望んでいる。しかし彼らは、大きな光の一部を見始めたにすぎない

。彼らは、信仰によってはるか遠方に認めた賜物を、神がお与えになるように、涙ながらに祈っている。大都会の悪の真中に、こうした魂が多く見いだされるのである。彼らは非常に恵まれない境遇にいる者が多く、そのために世に気づかれずにいる。そういう人々は多いが、牧師も教会もその人々について少しも知らないでいる。しかし、彼らはその低く卑しくみじめな場所で、主の証人となっている。彼らはわずかの光しかもたず、キリスト教の訓練を受ける機会もなかったことであろう。しかし彼らは、着る物もなく、飢え、こごえている人々の中にいて、他の人々に奉仕しようとしている。神の豊かな恵みの管理者たちは、こうした人々をさがし出し、彼らの家を訪問し、聖霊の力によって、彼らの必要を満たすために働くべきである。彼らと共に聖書を学び、聖霊の感動を受けて、単純に彼らと祈りなさい。キリストはその僕たちに、魂に対する天来のパンとなる使命をお与えになる。尊い祝福が心から心へ、家から家へ伝えられるであろう。 {COL 1276.2}

たとえの中にある「人々を無理やりにひっぱってきなさい」という命令は、たびたび誤解されてきた。それは、わたしたちが、人々に強制して、福音を受けさせるべきだという教えであるかのように解釈されてきた。しかしそれはむしろ、熱心に招待して、勧誘するならば、効果があることを示すのである。福音は人々をキリストに連れてくるのに、強制力は決して用いない。その使命は、「さあ、かわいている者はみな水にきたれ」（イザヤ55：1）、「御霊も花嫁も共に言った『きたりませ』……いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」である（黙示録22：17）。神の愛と恵みの力が、わたしたちに来ることをせまるのである。 {COL 1276.3}

救い主は、「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう」と仰せになる（黙示録3：20）。主は軽べつや脅かしにあわれてもひるんだり去ったりなさらないで、「どうして、あなたを捨てることができようか」と言って、たえず失われた者をおたずねになる（ホセア11：8）。かたくなな心がどんなに主の愛を退けても、主は再び来て、「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている」と、

更に強く訴えられるのである。人を引きつけずにはおかない主の愛の力が、魂に入って来ることを迫るのである。こうしてついに彼らはキリストに向かって、「あなたの助けはわたしを大いなる者とされました」と言うのである（詩篇18：35）。{COL 1276.4}

キリストは、ご自身が失われたものをたずねる時に持っておられたのと同じひたすらな愛を、主の使者たちにお与えになる。わたしたちは単に「来なさい」と言うのではない。招きを聞いても、その意味を聞きとることができない鈍い耳の人々がいる。彼らの目は備えられたものに、なんのよきものも見いだせないほど盲目になっている。多くの者は自分が大いなる堕落の淵に沈んでいるのを知っている。彼らは、わたしは助けを受けるにふさわしくありません、わたしをほっておいてくださいと言う。しかし働き人はそこでやめてはならない。やさしい同情をもって、失望した無力な者をしっかり捕らえなければならない。彼らに、あなたの勇気、あなたの希望、あなたの力を与えなさい。親切に、彼らを強いて主の所に連れて来なさい。「疑いをいだく人々があれば、彼らをあわれみ、火の中から引き出して救ってやりなさい。また、そのほかの人たちを、おそれの心をもってあわれみなさい」（ユダ22、23）。{COL 1276.5}

もし神の僕たちが、信仰によって主と共に歩むならば、主は彼らの使命に力をお与えになる。彼らは、人々が福音を受け入れないではいられなくなるように、神の愛を示すとともに、神の恵みを拒むことは危険であることを示すことができる。人が神から与えられた分をなしさえすれば、キリストは驚くべき奇跡を行われるであろう。今日も人間の心の中に、過去幾時代もの間に行われてきた大変化がなしとげられるであろう。ジョン・バンヤンは歓楽と冒瀆の中から救われ、ジョン・ニュートンは奴隷売買から救われて、高くあげられた救い主を伝えた。今日も、バンヤンやニユートンのような人が、多くの人々の中から救われるにちがいない。神と協力する人間の器によって、多くのあわれな社会の日陰者たちが教化され、ひるがえって、彼らは、人間の中に神のみ姿を回復したいと願うようになる。よりよい道を知らないために、非常にわずかの機会にしかめぐまれず、誤った道に歩んでいる者が多くいる。そういう人々に、光が潮のようによせて来るのである。キリ

ストがザアカイに、「きょう、あなたの家に泊まることにしているから」とお語りになったように、主は彼らにも語りかけられる（ルカ19：5）。そしてがんこな罪人であると見なされていた者たちが、キリストに目を留めていただいたために、幼児のようにやさしい心を持つ者となる。多くの者が大きな過ちと罪から救い出される。そして機会と特権に恵まれていながら、それを尊ばなかった者の位置をかわって占めるのである。彼らは神にえらばれた者、尊い者となり、キリストがみ国にお入りになる時には、彼らはキリストのみ座の一番近くに立つのである。{COL 1277.1}

しかし、「あなたがたは、語っておられるかたを拒むことがないように、注意しなさい」（ヘブル12：25）。イエスは「招かれた人で、わたしの晩餐にあずかる者はひとりもないであろう」と言われた。彼らはその招待を拒んでしまい、彼らのうちだれ1人としてもう1度招待される者はない。ユダヤ人はキリストを拒むことによって、自分たちの心をかたくなにし、サタンの力に自己を屈しつつあった。こうして彼らは神の恵みを受け入れることができなくなった。今日も同じである。もし人が神の愛を喜んで受けることをせず、その愛が心の中で魂を和らげ、屈服させる永続的な力とならないならば、わたしたちは全く失われた状態にあるのである。主は、今まで与えてこられたより以上の大きな愛を、お与えになることはできない。もしイエスの愛が人の心を従わせないとすれば、わたしたちの心を動かす方法は他になにもないのである。{COL 1277.2}

あなたが憐れみの使命を聞くことを拒む度に、あなたは不信を強めているのである。あなたがキリストに心の戸を開かないその度に、あなたは、ますます、語っておられるお方の声を聞こうとしなくなる。ついにあなたは憐れみの最後の訴えに応答する機会をなくしてしまうのである。「エフライムは偶像に結びつらなった。そのなすにまかせよ」と、古代イスラエルについて書かれたように、あなたについて書かれないようにしなさい（ホセア4：17）。キリストがエルサレムのために泣かれたように、あなたのために泣かれることのないようにしなさい。その時イエスはこう言われた、「ちょうどめんどりが翼の下にひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。そ

れだのに、おまえたちは応じようとしなかった。見よ、おまえたちの家は見捨てられてしまう」（ルカ13：34、35）。{COL 1277.3}

わたしたちの時代は、憐れみの最後の使命の招待が、人の子らにむかって発せられている時である。「道やかきねのあたりに出て行け」という命令は、その最後の成就に至っている。キリストの招待は、すべての魂に発せられるべきである。使者は、「さあ、おいでください。もう準備ができましたから」と言っている。天使たちは、今も人間の働き人と協力して働いている。聖霊はあなたを強いて来させるために、あらゆる手をつくしておられる。キリストはあなたの心に入ろうとして、かんぬきがはずされ、扉が開かれたことを示す物音を聞こうと、耳をそばだてておられる。天使たちは、更にもう1人の罪人が見いだされたとの知らせを天にもたらすために、待っている。天の軍勢は、立琴をならし、喜びの歌を歌う用意をして、もう1人の魂が福音の祝宴への招待を受けいれるのを待っているのである。{COL 1278.1}

第19章　人を赦す方法

本章は、マタイ18：21～35に基づく {COL 1278.2}

ペテロがキリストのもとに来て、「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯した場合、幾たびゆるさねばなりませんか。7たびまでですか」と質問した。ラビたちは赦しの限度を3度までとしていた。ペテロはキリストの教えから考えて、完全数である7回までのばそうと考えた。しかしキリストは、赦すことにうみつかれてはならないと、お教えになった。「7たびまでとは言わない。7たびを70倍するまでにしなさい」と主は言われた。{COL 1278.3}

そこで主は、赦しを与える理由がなんであるかということと、赦さない精神をいだくことがいかに危険であるかをお示しになった。主は、政府の事務をつかさどっていた役人に対して、王がどんな処置を取ったかについて、1つのたとえをお話しになった。役人のうちには、国家の巨額な公金を横領していた者があった。王が、資金をゆだねていたものの会計調査を行った時、王に対して1万タラントという巨額の負債を負った者のあることが判った。その男は、王の前につれて来られた。この男には支払う金がなかった。当時の習慣によって、王は彼に、所有物を全部売り払って負債をつぐなえと命じた。しかし、驚いた男は王の足下にひれふし、王に嘆願して言った。「『どうぞお待ちください。全部お返しいたしますから』。僕の主人はあわれに思って、彼をゆるし、その負債を免じてやった。」 {COL 1278.4}

「その僕が出て行くと、100デナリを貸しているひとりの仲間に出会い、彼をつかまえ、首をしめて『借金を返せ』と言った。そこでこの仲間はひれ伏し、『どうか待ってくれ。返すから』と言って頼んだ。しかし承知せずに、その人をひっぱって行って、借金を返すまで獄に入れた。その人の仲間たちは、この様子を見て、非常に心をいため、行ってそのことをのこらず主人に話した。そこでこの主人は彼を呼びつけて言った、『悪い僕、

わたしに願ったからこそ、あの負債を全部ゆるしてやったのだ。わたしがあわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか』。そして主人は立腹して、負債全部を返してしまうまで、彼を獄吏に引きわたした。」 {COL 1278.5}

このたとえには、たとえ全体を描き出すために必要な細かい記述があるが、それらは重要な霊的意味を持つものではない。そうしたものに注意をそらしてはならない。ここに、いくつかの重要な真理が教えられているので、それにわたしたちの思いを集中すべきである。 {COL 1278.6}

この王が与えた赦しは、すべての罪に対する神の赦しをあらわしている。あわれに思って僕の負債を赦した王は、キリストを表している。人間は律法を破って、罪の宣告のもとにあった。人間は自分自身を救うことができなかった。そのためにキリストはこの世界にこられ、神性に人性をまとい、不義な者のために、義なるご自身の命をお与えになった。主はわたしたちの罪のためにご自身を与え、血によって買いとった赦しを、すべての人に価なしに提供される。「主には、いつくしみがあり、また豊かなあがないがある」（詩篇130：7）。 {COL 1278.7}

ここに、わたしたちが、わたしたちと同じ罪人に向かって、同情の心をいだかなければならないという理由が示されている。「神がこのようにわたしたちを愛してくださったのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきである」（Ｉヨハネ4：11）、「ただで受けたのだから、ただで与えるがよい」とキリストは仰せになる（マタイ10：8）。 {COL 1279.1}

たとえにおいて、負債のある者が、「どうぞお待ちください。全部お返しいたしますから」と約束して、猶予を願った時、その宣告は取り消された。負債は全部消された。そのすぐあとに、彼は、彼を赦した主人の模範にならう1つの機会が与えられた。外に出ると、彼は、わずかな貸しのある仲間に出会った。彼は1万タラント赦されたばかりであった。彼は、この仲間には100デナリ貸していた。しかし、これほどの憐れみを受けた彼が

、仲間に向かっては全然違った態度をとった、仲間は、彼自身が王に向かってしたと同じ訴えをした。しかし同じような赦しは得られなかった。つい先ほど赦されたばかりの彼は、やさしい心も、同情も持たなかった。憐れみが彼に示されたのに、彼は仲間に向かっては、憐れみを持たなかった。彼は待ってくださいという頼みに、気をとめなかった。この恩知らずの僕は、仲間に貸したわずかな金のことしか考えていなかった。彼は、自分の当然受けるべきものと考えたものを、全部要求した。そして彼のためには恵み深くも取り消されたところの、同じ厳しい宣告を仲間に対して下した。 {COL 1279.2}

今日、いかに多くの者が、同じ精神をあらわしていることであろう。負債を負った者が主人に憐れみを願った時、彼は自分の負債の大きさを本当には理解していなかった。彼は自分の無力を知らなかった。彼は自分を救おうとした。彼は「どうぞお待ちください。全部お返しいたしますから」と言ったのである。同様に、自分の行いによって神の恵みを得ようと望んでいる者が多い。彼らは自分の無力なことを知っていない。彼らは価なくして与えられる賜物として、神の恵みを受けず、自分の義をたてようと努力している。彼らの心は罪のために砕かれることなく、謙遜になっていない。彼らは他人に対して厳しく、寛容ではない。彼らの神に対する罪は、彼らに対する兄弟の罪と比べると、1万タラント対100デナリでーーほとんど100万倍に当たる。しかし、彼らはあえて人を赦そうとしないのである。 {COL 1279.3}

たとえの中で、主人は、この無慈悲な負債者の出頭を命じ、彼に「言った、『悪い僕、わたしに願ったからこそ、あの負債を全部ゆるしてやったのだ。わたしがあわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか』。そして主人は立腹して、負債全部を返してしまうまで、彼を獄吏に引きわたした」。そこでイエスは言われた、「あなたがためいめいも、もし心から兄弟をゆるさないならば、わたしの天の父もまたあなたがたに対して、そのようになさるであろう」。赦すことを拒む者は、それによって彼自身が赦される望みを捨てているのである。 {COL 1279.4}

しかし、このたとえを誤用してはならない。わたしたちを神がお赦しになるからといって、わたしたちが神に服従する義務が減少するものではない。お互いに仲間に対して赦しの精神を持つからといって、なすべき義務を果たさずにすむものではない。キリストが弟子たちに教えられた祈りの中に、「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもおゆるしください」と、主は仰せになった（マタイ6：12）。これは、わたしたちの罪が赦されるために、わたしたちから借りている人に、当然支払いを求めてよいものまでも要求してはいけないという意味ではない。もし彼らが支払うことができない場合、たとえ、それが不十分な管理の結果ではあったとしても、彼らを獄に入れたり、しえたげたりして、ひどい取り扱いをするべきではない。しかし、このたとえはわたしたちに、怠惰を奨励するように教えるものではない。神の言葉は、働こうとしない者は、食べることもしてはならないと言っている（Ⅱテサロニケ3：10）。主は、けんめいに働く人に、なまけ者を扶助することを求めてはおられない。時間を浪費し、努力をしないために、貧しく乏しくなっている人が多い。このようなありさまにおちいった人々が、その誤りを正さないならば、彼らのためにいくら努力しても、すべては穴の開いた袋の中に宝を入れるようなものである。しかし、避けることのできない事情で貧困におちいることもある。こうした不幸な人々に対しては、やさしさと同情を示さなければならない。わたしたちは自分たちが、彼らと同じ事情のもとにあったとすれば、自分がしてもらいたいと思うように、他の人々を取り扱うべきである。{COL 1279.5}

聖霊は、使徒パウロを通して、次のようにわたしたちを戒めておられる。「そこで、あなたがたに、キリストによる勧め、愛の励まし、御霊の交わり、熱愛とあわれみとが、いくらかでもあるなら、どうか同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、1つ思いになって、わたしの喜びを満たしてほしい。何事も党派心や虚栄からするのでなく、へりくだった心をもって互に人を自分よりすぐれた者としなさい。おのおの、自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい。キリスト・イエスにあっていだいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい」（ピリピ2：1～5）。{COL 1280.1}

しかし罪は、軽く考えてはならない。主は、兄弟が悪をなすままに放任しておかないようにと、わたしたちに命じておられる。「もしあなたの兄弟が罪を犯すなら、彼をいさめなさい」と主は言われた（ルカ17：3）。罪は罪として呼ばれるべきである。そして悪を行う者の前に、はっきりとそれを示さなければならない。 {COL 1280.2}

パウロは聖霊によって、「時が良くても悪くても、それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい」と書いて、テモテを教えた（Ⅱテモテ4：2）。またテトスには次のように書いた、「法に服さない者、空論に走る者、人の心を惑わす者が多くおる、……だから、彼らをきびしく責めて、その信仰を健全なものにしなさい」（テトス1：10～13）。 {COL 1280.3}

キリストは、次のように仰せになる。「もしあなたの兄弟が罪を犯すなら、行って、彼とふたりだけの所で忠告しなさい。もし聞いてくれたら、あなたの兄弟を得たことになる。もし聞いてくれないなら、ほかにひとりふたりを、一緒に連れて行きなさい。それは、ふたりまたは3人の証人の口によって、すべてのことがらが確かめられるためである。もし彼らの言うことを聞かないなら、教会に申し出なさい。もし教会の言うことも聞かないなら、その人を異邦人または取税人同様に扱いなさい」（マタイ18：15～17）。 {COL 1280.4}

主はクリスチャンの間の困難な問題は、教会の中で解決すべきであるとお教えになった。それらを、神をおそれない人々の前に持ち出してはならない。もしクリスチャンが兄弟から不正なことをされた場合、法廷にもちこんで不信者に訴えるべきではない。彼は、キリストがお与えになった教訓に従うべきである。復讐しようとするのではなく、その兄弟を救うことを求めるべきである。神は、神を愛し、おそれる者の権益をお守りくださる。わたしたちは確信をもって正しくおさばきになるお方に、問題をゆだねることができる。 {COL 1280.5}

くりかえし悪事を行い、それを行った者がそのあやまちを告白する時、害を受けた者はしびれを切らしてこれ以上赦すことはできないと考えることが、しばしばある。しかし、救い主はわたしたちに、誤りを犯した者をどのように取り扱うべきかをはっきりとお語りになった、「もしあなたの兄弟が罪を犯すなら、彼をいさめなさい。そして悔い改めたら、ゆるしてやりなさい」（ルカ17：3）。彼を、信用できないといって退けてはならない。「もしか自分自身も誘惑に陥ることがありはしないか」と考えなさい（ガラテヤ6：1）。{COL 1280.6}

もしあなたの兄弟が過ちを犯すならば、あなたは彼らを赦すべきである。彼らが告白してきた場合、あなたは、彼らの心が十分砕かれているとは思えないとか、彼らが痛切に告白しているようには思われないとか言ってはならない。人の心の中まで読んだかのように、彼らをさばく力が、あなたにはあるのだろうか。神の言葉はこう言っている。「そして悔い改めたら、ゆるしてやりなさい。もしあなたに対して1日に7度罪を犯し、そして7度『悔い改めます』と言ってあなたのところへ帰ってくれば、ゆるしてやるがよい」（ルカ17：3、4）。神があなたを赦してくださっただけ赦しなさい。7度だけでなく、7度を70倍するまでにと言われる。{COL 1280.7}

わたしたち自身、神の無代のたまものの恵みをこうむっている。わたしたちは恵み深い契約によって、神の子と定められた。救い主の恵みによってわたしたちはあがなわれて、生まれかわった者となり、キリストと共なる世継ぎにまで高められたのである。この恵みを他の人々にあらわすようにしよう。{COL 1281.1}

過ちを犯した者を失望におとしいれてはならない。パリサイ的な厳しさによって、兄弟を傷つけてはならない。苦々しい軽べつの心を起こしてはならない。あざけりの調子を声に出してはならない。もしあなたが自分自身の言葉を語り、無関心をよそおい、疑いや、不信を示すならば、魂を滅びにおとしいれることになる。憐れみ深い長兄イエスの心を持った人間が、彼の心に触れなければならない。心から彼に同情して温かく手を握り、一

緒に祈りましょうとささやきかけなければならない。神はあなたがた2人に、豊かな経験をお与えになることであろう。祈りはわたしたちを互いに結びつけ、また、わたしたちと神とを結びつける。祈りはイエスをわたしたちに近づけ、疲れ果てて倒れそうな魂に、世と肉と悪魔に勝利する新しい力をもたらす。祈りは、サタンの攻撃をかわすものである。{COL 1281.2}

人が人間の不完全さから目を転じて、イエスを見上げる時、聖なる変化が品性の中に起こる。キリストの霊が心に働いて、そのみかたちに一致させる。そして、イエスを高く掲げるように努めなさい。心の目を、「世の罪を取り除く神の小羊」に注ぎなさい（ヨハネ1：29）。そしてあなたがこのような働きに従事する時、「かように罪人を迷いの道から引きもどす人は、そのたましいを死から救い出し、かつ、多くの罪をおおうものであることを、知るべきである」（ヤコブ5：20）。{COL 1281.3}

「もし人をゆるさないならば、あなたがたの父も、あなたがたのあやまちをゆるして下さらないであろう」（マタイ6：15）。人を赦さない精神を、正しいと認めることはできない。他の人に対して無慈悲な者は、その人自身が神の赦しの恵みを受けていない証拠である。神の赦しによって、過ちを犯した者の心は、無限の愛なる神の大いなるみ心に近く引き寄せられる。神の憐れみが潮のように、罪人の心に流れ込み、又その人から他の人々の心に流れ込むのである。キリストがその尊い生涯にあらわされたやさしさと憐れみとが、主の恵みの共有者となる者の中に見られるのである。しかし、「もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではない」（ローマ8：9）。そのような人は神から遠ざかっていた。彼が、神から永遠に切り離されるのは当然である。{COL 1281.4}

彼が以前に赦しを受けたことは事実である。しかし彼の無慈悲な心は、彼が今、神が愛の中に赦しをお与えになったことを拒んでいることを示している。彼は神から自分を引きはなし、赦しを受ける前となんら変わりがない。彼は自分の悔い改めを否定した。そし

て彼の罪は、あたかも彼が悔い改めなかったかのように彼の上に置かれているのである。{COL 1281.5}

しかしこのたとえの偉大な教えは、神の憐れみと人間の無情との比較にある。また、それは、神の憐れみ深い赦しが、わたしたちの赦しの尺度であるということを教えている。「わたしがあわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか。」{COL 1281.6}

わたしたちは、自分が赦すから赦されるのではない。わたしたちが赦すように赦されるのである。すべての赦しは、なんの功もなくして得られる神の愛に基づいている。しかし他の人々に対するわたしたちの態度は、わたしたちがその愛を自分のものにしたかどうかを示すのである。キリストが、「あなたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう」と言われたのは、そのためである（マタイ7：2）。{COL 1281.7}

第20章　愚かな金持ち

本章は、ルカ12：13～21に基づく {COL 1282.1}

キリストは人々を教えておられた。そして、いつものように、弟子たちだけでなく、他の人々もキリストの周りに集まっていた。キリストは弟子たちに、彼らがやがて役割を演ずべき場面について語っておられた。彼らは、自分たちにゆだねられた真理を、広く宣べ伝えなければならなかった。彼らは、この世の支配者たちと争うこととなるのも、覚悟しなければならなかった。キリストのために彼らは法廷に立たされ、為政者や王たちの前に呼び出されなければならなかった。キリストは、だれも反論することができないような知恵を彼らに与えると保証なさった。群衆の心を感動させ、狡滑な敵を論駁（うんばく）なさったキリストのみ言葉は、キリストの内に聖霊の力が宿っているのを証ししたが、キリストは彼に従う者にこの聖霊の力を約束なさった。 {COL 1282.2}

しかし、天の恵みを、ただ利己的な目的のためにのみ望んだ人々が大勢いた。彼らは、真理を明らかにお示しになるキリストの驚くべき力を認めた。彼らは、支配者や為政者たちの前で語る知恵が与えられるという約束が、弟子たちに与えられるのを耳にした。キリストは、自分たちの世的な利益のためにも、その力を貸してはくださらないであろうかと彼らは考えた。 {COL 1282.3}

「群衆の中のひとりがイエスに言った、『先生、わたしの兄弟に、遺産を分けてくれるようにおっしゃってください。』」神はモーセを通して、財産の譲渡について、指示を与えておられた。長男は、父の財産のうち、他の子供たちの2倍を受けたが、他の兄弟たちは平等に分配を受けることになっていた。この人は、自分の分け前が兄弟に詐取されたと考えた。そして自分の力だけでは、自分が当然受けるべき分であると思われるものを手に入れることができなかった。しかし、もしキリストが口添えをしてくだされば、必ず自分の希望通りになるものと彼は考えた。この男は、キリストの、人の心を動かす訴えや、

学者やパリサイ人に対する厳粛な譴責の言葉を聞いていた。そのような命令の言葉が兄弟に向かって語られるならば、彼は当方の権利を無視して分け前を渡さないようなことはないだろうと、彼は考えた。 {COL 1282.4}

キリストが厳粛な教えをたれておられた最中に、この男は自分の利己的な性質をあらわした。彼は、主の能力を、自分の現世の問題の解決に役立たせようと思ったのであるが、その霊的真理は彼の心を捕らえなかった。彼の心は、遺産を獲得することに奪われていた。富んでおられたにもかかわらずわたしたちのために貧しい者となられた栄光の王なるイエスは、神の愛という宝を彼に示しておられた。聖霊は彼に、「朽ちず汚れず、しぼむことのない」財産を受け継ぐ者となるようにと訴えていた（Ⅰペテロ1：4）。彼は、キリストのみ力の証拠を見ていた。今こそ、偉大な教師に自分の心の最大の願いを表明すべき時が来た。しかし、バンヤンの寓話の中のくまでを持った男のように、彼の目は地上に向けられていた。彼は上の方にある冠を見なかった。魔術師シモンのように、彼は、神の賜物を、世的な利益を得る手段と考えたのであった。 {COL 1282.5}

救い主の地上における使命は、終わりに近づいていた。恵みの王国の建設にあたって、主がなすべきことを成し遂げる時は、わずか数か月しか残っていなかった。それなのに、人間の貪欲は、一片の土地に関する争いのために、主をそのみ働きからそらそうとした。しかし、イエスは、その使命からそらされるべきではなかった。イエスは、「人よ、だれがわたしをあなたがたの裁判人または分配人に立てたのか」とお答えになった。 {COL 1282.6}

イエスは、この人に何が正しいかを告げることもおできになったろう。イエスは、その場合に何が正当かを知っておられた。しかし、兄弟たちは、いずれも、貪欲な心を持っていたための争いであった。キリストは、こういう論争を解決することはわたしの仕事ではないと言われた。キリストは、福音の宣教という別の目的 1283のため、すなわち永遠

の実在に対して人々の目を覚まさせるという目的のために、来られたのであった。{COL 1282.7}

この場合のキリストのご処置は、キリストの名によって奉仕するすべての者に対する教訓である。キリストが12人の弟子たちをおつかわしになった時、彼は、「行って、『天国が近づいた』と宣べ伝えよ。病人をいやし、死人をよみがえらせ、重い皮膚病にかかった人をきよめ、悪霊を追い出せ。ただで受けたのだから、ただで与えるがよい」と言われた（マタイ10：7、8）。彼らは、人々の現世的な問題の解決にあたるべきではなかった。{COL 1283.1}

彼らの仕事は、神と和らぐよう人々を説き勧めることであった。この仕事にたずさわる彼らに、人類を祝福する力があった。人間の罪と悲しみに対する唯一の救済策は、キリストである。キリストの恵みの福音のみが、社会ののろいとなっているさまざまの悪を除くことができる。富んだ者が貧しい者に対して行う不正、貧しい者が富んだ者に対していだく憎しみは、共に、利己心に根ざしており、これはキリストへの屈服によってのみ根絶される。キリストのみが、利己的な罪の心を取り去り、新しい愛の心をお与えになるのである。キリストの僕は、天からつかわされた聖霊によって福音を宣べ伝え、キリストが人々のためにお働きになったように働くべきである。その時、この人類を祝福し高める働きにおいて、人間の力では全くなしとげられないような結果があらわされるのである。{COL 1283.2}

主は、この質問者を悩ましていた問題、また同様なすべての争いの根底を突いて、「あらゆる貪欲に対してよくよく警戒しなさい。たといたくさんの物を持っていても、人のいのちは、持ち物にはよらないのである」と言われた。{COL 1283.3}

「そこで1つの譬を語られた、『ある金持の畑が豊作であった。そこで彼は心の中で、「どうしようか、わたしの作物をしまっておく所がないのだが」と思いめぐらして言った、「こうしよう。わたしの倉を取りこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食糧

を全部しまい込もう。そして自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食え、飲め、楽しめ。」すると神が彼に言われた、「愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう。そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか。」自分のために宝を積んで神に対して富まない者はこれと同じである』。」{COL 1283.4}

愚かな金持ちのたとえによって、キリストは、この世をすべてとする者の愚かさをお示しになった。この人は、すべての物を神から受けていた。太陽は彼の土地の上を照らしていた。太陽の光は正しい者の上にも正しくない者の上にも輝くのである。天からの雨は、悪人の上にも善人の上にも降り注ぐ。主は植物を茂らせ、畑に豊かに物を生ぜしめられた。{COL 1283.5}

この金持ちは、農産物をどうすべきかと心を悩ました。彼の倉はあふれるほどであり、余分に取れた物を入れる場所もなかった。彼は、すべての恵みの源である神のことを思わなかった。彼は、貧しい人々を助けることができるように、神が彼を神の物をつかさどる家令とされたことを自覚しなかった。彼は、神の賜物を分配するという尊い機会を持ちながら、自分の安楽のことしか考えなかった。{COL 1283.6}

貧しい者、孤児、やもめ、苦しむ者、悩んでいる者の窮状は、この金持ちも知っていた。持ち物を施す多くの機会があった。豊かな持ち物から1部を分けてやることは、彼には容易なことだったろう。そうすれば、多くの家庭は困窮から解放され、飢えている多くの人々は食物を与えられ、多くの裸の者は着物を着せられ、多くの人々の心は喜び、パンと着物を求める多くの祈りは答えられ、賛美の調べが天に上ったことであろう。「神よ、あなたは恵みをもって貧しい者のために備えられました」（詩篇68：10）。この金持ちに与えられた祝福を通して、多くの人々の困窮に対する豊かな備えがなされていた。しかし、彼は、貧しい人々の叫びに対して心を閉じ、その僕たちに、「こうしよう。わたしの倉を取りこわし、もっと大きいのを建てて、そこに穀物や食糧を全部しまい込もう。そし

て自分の魂に言おう。たましいよ、おまえには長年分の食糧がたくさんたくわえてある。さあ安心せよ、食え、飲め、楽しめ」と言ったのである。 {COL 1283.7}

この人の目標は、滅んで行く獣の目標より高くはなかった。彼は、神も天国も未来の生命もないかのように、自分の持つものはすべて自分の物で、神や人にはなんの負うところもないかのように生活していた。詩篇記者は、「愚かな者は心のうちに『神はない』と言う」と書いた時、このような人間のことを述べたのであった（詩篇14：1）。 {COL 1284.1}

この人は、自己のために計画を立て、生活した。彼は、未来に対して十分の備えができたのを見届けた。彼にとって今や、勤労の実をたくわえ、楽しむことがすべてであった。彼は、自分を他の人々よりも恵まれた者と思い、自分の賢明な経営法を手柄とした。彼は町の人々から、すぐれた判断力を持っ人、富裕な市民としてあがめられた。「みずから幸いなときに、人々から称賛され」るものだからである（詩篇49：18）。 {COL 1284.2}

しかし、「この世の知恵は、神の前では愚かなもの」である（Ｉコリント3：19）。金持ちが、楽しい年月を期待していた時、主は全く別の計画を立てておられた。この不忠実な家令に言われたことは、「愚かな者よ、あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう」という言葉であった。この要求には金で応ずることはできない。彼が蓄えた富であっても、刑の執行猶予を買い取ることはできない。一瞬にして、彼が一生をかけて獲得したものは、彼にとって全く無価値なものとなる。「そしたら、あなたが用意した物は、だれのものになるのか」。彼の広大な畑も、一杯に満たされた倉も、彼の支配の下を離れる。「彼は積みたくわえるけれども、だれがそれを収めるかを知りません」（詩篇39：6）。 {COL 1284.3}

彼は今の自分にとって価値のある唯一の物を、手に入れていなかった。自己のために生きることによって、彼は、同胞に対する憐れみとなって流れ出ていたはずの神の愛をし

りぞけてきた。こうして、彼は命を拒否したのである。なぜなら、神は愛であり、愛は命だからである。この人は、霊的なものよりも地上のものを選んだ。そして、地上のものと共に、彼は過ぎ行かなければならなかった。「人は栄華のうちに長くとどまることはできない。滅びうせる獣にひとしい」（詩篇49：20）。{COL 1284.4}

「自分のために宝を積んで神に対して富まない者はこれと同じである。」この描写は、いつの時代にも真実である。あなたは、利己的な利益のために計画を立てることも、宝を集めることも、古代バビロンの建設者が建てたような広壮な邸宅を建てることもできよう。しかし、破滅の使者を締め出すことができるほどの高い壁や、がんじょうな門を造ることはできない。バビロン王ベルシャザルは、「盛んな酒宴を設け」、「金、銀、青銅、鉄、木、石などの神々をほめたたえた」（ダニエル5：1、4）。しかし、見えない方の手が、壁に破滅の言葉を書きしるし、敵軍の足音が宮殿の門の中に聞こえたのである。「カルデヤびとの王ベルシャザルは、その夜のうちに殺され」、別の国の王が王位についた（ダニエル5：30）。{COL 1284.5}

自己のために生きることは、滅びることである。貪欲、自己のために利益を求めることは、魂を命から切り離す。物を獲得し、自己に引き寄せようとするのは、サタンの精神である。人々に与え、自己を他の人々の幸福のために犠牲にすることは、キリストの精神である。「そのあかしとは、神が永遠のいのちをわたしたちに賜わり、かつ、そのいのちが御子のうちにあるといりいとである。御子を持つ者はいのちを持ち、神の御子を持たない者はいのちを持っていない」（Ⅰヨハネ5：11、12）。{COL 1284.6}

それゆえ、キリストは言われる。「あらゆる貪欲に対してよくよく警戒しなさい。たといたくさんの物を持っていても、人のいのちは、持ち物にはよらないのである。」{COL 1284.7}

第21章　「大きな淵がおいてあって」

本章は、ルカ16：19～31に基づく {COL 1285.1}

キリストは、金持ちとラザロのたとえをお語りになって、人々が自己の永遠の運命を決定するのは、この世の生涯においてであることをお示しになった。恩恵の期間の間は、神の恵みがすべての人々に与えられている。しかし、もし人々がその機会を自己満足のために逃してしまうならば、彼らは自分を永遠の命から切り離してしまうのである。その後にはもはや恩恵の期間は与えられないのである。自分の選択によって、彼らは自分たちと神との間に越えることのできない淵をつくってしまうのである。 {COL 1285.2}

このたとえは、神を頼りとしなかった金持ちと、神を頼りとした貧しい人との対照を描いている。キリストは、この両者の立場が逆になる時が来ることをお示しになった。この世の財産は少なくても、神に頼り、苦しみに耐える者は、やがて、世の与えうる最高の地位を占めながら、その生涯を神にささげなかった人々よりも高められるのである。 {COL 1285.3}

「ある金持がいた。彼は紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮していた。ところが、ラザロという貧しい人が全身でき物でおおわれて、この金持の玄関の前にすわり、その食卓から落ちるもので飢えをしのごうと望んでいた」とキリストは言われた。 {COL 1285.4}

この金持ちは、公然と、神も人も無視してはばからない、不正な裁判官によって代表されるような人ではなかった。彼はアブラハムの子であると称していた。彼は、こじきに乱暴をすることもなく、また見るのが不愉快だからどこかへ行ってくれとも言わなかった。もし、この人のいやがるあわれなこじきが、金持ちの門の所で、彼の出入りするのを見ることによって、幾分でも慰められるのなら、金持ちは彼がそこにいてはいけないとは言

わなかった。しかし、彼は苦しんでいる兄弟の困窮に対して、利己的で無関心であった。{COL 1285.5}

当時、病人の世話をする病院はなかった。苦しむ者や貧しい者は、人々の助けと同情を受けることができるように、主が富をおゆだねになった人々の目につく所に運ばれて来た。このこじきと金持ちの場合もそうであった。ラザロは助けを大いに必要としていた。なぜなら、彼には友も家庭も金も食物もなかったからである。にもかかわらず、彼はくる日もくる日も、このような状態の下に過ごさねばならなかった。それに反して金持ちは、すべての必要が満たされていた。同胞の苦しみを十分救うことができるのに、彼は、今日多くの者がそうであるように、ただ自分のために生きていた。{COL 1285.6}

今日、わたしたちの身近に、飢え、裸で、家のない者が大勢いる。これらの貧しく、苦しんでいる人々に自分の財産を分け与えない者は、自分に罪の荷を背負わせていることになるが、やがて、それに当面する恐ろしい日がやってくる。すべてのどん欲は偶像崇拝として責められている。すべての利己的な放縦は、神の御目にはいとわしいものである。{COL 1285.7}

神はこの金持ちを神の財産の管理者とされた。このこじきのような者に心を用いることは、彼の義務であった。「あなたは心をつくし、精神をつくし、力をつくして、あなたの神、主を愛さなければならない」「あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない」という命令が与えられていた（申命記6：5、レビ19：18）。この金持ちはユダヤ人であり、神のご命令をよく知っていた。しかし彼は、自分にゆだねられた財産や能力の使途について責任があることを忘れていた。主の祝福は、彼に豊かに与えられていたが、彼はそれを、自分を創造された方ではなく、自分自身をあがめるために、利己的に用いたのであった。彼が豊かであればあるだけ、人類を向上させるために贈り物を用いるべき彼の義務も、それに比例して大きいのであった。これは主のご命令であったが、この金持ちは、神に対する自分の義務を思わなかった。彼は金を貸し、貸したものから利息を取っ

た。しかし、彼は、神が彼に貸してくださったものに対して利息を払わなかった。彼は知識と能力を持っていたが、それらを活用しなかった。彼は神に対する責任を忘れて、自分の力のすべてを快楽のために費やした。日々の娯楽、友人たちの称賛やおせじなど、彼をとり巻くすべてのものは、彼の利己的な楽しみを助長した。彼はあまりにも友人たちとの社交に心を奪われていた。彼は神と協力して、神の恵みの働きに参加する責任を忘れていた。彼は、神のみ言葉を理解し、その教えを実行する機会をもっていたが、彼の選んだ快楽愛好的な社交は、彼の時間をあまりにも取りすぎて、彼は永遠の神を忘れてしまった。{COL 1285.8}

やがて、この2人の人間の状態に変化の起こる時がきた。貧しい人は、日々苦しんだが、忍耐強く、静かに耐えた。そのうちに、彼は死に、葬られた。彼のために悲しむ者もなかった。しかし、苦しみに耐えることによって、彼はキリストのために証しをし、信仰の試みに耐えた。そして死んだ時、彼は、天使によってアブラハムのふところに連れていかれたと述べられている。{COL 1286.1}

ラザロはキリストを信じて、苦難の中にいる貧しい人々を代表している。ラッパが鳴り、墓にいるすべての者が、キリストの声を聞いて出てくる時、彼らはその報いを受ける。彼らの神に対する信仰は、単なる理論ではなく、真実のものであったからである。{COL 1286.2}

「金持も死んで葬られた。そして黄泉（よみ）にいて苦しみながら、目をあげると、アブラハムとそのふところにいるラザロとが、はるかに見えた。そこで声をあげて言った、『父、アブラハムよ、わたしをあわれんでください。ラザロをおつかわしになって、その指先を水でぬらし、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの火炎の中で苦しみもだえています』。」{COL 1286.3}

キリストは、このたとえでは、人間の立場に立って語っておられる。キリストの話を聞いていた者たちのうち、多くの者が、復活の間には意識のある状態が続くという教えを

信じていた。救い主は、彼らのそのような考えを知っておられて、すでに彼らのいだいている思想を用いて、重要な真理を彼らの心に植えつけようとなさった。彼は、聴衆の前に、彼らが、自分たちの神との真の関係を知るための鏡を置かれた。{COL 1286.4}

彼は、すべての人に明らかにしたいと望まれた思想――人はその持ち物によって評価されるものではないということと、人間の持っているすべての物は、主からただ委託された物としてその人の所有になっていること――を教えるために、そのころ一般に流布していた考え方を利用なさった。これらの賜物の用い方を誤るならば、神を愛し神に信頼する最も貧しくて、最も苦しんでいる人よりも下に置かれることとなるのである。{COL 1286.5}

キリストは、聴衆に、人間は、死後に魂の救いを得ることは不可能であることを理解させようと望まれた。アブラハムは、次のように答えたと述べられている。「子よ、思い出すがよい。あなたは生前よいものを受け、ラザロの方は悪いものを受けた。しかし今ここでは、彼は慰められ、あなたは苦しみもだえている。そればかりか、わたしたちとあなたがたとの間には大きな淵がおいてあって、こちらからあなたがたの方へ渡ろうと思ってもできないし、そちらからわたしたちの方へ越えて来ることもできな。」このように、キリストは、人々が第二の恩恵期間を望んでもむだであることをお示しになった。この世は、永遠のために備えをするために、人々に与えられた唯一の期間である。{COL 1286.6}

この金持ちは、自分がアブラハムの子であるといり考えを捨てず、苦しみの中から、アブラハムに助けを求めている。「父、アブラハムよ、わたしをあわれんでください」と彼は祈った。彼は神に祈らず、アブラハムに祈った。そのことによって、彼は、アブラハムを神よりも上に置いていること、自分が救われるためにアブラハムとの関係にたよっていることを示した。十字架上の強盗は、キリストに祈りをささげた。「あなたが御国の権威をもっておいでになるときには、わたしを思い出してください」と、彼は言った（ルカ

23：42）。すると直ちに答えが与えられた。「（わたしが屈辱と苦痛のうちに十字架にかかっていろ）きょう、よく言っておくが、あなたはわたしと一緒にパラダイスにいるであろう。」しかし、この金持ちはアブラハムに祈り、その願いは聞き入れられなかった。キリストのみが、「イスラエルを悔い改めさせてこれに罪のゆるしを与える」救い主としてあがめられるのである（使徒行伝5：31）。「この人による以外に救はない」（使徒行伝4：12）。 {COL 1286.7}

この金持ちは、生涯を自己の快楽のために過ごし、永遠のための備えをしなかったことに気づいた時は、すでに遅かった。彼は自分の愚かさを認め、自分と同じように、自己の満足のために生き続けるに違いない自分の兄弟たちのことを思った。そこで彼は、求めた。「父よ、ではお願いします。わたしの父の家へラザロをつかわしてください。わたしに5人の兄弟がいますので、こんな苦しい所へ来ることがないように、彼らに警告していただきたいのです。」しかし、「アブラハムは言った、『彼らにはモーセと預言者とがある。それに聞くがよかろう』。金持が言った、『いえいえ、父アブラハムよ、もし死人の中からだれかが兄弟たちのところへ行ってくれましたら、彼らは悔い改めるでしょう』。アブラハムは言った、『もし彼らがモーセと預言者とに耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう』。」 {COL 1287.1}

金持ちがその兄弟たちのために、もっと証拠を与えてくれるように嘆願した時、彼は、もしそのような証拠が与えられても、彼らはその勧めを聞き入れないであろうとはっきり告げられた。彼の要求は神を非難するものだった。それは、あなたがもっと十分にわたしを警告してくださったならば、わたしは今ここにいないであろうにと言っているも同然であった。この願いに答えて、アブラハムは、あなたの兄弟たちは十分に警告されていると答えた。光は彼らに与えられたが、彼らは見ようとしなかった。真理は彼らに示されたが、彼らは聞こうとしなかった。 {COL 1287.2}

「もし彼らがモーセと預言者とに耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであろう」。この言葉は、ユダヤ民族の歴史の中において、真実であることが証明された。キリストの最後の、かつ最大の奇跡は、死んで4日もたったベタニヤのラザロをよみがえらされたことであった。ユダヤ人は、救い主の神性についての、この驚くべき証拠を与えられたが、彼らはそれを拒否した。ラザロはよみがえり、彼らの前で証ししたが、彼らはすべての証拠に対して心をかたくなにし、彼の命を取ろうとさえしたのであった（ヨハネ12：9～11）。{COL 1287.3}

律法と預言者とは、人間の救いのために神がお定めになったものである。これらの証拠に心を向けるべきであるとキリストは自われた。もし彼らが、神のみ言葉にあらわされた神のみ声に耳を傾けないなら、死人の中からよみがえった人の証しにも心を留めはしないであろう。{COL 1287.4}

モーセと預言者に心を留める者は、神がお与えになったもの以上に大きな光を求めはしないであろう。しかし、もし人々が光を拒み、彼らに与えられた機会の価値を認めないならば、彼らは、死からよみがえった人が、メッセージを持って彼らの所にくるようなことがあっても、聞きはしないであろう。彼らは、このような証拠によっても、納得することはないであろう。なぜなら、律法と預言者を拒否する者は、心をかたくなにしてしまうので、すべての光を拒むからである。{COL 1287.5}

アブラハムとこの金持ちとの会話は、比喩的なものである。これから学ぶべき教訓は、すべての人は、要求されている義務を果たすのに十分な光が与えられているということである。人の責任は、その人の与えられた機会と特権に比例するのである。神は、各々に働きをお与えになったのであるが、その働きを果たすのに十分な光と恵みとをすべての人にお与えになる。もし、小さな光が示す義務を人が果たさないならば、さらに大きな光が与えられても、その光に従わず、与えられた祝福を活用しようとしないことを示すだけであろう。「小事に忠実な人は、大事にも忠実である。そして、小事に不忠実な人は大事に

も不忠実である」（ルカ16：10）。モーセと預言者によって啓発されることを拒み、何か驚くべき奇跡が行われることだけを求める者は、もし彼らの望みがかなえられても、納得しはしないであろう。 {COL 1287.6}

金持ちとラザロのたとえは、これらの人々によって代表される2種類の人々が、霊の世界においていかに評価されているかを示している。もし富を不正な方法によって得るのでなければ、金持ちであることは別に罪ではない。金持ちは、富を持っていることを非難されはしない。ただ、ゆだねられた財産を利己的に用いる時に非難されるのである。善をなすために富を用いることによって、神のみくらに富を積むことこそ望ましいことである。このように、永遠の富を求めることに専念する者を貧しくすることは、死でさえできない。 {COL 1287.7}

しかし、宝を自己のために蓄える者は、その蓄えたもののわずかな部分さえ、天へたずさえて行くことはできない。彼は不忠実な家令であったことを示した。彼は、その生涯の間、良い物を持ったが、神に対する義務を忘れていた。彼は天の宝を得ることができなかった。 {COL 1288.1}

多くの特権を持っていた金持ちは、そのわざが未来の世界にまで達し、霊的な特権をますます優れたものとして、自分とともにたずさえて行くように、その賜物を涵養（かんよう）すべきであった人を示している。贖罪の目的は、罪をぬぐい去ることだけでなく、罪の退化力のために失われた霊的賜物を、人間に回復することにある。金銭は来世にたずさえて行くことはできない。金銭はそこでは必要でない。しかし、キリストに魂を導くためになされた良い行いは、天にたずさえられるのである。しかし、主の賜物を利己的に費やし、困っている同胞に助けを与えず、神のみわざの進展のために何もしない者は、造り主をはずかしめるのである。神から盗むことは天の書に記録される。 {COL 1288.2}

金持ちは、金で手に入れられるあらゆるものを持っていたが、神との会計を正しく保って置くところの富を持っていなかった。彼は、自分の所有するものはすべて、自分の物

であるかのように生活した。彼は神の声も苦しむ貧困者の叫びも無視した。しかし遂に、無視することのできない要求が出された。疑う余地もなければ、抵抗することもできない力によって、彼は、もはや彼のものでない財産を手放すように命じられた。かつての金持ちは、全くよりどころのない貧困状態に落とされた。天のはたで織られたキリストの義の衣は、彼をおおうことができない。かつては、紫の衣や細布を着ていた者が、裸にされた。彼の恩恵期間は終わった。彼はこの世に何物もたずさえてこなかった。また彼は、この世から何1つたずさえて行くことはできない。 {COL 1288.3}

キリストは未来の幕をあげて、この光景を、祭司や司たち、学者やパリサイ人たちの前にお示しになった。この世の財貨に富み、神に対して富まぬ人々よ、この光景を見ていただきたい。この光景について深く考えていただきたい。人々の間では高く評価されるものの内にも、神の目には憎むべきものとされるものがある。キリストは「人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか。また、人はどんな代価を払って、その命を買いもどすことができようか」と問うておられる（マルコ8：36、37）。 {COL 1288.4}

たとえのユダヤ民族への適用

キリストが金持ちとラザロのたとえをお語りになった時、ユダヤ民族の中には、この金持ちのようなあわれな状態にあって、主の財貨を利己的な満足のために用い、「あなたがはかりで量られて、その量の足りないことがあらわれた」という宣告を受けようとしている人々が大勢いた（ダニエル5：27）。この金持ちは、物質的、精神的なあらゆる祝福を与えられていたが、これらの祝福を神と協力して用いようとしなかった。ユダヤ民族の場合もそうであった。主はユダヤ人を神聖な真理の保管者とされた。主は彼らを、その恵みのための家令に任じられた。主は彼らにあらゆる霊的物的利益を与え、これらの祝福を分け与えるように要求された。零落した兄弟、門のうちの見知らぬ人、彼らのうちの貧しい人々などの取り扱いに関して、特別の指示が彼らに与えられていた。彼らば自分たちの

利益のためにすべての物を得ようとしてはならず、困窮している者に心をくばり、彼らと物を分かち合うべきであった。神は、彼らの愛と憐れみの行為に応じて、彼らを祝福すると約束された、しかし、この金持ちのように、彼らは、苦しんでいる人類の物 1289質的、霊的窮状を和らげるために、救いの手を差し伸べようとはしなかった。誇りに満たされて、彼らは、自分たちを神に恵まれた選民であると考えた。しかし、彼らは、神に仕えようとも、神を礼拝しようともしなかった。彼らは、自分たちがアブラハムの子孫であるという事実に頼りきっていた。「わたしたちはアブラハムの子孫である」と彼らは誇らかに言った（ヨハネ8：33）。危機が訪れた時、彼らは神と縁を切っていること、またアブラハムが神であるかのように、アブラハムに信頼していたことが明らかにされた。 {COL 1288.5}

キリストは、ユダヤ人たちの、暗くされた心の中に光を輝かそうと望んでおられた。キリストは彼らに、「もしアブラハムの子であるなら、アブラハムのわざをするがよい。ところが今、神から聞いた真理をあなたがたに語ってきたこのわたしを、殺そうとしている。そんなことをアブラハムはしなかった」と言われた（ヨハネ8：39、40）。 {COL 1289.1}

キリストは、血筋というものになんら価値をお認めにならなかった。彼は霊的関係の方が、あらゆる血縁関係にまさるものであるとお教えになった。ユダヤ人は、自分たちはアブラハムの子孫であると主張した。しかし、アブラハムのわざを行わなかったことによって、彼らは、自分たちがアブラハムの真の子でないことを示した。神のみ声に従うことによって、霊的にアブラハムと一致していることを示す者のみが、真の子孫とみなされるのである。このこじきは、人々からいやしめられた階級の者であったが、キリストは、彼を、アブラハムとの親しい交わりに入れる者としてお認めになった。 {COL 1289.2}

金持ちは、あらゆるぜいたくな物で囲まれていたが、全く知識に欠けていて、アブラハムを神の位置に置いた。もし彼が、自分の大きな特権を認め、神の霊の導きのままに心

を従わせていたならば、彼は全く違った状態にあったことであろう。彼が代表した民族の場合もそうであった。もし彼らが彼の召しに応えていたならば、彼らの未来は全く違ったものとなっていたであろう。彼らは真の霊的識別力を示したことであろう。彼らは、富を持っていたから、神はそれを増し加えて、それを全世界の祝福と啓発のために十分なものとされたことであろう。しかし、彼らは、主のご計画から全く離れてしまったので、彼らの生活全体がゆがめられてしまった。彼らは、神の家令として、真理と義に調和して、賜物を用いなかった。彼らは永遠のことを考えていなかった。こうして彼らが不忠実であったために、ユダヤ民族全体が滅びてしまった。 {COL 1289.3}

キリストは、エルサレムの滅亡する時に、ユダヤ人たちが彼の警告を思い出すことを知っておられた。事実その通りであった。災いがエルサレムを襲い、飢餓とあらゆる苦しみが民の上にのぞんだ時、彼らは、これらのキリストのみ言葉を思い出し、そのたとえの意味を理解した。彼らは、神のお与えになった光を世に輝かすことを怠ったことによって、苦しみを自分たちの上に招いたのであった。 {COL 1289.4}

最後の日に

この世の歴史の最後の光景が、この金持ちの最後によって描かれている。この金持ちはアブラハムの子であると言っていたが、アブラハムからは、越えることのできない淵、すなわち、誤った方向に発達した品性によってへだてられていた。アブラハムは神に仕え、信仰と従順の精神をもってそのみ言葉に従った。しかし、金持ちは、神にも、苦しむ人類の必要にも心を留めなかった。彼とアブラハムとの間に定められた大きな淵は、不従順の淵であった。これと同じ道を歩んでいる者が、今日も大勢いる。彼らは、教会員ではあるが改心していない。彼らは教会の礼拝には出席するであろう。彼らは「神よ、しかが谷川を慕いあえぐように、わが魂もあなたを慕いあえぐ」と詩篇を唱えるであろう（詩篇42：1）。しかし、それは偽善である。彼らは極悪の罪人と同様に、神の御目には正しくない者とみなされる。世の快楽の刺激を求め、虚栄心に満ちた者は、神に仕えることはで

きない。たとえの中の金持ちのように、そのような人は、肉の欲と戦おうとする気持ちを持っていない。彼は食欲をほしいままにしたいと願う。彼は罪の生活の中にい 1290ることを選ぶ。彼は突然、死によって取り去られ、サタンと力を合わせて、一生の間に形成した品性を持って墓に下る。墓の中では、善であれ悪であれ、彼は何物をも選ぶ力を持たない。なぜなら、人は死ねば、その思想も滅びるからである（詩篇146：4、伝道の書9：5、6）。{COL 1289.5}

神のみ声が死者を呼び起こす時、彼は、生きていた時持っていたのと同じ食欲や情欲、同じ趣好を持って墓から出てくる。すでにあらゆる機会が与えられ、あらゆる便益が提供されていた時、造り変えられたいと願わなかった人を、神は再創造するために奇跡を行うことはされない。そのような人は、生涯の間、神を喜びとせず、神のこ用に喜びを見いださなかった。彼の品性は神と調和していない。彼は天の家族の中にいても幸福ではあり得ないのである。{COL 1290.1}

今日、世の中には、自己を義とする人々がいる。彼らは暴食家ではない。彼らは酒飲みではない。彼らは無神論者でもない。しかし、彼らは神のためではなくて、自分のために生きることを願う。彼らは神のことを少しも考えない。そのために、彼らは信仰のない人々と一緒にされるのである。彼らが神の都の門を入ることができたとしても、彼らは命の木にあずかる権利を持つことはできない。なぜなら、神の戒めが、そのすべての要求と共に彼らの前に置かれた時、彼らはそれを拒んだからである。彼らは、この世にあって神に仕えなかった。それゆえ、彼らは来世においても神に仕えることはない。彼らは神のみ前に生きることはできない。彼らは、天国よりは他の場所のほうが好ましいと感じるであろう。{COL 1290.2}

キリストから学ぶということは、彼の恵み、つまり彼の品性を受けることを意味する。しかし、地上において彼らに貴重な機会が与えられていたことと、聖なる感化がいかに価値あるものであったかを認めず、それらを用いなかった者は、天の聖なる礼拝にあずか

るにふさわしい者ではない。彼らの品性は、神の形にならって形造られていない。彼ら自身の怠慢によって、彼らは、何物も橋渡しのできない淵を形造ったのである。彼らと義人との間には、大きな淵が横たわっている。 {COL 1290.3}

第22章　言葉よりは行動

本章は、マタイ21：23～32に基づく {COL 1290.4}

「『あなたがたはどう思うか。ある人にふたりの子があったが、兄のところに行って言った、「子よ、きょう、ぶどう園へ行って働いてくれ」。すると彼は「おとうさん、参ります」と答えたが、行かなかった。また弟のところにきて同じように言った。彼は「いやです」と答えたが、あとから心を変えて、出かけた。このふたりのうち、どちらが父の望みどおりにしたのか』。彼らは言った、『あとの者です』。」 {COL 1290.5}

山上の説教の中で、キリストは、「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである」と言われた（マタイ7：21）。誠実を示すものは、言葉ではなく、行為である。キリストは、あなたがたは、なんのすぐれたことを言うだろうかとは言われず、「なんのすぐれた事をしているだろうか」と言われるのである（マタイ5：47）。「もしこれらのことがわかっていて、それを行うなら、あなたがたはさいわいである」というキリストのみ言葉は意味深い（ヨハネ13：17）。言葉には、それにふさわしい行為が伴わなければ価値がない。これが2人の息子のたとえによって教えられている教訓である。 {COL 1290.6}

このたとえは、キリストがその死に先だって、最後にエルサレムを訪問された時に語られた。彼は、神殿で売り買いする者たちを追い出された。彼のみ声は、神の力をもって彼らの心に語りかけた。人々は驚き恐れて、言いわけも抵抗もせずに彼の命令に従った。 {COL 1290.7}

恐怖がおさまった時、祭司や長老たちは、神殿にもどって来て、キリストが病人や死にかけている人々をいやしておられるのを見た。彼らは、喜びの声と賛美の歌を聞いた。神殿の中では、いやされて健康になった子供たちが、しゅろの枝をうち振り、ダビデの子

にホサナと歌っていた。幼児は、回らない舌で、力強いいやし主を賛美していた。それなのに、こうしたすべての事柄も、祭司や長老たちの偏見やしっとを打ち破るには十分でなかったのである。 {COL 1290.8}

次の日、キリストが宮で教えておられると、祭司長たちや民の長老たちがイエスのもとに来て言った、「何の権威によって、これらの事をするのですか。だれが、そうする権威を授けたのですか。」 {COL 1291.1}

祭司や長老たちは、キリストの権能について確かな証拠を見ていた。彼が宮を清められた時、天の権威がそのみ顔からひらめくのを彼らは目撃した。彼らは、そのみ言葉によって立つ権威に抵抗することができなかった。再びその驚くべきいやしの行為によって、キリストは、彼らの疑問にお答えになった。彼は、その権威について、議論の余地のない証拠をお与えになったのであった。しかし、彼らの欲したのは証拠ではなかった。祭司や長老たちは、イエスにメシヤであることを宣言させておいて、そのみ言葉を悪く解釈して人々を扇動して、彼に立ち向かわせようとしていた。彼らは、キリストの影響力を失わせ、彼を殺そうと望んでいた。 {COL 1291.2}

イエスは、もし彼らがご自分のうちに神を認めることができず、そのみわざのうちにイエスの神性の証拠を見ることができなければ、自分はキリストであるとイエスがご自身について証しをしても、彼らが信じないことを知っておられた。その答えにおいて、イエスは、彼らが引き起こそうとしていた問題を避けて、非難を彼ら自身に向けられた。 {COL 1291.3}

「わたしも1つだけ尋ねよう。あなたがたがそれに答えてくれたなら、わたしも、何の権威によってこれらの事をするのか、あなたがたに言おう。ヨハネのバプテスマはどこからきたのであったか。天からであったか、人からであったか」と彼は言われた。 {COL 1291.4}

祭司やつかさたちは当惑した。「彼らは互に論じて言った、『もし天からだと言えば、では、なぜ彼を信じなかったのか、とイエスは言うだろう。しかし、もし人からだと言えば、群衆が恐ろしい。人々がみなヨハネを預言者と思っているのだから』。そこで彼らは、『わたしたちにはわかりません』と答えた。するとイエスが言われた、『わたしも何の権威によってこれらの事をするのか、あなたがたに言うまい。』」 {COL 1291.5}

「わたしたちにはわかりません。」この答えは偽りであった。祭司たちは、自分たちのおかれた立場を知っていたが、言い逃れをするために偽ったのである。バプテスマのヨハネはすでに現れて、彼らが今、権威の有無を論じているイエスについて証しを立てたのであった。彼はイエスをさし示して、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と言った（ヨハネ1：29）。彼はイエスにバプテスマをほどこした。バプテスマをお受けになったのち、キリストが祈っておられると、天が開けて、神のみ霊がはとのように彼の上に下り、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」と言う、天からの声が聞こえた（マタイ3：17）。 {COL 1291.6}

祭司やつかさたちは、ヨハネがどれほど、メシヤに関する預言をくり返して語ったかを知り、イエスのバプテスマの時の光景を知りながらも、ヨハネのバプテスマが天からのものであったと言おうとはしなかった。もし彼らが、心で信じている通りに、ヨハネは預言者であると告白するならば、どうして彼らは、ナザレのイエスは神の子であるというヨハネの証しを否定することができたであろうか。また彼らは、ヨハネのバプテスマは人からであったと言うこともできなかった。人々がヨハネは預言者であると信じていたからである。そこで彼らは、「わたしたちにはわかりません」と言ったのである。 {COL 1291.7}

ついで、キリストは、父親と2人の息子のたとえを語られた。父は兄の所に行って言った、「きょう、ぶどう園へ行って働いてくれ。」彼は、「おとうさん、参ります」と答えたが、行かなかった。また弟のところにきて同じように言った。彼は「いやです」と言下

に答えた。彼は従うことを拒み、悪い道に走って悪友の仲間に入ってしまった。しかし、後に悔いて、父の命令に従った。 {COL 1291.8}

このたとえの中で、父は神をあらわし、ぶどう園は教会をあらわしている。2人の息子は、2種類の人々をあらわしている。命令に従うことを拒み、「いやです」と言った息子は、公然と罪のうちに生活し、信心を口にすることもなく、神の律法の課する制限と服従のくびきに従うことを拒否する人々をあらわしている。しかし、これらの人々の多くは、後に悔い改めて、神のご要求に従ったのであった。「悔い改めよ、天国は近づいた」というバプテスマのヨハネのメッセージによって福音が伝えられた時、彼らは悔い改めて、罪を告白した（マタイ3：2）。 {COL 1292.1}

「おとうさん、参ります」と言って、行かなかった息子は、パリサイ人の性格をよくあらわしている。この息子のように、ユダヤの指導者たちは、悔い改めがなんであるかを知らず、強いうぬぼれを持っていた。ユダヤ民族の宗教生活は、うわべだけのものとなっていた。シナイ山で神の声がおきてを宣言した時、すべての民は従うことを誓ったのであった。彼らは、「参ります」と言ったが、行かなかった。キリストがおいでになって彼らの前に律法の原則を示されても、彼らはキリストを拒否した。キリストは、当時のユダヤの指導者たちに、ご自分の権威と神としてのみ力について、十分な証拠をお与えになったのである。彼らは、それを明らかに認めながらも、その証拠を受け入れようとはしなかった。キリストは、彼らが服従の精神を持っていないために、いつまでも信じようとしないのであると言われた。「あなたがたは自分たちの言伝えによって、神の言を無にしている。……人間のいましめを教として教え、無意味にわたしを拝んでいる」とキリストは以前に彼らにおおせになられたことがあった（マタイ15：6、9）。 {COL 1292.2}

キリストの前にいた人々の中には、学者やパリサイ人、祭司やっかさたちがいたが、2人の息子のたとえをお語りになった後で、キリストは聴衆に、「このふたりのうち、どちらが父の望みどおりにしたのか」と質問された。われを忘れて、パリサイ人たちは、「あ

との者です」と答えた。彼らは、それが自分たちを非難していることとは気づかずに、こう言ったのであった。その時キリストのみ口から、非難の言葉が発せられた。「よく聞きなさい。取税人や遊女は、あなたがたより先に神の国にはいる。というのは、ヨハネがあなたがたのところにきて、義の道を説いたのに、あなたがたは彼を信じなかった。ところが、取税人や遊女は彼を信じた。あなたがたはそれを見たのに、あとになっても、心をいれ変えて彼を信じようとしなかった。」{COL 1292.3}

バプテスマのヨハネは、来て真理を宣べ伝えた。罪人はその説教によって、罪を悟り、悔い改めた。これらの人々は、自己を義として、厳粛な警告を拒否する者たちよりも先に、天国に入るであろう。取税人や遊女は無知であった。それに反して、知識のあるこれらの人々は真理の道を知っていた。それにもかかわらず、彼らは、神のパラダイスへの道を歩もうとはしなかった。彼らにとって命から命へいたる香りであるはずの真理は、死から死へいたる香りとなった。自己を嫌悪した公然たる罪人たちは、ヨハネの手によってバプテスマを受けた。しかし、これらの教師たちは偽善者であった。彼らのかたくなな心は、真理を受け入れる妨げとなった。彼らは、罪を悟らせる神の御霊の力に抵抗した。彼らは神の戒めに従わなかった。{COL 1292.4}

キリストは彼らに、あなたがたは天国に入ることはできないとは言われなかった。キリストは、彼らが天国に入るのを妨げているものは、彼ら自身か作り出したものであることをお示しになった。これらユダヤの指導者たちに対して、戸はなお開かれていた。招きはまだ発せられていた。キリストは、彼らが罪を悟り、改心するのを見たいと望んでおられた。{COL 1292.5}

イスラエルの祭司や長老たちは、宗教的儀式を行って日々を過ごした。彼らはこうした宗教的儀式を神聖なものと考えるあまり、俗事とは全く別のものにしていた。従って彼らの生活は、全く宗教的なものと思われていた。しかし彼らは、世の人に信心深く敬虔な者と思われたいと願い、人々に見てもらいたいために儀式を行った。服従すると口では言

いながら、彼らは神に服従していなかった。彼らは、自分たちが教えていると公言している真理を、行う者ではなかった。 {COL 1292.6}

キリストは、バプテスマのヨハネを預言者たちのうちで最も偉大なものであると言明され、その聴衆に、ヨハネが神からつかわされた使者であるという証拠が、彼らに十分与えられていることをお示しになった。荒野の説教者の言葉には力があった。彼らはメッセージを断固として伝え、祭司やつかさたちの罪を責め、彼らに天国のわざを行うように命じた。また、命じられたわざを行わず、神の権威を無視することがいかに罪深いものかを、ヨハネは彼らに小した。彼は罪と妥協しなかった。そして、多くの者か不義を離れたのである。 {COL 1293.1}

ユダヤの指導者たちの口にするところが真実のものであったならは、彼らはヨハネの証しを受け入れ、イエスをメシヤと信じたことであろう。しかし、彼らは、悔い改めと義の実を示さなかった。彼らが軽べつした者たちが、彼らより先に天国へと進んでいた。 {COL 1293.2}

たとえの中で、「参ります」と言った息子は、忠実で従順なように見せかけたが、やがて、彼の言葉が真実でないことがわかった。彼は、父に対して真の愛を持っていなかった。そのように、パリサイ人も自己の清さを誇っていたが、試みられると、欠けていることが明らかにされた。彼らは自分たちの利益となると考えられる時には、律法の要求を苛酷なものとしたが、彼ら自身に服従が求められると、巧妙な詭弁を弄（ろう）して、神の戒めの力を弱めたのである。彼らについて、キリストは、「彼らのすることには、ならうな。彼らは言うだけで、実行しないから」と言われた（マタイ23：3）。彼らは、神に対しても、人に対しても、本当の愛を持っていなかった。神は、世を祝福するために、彼らが神の協力者となるように、彼らを召されたのであった。しかし、彼らは、口ではその召しを受け入れながら、行為においては、服従を拒んでいた。彼らは自己に信頼し、自己の善良さを誇ったか、神の戒めを無視した。彼らは、神が彼らにお命じになったわざを行お

うとしなかった。主は彼らの罪のゆえに、この不従順な民を絶縁しようとしておられた。{COL 1293.3}

自分自身を義とすることは真の義ではない。それにすがりつく者は、恐ろしい欺瞞におちいることになるだろう。今日、多くの者が、神の戒めに従っていると言いながら、その心の中には、他の人々に対して流れ出る神の愛を持っていない。キリストは、主ご自身と一体となって、世を救うみわざにたずさわるように彼らをお召しになる。しかし、彼らは、「おとうさん、参ります」と言うことだけで満足している。彼らは行かないのである。彼らは、神の働きをしている者と協力しない。彼らはなまけ者である。不忠実な息子のように、彼らは神に偽って約束をする。教会の厳粛な契約をすることによって、彼らは、神のみ言葉を受け入れ、それに従うこと、神のご用に自己をささげることを誓った。しかし、彼らは、これを行わないのである。口では、神の子であると称するが、生活と品性においては、その関係を否定するのである。彼は意志を神に服従させていない。彼らの生活は偽りである。{COL 1293.4}

彼らは、それが犠牲を必要としない場合には、服従の約束を守るように見える。しかし、克己や犠牲が要求されたり、十字架がかかげられるのを見ると、彼らはしりごみするのである。そして、義務についての確信は薄らぎ、神の戒めを知りつつ犯すことが習慣となる。耳は神のみ言葉を聞くことであろう。しかし、霊的知覚力はもはやない。心はかたくなになり、良心はまひしている。{COL 1293.5}

キリストに対してはっきりした敵意をあらわしていないからといって、キリストに仕えていると思い違えてはならない。わたしたちは、このように考えて自分の心を欺くのである。時であれ、財産であれ、そのほかどんな神のおゆだねになった賜物であれ、神が神のご用に用いるようにわたしたちにお与えになった物を、自分のために用いることは神に敵することになるのである。{COL 1293.6}

サタンは、自己の勢力を強め、魂を自分の側にかち取るために、クリスチャンと称する者の、ものうくねむたげで怠惰なところを用いるのである。自分はキリストのために実際の働きはしていないが、キリストの側にあると考えている多くの人は、敵に有利な立場を与えているのである。主のための勤勉な働き人とならないことによって、あるいは義務を果たさず、み言葉を語らずにいることによって、彼らは、キリストのためにかち得られたはずの魂を、サタンが支配するままにさせているのである。{COL 1293.7}

わたしたちは、怠慢や無為であって救われることはできない、真に改心した人が、無力な役に立たない生活を送ることはないのである。慢然と天国に流れつくというようなことは、あり得ない。なまけ者はそこに入ることはできない。もしわたしたちが、天国に入ろうと努力しないならば、またもしわたしたちが、天国の律法を構成しているものを熱心に学ぼうとしないならば、それにあずかるにふさわしくないのである。地上において神と協力しようとしない者は、天国においても神と協力しないであろう。彼らを天国に連れて行くことは安全ではないであろう。{COL 1294.1}

神の言葉を知りながら、それに従おうとしない者よりも、取税人や罪人の方に望みがある。自分が罪人であることを知り、その罪をおおわず、神のみ前に、身も心も汚れていることに気づく者は、永遠に天国から切り離されるのではないかとおそれをいだくのである。その人は、病人である自分の状態を認め、「わたしに来る者を決して拒みはしない」と言われた偉大な医者のいやしを求める（ヨハネ6：37）。このような人々を主は、そのぶどう園の働き人としてお用いになることができる。{COL 1294.2}

初め、父の命令に従わなかった息子を、キリストは非難もなさらなかったし、また賞賛もなさらなかった。この第一の息子のように服従しない人々は、そういう態度を取ったからといって、それは名誉なことではない。彼らの率直さは徳と見なされるべきではない。ただその率直さが、真理と神聖によって清められるならば、人々をキリストのための大胆な証し人とするであろう。しかし、罪人が、それを生来の状態のままで用いるならば、

それは、侮べつ的であり、反抗的であり、ほとんど冒瀆と言ってよいものである。人が偽善者でないということは、その人の罪を軽くするものではない。聖霊が心に訴える時、即刻これに応じることが、わたしたちにとって一番安全である。「きょう、ぶどう園へ行って働いてくれ」という召しが来るとき、その招きを拒んではならない。「きょう、み声を聞いたなら、あなたがたの心を、かたくなにしてはいけない」（ヘブル4：7）。服従を延ばすことは安全てはない。あなたは2度と招きを聞かないかも知れない。 {COL 1294.3}

また、一時罪を心にいだいても、あとで、容易にそれを捨てることができるなどとだれも考えてはならない。そうはいかないのである。心にいだくすべての罪は、性格を弱め、習慣を強める。肉体的、知的、道徳的随落がその結果となってあらわれる。人は犯した悪を悔い、正しい道を歩もうとすることであろうが、ひとたび、悪となれ親しんだことは、善と悪との識別を困難にする。形造られた悪習慣によって、サタンは幾度も幾度も攻撃してくるのである。 {COL 1294.4}

「きょう、ぶどう園へ行って働いてくれ」という命令によって、すべての人の誠実さが試みられる。言葉だけでなく行為が伴うであろうか。召された者は、その持つすべての知識を用い、忠実に、私心なく、ぶどう園の所有者のために働いているであろうか。 {COL 1294.5}

使徒ペテロは、わたしたちがどのように働くべきかについて、教えている。彼はこう言っていろ。「神とわたしたちの主イエスとを知ることによって、恵みと平安とが、あなたがたに豊かに加わるように。いのちと信心とにかかわるすべてのことは、主イエスの神聖な力によって、わたしたちに与えられている。それは、ご自身の栄光と徳とによって、わたしたちを召されたかたを知る知識によるのである。また、それらのものによって、尊く、大いなる約束がわたしたちに与えられている。それは、あなたがたが、世にある欲のために滅びることを免れ、神の性質にあずかる者となるためである。それだから、あなた

がたは、力の限りをつくして、あなたがたの信仰に徳を加え、徳に知識を、知識に節制を、節制に忍耐を、忍耐に信心を、信心に兄弟愛を、兄弟愛に愛を加えなさい」（Ⅱペテロ1：2～7）。{COL 1294.6}

もしあなたが、あなたの魂というぶどう園を忠実に耕すならば、神はあなたを、ご自身と共に働く者としておられるのである。あなたは、自分のためだけでなく、他の人々のためにも、なすべき働きがあるであろう。教会をぶどう園にたとえることによって、キリストは、わたしたちの同情と働きの対象を、教会内部の者にのみ限るようにお教えになったわけではない。主のぶどう園は広げなければならない。働きの場は全世界に広げられることを主は望んでおられる。わたしたちが神の教えと恵みを受ける時、尊い作物をいかに育てるべきかについての知識を、他の人々に分け与えなければならない。そうすることによって、わたしたちは主のぶどう園を拡張することができるのである。神は、わたしたちの信仰、愛、忍耐の証拠を見たいと待っておられる。神は、わたしたちが地上の神のぶどう園で有能な働き人となるために、あらゆる霊的便宜を活用しているかどうかを見ておられる。それは、アダムとエバが罪のために追放された神のパラダイス、エデンの住居にわたしたちが入れるようになるためである。{COL 1294.7}

神は、神の民に対して父としての関係に立っておられる。そして、わたしたちに、父としての神に忠実に奉仕することを要求しておられる。ここでキリストの生涯を考えてみよう。キリストは、人類の頭として立つとともに、父なる神に奉仕なさった。こうして、すべての人の子らのとるべき道を示す模範となられた。神は、キリストのような服従を今日の人々に求めておられる。キリストは父なる神に、愛と喜びと自由をもってお仕えになった。「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」と宣言された（詩篇40：8）、キリストは、なすべき働きを完成するためには、どんな犠牲も大き過ぎるとは考えず、どんな苦労もつら過ぎるとはお思いにならなかった。12才の時、彼は「わたしが自分の父の業をつとめている（詳訳聖書）ことを、ご存じなかったのですか」と自われた（ルカ2：49）。彼はすでに召しを聞き、働

きに着手しておられたのであった。「わたしの食物というのは、わたしをつかわされたかたのみこころを行い、そのみわざをなし遂げることである」と、彼は言われた（ヨハネ4：34）。{COL 1295.1}

このように、わたしたちも神に仕えるべきである。最高の標準に基づいて服従する者こそ仕えていると言えるのである。神の息子、娘となろうと思う者は、神、キリスト、天使たちと共に働く者であることを示さなければならない。これは、すべての人にとってのテストである。彼に忠実に仕える者について、主は、「彼らはわたしが手を下して事を行う日に、わたしの者となり、わたしの宝となる。また人が自分に仕える子をあわれむように、わたしは彼らをあわれむ」と言っておられる（マラキ3：17）。{COL 1295.2}

み摂理のうちに神がお働きになるのは、人々を試式みて、人々に品性を発達させる機会を与えることである。それによって神は、彼らが神の命令に従うかどうかを試されるのである。善行によって神の愛を買い取ることはできないが、それはわたしたちが愛を持っていることをあらわすのである。もしわたしたちが、神に意志をささげるならば、わたしたちは、神の愛を得ようとして働くようなことはしないであろう。神の愛を、価なくして与えられる賜物として心に受け入れるならば、神に対する愛の心から、喜んで神の戒めに従うようになる。{COL 1295.3}

今日、世界にはただ2種類の人々しかいない。さばきの時にもただ2種類の人々が認められるだけである。つまり、神の律法を犯す人々とそれに従う人々とである。キリストは、わたしたちが忠実であるか不忠実であるかをためす試金石を与えておられる。彼は言われた。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。……わたしのいましめを心にいだいてこれを守る者は、わたしを愛する者である。わたしを愛する者は、わたしの父に愛されるであろう。わたしもその人を愛し、その人にわたし自身をあらわすであろう。……わたしを愛さない者はわたしの言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉は、わたしの言葉ではなく、わたしをつかわされた父の言葉である。

」「もしわたしのいましめを守るならば、あなたがたはわたしの愛のうちにおるのである。それはわたしがわたしの父のいましめを守ったので、その愛のうちにおるのと同じである」（ヨハネ14：15、21、24、15：10）。{COL 1295.4}

第23章　主のぶどう園

本章は、マタイ21：33～44に基づく {COL 1296.1}

ユダヤ民族

2人の息子のたとえに引き続いて、ぶどう園のたとえが語られた。キリストは前のたとえで、従順がいかに重要であるかということをユダヤの教師たちにお教えになった。そして、後のたとえでイスラエルに与えられた豊かな祝福をさし示し、それによって、神にはイスラエルに従順をお求めになる権利のあることを明らかにされた。主は、輝かしい神のみ旨を示されたが、それは彼らが従順であれば成就したはずのものであった。主は未来のベールを取り去り、ユダヤ民族が神のみ旨を果たさなかったために、主の祝福を失い、自らの上に滅亡を招いていることをお示しになった。 {COL 1296.2}

「ある所に、ひとりの家の主人がいたが、ぶどう園を造り、かきをめぐらし、その中に酒ぶねの穴を掘り、やぐらを立て、それを農夫たちに貸して、旅に出かけた」とキリストは言われた。 {COL 1296.3}

このぶどう園の描写は、預言者イザヤによっても与えられている、「わたしはわが愛する者のために、そのぶどう畑についてのわが愛の歌をうたおう。わが愛する者は土肥えた小山の上に、1つのぶどう畑をもっていた。彼はそれを掘りおこし、石を除き、それに良いぶどうを植え、その中に物見やぐらを建て、またその中に酒ぶねを掘り、良いぶどうの結ぶのを待ち望んだ」（イザヤ5：1、2）。 {COL 1296.4}

農夫は荒野の中から土地の一画を選び、それにかきをめぐらし、それを開き、耕し、そこに特に選び出したぶどうを植えて、豊かな収穫を期待する。未開の荒地よりはすぐれたこの土地が、その栽培に要した労苦の実を結ぶことを農夫は待望する。そのように神は世から1つの民を選び、これをキリストによって教育し薫陶された。預言者は「万軍の主のぶどう畑はイスラエルの家であり、主が喜んでそこに植えられた物は、ユダの人々であ

る」と言っている（イザヤ5：7）。神はこの民に大きな特権を与え、ご自分に満ち満ちている富によって彼らを豊かに祝福された。神は彼らが実を結ぶことを期待された。彼らはみ国の精神をあらわすべきであった。堕落した邪悪な世界のただ中にあって、彼らは神のこ品性をあらわすべきであった。 {COL 1296.5}

彼らは主のぶどう園として、異教民族とはまったく違った実を結ばなければならなかった。これら偶像礼拝の諸国民は、ただ悪ばかりに走っていた。彼らは暴虐、犯罪、強欲、圧制を行って、はかり知れぬ堕落のどん底に沈んでいた。腐食した木の結ぶ実は、非道、退廃、悲惨であった。神のお植えになうぶどうの木になる実は、これとはまったく違ったものでなければならなかった。 {COL 1296.6}

神がモーセに教えられたような神のご品性をあらわすことは、ユダヤ民族の特権であった。「どうぞあなたの栄光をわたしにお示しください」というモーセの祈りに答えて、主は「わたしはわたしのもろもろの善をあなたの前に通らせ……るであろう」と約束なさった（出エジプト33：18、19）。「主は彼の前を過ぎて宣べられた。『主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、いつくしみと、まこととの豊かなる神、いつくしみを千代までも施し、悪と、とがと、罪とをゆるす者』」（出エジプト34：6、7）。これこそ神がその民に望まれた実であった。彼らは純潔な品性と、清い生活と、恵みといつくしみとあわれみとで、「主のおきては完全であって、魂を生きかえらせる」ことを示さなければならなかった（詩篇19：7）。 {COL 1296.7}

ユダヤ民族を通して、豊かな祝福を全人類に与えることが神のみ旨であった。イスラエルを通して、神の光を令世界に輝かせる道が備えられなければならなかった。世界の諸国は、堕落した習慣におちいることによって神の知識を失っていた。しかし、憐れみある神は彼らを滅ぼしたりなさらなかった。神は、教会を通して、神を知る機会を彼らに与えようと意図なさった。神は、神の民を通してあらわされろ原則が、人間の中に神の道徳的なみかたちを回復する手段となるように計画された。 {COL 1296.8}

神が偶像礼拝をしていた親族のうちからアブラハムを呼び出してカナンの地に住むようにお命じになったのは、このみ旨を果たすためであった。「わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう」と神は言われた（創世記12：2）。{COL 1297.1}

アブラハムの子孫のヤコブとその子らはエジプトに移されたが、それは彼らがこのよこしまな大国の中にあって、神のみ国の原則をあらわすためであった。ヨセブの高潔さと、全エジプト国民の生命を救ったあの驚くべき働きは、キリストの生涯を代表したものであった。モーセをはじめ、その他多くの人々は、神を証しする証人であった。{COL 1297.2}

主は、イスラエルをエジプトから導き出して、再び主の力と憐れみをお示しになった。奴隷の境遇からイスラエルの人々を解放するという驚くべきみわざと、彼らを荒野の旅路の間お導きになったこととは、ただ単に彼らのためばかりではなかった。それはまた周囲の諸国に対して、実物教訓となるためであった。主は人間のあらゆる権威と偉大さをしのぐお方として、ご自分をあらわされた。神の民のために神が行われたしるしと不思議とは、自然を超越した神の力を示し、いかに偉大な自然崇拝者をも越えた神の力を示した。神は終わりの時代に地上をお通りになるのであるが、それと同じように、高慢なエジプトの地を過ぎゆかれた。この偉大な「わたしは有る」といりお方は、火と嵐と地震と死のうちに神の民をあがなわれた。神は彼らを奴隷の地から連れ出された。神は、「あの大きな恐ろしい荒野、すなわち火のへびや、さそりがいて、水のない、かわいた地」の旅を導かれた（申命記8：15）。神は「堅い岩」から水を出し、「天の穀物」で彼らを養われた（詩篇78：24）。「主の分はその民であって、ヤコブはその定められた嗣業である。主はこれを荒野の地で見いだし、獣のほえる荒れ地で会い、これを巡り囲んでいたわり、目のひとみのように守られた。わしがその巣のひなを呼び起し、その子の上に舞いかけり、その羽をひろげて彼らをのせ、そのつばさの上にこれを負うように、主はただひとりで彼を導かれて、ほかの神々はあずからなかった」とモーセは言った（申命記32：9～12）。こ

うして神は、いと高き者の陰に宿らせるために、彼らをみもとに引き寄せられたのである。 {COL 1297.3}

キリストは、荒野をさすらうイスラエルの子らの導き手であった。昼は雲の柱、夜は火の柱によって、主は彼らを導かれた。主は彼らを荒野の危険から守って約束の地に導き入れ、神を認めない万国の民の見守るうちに、自ら選んだご自分の所有として、また主のぶどう園としてイスラエルの国の基をおすえになった。 {COL 1297.4}

この民に神の託宣がゆだねられた。彼らは、真理と正義と純潔という永遠の原則、すなわち、神の律法によって周りを囲まれていた。これらの諸原則に従順であれば、彼らは守られるのであった。従順でさえあれば、罪の習慣によって自らを滅ぼすことがないからである。そして、国のまん中には、ちょうどぶどう園のやぐらのように、聖なる神殿が置かれていた。 {COL 1297.5}

キリストが彼らの指導者であった。キリストは、荒野で彼らと共におられたように、今もなお、彼らを教え導くお方であった。幕屋と神殿において、キリストの栄光は贖罪所の上の聖なるシェキナ（光雲）となって宿っていた。主は彼らのために、豊かな愛と忍耐をたえず現しておられた。 {COL 1297.6}

神は、その民イスラエルを、ほまれとし、栄光としようと望まれた。あらゆる霊的な便宜が彼らに与えられた。彼らが神の代表者にふさわしい品性を形成するために役立つものは何であっても、差し控えることなく神から与えられていた。 {COL 1297.7}

神の律法に従順であることは、世界の諸国の前で彼らに驚嘆すべき繁栄を得させるものであった。すべての巧みなわざをなす知恵と技量を与えることのできる神は、いつまでも彼らの教師となり、神の律法に対する従順を通して彼らを高められるのであった。彼らは、もし従順であれば、他の諸国を襲った疾病から守られ、豊かな知性に恵まれるのであった。神の栄光と尊厳と大能は、彼らの繁栄の中にあらわされ、彼らは祭司と王の国とな

るのであった。神は彼らを、地上最大の国家とするためのあらゆる必要なものを提供しておられた。 {COL 1297.8}

キリストはモーセを通して、非常に明確に神のみ旨を示し、どうすれば彼らが繁栄するか、その条件を明らかにしておられた。彼は言われた、「あなたはあなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地のおもてのすべての民のうちからあなたを選んで、自分の宝の民とされた……。それゆえあなたは知らなければならない。あなたの神、主は神にましまし、真実の神にましまして、彼を愛し、その命令を守る者には、契約を守り、恵みを施して千代に及ば……れることを……。それゆえ、きょうわたしがあなたに命じる命令と、定めと、おきてとを守って、これを行なわなければならない。あなたがたがこれらのおきてを聞いて守り行なうならば、あなたの神、主はあなたの先祖たちに誓われた契約を守り、いつくしみを施されるであろう。あなたを愛し、あなたを祝福し、あなたの数を増し、あなたに与えると先祖たちに誓われた地で、あなたの子女を祝福し、あなたの地の産物、穀物、酒、油、また牛の子、羊の子を増されるであろう。あなたは万民にまさって祝福されるであろう……。主はまたすべての病をあなたから取り去り、あなたの知っている、あのエジプトの悪疫にかからせない……であろう」（申命記7：6、9、11～15）。 {COL 1298.1}

もし神の戒めを守るなら彼らに最上の穀物を得させ、彼らのために岩から蜜を出そうと神は約束された。また長寿をもって満ち足らせ、ご自分の救いを示そうと約束された。 {COL 1298.2}

アダムとエバは神への不従順によってエデンを失い、全地は罪のためにのろわれた。だが、もし神の民が神の教えに従うなら、その土地は豊饒と美を回復するのであった。神は、自ら土地の耕作についての教えを、彼らにお与えになった。だから、彼らは回復のために神と協力しなければならなかった。こうして神の支配下にあって、全地が霊的真理の実物教訓となるのであった。神の自然の法則に従うことによって、地がその宝をうみ出す

ように、神の道徳律に従うことによって、民の心は神のご品性を反映できるのであった。異邦人も、生ける神に仕えて、これを拝する者たちの優越を認めることであろう。{COL 1298.3}

モーセは言った、「わたしはわたしの神、主が命じられたとおりに、定めと、おきてとを、あなたがたに教える。あなたがたがはいって、自分のものとする地において、そのように行うためである。あなたがたは、これを守って行わなければならない。これは、もろもろの民にあなたがたの知恵、また知識を示す事である。彼らは、このもろもろの定めを聞いて、『この大いなる国民は、まことに知恵あり、知識ある民である』と言うであろう。われわれの神、主は、われわれが呼び求める時、つねにわれわれに近くおられろ。いずれの大いなる国民に、このように近くおる神があるであろうか。また、いずれの大いなる国民に、きょう、わたしがあなたがたの前に立てるこのすべての律法のような正しい定めと、おきてとがあるであろうか」（申命記4：5～8）。{COL 1298.4}

イスラエルの子らは、神が彼らのために定められた地域を、ことごとく占有することになっていた。真の神への礼拝と奉仕を拒む諸民族は、立ちのかされるのであった。しかし、イスラエルが神のご品性をあらわすことによって、人々が神に引きつけられることが神のみ旨であった。全世界に、福音の招きが与えられなければならなかった犠牲制度の教えを通して、キリストは諸国民の前に掲げられ、それを見あげる者はすべて生きることができるのであった。カナン人ラハブやモアブ人ルツのように、偶像礼拝から真の神の礼拝へ立ち帰った者はみな、神の選民に加えられるのであった。イスラエルは人数が増えるにしたがってその境界をひろげ、彼らの国は全世界を包含するに至るはずであった。{COL 1298.5}

神は万国の民を、ご自分の憐れみある統治下に引き寄せたいと望まれた。神は地球を、喜びと平和でみたしたいとお望みになった。神が人をお造りになったのは、人を幸福に

するためであった。そして、人の心を天の平和でみたしたいと願っておられる。神 は地上の家族が天の一大家族の象徴となるように望んでおられる。{COL 1298.6}

しかし、イスラエルは神のみ旨を成就しなかった。「わたしはあなたを、まったく良い種のすぐれたぶどうの木として植えたのに、どうしてあなたは変って、悪い野ぶどうの木となったのか」と主は言明なさった（エレミヤ2：21）。「イスラエルはむなしいぶどうの木であって、自分自身のために実を結ぶ」（ホセア10：1英語欽定訳）。「それで、エルサレムに住む者とユダの人々よ、どうか、わたしとぶどう畑との間をさばけ。わたしが、ぶどう畑になした事のほかに、何かなすべきことがあるか。わたしは良いぶどうの結ぶのを待ち望んだのに、どうして野ぶどうを結んだのか。それで、わたしが、ぶどう畑になそうとすることを、あなたがたに告げる。わたしはそのまがきを取り去って、食い荒されるにまかせ、そのかきをとりこわして、踏み荒されるにまかせる。わたしはこれを荒して、刈り込むことも、耕すこともせず、おどろと、いばらとを生えさせ、また雲に命じて、その上に雨を降らさない……。主はこれに公平を望まれたのに、見よ、流血。正義を望まれたのに、見よ、叫び」（イザヤ5：3～7）。{COL 1299.1}

主はモーセを通して、不従順であればその結果がどんなものかをその民に示しておられた。彼らは、もし契約を守ろうとしないなら、自分自身を神の生命から遮断することになり、神の祝福はもはや彼らに臨むことができない。モーセはこう言った、「あなたは、きょう、わたしが命じる主の命令と、おきてと、定めとを守らず、あなたの神、主を忘れることのないように慎まなければならない。あなたは食べて飽き、麗しい家を建てて住み、また牛や羊がふえ、金銀が増し、持ち物がみな増し加わるとき、おそらく心にたかぶり、あなたの神、主を忘れるであろう……。あなたは心のうちに『自分の力と自分の手の働きで、わたしはこの富を得た』と言ってはならない……。もしあなたの神、主を忘れて他の神々に従い、これに仕え、これを拝むならば、ーーわたしはきょう、あなたがたに警告する。ーーあなたがたはきっと滅びるであろう。主があなたがたの前から滅ぼし去られる

国々の民のように、あなたがたも滅びるであろう。あなたがたの神、主の声に従わないからである」（申命記8：11～14、17、19、20）。{COL 1299.2}

ユダヤ人は、この警告をかえりみなかった。彼らは神を忘れ、神の代表者としての特権を見失った。彼らがどんなに祝福されても、それは世界になんの祝福ともならなかった。彼らの特権はことごとく、自分たちの名誉を高めることに当てられた。彼らは神の要求なさる奉仕をおこたり、同胞に宗教上の指導と聖なる模範をたれることをしなかった。彼らは洪水前の世界の民と同じく、その邪悪な心が考え出すままに行動していた。こうして彼らは「これは主の神殿だ、主の神殿だ、主の神殿だ」と言いながら、聖なる事柄を世俗的なものと化すとともに、神の品性を誤ってあらわし、聖なる神のみ名を傷つけ、聖所を汚していた（エレミヤ7：4）。{COL 1299.3}

主のぶどう園を託された農夫は、その信任に不忠実であった。祭司や教師は民を忠実に教えなかった。彼らは神のいつくしみと憐れみを人々の前にかかげず、神に対して彼らの愛と奉仕をささげなければならないことを示さなかった。これらの農夫は自分の名誉を求めた。彼らは、ぶどう園からとれる実を専有したいと望んだ。彼らは、人々の注目と尊敬を自分に集めようとばかり気をつかった。{COL 1299.4}

これらイスラエル指導者の罪は、普通の人の場合の罪と同じではない。彼らは神に対して最も厳粛な義務を果たさなければならなかった。彼らは「主はこう言われる」というその事がらを教え、全き従順を日常生活において実践することを誓っていた。ところが彼らはそれを守らずかえって聖書を誤用した。彼らは人々に重荷を負わせ、生活のあらゆる面にまで儀式を強いた。人々は、ラビの規定した要求を満たすことができずに、絶えず不安な気持ちをもって生活していた。彼らは人の作った戒めが守れないものであることを知って、神の戒めをも捨ててしまった。{COL 1299.5}

神がぶどう園の領主であり、民の所有物は、みな神のために用いるように委託されたものであることを、主は人々にお教えになった。しかし祭司や教師はその神聖な職務を、

神の財産を扱う態度で遂行しなかった。彼らは、みわざの前進のためにゆだねられた資力や便益を、常習的に盗んでいた。彼らは、どん欲のために異邦人からさえ軽べつされるほどであった。こうして、異教の世界は、神の品性とみ国の律法を誤解するようになってしまった。 {COL 1299.6}

神は父親のような心で、人々を耐え忍ばれた。神は、時に憐れみを与え、また時には憐れみを取り去って、彼らに訴えられた。神はたゆまず彼らの罪を彼らに示し、しんぼう強く彼らがそれを認めるのを待ち続けられた。預言者たちや使いの者たちが送られて、農夫に対する神のご要求を力説した。しかし彼らは歓迎されるどころか、敵のように扱われた。農夫たちは彼らを迫害して殺した。神はまたほかの使者をつかわされたが、彼らもはじめの使者たちと同じ扱いを受け、農夫たちは前にもまして激しい憎悪をあらわした。 {COL 1300.1}

神は最後の手段として、「わたしの子は敬ってくれるだろう」と思って、ご自分のみ子をつかわされた。しかし反抗のために執念深くなった彼らは、「あれはあと取りだ。さあ、これを殺して、その財産を手に入れよう」、そうすればぶどう園はわたしたちの手に入り、その実は自分勝手にすることができるのだと語りあった。 {COL 1300.2}

ユダヤのつかさたちは、神を愛していなかった。だから、彼らは神から離れ、正しい解決をお求めになった神の申しいれを、拒絶したのであった。神の愛する子キリストがぶどう園の領主の権利を擁護するためにこられたが、農夫たちは、わたしたちはこの人に治められるのを好まないと言って、彼を侮辱した態度をとった。彼らはキリストの品性の美しさをしっとした。キリストの教え方は彼らよりはるかにすぐれていて、彼らはその成功を恐れた。主は彼らの偽善をあばき、その行為の結果を示して、彼らに抗議なさった。このことが彼らを狂気のようにした。彼らは、否定することのできないその非難の言葉に激怒した。彼らは、キリストがいつも示される義の高い水準を憎んだ。彼らは、その教えが自分たちの利己心をあばくものであることを知り、彼を殺そうと決意した。彼らは主の示

される誠実と敬虔の模範と、そしてそのあらゆる行為にあらわれる高い霊性を憎悪した。主の生活は、すべてが彼らの利己心を譴責するものであった。そして最後の試み、すなわち永遠の生命に至る従順か、永遠の死に至る不従順かを決定する試みが来た時、彼らはイスラエルの聖者を拒絶してしまった。彼らはキリストかバラバかそのどちらを選ぶかと聞かれた時、「バラバをゆるしてくれ」と叫んだ（ルカ23：18）。そしてピラトが「それでは……イエスはどうしたらよいか」と問うたとき、彼らは「十字架につけよ」とはげしく叫んだ（マタイ27：22）。ピラトが「あなたがたの王を、わたしが十字架につけるのか」と言うと、祭司やつかさは、「わたしたちには、カイザル以外に王はありません」と答えた（ヨハネ19：15）。ピラトが手を洗って、「この人の血について、わたしには責任がない」と言うと、祭司たちは無知な群集と共に、「その血の責任は、われわれとわれわれの子孫の上にかかってもよい」と断言した（マタイ27：24、25）。{COL 1300.3}

こうしてユダヤの指導者たちは、ついにこのような道を選んだ。彼らの決定は、いかなる人も開くことのできない書にしるされた。ヨハネはこの書が、み座にいます方の手にあるのを見た。この決断は、ユダ族の士師によってこの書が開封される日に、彼らの前に明らかにされ、彼らはその報復を受けるのである。{COL 1300.4}

ユダヤ民族は、自分たちは天の寵愛を受けており、神の教会としていつどんな時でも称揚されることができると考えていた。彼らは、自分たちはアブラハムの子だと言明していた。そして彼らの目には、その繁栄の基礎はゆるぎのないものに映じ、その権利を奪えるなら奪ってみよと、天地に公言してはばからなかった。しかし彼らは、その不忠実な生活を送ることによって、自らに罪の宣言を下し、神から切りはなされるために道を開いたのであった。{COL 1300.5}

ぶどう園のたとえの中で、祭司たちの前にその最後の悪行を描き出したあと、キリストは彼らにこう問われた、「このぶどう園の主人が帰ってきたら、この農夫たちをどうするだろうか。」祭司たちは興味深くこ 1301の話の筋をたどってきたが、彼らはこのたと

えのテーマと自分たちとの関係を何も考えずに、人々と一緒になって、「悪人どもを、皆殺しにして、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに、そのぶどう園を貸し与えるでしょう」と答えた。{COL 1300.6}

彼らはそれと知らずに、われとわが身に宣告をくだしたのだった。イエスは彼らを見つめられた。鋭い凝視を受けた彼らは、心の秘密が読みとられたことを悟った。イエスの神性が、誤解の余地のない力をもって、彼らの前にきらめいた。彼らはこの農夫たちというのは、自分たちのことをさしているのを悟ったが、とっさに「そんなことはない」と、それを打ち消した。{COL 1301.1}

イエスは厳粛に悲しげに尋ねられた、「あなたがたは、聖書でまだ読んだことがないのか、『家造りらの捨てた石が隅のかしら石になった。これは主がなされたことで、わたしたちの目には不思議に見える』。それだから、あなたがたに言うが、神の国はあなたがたから取り上げられて、御国にふさわしい実を結ぶような異邦人に与えられるであろう。またその石の上に落ちる者は打ち砕かれ、それがだれかの上に落ちかかるなら、その人はこなみじんにされるであろう。」{COL 1301.2}

もしユダヤ人がキリストを受け入れたとすれば、キリストはユダヤの国を滅びから救おうと望んでおられたのである。だが、ねたみとしっとのために彼らの心は執念深くなっていた。彼らは、ナザレのイエスをメシヤとして受け入れないことに心を定めてしまった。彼らは世の光をしりぞけ、それ以来、彼らの生活は暗夜のような暗黒に閉ざされた。{COL 1301.3}

予言されていた運命が彼らを襲った。滅亡は、はげしい欲情のままに放縦な生活におちいった、彼ら自身の招いたものであった。彼らは怒り狂って、たがいに殺しあった、彼らの頑固さと反逆的な高慢さが、ローマの征服者たちの怒りを招いた。エルサレムは滅ぼされ、神殿は廃虚と化し、その跡は畑のように掘り返された。ユダヤ人はせいさんな死をとげた。幾百万の人々が奴隷に売られ、異邦諸国で働く身になった。{COL 1301.4}

ユダヤ人は民族として、神のみ旨をはたすことができなかった。そしてぶどう園は彼らから取り去られた。彼らが乱用した特権、彼らが軽んじた務めは他の者たちにゆだねられた。{COL 1301.5}

今日の教会

ぶどう園のたとえは、ユダヤ民族にだけあてはまるのではなく、それはわたしたちが学ぶべき教訓でもある。現代の教会は、大きな特権と祝福を神から受けており、神はそれにふさわしい感謝の行為を期待しておられる。{COL 1301.6}

わたしたちは、高い身代金によってあがなわれた。わたしたちは、この身代金の価が大きなものであったことから考えて、それがどんなに大きな結果をもたらすものであるかを知ることができるのである。土が神の子の涙と血でうるおされたこの地上は、パラダイスの尊い実を結ばなければならない。神の民の生活のなかに、み言葉の真理の栄光と美とがあらわれなければならない。キリストは、神の民を通してご自分の品性とみ国の原理を示されるのである。{COL 1301.7}

サタンは、神のみわざを破壊しようとして、サタン自身の原則に従うように人々を勧誘している。サタンは、神の選民があたかも惑わされた民であるかのように言いふらすのである。彼は兄弟らを訴える者であって、そのとがめだては、義を行う人々に向かって発せられる。神は、神の民が義の原則に従順であればいかなる実を結ぶかを示して、サタンの訴えに答えることを望んでおられる。{COL 1301.8}

これらの原則は、クリスチャン個人において、家庭において、教会において、また神の奉仕のために立てられたあらゆる機関において、明らかにされなければならない。これらはみな、世のためにどれほどのことがなされるかという象徴でなければならない。それらは、福音の真理にはどんな救いの力があるのかを示す型でなければならない。これらはみな、神が人類に対して持っておられる大いなるみ旨を、成就する手立てなのである。{COL 1301.9}

ユダヤの指導者たちは、彼らの壮麗な神殿と印象的な宗教行事の儀式とを誇りにしていたが、義と憐れみと神への愛が欠けていた。神殿の壮観もその奉仕の華麗さも、彼らを神に嘉納されるものとすることはできなかった。すなわち、彼らは、神の目に価値のある唯一のものを、ささげていなかったのである。彼らはへりくだった、くだけた精神を神のもとに携えてこなかった。儀式がはなばなしくなり、多岐にわたるに至るのは、神の国の根本原理が失われた時である。誇りと外見を重んじて、壮麗な教会建築や、華美な装飾や、人目を引く儀式を求めるのは、品性の形成がおろそかにされ、魂の飾りが欠け、純真な敬神の念が見失われた時である。こうしたことがいくら重ねられても、神はあがめられない。儀式と虚飾と誇示から成る一般の教会は、神に受け入れられるものではない。その礼拝は天来の使者から、いかなる応答をも得ることができない。 {COL 1301.1]0}

教会は、神の目に非常に尊いものである。その外面の装いではなく、世とは全くかけ離れた誠実な敬神さのゆえに、神は教会を重んじられるのである。神は、その教会員がキリストを知る知識にどの程度成長しているか、また、霊的な経験にどの程度進んでいるかによって教会を評価なさる。 {COL 1302.1}

キリストはそのぶどう園から、聖潔と無我という実を得たいと渇望しておられる。キリストは、愛と善意の原則を求めておられる。いかなる美術品であっても、キリストの代表者である人々のうちに、現されるべき性質と品性の美には匹敵できない。信ずる者を生命から生命に至る香りとし、そのわざに神の祝福をもたらすものは、彼の魂をつつむ恵みの雰囲気である。 {COL 1302.2}

教会の会衆は、その国の人々の中で、最も貧しい者であるかもしれない。見たところ、人の目を引くものは何もないかもしれない。しかし、もし彼らがキリストの品性の原則を所有しているなら、彼らの魂にはキリストの喜びが宿るのである。天使も彼らの礼拝に加わり、感謝と心からの賛美は甘美なささげものとして神のもとにのぼる。 {COL 1302.3}

主はわたしたちがそのいつくしみを述べ、その力を語るようにと望んでおられる。わたしたちが賛美と感謝を表現する時に、主はあがめられる。「感謝のいけにえをささげる者はわたしをあがめる」と主は言われる（詩篇50：23）。イスラエルの民は、荒野を旅したあいだ、聖なる歌をもって神をたたえた。主の戒めと約束を曲に合わせて、イスラエルの人々が長い荒野の旅をしながらうたったのである、また、カナンにおいては、聖なる祭りに彼らが集うごとに、神のくすしきみわざについて語り、そのみ名への感謝をささげた。神は、その民の全生活が賛美の生活であるようにお望みになった。こうして神の道は「あまねく地に知られ」、神の「救の力がもろもろの国民のうちに知られる」のであった（詩篇67：2）。{COL 1302.4}

今も、このとおりでなければならない。世界の人々は偽りの神々を拝んでいる。彼らをそのような間違った礼拝から、引き離さなければならないが、それは偶像を非難することによってではなくて、それよりも更にすぐれたものを見せることによってでなければならない。神のいつくしみを人々に知らせなければならない。「『あなたがたはわが証人である』と主は言われる」（イザヤ43：12）。{COL 1302.5}

主は、わたしたちが偉大なあがないの計画をよく理解し、神の子供たちとしての大いなる特権を認識し、感謝しつつ従順にそのみ前を歩むことを、望んでおられる。主はまた、わたしたちが毎日喜びつつ、新しい生命にあふれて主に仕えることを望んでおられる。小羊の命の書に名前を記された感謝と、またわたしたちのためにみ心をお痛めになる神に、わたしたちの心配事をおまかせすることのできる感謝とが、わたしたちの心のうちにわいてくるのを、神は望んでおられる。わたしたちは主の嗣業であり、キリストの義は聖徒の白衣であり、わたしたちには、救い主がまもなくおいでになるという祝福にみちた望みがある。それであるから主は、わたしたちに喜べとお命じになるのである。{COL 1302.6}

真心から神をたたえることは、祈りと同様の義務である。罪におちいった人類への神の驚くべき愛を感謝するとともに、神の無限の富の中から、いっそう大きな祝福を受けることを待望していることを、わたしたちは世界と、そしてすべての住民たちに示さなければならない。わたしたちは今より以上に、もっと自分のとうとい体験を語る必要がある。聖霊が特別に注がれると、主にある喜びとその奉仕における能力とは、神の子らに対する神のいつくしみと驚くべきみわざをわたしたちが語ることによって、著しく増大するであろう。 {COL 1302.7}

こうしたことは、サタンの力を後退させる。それはつぶやきと不平の精神を取り去り、誘惑者を退却させる。それは地上の住民の品性を天の邸宅を継ぐにふさわしく涵養する。 {COL 1303.1}

こうした証しは人々に感化を及ぼす。魂をキリストにかち取るのに、これ以上有効な方法はない。 {COL 1303.2}

わたしたちは実質的な奉仕をしてーーみ名の栄光を増すためにできるかぎりのことをしてーー神をたたえるべきである。神はその賜物をわたしたちに分け与えられるが、それはわたしたちも与え、こうして神のご品性を世に知らしめるためである。ユダヤの制度において、ささげ物は神の礼拝の重要な部分を占めていた。イスラエル人は、全収入の10分の1を聖所の奉仕にささげるように教えられていた。そのほかに彼らは、罪祭、任意のささげ物、感謝のささげ物などをたずさえてくることになっていた。これらは当時の福音の働きをささえる方法であった。神は昔の民に期待なさったと同じものを、わたしたちにも期待しておられる。魂の救済という大事業は、押し進めていかなければならない。神は、10分の1やその他のささげ物を、このみわざのためにお充てになった。神はこうして福音の働きを維持しようと意図しておられる。神は10分の1をご自分のものと主張なさるのであるから、いつでもそれは聖なる保留物とみなされ、み事業のために神の宝庫に納めな

ければならない。神はまた、任意のささげ物と感謝のささげものをお求めになる。このすべては、福音を地のはてにまで伝えるために用いられるものである。{COL 1303.3}

神への奉仕には個人的な働きが含まれている。わたしたちは個人的に努力して、世の救いのために神と協力しなければならない。「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」というキリストの言葉は、主に従う一人一人に語られている（マルコ16：15）。キリストのお与えになる命に入るように定められた者はみな、同胞の救いのために働くように定められたのである。彼らの心は、キリストの心と1つになって鼓動する。キリストが魂に対して感じておられるのと同じ渇望が、彼らのうちにもあらわされる。みわざにおいて、すべての者が同じ所を占めることはできないが、すべての者にはそれぞれ占めるべき所と働きがあるのである。{COL 1303.4}

昔アブラハムもイサクもヤコブも、柔和で知恵深かったモーセも、種々の才能に恵まれていたヨシュアも、みな神の奉仕に参加した。ミリアムの音楽も、デボラの勇気と敬神の心も、ルツの嫁としての情愛も、サムエルの従順と誠実も、エリヤの確固とした忠誠も、エリシャの穏やかな感化力も、そのすべてが必要であった。このように今でも、神の祝福を受けた者はみな、実際的な奉仕によってこたえなければならない。あらゆる才能を、み国の発展とみ名の栄光のために用いなければならない。{COL 1303.5}

キリストを個人的な救い主として受け入れる者はみな、福音の真理とその救いの力の立証をしなければならない。神がお命じになることは、必ずそれをなしとげることができるように備えがされているのである。神の要求なさることは、キリストの恵みによってことごとくなしとげることができる。天の富が全部、神の民を通してあらわされるべきである。「あなたがたが実を豊かに結び、そしてわたしの弟子となるならば、それによって、わたしの父は栄光をお受けになるであろう」とキリストは言っておられる（ヨハネ15：8）。{COL 1303.6}

神は、全地がご自分のぶどう園であると主張なさる。たとえ今は横領者サタンの手の中にあるとはいっても、これは神の所有である。創造によると同時に贖罪によっても、これは神のものである。キリストの犠牲は世界のためになしとげられた。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」（ヨハネ3：16）。この賜物が1つ与えられたことによって、ほかのすべての賜物が人々に与えられるのであ 1304る。全世界は、日ごとに神の祝福を受けている。恩を忘れた人類にそそがれるひとしずくの雨、ひとすじの日光、また1枚の葉、1つの花、1つの実など、その1つ1つは神の寛容とその偉大なる愛を証ししている。 {COL 1303.7}

ところで、この偉大な賦与者にどんな返礼をしているだろうか。人々は神のご要求をどう扱っているだろうか。人類の大多数は、一体何に奉仕をささげているだろうか。彼らは実に、富に仕えているのである。この世における財貨と地位と快楽が彼らの目標である。彼らは人からだけでなく、神からも奪うことによってその財貨を得ている。人々は利己心を満足させるために、神の賜物を用いている。彼らの握ることのできるものはことごとく、そのどん欲と利己的な快楽を求めることのために充てられている。 {COL 1304.1}

今日の世界の罪は、イスラエルに滅亡を招いた罪と同じものである。神への忘恩、機会と恩恵をなおざりにすること、神の賜物を独り占めにすることーーこれらがイスラエルに怒りを招いた罪のもとであった。それはまた、今日の世界にも滅びをもたらしつつあるのである。 {COL 1304.2}

キリストが、オリブ山から神に選ばれた都をながめながら流された涙は、ひとりエルサレムのための涙ではなかった。エルサレムの運命の中に、主は世界の滅亡を見ておられた。 {COL 1304.3}

「もしおまえも、この日に、平和をもたらす道を知ってさえいたら……しかし、それは今おまえの目に隠されている」（ルカ19：42）。 {COL 1304.4}

「この日に」――その日は今、暮れようとしている。憐れみと特権の期間は、もうほとんど残っていない。報復の雲はたちこめてきている。神の恵みをこばんだ者たちは、急速な滅亡、とりかえしのつかない滅亡に、まさに巻き込まれようとしている。{COL 1304.5}

だが世界は眠っている。人々は自分たちの審判の時を知らない。{COL 1304.6}

この危急の時に、教会はどういう態度をとっているだろうか。教会員は神のご要求に応じているだろうか。またその任務をまっとうし、世に神のご品性をあらわしているだろうか。彼らは最後の憐れみの警告に同胞の注意を促しているだろうか。{COL 1304.7}

人類は危険にさらされている。大衆は滅びようとしている。だがキリスト教徒といわれている人々の間で、これらの魂に重荷を感じている者はなんと少ないことだろう。世界の運命が決定しようとしているのに、これまでに人類に与えられた最も遠大な真理を信ずると主張する者たちでさえ、この事実にほとんど心を動かされていない。キリストが天の家郷を去り、人性をもって人性に接触し、人性を神性に引きつけるために、みずから人間の性質をおとりになったあの愛が、彼らに欠けている。神の民は無感覚のまひ状態におちいって、今何をすべきかに気づかないのである。{COL 1304.8}

イスラエルはカナンに入った時、全地を占領して神のみ旨をはたすべきであったが、そうしなかった。彼らは一部の領土を征服すると、ただ勝利を治めたところに落ちついてしまった。彼らはその不信仰と安逸を求める心とから、すでに征服した所にかたまってしまい、新しい地域の占領に向かって前進しようとしなかった。こうして彼らは神から離れはじめた。神のみ旨をはたさなかった彼らは、神が祝福に満ちた約束を果たすことができないようにした。今日の教会も同じことをしていないだろうか。福音を必要とする全世界を目の前にしながら、キリストを言い表す者たちは、福音の特権をたのしむことができるところにかたまっている。彼らは新しい地域に乗り出して、救いのおとずれを遠隔の地方に伝える必要を感じていない。「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣

べ伝えよ」というキリストの任命を彼らははたそうとしていない（マルコ16：15）。ユダヤの教会と比較して、彼らの罪は軽いと言えるだろうか。{COL 1304.9}

キリストに従う者であると公言する者たちは宇宙の前でさばかれている。ところが、彼らの神に対する奉仕が不熱心で努力が足りないために、彼らは不忠実のそしりをまぬかれることはできない。もし彼らのしていることが全力を尽くしているのであれば、彼らは非難を受けないであろう。だが、神の働きに心をこめてするなら、彼らはさらに多くのことをなしうるはずである。彼らが自己否定と十字架を負う精神を大部分失っていることは、彼ら自身も知っていれば世も知っている。天の記録に、生産者ではなく消費者としてその名前が書きこまれる者が大勢いる。キリストのみ名をかかげる多くの者によって、キリストの栄光は曇らされ、その美はおおわれ、その誉れははばまれている。{COL 1304.1]0}

名前は教会の名簿に載っていても、実際にキリストの統治の下にいない者が多い。彼らは主の教えをかえりみず、主の働きを行っていない。従って彼らは敵サタンの支配下にいる。彼らは積極的な善をしない。したがって彼らは、はなはだしい害を及ぼしている。なぜなら、彼らの感化は生命から生命に至る香りでなく、死から死に至る香りだからである。{COL 1305.1}

「わたしはこれらの事のために彼らを罰しないでいられようか」と主は言われる（エレミヤ5：9）。神のみ旨を果たさなかったために、イスラエルの子らは退けられて、神の招きはほかの国々の人々にさしのべられた。だが、もし彼らも不忠実であれば、同じように拒まれるのではなかろうか。{COL 1305.2}

ぶどう園のたとえの中で、キリストが罪を宣告なさったのは農夫たちであった。土地から生じた産物を、主人に返そうとしなかったのは彼らであった。ユダヤ民族の場合、民を誤り導いて、神が求めておられる奉仕を神にささげないようにしたのは、祭司と教師であった。民族をキリストから離れさせたのは彼らであった。{COL 1305.3}

キリストは人間の言い伝えの混じらない神の律法を、従順の大標準としてお示しになった。ラビたちはこのことによって敵意をいだいた。彼らは人間の教えを神のみ言葉以上のものとして、民を神の戒めから遠ざけていた。彼らは、神のみ言葉の要求に従うために、人の作った戒律を捨てようとはあえてしなかった。彼らは、真理のために、理性の誇りと人の賞賛とを犠牲にしようとはしなかった。キリストが来て、神の要求を民族に示された時に、祭司や長老たちは、彼らと民の間に介入なさるキリストの権利を認めなかった。彼らはキリストの譴責と警告を受け入れようとはせず、かえって民をキリストに逆らわせ、キリストをなきものにしようとはかった。 {COL 1305.4}

キリストを拒んだことと、それによって生じた結果に対する責任は彼らにあった。1つの民族が罪を犯し、滅びていった原因は、その宗教指導者たちにあった。 {COL 1305.5}

わたしたちの時代にも、これと同じ勢力が働いていないだろうか。現在、主のぶどう園で働く農夫たちのうちに、ユダヤの指導者の二の舞を踏んでいる者が多いのではないだろうか。宗教指導者たちは、神のみ言葉の明白な要求から人々を引き離してはいないだろうか。彼らは人々に神の律法への従順を教えるのではなく、罪を犯すことを教えているのではないだろうか。人々は、多くの教会の講壇から、神の律法は拘束力を持たないものであると教えられている。人間の言い伝えや儀式や慣習が称揚されている。神の賜物を与えられたことに対しては、誇りと自己満足の気持ちがいだかれている一方、神の要求は無視されている。 {COL 1305.6}

人々は、神の律法を拒むということがどういうことなのかを理解していない。神の律法はそのご品性の写しである。それはみ国の原則を具体化したものである。この原則を拒んで受け入れない者は、神の祝福を受けることができないようになってしまう。 {COL 1305.7}

イスラエルの前途にあった輝かしい将来は、神の戒めに従うことによってはじめて、実現されうるものであった。同じように品性が向上し、同じ祝福にあふれて、――精神と魂と身体の祝福、家と畑の祝福、現世と来世の祝福に満ちあふれること――は、従順によってのみわたしたちに可能となるのである。 {COL 1305.8}

自然界におけると同じく霊的な世界においても、神の法則への従順が、実を結ぶための条件である。そして神の戒めを無視することを人に教えるなら、それは神の栄光のために実を結ぶのを妨げることである。そのように教える者は、主のぶどう園の収穫を主に返さない罪を問われるのである。 {COL 1305.9}

神の使者たちは、主の命令を受けて、わたしたちの所にやって来る。彼らは来て、キリストが求められたと同様に、神のみ言葉に従うことを求める。彼らはぶどう園の収穫――愛と謙遜と自己犠牲的奉仕の実――を求める権利が主にあることを教える。これを聞いて、ぶどう園の農夫たちの多くは、ユダヤの指導者たちと同じように怒りをいだくのではないだろうか。神の律法の要求が民の前に置かれる時、これらの教師たちは、自分の影響下にある人々に、神の律法を拒むようにさせるのではないだろうか。そうした教師を神は不忠実な僕と呼ばれるのである。 {COL 1305.1]0}

古代イスラエルに対して言われた神の言葉は、今日の教会とその指導者たちに対する厳粛な警告である。イスラエルについて主は言われた、「わたしは彼のために、あまたの律法を書きしるしたが、これはかえって怪しい物のように思われた」（ホセア8：12）。また祭司や教師に主は言われた、「わたしの民は知識がないために滅ぼされる。あなたは知識を捨てたゆえに、わたしもあなたを捨てる……。あなたはあなたの神の律法を忘れたゆえに、わたしもまたあなたの子らを忘れる」（ホセア4：6）。 {COL 1306.1}

神の警告に、なんの注意をも払わずに見すごしてよいであろうか。奉仕の機会を活用しないでいてよいであろうか。世のあざけり、理性の誇り、人間の慣習や言い伝えの尊重などのために、キリストの弟子と公言する者が、キリストに対する奉仕をしないでいてよ

いであろうか。キリストの弟子であると公言する者は、ちょうどユダヤの指導者たちがキリストを拒んだように、神のみ言葉を拒むのであろうか。イスラエルの罪の結果は、わたしたちの前に明らかにされている。今日の教会は警告に従うであろうか。 {COL 1306.2}

「もしある枝が切り去られて、野生のオリブであるあなたがそれにつがれ、オリブの根の豊かな養分にあずかっているとすれば、あなたは……誇ってはならない……。彼らは不信仰のゆえに切り去られ、あなたは信仰のゆえに立っているのである。高ぶった思いをいだかないで、むしろ恐れなさい。もし神が元木の枝を惜しまなかったとすれば、あなたを惜しむようなことはないであろう」（ローマ11：17～21）。 {COL 1306.3}

第24章　王の婚宴

本章は、マタイ22：1～14に基づく {COL 1306.4}

礼服のたとえは、わたしたちの前にきわめて重要な教訓を展開している。婚姻は、人性と神性との結合をあらわし、礼服は、婚宴にふさわしい客と認められる者が、みな所有しなければならない品性をあらわすのである。 {COL 1306.5}

このたとえは、晩餐のたとえと同様に福音の招待が発せられて、ユダヤ民族がそれを拒んだために、異邦人に憐れみ深い招待が発せられたことを教えている。しかし、このたとえでは招待を拒絶した者に対して非常な恥辱と恐ろしい罰があることを教えている。婚宴への招待は王の招待である。それは命令を下す権威者から発せられている。それを受ける者に非常な名誉を与える。しかし、その名誉は正しく評価されなかった。王の権威は軽視された。家の主人の招待の方は、冷淡に扱われたが、王の招待の方には、侮辱と殺害が待っていた。彼らは王の僕たちをあなどり、侮辱を加えて殺してしまった。 {COL 1306.6}

一家の主人は、自分の招待が軽んじられたのを見ると、招かれた人でその晩餐にあずかる者は1人もないであろうと言った。しかし、王に侮辱を加えた者は、王の面前と彼の食卓から除かれるだけではすまなかった。王は「軍隊を送ってそれらの人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った。」 {COL 1306.7}

どちらのたとえでも、婚宴には客がつれてこられたが、婚宴に出席する者はみな1つの準備をしていなければならないことが、後の方のたとえで示されている。この準備を怠る者は、退けられるのである。「王は客を迎えようとしてはいってきたが、そこに礼服をつけていないひとりの人を見て、彼に言った、『友よ、どうしてあなたは礼服をつけないで、ここにはいって

婚宴への招待は、キリストの弟子たちが発したものであった。わたしたちの主は、はじめに12人を、次に70人をつかわされた。彼らは神の国は近づいた、悔い改めて福音を信ぜよと人々に呼びかけた。だがこの呼びかけに応じる者はなかった。婚宴に招かれた者たちはこなかった。僕たちはまたつかわされて言った、「食事の用意ができました。牛も肥えた獣もほふられて、すべての用意ができました。さあ、婚宴においでください。」これはキリストの十字架後に、ユダヤ民族に発せられたメッセージであった。だが、神の特別の民であると自認する民族は、聖霊の力をもって彼らに伝えられた福音を拒んだ。しかも多くの者は、これを非常に軽べつした態度で拒んだ。またある者は、救いが与えられることと、栄光の主を拒絶したことに対する赦しが与えられるという申し出に腹を立てて、使いの者たちを攻撃した。「大迫害」が起こった（使徒行伝8：1）。大勢の男女が獄屋に投げ込まれ、主の使者の中には、ステパノやヤコブのように、殺害された者もあった。{COL 1307.1}

こうしてユダヤ民族は、神の憐れみを全く拒絶してしまった。キリストは、こうなることをたとえの中で予告しておられた。王は「軍隊を送ってそれらの人殺しどもを滅ぼし、その町を焼き払った。」宣言されていた通りの審判がユダヤ人にくだり、エルサレムは破壊され、民族は散らされた。{COL 1307.2}

婚宴への3度目の招待は、福音が異邦人に与えられたことをあらわしている。王は言った、「婚宴の用意はできているが、招かれていたのはふさわしくない人々であった。だから、町の大通りに出て行って、出会った人はだれでも婚宴に連れてきなさい。」{COL 1307.3}

大通りに出て行った王の僕たちは、「出会う人は、悪人でも善人でもみな集めてきた。」それは多種多様な人々から成る一団であった。ある者は招待を拒絶した人々と同様、婚宴をもよおした主人になんの関心も持っていなかった。はじめに招かれた者たちは、この世の利益を犠牲にしてまで王の晩餐に出なければならぬことはないと考えた。また招き

を受け入れた者であっても、ただ、自分の利益のことしか考えていない者もあった。彼らは婚宴の食卓にあずかるために来たが、王を尊ぼうとする気持ちは少しも持っていなかった。{COL 1307.4}

王が来て客を見わたすと、すべての者の本性が明らかであった。それというのは、婚宴に集った客の一人一人のために、あらかじめ礼服が用意されていた。この服は王の贈り物であった。客はこれを着ることによって、婚宴を催した主人に敬意をあらわした。しかし、1人の男はふだん着を着ていた。彼は、王の求めた準備を拒んだのである。高い価を払って彼のために用意されてある服を、彼は無視して着なかった。こうして彼はその主人をさげすんだ。「どうしてあなたは礼服をつけないで、ここにはいってきたのですか」という王の質問に、彼は何も答えることができなかった。彼は自分のいけないことを知っていた。その時王は言った、「この者の手足をしばって、外の暗やみにほうり出せ。」{COL 1307.5}

こうして、王が婚宴の客を吟味したことは、審判のみわざをあらわしている。福音の婚宴に集まる客は、神に仕えることを表明する者、その名が命の書に書かれている者である。しかしクリスチャンであると告白する者が、すべて本当の弟子なのではない。最後の報酬が与えられる前に、だれが義人の嗣業にあずかるにふさわしいかが、決定されなければならない。この決定は、キリストが天の雲に乗って再臨なさる以前に、行われなければならない。キリストがこられる時には、報いを携えてきて、「それぞれのしわざに応じて報い」られるからである（黙示録22：12）。とすると、主の来臨の前にすべての人のわざがどんなものであるかがさばかれ、キリストの弟子の一人一人は、その行為にしたがって報いが与えられるのである。{COL 1307.6}

調査審判が天の法廷で行われるのは、人がまだ地上に住んでいる時においてである。キリストの弟子であることを表明するすべての者の生活が、神の前で調べられる。すべて

の者が天の書物の記録に従って吟味され、その行為によって一人一人の運命が永遠に決定される。{COL 1307.7}

たとえの中の礼服は、キリストの真の弟子が持つ、清くてしみのない品性をあらわしている。教会は、「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく」、「汚れのない麻布の衣を着る」のである（エペソ5：27、黙示録19：8）。この麻布の衣は「聖徒たちの正しい行いである」と聖書にしるされている（黙示録19：8）。主を自分の救い主として受け入れるすべての者に、信仰を通して与えられるのは、キリストの義であり、キリストご自身の汚れのないご品性である。{COL 1308.1}

神が人類を最初に聖なるエデンに置かれた時、彼らが着ていたのは純潔という白い衣であった。彼らは、神のみこころに完全に一致した生活を送った。彼らの深い愛情は、ことごとく天の父にささげられた。美しく柔かい光――神の光――が罪を知らぬアダムとエバを包んだ。この光の衣は、天与の純潔という霊的な着衣の象徴であった。もし彼らがずっと神に真実を尽くしていたら、彼らはいつまでもその光に包まれていたはずであった。しかし罪が侵入した時、神とのつながりは断たれ、それまで彼らを取り囲んでいた光は消え去った。彼らは裸となった自分の身を恥じて、いちじくの葉をぬい合わせておおいを作り、それを天の衣の代わりにしようとした。{COL 1308.2}

これは、アダムとエバが神にそむいて以来、神の律法の違反者が常に試みてきたことである。彼らは違反によってあらわれた裸をおおうために、いちじくの葉をぬい合わせて着た。彼らは、自分で工夫した衣を着てきた。彼らは自分のわざによって罪をおおい、神に受け入れられようとしてきた。{COL 1308.3}

しかしこれはできることではない。人は、失われた純潔という衣の代わりになるものを工夫することはできない。いちじくの葉で作った衣やこの世の服装がどれほどよいものであっても、それを着てキリストと天使と共に小羊の婚宴に列席することはできないのである。{COL 1308.4}

キリストご自身の備えてくださった衣だけが、わたしたちを神の臨在の前に立たせてくれるのである。キリストはこのおおい、すなわち主ご自身の義の衣を、悔い改めて信ずる一人一人の魂に着せてくださるのである。「そこで、あなたに勧める……。あなたの裸の恥をさらさないため身に着けるように、白い衣を買いなさい」と主は言われる（黙示録3：18）。{COL 1308.5}

天の織機で織られたこの衣には、人間の創意による糸は1本も含まれていない。キリストは人性をおとりになって、完全な品性を形成された。そしてこの品性をわたしたちに分け与えてくださるのである。「われわれの正しい行いは、ことごとく汚れた衣のようである」（イザヤ64：6）。わたしたちが自分でなし得ることは、罪で汚れている。しかし神のみ子は「罪をとり除くために現れたのであって、彼にはなんらの罪がない」（Ⅰヨハネ3：5）。罪は「律法を犯すこと」であると定義されている（Ⅰヨハネ3：4・英語欽定訳）。だがキリストは、律法のあらゆる要求に従順であられた。主はご自分について、「わが神よ、わたしはみこころを行うことを喜びます。あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」と言われた（詩篇40：8）。主はまた、この地上におられた時、弟子たちに向かって、「わたし（は）わたしの父のいましめを守った」と言われた（ヨハネ15：10）。キリストはその全き従順によって、あらゆる人間が神の戒めに従うことができるようになさった。人が自分自身の心をキリストにささげる時、心はキリストの心と結合し、意志はキリストの意志に没入し、精神はキリストの精神と1つになり、思いはキリストのうちにとらわれて、わたしたちはキリストの命を生きる。これが、キリストの義の衣を着ることである。そして、主がわたしたちをご覧になる時、いちじくの葉の衣でも、裸と罪のみにくさでもなく、エホバなる神の律法への完全な従順であるご自分の義の衣をお認めになる。{COL 1308.6}

婚宴の客は王の検査を受けた。王の命じるままに礼服を身につけた者だけが、受け入れられた。福音の婚宴の客もこれと同じである。すべての者が、偉大な王の厳密な検査を

通過しなければならない。そしてキリストの義の衣を着ている者だけが、受け入れられるのである。 {COL 1308.7}

義とは正しい行いである。そしてすべての者は、各自の行為によってさばかれる。わたしたちの品性は、わたしたちの行いに現れる。行いは信仰が本物であるかどうかを示す。 {COL 1309.1}

キリストはいつわりをおおせにならない。また聖書の教えは、巧みに作られた寓話ではないと確信するだけでは十分でない。わたしたちは、イエスのみ名こそ、人を救う唯一の名であることを信じつつも、なお信仰によって、キリストを自分の救い主として信じないでいることもできる。真理の理論を信ずるだけでは十分でない。キリストへの信仰を表明して、名前を教会名簿に連ねるだけでは十分でない。「神の戒めを守る人は、神におり、神もまたその人にいます。そして、神がわたしたちのうちにいますことは、神がわたしたちに賜わった御霊によって知るのである。」「もし、わたしたちが彼の戒めを守るならば、それによって彼を知っていることを悟るのである」（Ⅰヨハネ3：24、2：3）。これが回心のほんとうの証拠である。わたしたちが口で何を言おうとも、キリストが義の行為となってあらわされるのでなければ、それは無にひとしい。 {COL 1309.2}

真理は心に植えつけられなければならない。それが頭脳を支配し、感情を調節しなければならない。人の品性全体が神の言葉の印を押されなければならない。神のみ言葉の一点一画が、日常生活の中にあらわされなければならない。天の性質にあずかる者は、神の義の標準であるその聖なる律法と調和する。神はこの規準によって人間の行為をおはかりになる。これが審判における品性の試金石となる。 {COL 1309.3}

律法は、キリストの死によって廃棄されたと主張する者が多いが、これは「わたしが律法や預言者を廃するためにきた、と思ってはならない……。天地が滅びゆくまでは、律法の一点一画もすたることはない」と言われた、キリストご自身の言葉と矛盾する（マタイ5：17、18）。キリストが生命を捨てられたのは、人間が律法にそむいたその罪をつぐ

なうためであった。律法を変えたり廃されたりできるものであれば、キリストの死の必要はなかった。キリストは、地上の生活によって神の律法をあがめられた。死によって、キリストは律法を確証なさった。キリストは、生命を犠牲としてささげられたが、それは神の律法を廃するためでも低い標準を設けるためでもなく、義が維持されるため、律法の不変性が示されるためであり、律法が永遠に確固として立つためであった。 {COL 1309.4}

サタンは、人間が神の戒めに従うことは不可能であると主張した。事実、自分の力では、わたしたちは戒めに従うことは不可能である。しかし、キリストは人間の形をとってこられて、人性に神性が結合する時人は神の戒めのあらゆる点に従いうることを、その完全な従順によって立証なさった。 {COL 1309.5}

「彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」（ヨハネ1：12）。この力は人間には備わっていない。それは神の力である。魂はキリストを受け入れる時、キリストのような生活を送る力を受ける。 {COL 1309.6}

神は、神の子らに完全を求められる。神の律法はご自身の品性の写しであり、またすべて品性の標準である。神がどのような人々によってみ国を構成なさるかについて、だれも間違いをしないように、この永遠の標準がすべての者に与えられている。キリストの地上生活は、神の律法の完全な表現であった。そして、自分は神の子であると表明する者の品性がキリストのようになれば、彼らは神の戒めに従うのである。その時主は、天の家族を構成する一員として、彼らを信頼することがおできになる。彼らはキリストの義の輝かしいよそおいを身にまとって、王の婚宴の座につく。彼らは、血で洗われた会衆に加わる権利を持つのである。 {COL 1309.7}

礼服をつけずに婚宴に出席した人は、今日のわたしたちの世界の多くの人々を代表している。彼らはクリスチャンであると表明し、福音の祝福と特権にあずかることを主張す

るが、自分の品性が変えられる必要があるとは思っていない。彼らは真心から罪を悔い改めたことがない。彼らはキリストの必要を自覚せず、キリストへの信仰を働かせない。彼らは、悪への先天的並びに後天的傾向に勝利していない。それにもかかわらず、彼らは自分は高潔であると思っており、キリストに信頼せずに自分の功績にたよっている。彼らはみ言葉を聞きに婚宴にあつまるが、キリストの義の衣を身につけていない。 {COL 1309.8}

自らクリスチャンと称する者の中には、単なる道徳家にすぎない者が多い。彼らは、キリストを世にあらわして主をあがめる唯一の賜物を拒んでいる。聖霊のお働きについては、彼らは何も知らないのである。彼らはみ言葉を行わない。キリストと一体である者と、世に結ばれている者とを区別する天の原則は、ほとんど識別することができなくなっている。キリストに従うと表明する者は、もはや特別にわかたれた民ではない。その境界線は明瞭でない。民は世と、そのならわしと、習慣と、利己主義のとりこになっている。世が教会と共に律法に従わなければならないのに、逆に教会が世とともに律法を犯している状態である。教会は日ごとに世に転向しつつある。 {COL 1310.1}

彼らは、みなキリストの死によって救われることを期待はするが、キリストの自己犠牲の生活を送ろうとしない。彼らは価なくして与えられる豊かな恵みを賛美し、自らをうわべだけの義でおおって、品性の欠陥を隠そうとする。しかし、彼らの努力は主の日になんの役にも立たない。 {COL 1310.2}

キリストの義は、心中に1つでも愛している罪があれば、それをおおうことをしない。人は、心の中で律法に違反していても、外面的な違反行為を犯さなければ、世間の人々から高潔な人物と見なされるだろう。しかし、神の律法は心の秘密を見ぬく。すべての行為は、その動機によってさばかれる。神の律法の原則に調和している事がらだけが、さばきの時に立ちうるのである。 {COL 1310.3}

神は愛である。神は、キリストを与えることによってその愛を示された。「御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るため」に「そのひとり子を賜わった」時、神は、ご自分で買いとられた所有である人類に、何1つさし控えることをなさらなかった（ヨハネ3：16）。神は全天をお与えになった。強敵サタンに打ち負かされないように、わたしたちはそこから力と能力を引き出すことができる。だが、神の愛は罪を許容するものではない。神はサタンの罪を許容されなかった。またアダムやカインの罪をも赦されなかった。同様に、いかなる人の子の罪もお赦しにならない。神はわたしたちの罪を黙認したり、品性の欠陥を看過したりなさらない。神はわたしたちに、そのみ名によって勝利することを期待されるのである。{COL 1310.4}

キリストの義の賜物を拒む者は、彼らを神の息子、娘とさせる品性を拒んでいるのである、彼らは婚宴の席に連なる唯一の資格であるものを拒んでいるのである。{COL 1310.5}

たとえの中で、「どうしてあなたは礼服をつけないで、ここにはいってきたのですか」と王に尋ねられた時、この男は黙っていた。このことは大いなる審判の日にもそうである。人々は、今は自分の品性の欠陥の言いわけをすることができても、その日にはなんの言いわけもできない。{COL 1310.6}

キリストを告白する現代の教会は、最高の特権に恵まれている。主は、ますます輝かしい光の中でわたしたちに啓示されている。わたしたちの特権は、昔の神の民の特権よりはるかに大きい。わたしたちは、イスラエルに託された大きな光を持っているばかりではない。偉大な救いの確証が、キリストを通していっそう明らかに与えられているのである。{COL 1310.7}

ユダヤ人にとって型であり象徴であったものが、わたしたちにとっては実体として与えられている。彼らには旧約の歴史があったが、わたしたちにはそれに加えて新約の歴史がある。わたしたちには来臨なさった救い主、十字架にかかり復活し、開かれたヨセフの

墓に向かって「わたしはよみがえりであり、命である」と仰せになった救い主の確証がある。わたしたちがキリストを知り、キリストがわたしたちを愛しておられることによって、神の国はわたしたちのまん中に置かれている。キリストは、説教によってわたしたちに啓示され、歌に歌われる。霊の婚宴は、わたしたちの前に豊かにととのえられている。測り知れない価で備えられた礼服は、あらゆる魂に無代で提供される。わたしたちは、キリストの義、信仰による義、神のみ言葉のきわめて大きな尊い約束、キリストによって天父に自由に近づくこと、聖霊の慰め、神の国における永遠の生命の保証などが、神の使者によって教えられている。神は、天の婚宴である大晩餐の準備のために、これ以上に何をしてくださることができるであろう。 {COL 1310.8}

天において、奉仕の天使はこう言っている。わたしたちに行えと命じられた務めを、わたしたちは果たしました。わたしたちは、悪天使の軍勢を押し返しました。わたしたちは輝きと光を人々の心に送り、イエスにあらわされた神の愛を思い起こさせました。わたしたちは、彼らの目をキリストの十字架に引き付けました。彼らの心は、神のみ子を十字架につけた罪を強く悟りました。彼らは罪を自覚しました。彼らは回心の時に、どんな段階をとるべきかを理解しました。彼らは福音の力を感じました。彼らの心は神の愛の尊さを見てくだかれました。彼らはキリストの品性の美しさを見ました。だが多くの者にとって、こうしたことはみな無益でした。彼らは、自分たちの習慣と性質とを神に従わせませんでした。彼らは天の衣を着るために、地の衣服を脱こうとしませんでした。彼らの心は貪欲に満ちていました。彼らは、神を愛するよりも世の交わりを愛しました。 {COL 1311.1}

最後の決定の日は厳粛な日である。使徒ヨハネは、預言の幻のうちにこう描写している。「また見ていると、大きな白い御座があり、そこにいますかたがあった。天も地も御顔の前から逃げ去って、あとかたもなくなった。また、死んでいた者が、大いなる者も小さき者も共に、御座の前に立っているのが見えた。かずかずの書物が開かれたが、もう1

つの書物が開かれた。これはいのちの害であった。死人はそのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれた」（黙示録20：11、12）。{COL 1311.2}

人々が永遠の門口に立って、過去を振り返ることは悲しいことである。自分の全生涯がありのままの姿で示される。その時には、世の快楽と富と名誉は、重大なものとは思われない。人々はその時に、自分たちのさげすんだ義だけが価値あるものであることを知る。彼らは、サタンの惑わしのままに、自分たちの品性が形成されたことを悟る。彼らが選んだ衣は、初めからの大背信者への忠誠のしるしであった。その時彼らは自分たちの選択の結果を見る。彼らは、神の戒めを犯すとはどういうことであるかを知る。{COL 1311.3}

永遠のために準備する恵みの期間は、もうこれから先にはない。わたしたちがキリストの義の衣を着なければならない時は、この世においてである。主の戒めを守る者のために、キリストがお備えくださった住居を継ぐために、品性を形成する機会はただこれだけである。{COL 1311.4}

わたしたちの恵みの期間はすみやかに閉じようとしている。終わりは近い。わたしたちは次のように警告されている、「あなたがたが放縦や、泥酔や、世の煩いのために心が鈍っているうちに、思いがけないとき、その日がわなのようにあなたがたを捕らえることがないように、よく注意していなさい」（ルカ21：34）。その日に準備ができていないことのないように、気をつけなければならない。礼服をつけずに王の婚宴に連なることのないように、注意しなければならない。{COL 1311.5}

「思いがけない時に人の子が来る。」「裸のままで歩かないように、また、裸の恥を見られないように、目をさまし着物を身に着けている者はさいわいである」（マタイ24：44、黙示録16：15）。{COL 1311.6}

第25章 タラントの正しい用い方

本章は、マタイ25：13～30に基づく {COL 1312.1}

キリストは、オリブ山上で、ご自分がこの世界にもう1度来られることについて、弟子たちに語られた。そして、キリスト再臨の切迫を示す前兆をあげて、目を覚まして、用意しているように弟子たちにお命じになった。キリストは、くり返して、「だから、目をさましていなさい。その日、その時が、あなたがたにはわからないからである」とおおせになった。そして、キリストの再臨を待つということは、何を意味するかを、お示しになった。それはただ漫然と待つことではなくて、勤勉に働いて、時を過ごすことであった。主はそのことをタラントのたとえで教えられた。 {COL 1312.2}

「また天国は、ある人が旅に出るとき、その僕どもを呼んで、自分の財産を預けるようなものである。すなわち、それぞれの能力に応じて、ある者には5タラント、ある者には2タラント、ある者には1タラントを与えて、旅に出た」と主は言われた。 {COL 1312.3}

遠い国へ旅に出た人とは、キリストのことである。キリストは、このたとえを語られた時、まもなくこの地上から天へ帰ろうとしておられた。「僕ども」、つまり、奴隷は、キリストの弟子たちのことである。わたしたちは自分自身のものではない。わたしたちは、「代価を払って買いとられた」もの（Ⅰコリント6：20）、しかも、それは「銀や金のような朽ちる物によったのではなく、きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである」（Ⅰペテロ1：18、19）。これは、「生きている者がもはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえったかたのために、生きるためである」（Ⅱコリント5：15）。 {COL 1312.4}

すべての人類は、この無限の代価を払って買われたのである。神は、この世界に天の全資産を傾けること、すなわち、キリストにあって、全天をわたしたちに与えることによ

って、すべての人の意志、愛情、知能、魂を買い取られたのである。信者であるとないと問わず、すべての人は、神の所有である。すべての者は、神のために奉仕するように召しを受けているのであって、それに対する彼らの態度いかんによって、大いなる審判の日に、決算をしなければならないのである。 {COL 1312.5}

ところが、このような神の要求を、すべての人が認めているわけではない。たとえの中で、キリストの僕たちといわれている人々は、キリストに奉仕することを、受け入れたことを公言する人のみをさしている。 {COL 1312.6}

キリストに従う者は、奉仕をするためにあがなわれた。主は、奉仕が人生の真の目的であることをお教えになった。キリストご自身が、勤労者であられて、彼に従うすべての者に、神と人類に仕えるという、奉仕の法則をお与えになる。ここで、キリストは、彼らがこれまで考えもしなかったところの、人生に対する高尚な見方をお示しになった。他のための奉仕に生きるということは、人をキリストに結合させる。奉仕の法則が、わたしたちを、神と同胞とに結びつける鎖となるのである。 {COL 1312.7}

キリストは、その僕たちに、「自分の財産」、つまり、神のために用いるべき何物かをお与えになる。キリストは、「それぞれ仕事を割り当てて」おられる。すべての者は、天の永遠の計画の中に自分の占めるべき場所があるのである。だれでも、魂を救うために、キリストと協力して働かなければならない。天の住居の中に、わたしたちの場所が確実に用意されているのと同じように、わたしたちがこの地上で神のために働くべき場所が、定められているのである。 {COL 1312.8}

聖霊の賜物

キリストが教会に託されたタラントというのは、特に、聖霊によって与えられる賜物と祝福のことである。「すなわち、ある人には御霊によって知恵の言葉が与えられ、ほかの人には、同じ御霊によって知識の言、またほかの人には、同じ御霊によって信仰、またほかの人には、1つの御霊によっていやしの賜物、またほかの人には力あるわざ、またほ

かの人には預言、またほかの人には霊を見わける力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力が与えられている。すべてこれらのものは、1つの同じ御霊の働きであって、御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられるのである」（Ⅰコリント12：8～11）。だれもが同じ賜物を与えられるわけではないが、主の僕にはだれにでも、何かの霊の賜物が約束されているのである。{COL 1312.9}

キリストは、弟子たちを去るに臨んで、「彼らに息、を吹きかけて仰せになった、『聖霊を受けよ』」（ヨハネ20：22）。また、「見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る」と言われた。しかしキリストの昇天後において初めて、賜物は、満ちあふれるばかりに注がれたのである。信仰と祈祷によって、弟子たちが神の働きのために全く自分たちを服従させた時に、初めて、神の霊が豊かに彼らの上に降り注いだのである。こうして、特別の意味において、天の財産が、キリストに従う者らにゆだねられたのである。「彼は高いところに上った時、とりこを捕らえて引き行き、人々に賜物を分け与えた」「キリストから賜わる賜物のはかりに従って、わたしたちひとりびとりに、恵みがあたえられている」（エペソ4：8、7）。「御霊は思いのままに、それらを各自に分け与えられたのである」（Ⅰコリント12：11）。賜物は、すでに、キリストにあってわたしたちのものであるが、それを実際に受けることは、神の霊をわたしたちが受けるか否かにかかっている。{COL 1313.1}

ところが、聖霊の約束は、それが尊重されなければならないほどには、尊ばれていない。約束の成就も実現されなければならないほどに、実際に現れていない。福音の事業を力のないものにしているのは、この聖霊の欠乏である。学識、才能、弁舌など、先天的、後天的な一切の資質が備わっていても、神の霊の臨在がないならば、人の心に触れることも、罪人をキリストに導くこともできない。その反面、どんなに貧弱で無知な弟子であっても、キリストと結合し、聖霊の賜物を所有しているならば、必ず人々の心に触れる能力を持つことができる。神は彼らを用いて、宇宙間の最高の感化を及ぼす器となさるのである。{COL 1313.2}

その他のタラント

特別な聖霊の賜物だけが、このたとえの中で表示されているタラントではない。タラントというのは、先天的であろうが、後天的であろうが、一般的なものであろうと霊的なものであろうと、すべての賜物と才能のことである。これを、すべて、キリストのための奉仕に用いなければならない。わたしたちは、キリストの弟子になったのであるから、自分自身と持っているすべての物をささげて、キリストに従うのである。すると、キリストは、これらの賜物を清め高尚にして、再びわたしたちに返してくださるから、わたしたちは、同胞を祝福するためにそれを用いて、神の栄光をあらわすようになるのである。{COL 1313.3}

神は、「それぞれの能力に応じて」、すべての者にお与えになった。タラントは、無計画に与えられるものではない。5タラントを使用する能力のある者は、5タラントが与えられた。2タラントを活用することができる者は、2タラントを受けた。1タラントだけを賢明に用いることができる者は、1タラントを受けたのである。だれも、大きな賜物を受けなかったからといって悲しむ必要はない。すべての者に賜物をお与えになった神は、賜物の大きい小さいにかかわらず、それが活用されることによって栄えをお受けになるからである。5タラントをさずけられた者は、5タラントを活用し、1タラントだけを与えられた者は、1タラントを活用しなければならない。神は、「持たないところによらず、持っているところによって」、人が返すことを望んでおられるのである（Ⅱコリント8：12）。{COL 1313.4}

たとえに、「5タラントを渡された者は、すぐに行って、それで商売をして、ほかに5タラントをもうけた。2タラントの者も同様にして、ほかに2タラントをもうけた」とある。{COL 1313.5}

タラントは、どんなに小さくても、活用しなければならない。わたしたちが、何よりも心に留めなければならないことは、どれほど受けたかということではなくて、現に与え

られているものをどのように活用しているか 1314ということである。わたしたちのすべての能力を発達させることが、わたしたちの神と同胞に対して果たさなければならない第一の義務である。日々自分の能力と有用さを発達させていない者は、人生の目的を果たしているとは言えない。キリストを信じると告白することは、主のために働く者として、最善を尽くして、向上することを誓約することである。そして、わたしたちの力の限り最大の善をするために、すべての能力を、最高の完全状態に発達させなければならない。{COL 1313.6}

主は、大事業をなしとげようとしておられる。そして、この世で、忠実に真心から最大の奉仕をする者には、来世において、最大のものを主はお与えになる。主は、ご自分のために働く者を選んで、日々、彼らを種々な環境の下において、ご自分の計画に従って試練をお与えになる。神の計画を成就しようと真心からの努力をする者を主が選ばれるのは、彼らが完全であるからではなくて、彼らが、神と結合することによって完全に到達できるようになるためである。 {COL 1314.1}

神は、高い目標を目指すことを決心した者だけを、お受けいれになる。神は、すべての人間が、最善を尽くすように義務づけられた。道徳的完全が、すべての者に要求されている。悪を行う傾向に対しては、先天的であろうが、後天的なものであろうが、そのような傾向と妥協するために、義の標準を下げてはならないのである。品性が不完全であることは、罪であることを知らなければならない。品性の正しい属性は、ことごとく、完全な調和のとれた全体として神の中に宿っている。そして、キリストを、自分の救い主として受け入れた者は、これらの属性をみな持つ特権が与えられている。 {COL 1314.2}

神と共に働く者となることを願っている者は、体のすべての器官と精神の能力とを完全な状態にするように努力しなければならない。真の教育とは、あらゆる義務を遂行することができるように、身体的、知的、道徳的能力を準備することである。それは、体と心

と魂を神の奉仕のために訓練することである。これは、永遠の生命につながる教育である。{COL 1314.3}

神は、すべてのクリスチャンが、あらゆる面において、力量を増し、能率をあげることを求めておられる。キリストは、ご自身の血と苦悩という代価を、わたしたちのために支払われた。そして、わたしたちが、喜んで奉仕することを待っておられるのである。主は、わたしたちがどのように働き、またどのような精神で働くべきであるかの実例を示すために、この世界に来られた。また主は、どうすれば神の働きを前進させ、神のみ名の栄えになるかを、わたしたちが研究することを望んでおられる。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」とある。この父に、わたしたちの最高の愛と献身とをささげて、栄光を帰すことを研究するように、主は望んでおられる（ヨハネ3：16）。{COL 1314.4}

とは言うものの、キリストは、品性を完成することがやさしいことであるとは、保証しておられない。高潔で円満な品性というものは、親から遺伝的にうけつぐものではない。また、偶然、ころがり込むものでもない。高潔な品性は、キリストの功績と恵みによって、人々が努力することによって得られるものである。神は、タラント、すなわち、精神の能力をお与えになる。そして、わたしたちが、品性を形成するのである。品性は、自己との厳しい戦いによって形成される。生来の傾向に対しては、争闘に次ぐに争闘をもって当たらなければならない。わたしたちは、厳しく自己を批判して、1つとして汚点を取り除かないで放っておくようなことをしてはならない。{COL 1314.5}

わたしは、自分の品性の欠点を正すことはできない、などとだれも言ってはならない。そう思い込んでしまえば、決して永遠の生命を受けることはできない。不可能であるということは、自分の心の中で、そう思ってしまうからである。勝とうと思わなければ、勝

つことはできない。心が清めを受けずに汚れていることと、神の支配に喜んで従わないことから、本当に困難なことが生じるのである。{COL 1314.6}

すぐれた働きをするように、神から資格を授けられた人々の多くがなぜ、なんらなすところがないかというと、彼らは、何もしようと努力しないからである。世には、なんの確かな目的ももたず、なんの標準もなく一生を送っている人が、多くいる。このような人は、彼らのしわざに相応した報いを受ける。{COL 1314.7}

人間は、自分が定めた標準以上には、出ることができないことを記憶しなければならない。そこで、どんなに苦しく、克己と犠牲が要求される時にも、標準を高くし、進歩の階段をのぼらなければならない。なににも妨げられてはならない。どんな人であっても、運命の網に捕らえられて、どうにも身動きができないほどに、固く縛られている人はない。難局に当面した場合には、それに打ち勝つ決心がなければならない。1つの障害を打ち破ると、前に進むいっそうの能力と勇気がわいてくるものである。正しい方面に向かって断固として進む時、環境は、妨げとはならず、かえって、わたしたちの助けとなるのである。{COL 1315.1}

わたしたちは、主の栄光のために、あらゆる品性の徳を養うように熱望しなければならない。品性建設のあらゆる面において、神を喜ばせなければならない。これはわたしたちにもできることである。エノクは、堕落した時代に生存しながら、神を喜ばせた。現代にも、エノクのような人々がいる。{COL 1315.2}

どんな誘惑にも屈しなかった、忠実な政治家ダニエルのように、わたしたちも立たなければならない。わたしたちを愛し、わたしたちの罪をあがなうために、その命を捨ててくださった主を失望させてはならない。「わたしから離れては、あなたがたは何1つできないからである」と主はおおせになる（ヨハネ15：5）。これを忘れないでほしい。もし過ちを犯した場合には、その過ちを認めて、それを再びくり返さないように戒めとするな

らば、勝利を収めたことになる。こうして敗北を勝利にかえ、敵に乗ぜられることなく、あがない主にほまれを帰すことになるのである。 {COL 1315.3}

神のかたちにかたどって形成された品性は、この世から来たるべき世界に持って行ける唯一の宝である。この世で、キリストの教えを受けた者は、その身につけた神の性質を全部天の住居に持っていくのである。そして、天では絶えず成長する。であるから、この世で品性を形成することは、非常に大切なことである。 {COL 1315.4}

完全な品性は、人を完全な行動にまで高めるから、それを確固たる信仰をもって求める者には、天使も協力して働くのである。この働きに加わっているすべての者に対して、わたしはあなたの右にあってあなたを助けると、キリストは言われる。 {COL 1315.5}

人間の意志が、神の意志と協力すると、どんなことでもできるようになる。神がお命じになったことは、神の力によって完成することができる。神のお命じになることはどんなことでも、成しとげることができるのである。 {COL 1315.6}

知能

神は、わたしたちが知能を啓発することを求めておられる。神は、神の僕たちが、世の人々よりすぐれた知性と識別力とを持つことを望んでおられる。また、彼らが、不注意と怠惰のために、有能で機敏な働き人になろうとしないことを悲しまれる。主は、心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主を愛するようにお命じになる。これは、わたしたちの全能力をあげて、創造主を知って愛するようになるために、知能を力の限り発達させる責任が、わたしたちに負わされたことを言っている。 {COL 1315.7}

知能は、聖霊の支配下におかれて、啓発されれば啓発されるほど、それは神のために力ある働きをすることができる。たとえ教育はなくても、神に献身して、他を祝福したいと望んでいる人は、神のご用のために主に用いられることができるもので、現にそのような人もある。しかし、十分な教育を受けた人が、同じ献身的精神をもったとすれば、キリ

ストのために更に広範囲の働きをすることができる。彼らは、有利な地位に立っているからである。 {COL 1315.8}

修得した知識を他に分け与えるために、できる限りの教育を受けるように、神はわたしたちに望んでおられる。人がどこでどのような働きに召され、神に代わって語るようになるかは、だれにもわからないのである。人が将来どのようになるかを知っているのは、ただ、わたしたちの天の父だけである。わたしたちの 1316

弱い信仰では認めることのできない可能性が、わたしたちの前途にはある。そこで、わたしたちは、よく知性をみがいていて、必要ならば、この地上の最高の権威者の前に立って、み言葉の真理を明らかにし、神のみ名の栄光を輝かすようにしなければならない。神のために働くために、知的な準備をする機会は、1つでも見のがしてはならない。 {COL 1316.9}

教育を受けなければならない青年は、確固たる決意をもって教育を受けるよう努力しなければならない。道が開かれるのを待たないで、自ら進んで開拓しなければならない。あらゆる機会を活用し、経済にも気をつけ、食欲や快楽のために、金銭を費やしてはならない。神が召された召しにかなった、有用で有能な人物になるように決心しなさい。何をするにしても、徹底的で忠実でなければならない。知能を強める機会は与えられるごとに活用しなければならない。書物の研究と同時に、有用な実業にも従事して、忠実に努力し、目をさまし、祈りつつ上からの知恵を得るように努力しなければならない。これが、青年に、円満な教育を与える。こうして、品性が向上し、他の人々によい感化を及ぼし、彼らを義と聖の道へと導くことができるようになるのである。 {COL 1316.1}

わたしたちに与えられた機会と特権に目覚めさえすれば、自学自習によって、はるかに大きな成果を見ることであろう。真の教育ということは、大学の教育以上のものを意味している。科学の研究も無視してはならないものではあるが、神と生きた交わりを保つことによって、はるかに高等の教育を受けることができる。学生は、聖書を手にして、大教

師イエスとの交わりに入らなければならない。そして、み言葉の探究中に出てくる困難な問題を解決することができる知能を、訓練し養成しておかなければならない。 {COL 1316.2}

同胞を祝福するために、知識をうえかわくように求める者は、自分自身が神の祝福にあずかる。彼らの知能は、聖書の研究によって、活発な働きをするように刺激を受ける。彼らの諸機能はますます発達して、知能も強くなり力を増してくる。 {COL 1316.3}

神のために働きたいと望んでいる者は、だれでも、自己を訓練することが必要である。雄弁などのすぐれたタラントよりも、自己を訓練することの方が、偉大なことをなしとげるのである。普通の知能の人でもよく訓練を受けた人は、最高の教育と最大のタラントに恵まれながら、自制心に欠けている人よりも、多くのことをなしとげることができる。 {COL 1316.4}

言葉

話すという能力は、努めて修得しなければならないタラントである。わたしたちが神から受けたあらゆる賜物の中で、これほど大きな祝福をもたらす能力は、ほかにない。わたしたちは、声を使って、人を説得したり、信服させたり、神に祈ったり、賛美したりする。また、声を用いて、あがない主の愛について、人々に語るのである。であるから、声を最も効果的に善のために用いるよう訓練することが、非常に大切である。 {COL 1316.5}

声の修練と声の正しい用い方は、知的でクリスチャン活動に従事している人々でさえ、非常になおざりにしている。物を読んだり、話したりする時に、低すぎたり、早すぎたりして、何を言っているのかよくわからないことが多い。また、重苦しく、不明瞭な発音をする人がいる。かん高い、するどい調子で聴衆に不快感を与える人もある。聖句、賛美歌、報告、発表などを公衆の前でする場合に、何を読んでいるのかわかりにくく、せっかくの力も印象深さも失われてしまうことが、よくある。 {COL 1316.6}

このような欠点は、正すことができるものであるから、是非とも直さなければならない。聖書もこの点について教訓を与えている。エズラの時代に、聖書を人々に読んで聞かせたレビ人について、「彼らはその書、すなわち神の律法をめいりょうに読み、その意味を解き明かしてその読むところを悟らせた」と、言われている（ネヘミヤ8：8）。{COL 1316.7}

熱心に努力することによって、だれでも、よくわかるように読み、音量のあるはっきりした丸い声で印象深く語ることができる。こうすることによって、わたしたちは、キリストのために働く者として、大いに効果をあ 1317げることができる。{COL 1316.8}

すべてのクリスチャンは、キリストの無尽蔵の富を、他の人々にのべ伝えるために召されたのである。であるから、わたしたちの言葉を完全にするように努めなければならない。聞く人の心を引きつけるような方法で、神の言葉を語らなければならない。神は、人間という通路がつたないものであることを望まれない。天からの流れが、人間を通っていく時に、その人のために、それが軽んぜられたり、価値が低められたりすることは、神のみ旨ではない。{COL 1317.1}

わたしたちは、完全な模範であるイエスをながめなければならない。そして、聖霊の助けを仰いで、神の力によって、完全な働きをすることができるようになるために、すべての器官を発達させるように努めなければならない。{COL 1317.2}

特に公の奉仕に召された者は、そうでなければならない。すべての牧師、すべての教師は、永遠の運命に関する使命を、人々に伝えていることを記憶しなければならない。語られた真理が、最後の審判の大いなる日に、人々をさばくのである。そして、真理を語った人の態度いかんによって、真理を受け入れるか拒むかを決定する魂もある。であるから、人々の理解に訴え、心に印象を残すように語らなければならない。真理は、ゆっくり、明瞭に、厳粛に語り、しかも、それは、その扱っている問題の重要性にふさわしい熱誠のこもったものでなければならない。{COL 1317.3}

言葉の力を正しく修練して用いることは、クリスチャン活動のあらゆる面に関係がある。これは、家庭生活の中にも、人との交際のどの場合にも必要なものである。わたしたちは、快い音声で話し、間違いのない正しい言葉を用い、親切で礼儀にかなった言葉を使うようにしなければならない。やさしい親切な言葉は、魂にとって、露のようなもの、静かに降る雨のようなものである。聖書にも、キリストには、「気品がそのくちびるに注がれて」いたから、「疲れた者を言葉をもって助けること」がおできであったとしるされている（詩篇45：2、イザヤ50：4）。また、「いつも……やさしい言葉を使いなさい」（コロサイ4：6）、「聞いている者の益になるようにしなさい」（エペソ4：29）と、主はお命じになるのである。{COL 1317.4}

人の誤りを正し、改めさせようとする場合、言葉に気をつけなければならない。言葉は命に至る命の香りともなれば、死に至る死の香りともなる。人を譴責したり、勧告したりする時に、傷ついた魂をいやすのにはふさわしくない、鋭い厳しい言葉を出す人が多い。このような思慮に欠けた発言によって、心を傷つけ、誤った人を反抗的にさせることがよくある。真理の原則をのべ伝える者は、すべて、天からの愛の油を受ける必要がある。どんな場合であっても、譴責の言葉は、愛をもって語らなければならない。そうするならば、わたしたちの言葉は、人を怒らせたりしないで、改革をうながすことができる。キリストは、聖霊によってわたしたちに、活力と能力を供給してくださる。これがキリストのお働きなのである。{COL 1317.5}

一言でさえも、無分別に言ってはならない。キリストの弟子の口からは、悪口や不真面目な話や、つぶやきやけがらわしいことを思わせる言葉が出てはならない。使徒パウロは、聖霊に動かされて、「悪い言葉をいっさい、あなたがたの口から出してはならない」と言った（エペソ4：29）。悪い言葉というのは、よこしまな言葉だけを言うのではない。それは、聖なる原則と清く汚れのない信心に反する表現をさしている。これは、不潔なことを暗示したり、ひそかに悪をほのめかしたりすることをも含んでいる。これらのことは、直ちにしりぞけないならば、大きな罪におとしいれるものである。{COL 1317.6}

汚れた言葉と戦うことは、すべての家庭とすべてのクリスチャン個人個人の上に負わせられた義務である。愚かな話をする仲間の中にわたしたちが入った時には、できるだけ、話題を変えるように努力することが、わたしたちの義務である。神の恵みの助けによって、静かに一言注意をするか、または、有益な話題を提供して人々の心をその方に向けるべきである。 {COL 1317.7}

子供たちに、正しい言葉使いを教えることは、親の務めである。この修練を行う一番よい学校は、家庭である。子供たちには、幼い時から、ていねいで愛に 1318あふれた言葉を両親に向かって、またお互いの間で、使うように教えなければならない。そして、柔和で真実で純潔な言葉だけを、くちびるから出すべきことを、教えなければならない。両親自身が、日毎にキリストの学校で学ぶ者となっていなければならない。そうすれば、「非難のない健全な言葉を用い」るように、自ら模範を示しながら、子供たちに教えることができる（テトス2：8）。これは両親の最も重大な責任の1つである。 {COL 1317.8}

わたしたちは、キリストに従う者として、互いのクリスチャン生活の助けとなり、励ましとなる言葉を語るようにしなければならない。わたしたちは、受けた恵みについてこれまでよりももっと多く語らなければならない。神の憐れみといつくしみ、救い主の愛のはかり知れない深さについて、語らなければならない。また、賛美と感謝をすべきである。心に神の愛があふれているならば、それが、会話にあらわれてくる。わたしたちの霊的生活の中に入ってきたものを、他の人々に分け与えることは、むずかしいことではない。偉大な思想、高貴な抱負、明確な真理の理解、無我の精神、敬虔と清めに対する渇望などは、当然言葉となってあらわれ、心の中に秘められた宝がどんなものであるかを示す。こうして、キリストが、わたしたちの言葉にあらわされる時に、その言葉は魂をキリストに導く力を持つようになるのである。 {COL 1318.1}

まだキリストを知らない人々に、キリストのことについて語るようにしなければならない。わたしたちは、キリストがなさったようにしなければならない。キリストは、会堂

であろうと、路傍であろうと、岸から押し出された舟の中であろうと、パリサイ人の宴会であろうと、取税人の食卓であろうと、どんな場所であっても、高尚な生活に関することを人々に語られた。主の教えの中には、自然の事物や日常のできごとなどが織り込まれていった。また、イエスは、病をいやし、悲しんでいる人を慰め、子供たちを腕に抱いて祝福されたりしたので、聴衆の心は、イエスに引き付けられた。イエスが1度、口を開いてお語りになると、人々は、吸い込まれるように聞き入り、その一言一言は、だれかの魂にとって、命から命に至らせる香りであった。 {COL 1318.2}

わたしたちも同様でなければならない。たとえどこにいようとも、救い主のことについて、人々に語る機会をとらえるようにしなければならない。わたしたちも、キリストの模範に従って善を行うならば、人々がキリストに心を開いたように、わたしたちにも心を開くのである。無作法な態度で話すのではなくて、神の愛から生じた気転を働かせることによって、「万人にぬきんで」「ことごとく麗しい」救い主のことを、彼らに語ることができる（雅歌5：10、16）。これこそ、言葉のタラントを最高に用いる方法である。言葉は、わたしたちがキリストを罪からの救い主として、人々にのべ伝えるために与えられたのである。 {COL 1318.3}

感化

キリストの一生は、どこまでも限りなく感化を及ぼした。この感化は、キリストを神と全人類家族とに結びつけた。神は、キリストを通して、人間に感化力を与えておられるから、人は自分だけの生活をすることができない。わたしたち個人個人は、神の総合体の1つとして、同胞と結ばれていて、お互いに義務づけられている。わたしたちの幸福は、他の人にも関係があるものであるから、だれ1人として、同胞から独立することはできない。各自が、自分は他の人の幸福のために必要であることを感じ、他人の幸福の増進のために努力することを、神は望んでおられる。 {COL 1318.4}

人はだれでも他に感化を及ぼすものである。信仰、勇気、希望などの生き生きとした愛の香りを放つものもあれば、あるいは、不平とわがままのために、重苦しく、冷たく憂うつで、心の中にひそむ罪の毒気を放っているものもある。わたしたちは、だれでも、このように自分の周りに、一種の雰囲気を持っていて、意識的に、または、無意識に、接する人々に感化を及ぼしているのである。{COL 1318.5}

これは、わたしたちの避けることのできない責任である。わたしたちの言葉、行為、服装、態度、あるいは、顔の表情でさえも、感化力を持っている。このようにして及ぼされた感化によって、相手がどれほどよくなるか、または、どれほど悪くなっていくか、だれにもわからない。このような刺激はすべて、必ず収穫をもたらす種である。それは、人類世界の長いできごとの連鎖の1つの輪であって、それが、どこまで続いているのかわからない。{COL 1318.6}

もしわたしたちが、自分たちの模範によって、人々の心の中によい原則を植えつけるのを助長したとすれば、彼らに善を行う力を与えることになる。彼らはまた彼らで、同じ感化を他の人々に与え、その人々はまた他の人々へと感化を及ぼしていく。こうして、わたしたちが、無意識のうちに及ぼした感化によって、幾千もの人々が祝福を受けるようになる。{COL 1319.1}

湖水に小石を投げると、波が生じて、次第に広がってついには岸にまで達する。わたしたちの感化もそれと同じで、わたしたちの知識と支配の限界を越えて、祝福かあるいはのろいを与えている。{COL 1319.2}

品性は力である。真実で無我の信心深い生活の無言の証しは、どんな人をも感化しないではおかない力を持っている。わたしたちの生活の中に、キリストの品性をあらわすことによって、わたしたちは、救霊の働きをキリストと共にするのである。わたしたちが、キリストと協力できるのは、わたしたちの生活に、キリストの品性をあらわすことによってのみである。そして感化の範囲が広ければ広いほど、それだけ、善をなす範囲も広い。

神に仕えるという者が、その日常生活において、律法の原則を実行して、キリストの模範に従う時、すなわち、何をしても、その行為によって、彼らが神を何ものよりも愛し、隣人を自分のように愛していることを示す時に、教会は、世界を動かす力をもつようになるのである。 {COL 1319.3}

しかし、感化は同様の力をもって、悪にも誘うものであることを忘れてはならない。自分の魂を失うことは、恐ろしいことである。けれども他の魂を滅びにおとしいれることは、さらに恐ろしいことである。わたしたちの感化が、死から死に至らせる香りになることは、恐ろしいことであるが、それは、可能である。キリストと共に集めているといいながら、かえってキリストから散らしている者が多い。教会が弱いのはこのためである。平気で批評非難をする者が多い。邪推、しっと、不満の精神などを口にすることによって、彼らは、サタンの配下となる。彼らが自分の行為に気づく前に、サタンは、彼らを用いて目的を達している。すでに悪い印象は与えられ、暗い影は投げられて、サタンの矢は、目標に当たったのである。こうして、キリストを受け入れたはずの人々が、疑惑と不信と無神思想をもつに至った。一方、サタンの側で働いた人々は、彼らの感化によって懐疑主義におちいり、神の譴責と懇願に対して心をかたくなにしてしまった人々を満足げにながめる。彼らは、自分たちを、その人々と比較して、自分たちは、徳もあれば、正しくもあるとうぬぼれる。しかし、実は、彼らの舌が無分別に語り、心が反逆的であったために、このような哀れな品性の破壊者が現れるに至ったのに気づかない。この人々が誘惑に負けて堕落したのは、彼らの感化によったのである。 {COL 1319.4}

このようにして、自称クリスチャンが、軽はずみでわがままな態度で、いいかげんな生活を送ることによって、多くの魂を命の道から追いやっている。神のさばきの時に、自分たちの及ぼした感化の結果を見ることを恐れる者が、多くあらわれることであろう。 {COL 1319.5}

ただ神の恵みによってのみ、わたしたちは、この賜物を正しく用いることができる。わたしたちは、自分の内には、他人によい感化を及ぼすことができるものを持っていない。自分の無力と神の力の必要とを自覚する時、わたしたちは自分自身に頼らないであろう。わたしたちは、1日、1時間、1瞬間がどんな結果を生じるかを知らないのであるから、天の父にわたしたちの道をまかせないで、1日を始めてはならない。天使たちは、わたしたちを保護するように、神の任命を受けているから、もし、わたしたちが、天使の守護の下にあるならば、どんな危険な時にも、天使たちは、わたしたちの右にいるのである。わたしたちが、無意識のうちに、悪い感化を及ぼす危険がある場合、天使がわたしたちの側で、他のよい方法をとるように注意してくれて、言うべき言葉を選び、わたしたちの行動を導いてくれる。こうして、わたしたちの感化は、無言で無意識のものであっても、他の人々をキリストと天国に導く強い力となるのである。 {COL 1319.6}

時

わたしたちの時は、神に属するものである。一瞬、一瞬が神のものである。そして、わたしたちには、その時を神の栄光のために活用するように、きわめて厳粛な責任が負わせられている。神がお与えになった賜物のなかで、わたしたちの時間ほどに厳密な説明が求められるものは他にないのである。 {COL 1320.1}

時間の価値は計り知れないものである。キリストは、1分1秒を貴重なものとみなされたが、わたしたちもそう思わなければならない。人の一生は、無駄にすごすには、あまりにも短い。永遠のために備えをすべき恵みの日は、ほんのわずかしかない。浪費したり、自己の快楽のために用いたり、罪にふけったりする時間はない。将来の永遠の命のために品性を形成するのは、今である。厳密な審判の時の備えをするのは、今である。 {COL 1320.2}

人類家族は、死ぬころになってから初めて、真に生き始めるようなものである。もし永遠の命に関する真の知識を得るのでないならば、この世の絶え間なき労苦も無に終わっ

てしまう。働きをする時間として、時を尊重する者だけが、永遠の命とその住居とに入るにふさわしい者である。その人は、この世に生まれたかいがあったといえるのである。{COL 1320.3}

わたしたちは、今の時を生かして用いるように勧められている。しかし、無駄に過ごした時間は、永久に帰ってこない。一瞬間でも呼びもどすことはできない。ただ残っている時間を神の協力者となって神の大贖罪計画のために最善をつくすことによって、時をあがなうことができるだけである。{COL 1320.4}

こうする者は、品性が一変する。彼は、神の子となり、王族の一員、天の王子となるのである。また、天使たちの友となるのにふさわしい者とされるのである。{COL 1320.5}

今こそ、同胞の救いのために働くべき時である。キリストの働きのために金銭をささげさえすれば、それで、すべての義務を果たしたように考えている者がいる。キリストのために個人的に奉仕をする農重な時間の方は、一向に活用されていない。しかし、神のために活動的奉仕をすることが、健康と力をもったすべての者の特権であり義務である。すべての者は、魂をキリストに導くために働かなければならない。献金は、この代わりにはならないのである。{COL 1320.6}

1秒1秒は、永遠にわたって重人な影響を及ぼすものである。いつでも義勇兵のように召集に応じて、奉仕をするために立たなければならない。助けを必要としている魂に命の言葉を語るために今与えられている機会は、もう2度とこないかも知れない。その人に向かって、神が「あなたの魂は今夜のうちにも取り去られるであろう」と言われるならは、その人は、わたしたちの怠慢のために、用意ができないことになってしまうのである（ルカ12：20）。大いなる審判の日に、わたしたちは、なんといって神の前に申し開きをしたらよいであろうか。{COL 1320.7}

人生は非常に厳粛であるから、一時的な地上の物に心を奪われたり、永遠に重大性をもった物と比べるならば、全く取るに足らない小さい事のために、絶えず心を煩わされていてはならない。とはいうものの、神は、この人生の一時的な事柄の中にあって、神に奉仕するように、わたしたちを召されたのである。この世の仕事を勤勉にすることは礼拝と同様に、真の宗教の一部である。聖書は、怠惰であってよいとは言っていない。怠惰は、この世界の最大ののろいとなっている。真に悔い改めた男女は、すべて勤勉に働く者となるのである。 {COL 1320.8}

知識を得、知力を啓発するか否かは、時間を正しく活用することにかかっている。知力の啓発は、貧困であるとか、いやしい身分であるとか、逆境にあるからとかいって妨げられるべきものてはない。 {COL 1320.9}

ただ時間を重んじればよいのである。なんのあてもないむだ話、朝、床の中で浪費する時間、電車や汽車の中、駅で待つ間、食事を待つ時間、約束の時間に来ない人を待つ間などの時間を、本を手にしていて、研究、読書、思索などに活用するならば、どのようなことが成しとげられるかわからない。固い決心 1321をもって、たゆまぬ努力を重ね、注意深く時間を節約するならば、知識と知的訓練を受けることができて、どのような地位にでも適した者となり、よい感化を及ぼし、りっぱに役立つ人物となるのである。 {COL 1320.1]0}

整頓、徹底、敏速の習慣をつけることは、すべてのクリスチャンの義務である。たとえ、どのような仕事にせよ、だらだらと不手際にしてよい理由はない。常に仕事をしていながら、仕事が完成されないとすれば、それは、仕事に心を入れていないからである。仕事がおそく、思うように運はない人は、このような欠点を改めるべきであることを自覚しなければならない。最大の結果を得るためには、どのように時間を用いるべきであるかを計画して、頭を働かせなければならない。気転と方法いかんによっては、他の人が10時間かかる仕事を、5時間で仕上げることができる。家庭の仕事をしている人で、仕事はそ

れほど多くはないが、時間を節約して計画しないために、1日中仕事をしている者がある。彼らはおそくぐずぐずしているために、わずかのことを、たいへんな仕事のようにしている。けれどもだれでも意志さえ働かせれば、このような手数のかかるぐずぐずした習慣に打ち勝つことができる。それには仕事をするにあたって、はっきりした目標を立てることである。この仕事にはなん時間必要であるかを定め、その時間内に、仕事を完成するように全力を注ぐのである。意志を働かせるならば、手も器用に動くようになるのである。{COL 1321.1}

自分から進んで改善しようという決意に欠けているために、人間は誤った習慣におちいってしまうのであるが、一方、自分たちの能力の啓発に努力するならば、最上の奉仕をする能力を得ることができる。そうすれば、彼らは、あらゆるところから求められ、彼らの真価は、人々から感謝されることであろう。{COL 1321.2}

家庭の重荷を負うことによって、父母に対してやさしい思いやりを示すことができるのに、その時間を浪費している青少年が多い。青年は、自分たちの強い肩に、人生の負うべき責任を多くになうことができる。{COL 1321.3}

キリストの生涯は、その幼少のときから、熱心で活動的な生活であった。イエスは、自分を楽しませる生活をなさらなかった。彼は、無限の神の子であったにもかかわらず、父ヨセブと共に大工の仕事をされた。彼の職業は意義深いものであった。彼は、品性の形成者としてこの世界においでになり、彼のすべての仕事は、完全であった。キリストが天の力によって人々の品性を完全に改変なさると同様に、この世の仕事をも完全になさったのである。彼は、わたしたちの模範である。{COL 1321.4}

親は、時の価値とその用い方を子供たちに教えなければならない。神の栄えをあらわし、人類を祝福するために何事かをするということは、努力に値するものであることを教えなければならない。子供たちは、幼いながらも、神のために伝道者となることができる。{COL 1321.5}

親が子供たちに、何もさせないでおくことほど大きな罪はない。やがて子供たちは、なまけ者になってしまい、無為無能の男女に成長してしまう。働く年齢になって、就職しても、仕事をなまけながら、それでいて忠実に働いた時と同じ給料を期待するのである。この種類の者と、忠実な家つかさになろうと自覚する者との間には、雲泥の差がある。{COL 1321.6}

仕事をなまけ、不注意な生活をしている者は、その習慣が宗教生活にまで影響を及ぼし、神のための奉仕も十分にできなくなってしまう。勤勉に努力すれば、世界のために祝福を与え得る身でありながら、怠惰のために身を滅ぼしている者が多い。職業につかず、また確固とした目的も持っていないために、様々な誘惑におちいる者が多い。悪友と悪習慣とが、心と魂を堕落させ、この世の命だけでなく、来たるべき命までも失ってしまうことになる。{COL 1321.7}

どの方面の仕事に従事しても、神の言葉はわたしたちに、次のように勧めている。「熱心で、うむことなく、霊に燃え、主に仕え、」「すべてあなたの手のなしうる事は力をつくしてなせ。」「あなたがたが知っているとおり、あなたがたは御国をつぐことを、報いとして主から受けるであろう。あなたがたは、主キリストに仕えているのである」（ローマ12：11、伝道の書9：10、コロサイ3：24）。{COL 1321.8}

健康

健康は祝福であるが、その価値を認める者は少ない。しかし、知的、身体的能力が力を発揮するには、体が健康でなければならない。わたしたちの感情は、身体の中に座を占めているから、身体も精神も最上の状態に保つようにして、わたしたちの才能を最高に活用しなければならない。{COL 1322.1}

体力を減退させるものは、なんであっても、精神を弱め、善悪の識別力を弱める。だんだん善を選ぶ力がなくなり、正しいと知りつつ、それを行う意志の力がなくなる。{COL 1322.2}

身体の諸機能を誤用するならば、神の栄光のために用いることができるはずの寿命をちぢめ、神からゆだねられた仕事を果たすことができなくなる。悪い習慣を続けたり、夜ふかしをしたり、健康を犠牲にしてまで食欲を満足させたりすることは、体を虚弱にする原因である。運動を怠ったり、心身を過度に疲れさせたりすると、神経系統の平衡が失われる。このようにして、自然の法則を無視したために寿命をちぢめ、奉仕ができなくなった人々は、神に対して盗みの罪を犯している。彼らは、また、同胞からも盗んでいることになる。他を祝福する機会、すなわち神がこの世界に彼らをお送りになった大切な仕事を、自分自身で短縮してしまった。そればかりではなくて、その短い期間に果たし得たはずのことさえできなくなってしまった。こうして、わたしたちが有害な習慣のために、世界から善を奪う時に、神はわたしたちに有罪の宣告を下されるのである。 {COL 1322.3}

肉体の法則に反することは、道徳律に反することである。神は、道徳律の創設者であると同時に、肉体の法則の創設者でもある。神は、人間にお任せになったすべての神経とすべての筋肉とすべての機能の上に、神の律法をご自分の手でお書きになった。であるから、わたしたちの体の組織のどの部分の悪用であっても、それは、その律法の違反になるのである。 {COL 1322.4}

神の働きをするために必要な状態に身体を保つためには、すべての者が人体の構造について十分な知識を持っていなければならない。神の性質が人によって、十分にあらわされるように、肉体の命を大切に保存し発達させなければならない。肉体の組織と霊的生命との関係を明らかにすることは、教育の最も重大な科目の1つである。家庭でも、学校でも、この点によく注意しなければならない。だれでも自分たちの体の構造と生命を支配する法則とをよく知らなければならない。だれでも故意に肉体の法則について無知でいたり、知らずに自然の法則を犯す者は、神に対して罪を犯すのである。だれでも、命と健康を増進させるように最善を尽くさなければならない。わたしたちの習慣は、神の支配下におかれた心の支配を受けなければならない。 {COL 1322.5}

使徒パウロは「あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたはもはや自分自身のものではないのである。あなたがたは代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分のからだをもって、神の栄光をあらわしなさい」と言っている（Ｉコリント6：19、20）。{COL 1322.6}

能力

わたしたちは、心をつくし、思いをつくし、精神をつくして神を愛するだけでなく、力をつくして愛さなければならない。これは身体の能力を十分に知的に活用することである。{COL 1322.7}

キリストは、霊的なことにおけると同様に、世的なことにおいても、真実の働きをなさって、それがなんであっても、天のみこころを行うという決心をもってなさった。天上のものと地上のものは、多くの者が想像している以上に、密接な関係をもち、また直接にキリストの支配の下にあるものである。地上に最初の幕屋を設ける計画をなさったのは、キリストであった。キリストはまた、ソロモンの神殿の建設の時の設計書をお与えになった。この地上の生涯でナザレの村の大工として働かれたお方は、ご自分の名があがめられるべき神殿を設計なさった、天の建築家であった。{COL 1322.8}

幕屋の建造にあたった人々に、精巧で美しい手際を示す知恵を与えたのは、キリストであった。主は言われた、「見よ、わたしはユダの部族に属するホルの子なるウリの子ベザレルを名ざして召し、これに神の霊を満たして、知恵と悟りと知識と諸種の工作に長ぜしめ……見よわたしはまたダンの部族に属するアヒサマクの子アホリアブを彼と共ならせ、そしてすべて賢い者の心に知恵を授け、わたしがあなたに命じたものを、ことごとく彼らに造らせるであろう」（出エジプト31：2～6）。{COL 1323.1}

各方面の神の働き人が、自分たちの所有している一切の物の与え主として、神を仰ぐことを、神は望まれる。すべての正しい発明と改良は、驚くべき計画を立て、すぐれたわざをなさる神から来たものである。医者の巧妙な手の働き、また医者が神経や筋肉を支配

する力、あるいは巧妙な体の諸器官に関する知識などは、苦しむ者を救うために用いるように与えられた神の力の知恵である。大工が金づちを用いる巧みさ、かじ屋が金床を鳴らす力などは、神から来る。神は人々にタラントをおゆだねになって、人々が神の指示を仰ぐことを期待される。どの部門のどんな仕事をするにしても、神は、わたしたちが、完全な仕事をすることができるように、わたしたちの思いを支配することを望んでおられる。{COL 1323.2}

宗教と実業とは、全然別のものではない。それは1つである。聖書の宗教は、わたしたちのすべての行為と言葉のなかに織り込まれなければならない。霊的なことを達成するのと同様に、この世的なことを達成する場合にも、天の力と人間の力とが結合しなければならない。この2つの力は、機械業や、農業、または商業や科学的事業などのあらゆる人間の職業において結合されなければならない。すべてのクリスチャン活動には、協力がなければならない。 {COL 1323.3}

神は、こうした協力が可能になる唯一の原則をお示しになった。それは神の栄光をあらわすことが、神と共に働くすべての者の動機でなければならないということである。わたしたちのすべての働きは、神を愛する心と神のみこころに従う心からなされるべきである。 {COL 1323.4}

神のみ旨を行うことは、礼拝に参列する場合と同様に、家を建てる時にも必要なことである。そして働き人たちが、自分の品性建設を正しい原則に従って行っているならば、彼らは、家を建てるごとに、恵みと知識に成長することができる。 {COL 1323.5}

しかし、どんなに大きなタラント、どんなにはなばなしい奉仕であっても、自己を祭壇にささげて、生きた犠牲として自分を焼きつくさないならば、神は、喜んでお受けにならない。根が清くないならば、神に受け入れられる実は無いのである。 {COL 1323.6}

神は、ダニエルやヨセフを賢明な管理者となさった。彼らは、自分の心を喜ばせるためではなくて、神を喜ばせるために生きたために、神は彼らを用いて、お働きになることができた。 {COL 1323.7}

ダニエルの実例は、わたしたちによい教訓を教えている。それは、実業家は、必ずしも抜け目のない政略的人間でなくてもよいということを示している。ダニエルは、バビロン帝国の総理大臣であったが、同時に神の預言者として、天来の霊感の光に浴していた。世の野心満々たる政治家たちは、草であって、やがて枯れてしまう野の花のようなものであると、聖書に記されている。しかし、神は、そのみ事業の中に賢明な人々を求め、各方面の働き場に有能な人々を求めておられるのである。真理の大原則を、商取引のあらゆる面に織り込む実業家が必要である。そして、彼らのタラントは、徹底的研究と訓練とによって完成されなければならない。賢明で有能な人材になるために、機会を活用すべき人々があるとするならば、それは、この世に神の国を建設するために努力している、その人々でなければならない。ダニエルは、厳密な調査を受けても執務上の欠点や過ちは、何1つなかった。ダニエルは、あらゆる実業に従事する者のよい模範である。ダニエルの生涯は、人間がもし、頭脳、骨、筋肉、心、命の力を神の奉仕にささげるならば、何をすることができるかを示したのである。 {COL 1323.8}

金銭

神は、また人々に財産をおゆだねになる。神は、富を得る力を人々にお与えになる。神は、天からの露と降りそそぐ雨によって地をうるおされる。また太陽を照らして、植物をはえさせ、繁茂させ、実を結ばせておられる。そして、神は、神のものを神に返すように人々にお求めになる。 {COL 1324.1}

金銭はわたしたちが、自分に栄えを帰するために与えられたものではない。わたしたちは、忠実な管理者として、神に栄光を帰するために、金銭を用いなければならない。自分たちの財産の一部分だけが、神のものであると、思っている人がある。宗教的、慈善的

目的のために一部分をささげれば、あとは、自分のもので自由に使用してもよいと、彼らは考える。しかし、これは間違いである。わたしたちの所有するものはみな神のものであって、その用途について、責任を負わなければならない。1銭の金を使うにも、神を第一に愛し、自分のように隣人を愛しているかどうかがあらわれるものである。 {COL 1324.2}

金銭は、大いなる善をすることができるから、大きな価値がある。それが神の子供たちの手にあれば、貧しい人の食事、かわいた人の水、裸の人の着物となり、圧迫されている人々の防御となり、病人を助ける手段にもなる。金銭は、困っている人々を助け、他を祝福し、キリストの働きを前進させるために用いてこそ、価値があるのであって、もしそうでないならば、金銭は砂と同様でなんの価値もないのである。 {COL 1324.3}

死蔵された富は、価値がないばかりでなくて、のろいである。それは、天の宝から人の心を遠ざけてしまうこの世のわなである。神の大いなる日に、用いられなかったタラントや無視された機会は、その所有者を責めることであろう。聖書には、次のようにしるされている。「富んでいる人たちよ。よく聞きなさい。あなたがたは、自分の身に降りかかろうとしているわざわいを思って、泣き叫ぶがよい。あなたがたの富は朽ち果て、着物はむしばまれ、金銭はさびている。そして、そのさびの毒は、あなたがたの罪を責め、あなたがたの肉を火のように食いつくすであろう。あなたがたは、終りの時にいるのに、なお宝をたくわえている。見よ、あなたがたが労働者たちに畑の刈入れをさせながら、支払わずにいる賃銀が、叫んでいる。そして、刈入れをした人たちの叫び声が、すでに万軍の主の耳に達している」（ヤコブ5：1～4）。 {COL 1324.4}

しかし、キリストは、金銭を浪費し、不注意に用いることがよいとは言っておられない。「少しでもむだにならないように、パンくずのあまりを集めなさい」という主の節約に関する教訓は、すべての弟子に対して与えられたものである（ヨハネ6：12）。金銭が

神から与えられたタラントであることを認める者は、だれでも、それを節約して用い、他に与えるために、蓄えておくことを義務と感じることであろう。 {COL 1324.5}

外見や放縦な生活のために、金銭を浪費すればするほど、飢えた者に食べさせ、裸の者に着せる分が少なくなる。不必要なことに金銭を費やす度に、善を行う尊い機会が失われていく。それは、そのゆだねられたタラントを活用して、神に帰すべきほまれと栄光とを、神から奪い去ることである。 {COL 1324.6}

親切な心と愛情

親切心、情け深い心、霊的理解の速やかなことなどは、尊いタラントである。こうしたタラントの持ち主には、重い責任が負わされている。これは、みな神のご用のために用いなければならない。ところが、ここで誤っている者が多い。彼らは、そのような特質を持っていることに満足し、それを他のために活発に働かせようとしない。何かの機会があり、また境遇に恵まれれば、大いなる善事をすることであろうと、自ら満足している。彼らは、機会を待っている。彼らは、貧しい人に、わずかの金を恵むのをさえ惜しむ人々の狭量さを軽べつして、このような人々こそ、利己的生活をしている人で、タラントの誤用に対する責任を負うべきであると考える。彼らは、自分たちをこのような狭い心の人々と比較して、自分たちのほうが、これらのいやしい心の隣人よりは良い状態にあると感じて、満足感にひたる。ところが、彼らは、自分を欺いている。よい特質を持ちながら、それを用いないこと 1325は、それだけ責任が重い。 {COL 1324.7}

大きな愛の心を持っている者は、単に友人ばかりでなくて、助けを必要とするすべての者を愛する義務が負わせられている。社会的に有利な地位もまたタラントであるから、それを、わたしたちの感化の及ぶ限りの人々の幸福のために用いなければならない。わずかの者にだけ親切にするのは、愛ではなくて、利己主義である。それは、どう見ても、人々を幸福にし、神に栄光を帰すものにはならない。こうして、主から与えられたタラントを活用しない人は、彼らが軽べつしている人以上に、罪深いのである。あなたがたは、主

の意志を知りながら、それを果たさなかったという宣告が、この人々には、下されることであろう。 {COL 1325.1}

タラントの活用による増加

タラントは、活用すれば、増加する。成功は、偶然や幸運の結果ではない。それは、神ご自身の摂理の結果で、信仰と思慮深さ、徳と不撓（ふとう）不屈の努力の結果である。神は、わたしたちが、すべての賜物を活用することを望んでおられる。そして、今持っている賜物を活用すれば、さらに大きな賜物を用いるようになる。神は、わたしたちに欠けている特質を、超自然的にお与えになったりしない。しかし、わたしたちが、持っているものを活用する時、神はわたしたちと共に働いて、すべての能力を増大し強化してくださる。主の奉仕のために全心をこめて熱心に自分を捧げるならば、その度にわたしたちの能力は増すのである。わたしたちが、自分を聖霊の働かれる器として服従する時に、神の恵みがわたしたちのうちに働いて、古い傾向を退け、強い性癖に勝利し、新しい習慣を形造るのである。わたしたちが、聖霊のささやきに耳を傾けて従うならば、わたしたちの心は拡大され、ますます神の力を受け、さらに、よい働きをすることができるのである。眠っていた精力は呼びさまされ、まひしていた機能も新しい生命を受けるのである。 {COL 1325.2}

神の召しに従順に応じるならば、どのような卑しい働き人にも、必ず神からの援助が約束されている。このように大きな清い責任を受け入れること自身が品性を高める。それは、知的、霊的能力を最高に活動させることを要求し、心と思いとを清めるのである。神の力を信じることによって、弱い者がどんなに強くなって不屈の努力を続け、大きな成果を生むようになるかは、驚くばかりである。たとえ、知識はわずかしかなくても、その少しの知識をへりくだった気持ちで人々に伝える者は、全天の宝庫が彼の要求に応じて開かれることを知るであろう。光を伝えたいと望めば望むほど、さらに光が与えられるのである。魂を愛して神の言葉を人に説明しようとすればするほど、ますますみ言葉の意味が明

らかに示される。知識を用い、能力を活用すればするほど、さらに多くの知識と能力とを持つようになるのである。 {COL 1325.3}

キリストのための努力は、すべて祝福となってわたしたちにもどってくる。神の栄光のために財産を用いるならば、もっと多くのものが与えられるのである。人々をキリストに導こうとして、彼らのために祈りをささげる時に、わたしたち自身の心が神の恵みの生きた感化によって脈打つのである。わたしたち自身の愛の心が、神からの熱を受けて、もっと燃えるようになり、わたしたちのクリスチャン生活はもっと現実的で、もっと熱心で、祈りに満ちたものとなることであろう。 {COL 1325.4}

天では、人の価値は、人間が持っている神を知る能力によって評価される。この知識こそ、すべての能力が流れ出る泉である。神は人間のすべての能力が、神のみこころにかなった能力になるように創造された。神は常に、人間の心を神の心と交わらせようとしておられる。神は、キリストと協力して、神の恵みを世界にあらわす特権を、わたしたちにお与えになる。これは、わたしたちがますます多くの天の知識を受けるためである。 {COL 1325.5}

イエスをながめることによって、いっそう明らかに神を見ることができるようになり、わたしたちは、ながめることによって変えられる。同胞に善を行い、彼らを愛することは、わたしたちにとっては自然に行う本能となる。そして、神の品性と全く同じ品性を自分たちの中に形成する。こうして、神のかたちにまで成長 1326することによって、神を知る能力もますます増加する。わたしたちは、ますます、天上の世界との交わりを深め、永遠の知識と知恵の富を受ける力を絶えず強めるのである。 {COL 1325.6}

1タラント

1タラントを渡された者は、「行って地を掘り、主人の金を隠しておいた。」 {COL 1326.1}

タラントを活用しなかったのは、一番小さい賜物を渡された者であった。これは、自分の賜物は小さいから、キリストのご用に活用しなくてもよいと思うすべての者に対して与えられた警告である。もし彼らも、何か大きなことができれば、どんなに喜んで、それをすることであろう。しかし、ほんの小さい奉仕しかできないから、何もしなくてよいと、彼らは考えるのである。これは間違っている。神は賜物を分配なさることによって、人の品性をためしておられる。自分のタラントの活用を怠る者は、不忠実な僕である。もし、彼が5タラント渡されたとしても、1タラントを土に埋めたように、5タラントを埋めたことであろう。彼が1タラントを活用しなかったことは、天の賜物を軽視したことをあらわしている。 {COL 1326.2}

「小事に忠実な人は、大事にも忠実である」（ルカ16：10）。小さい事は、それが小さいために、その重要性が認められない場合がよくある。しかし、小事は、人生において実際によい訓練を与えるものである。クリスチャンの生活の中では、真に不必要なものはない。小事の重要性を軽視するために、品性形成上のあらゆる危険にあうのである。 {COL 1326.3}

「小事に不忠実な人は大事にも不忠実である。」どんなに小さい義務であっても、それに不忠実であることは、人間が神につくすべき奉仕を、創造主から奪うことになる。この不忠実さは自己にもどってくる。彼は神に完全に服従することによって、受けることができる恵みと能力と品性の力を、受けることができない。キリストから離れて生活をする結果、サタンの誘惑に負けて、創造主のご用をしながらも誤りをする。彼は、小事において正しい原則に導かれていないから、これは、自分の特別の仕事であるとみなす大事においても、神に従わないのである。人生の小事を扱う時に見られる欠点が、大切なことを扱う時にも及んでくる。日ごろの態度が、何事にもあらわれてくる。こうして、行為をくり返しているうちにそれが習慣となり、習慣は品性を形成し、品性は、わたしたちの現世と永遠の運命を決定するのである。 {COL 1326.4}

小事に忠実であってこそ初めて、大きな責任が負わせられた時にも忠実に行動するように訓練されるのである。神は、ダニエルと彼の友人たちを、バビロンの偉大な人々の中に置かれたが、これは、異教の中にある人々に、真の宗教の原則を知らせるためであった。ダニエルは、偶像教徒の中で、神の品性の代表者として置かれたのである。ダニエルは、どうして、こうした大きな信頼と栄誉を受けるにふさわしい者になったのであろうか。それは、小事に対する忠実さが、彼の全生活を貫いていたからである。ダニエルは、どんな小さい義務を行う時にも、神をあがめた。神は、ダニエルと共に働かれた。神は、ダニエルとその友人たちに、「知識を与え、すべての文学と知恵にさとい者とされた。ダニエルはまたすべての幻と夢とを理解した」（ダニエル1：17）。{COL 1326.5}

ちょうど神がバビロンにおける証人として、ダニエルを召されたように、今日、この世界において神の証人とするために、わたしたちを召されたのである。神は、わたしたちが、小事においても、大事においても、神の国の原則を人々の前にあらわすように望んでおられる。{COL 1326.6}

キリストは、この地上の生活において、小事に注意すべきことをお教えになった。贖罪の大業ということが、常に主の心の重荷であった。主が教えたり、いやしたりなさった時には、主は、その心身の全精力をそのことに集中された。また、彼は、自然の中や人生のごく単純なことに心を留められた。イエスの最大のお教えは、自然界の単純なものを例にあげて、神の国の大真理を説明なさった時に語られたのである。どんなに卑しい僕の必要でさえ、イエスは、見過ごしにされなかった。彼の耳は、必要を訴えるすべての叫びを聞いたのである。彼は、群衆の中の病に苦しむ女が衣に触れたのを知り、その信仰のかすかな接触に答えられた。また、ヤイロの娘を死からよみがえらせた時に、何か食物を与えるように、両親に注意なさった。また、主が、ご自分の大能の力によって墓からよみがえられた時に、身にまとっておられた衣をたたんで、ていねいに適当な場所に置くことをおいといにならなかったのである。{COL 1326.7}

クリスチャンとして、わたしたちがするように召された働きは、キリストと協力して、魂の救いのために働くことである。わたしたちは、すでに、この仕事をすることを主と契約している。この働きを怠ることは、キリストに対して、不忠実であることを表す。しかし、この働きを完成するためには、忠実に良心的に小事をなさったイエスの模範に、従わなければならない。あらゆるクリスチャン活動とその感化がよい結果をもたらす秘訣は、ここにある。 {COL 1327.1}

神は、民らが最高の階段にまで上って、神が与えようとしておられる能力を所有して、神の栄光をあらわすことを望んでおられる。わたしたちは、世の人々よりは、はるかにまさった計画に従って動いていることを示すあらゆる準備が、神の恵みの下に整えられているのである。わたしたちは、神を信じ、神が人の心に働く力を信じているから、知力と理解力、技術と知識にすぐれていることを示さなければならない。 {COL 1327.2}

しかし、大きな賜物を与えられなかった者も失望する必要はない。常に品性の弱点に注意しながら、神の恵みによってそれを強めるように努め、持っているものを活用すればよいのである。人生のあらゆる行為の中に真実と忠誠とを織り込み、仕事の完成のために役立つ特質を養うべきである。 {COL 1327.3}

怠慢の習慣には、断固として打ち勝たなければならない。どんなに大きな過ちをしても、忘れていたと言いわけをしさえすれば、それで十分であると考えている者が多い。しかし、彼らも他の人々と同様の知能をもっているのではなかろうか。それならば、物をよく覚えるように頭を訓練しなければならない。忘れることは罪であり、怠ることは罪である。怠る習慣をつけると、自分の魂の救いを怠るようになり、ひいては、不用意のために、神の国に入ることができなくなるのである。 {COL 1327.4}

偉大な真理は、小事のなかにもあらわされなければならない。日ごとのどんなに卑しい務めも、宗教的態度で行うべきである。神の言葉に絶対的に従うことが、いかなる人にも、最大の資格を与えるのである。 {COL 1327.5}

直接宗教の働きに関係がないからといって、自分たちの生涯はなんの役にも立たず神の国の発展のために何もしていないと感じる人が多い。しかし、これは間違った考えである。だれかのしなければならない仕事が与えられているならば、自分たちは神の大きな家族の中で、なんの役にもたたないなどと思ったりしてはならない。どんなに小さな務めでも軽視してはならない。真面目な仕事は、なんであっても祝福である。その仕事を忠実にしているならば、どんな信任でも受ける訓練となるのである。 {COL 1327.6}

どんな仕事でも、全く自己を捨てて神のために行うならば、神はそれを最上の奉仕としてお受けになる。真心から喜んでささげるささげ物は、なんであっても、小さいものではないのである。 {COL 1327.7}

たとえ、わたしたちはどこにいても、その場にある義務を果たすように、キリストは命じておられる。もし家庭にいるならば、家庭を楽しい所にするように、喜んで熱心に行いなさい。あなたが母親であれば、子供たちをキリストのために育ててください。これは講壇に立つ牧師と同じく、神のための働きである。また、台所で働くことが、自分の義務であれば、完全な料理人になるように努めなさい。健康的で栄養のあるおいしいものを作りなさい。そして料理に最高の材料を用いる時に、自分の心にも最高の思想がわいてくるような材料を与えなければならないことを、忘れないでもらいたい。また、農業その他の職業に従事している人は、現在している務めを成功させるように努力してください。今している仕事に注意を集中しなさい。どんな仕事をしていても、キリストを代表しなさい。キリストがあなたの立場におられたら、彼がなさる通りにしなさい。 {COL 1327.8}

タラントは、どんなに小さくても、神には、その使い場所がある。1つのタラントでも賢明に活用されるならば、それは、定められた働きを成し遂げるのである。小さい義務を忠実に果たしていくことによって、わたしたちは、加え算で仕事をしていくけれども、神は、かけ算で、わたしたちのために働いてくださるのである。このような小さいものが神の働きの中で、何よりの貴重な感化となるのである。 {COL 1328.1}

どんなに小さい義務の遂行にあたっても、生きた信仰が金の糸のようにその中に織り込まれていなければならない。そうすれば、日ごとの仕事の全体が、クリスチャンの成長を助け、イエスを絶えず仰ぎ見るようにする。わたしたちは、キリストを愛しているので、なすすべての事に力が入るのである。こうして、わたしたちは、タラントを正しく活用することによって、わたしたちをより高い世界に、金の鎖で結びつけることができるのである。これが真の清めである。というのは、清めとは神のみこころに完全に従いながら、日毎の務めを快活に行うことであるからである。 {COL 1328.2}

ところが、何か大きな仕事が任せられるのを待っているクリスチャンが多い。彼らは、自分たちの野心を満足させるに足るような、大きな場所をみつけることができないために、人生の平凡な義務を忠実に果たさない。平常の務めは、あまり興味がないと思っている。こうして、日1日と、神に忠実に仕える機会を逸している。何か大きな事をしようと待っている間に、彼らは、なんの目的も達せず、働きも完成しないで、人生を過ごしてしまうのである。 {COL 1328.3}

返されたタラント

「だいぶ時がたってから、これらの僕の室人が帰ってきて、彼らと計算をしはじめた。」主が僕たちと計算される時には、すべてのタラントがどれだけ増したかが厳密に調べられる。行った働きが、僕たちの品性をあらわすのである。 {COL 1328.4}

5タラント与えられた者と、2タラント与えられた者とは、託された物と利益とを主に返した。これは彼らが、何も自分の功績を認めないことを示している。彼らのタラントは、与えられたものであった。別のタラントをもうけたのではあるが、元金がなければ利益もなかったのである。彼らは、ただ自己の義務を果たしたことを認めている。資金は主のものであったから、利益も主のものである。もしも主が彼らに愛と恵みとを賜らなかったならば、彼らは、永遠に破産してしまったことであろう。 {COL 1328.5}

しかし、主がタラントをお受けになった時、それがいかにも彼らの功績であるかのように、僕たちを賞賛し、報われたのである。彼の顔には、喜びと満足の色があらわれていた。主は彼らに、祝福を与えることができることを喜ばれるのである。神が僕たちに奉仕と犠牲をお与えになるのは、神の側に与えなければならない義務があるからではなくて、愛とやさしさにあふれた心からなさるのである。 {COL 1328.6}

「良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。」 {COL 1328.7}

神が喜んでお受けになるものは、神への忠実さ、忠誠、愛の奉仕などである。聖霊に動かされて、人々を善と神とに導いた行為は、天の書に記録される。そして、このような働きをした僕は、神の日に賞賛を受けるのである。 {COL 1328.8}

彼らは、自分たちの働きの結果、あがなわれた人々を、神の国でみる時に、主の喜びにあずかるのである。そして、彼らは、この地上で神と共に働くのにふさわしい者となっていたから、天でも神とともに働く特権が与えられる。わたしたちが、天でどうなるかは、現在どんな品性をもち、神のみわざの中で何をしているかによってきまる。「それは、人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためである」と、キリストご自身が言われた（マタイ20：28）。キリストのこの地上の働きは、キリストの天の働きである。この地上でキリストと共に働くことの報いは、来たるべき世界で、キリストと共に働くという、より大きな力と特権が与えられることである。 {COL 1328.9}

「1タラントを渡された者も進み出て言った、『ご主人様、わたしはあなたが、まかない所から刈り、散らさない所から集める酷な人であることを承知していました。そこで恐ろしさのあまり、行って、あなたのタラントを地の中に隠しておきました。ごらんください。ここにあなたのお金がございます』。」 {COL 1328.1]0}

人々はこのように、神の賜物を用いなかったことの弁解をする。いかにも神が横暴苛酷で、人間の欠点をさがしては、罰を与えるもののように考える。何も与えずにおいて要求し、まかないでおいて刈るもののように非難する。{COL 1329.1}

神が人々の所有を要求し、彼らの奉仕をお求めになるのを非難して、神は苛酷な主人であるという者が多くいる。しかし、わたしたちは、すでに神のものである物のほかに、何も神にささげることはできない。ダビデ王は「すべての物はあなたから出ます。われわれはあなたから受けて、あなたにささげたのです」と言った（歴代志上29：14）。万物は、創造によるばかりでなく、贖罪によって神の所有なのである。現世ばかりでなく、来世においても、受ける祝福のすべてには、カルバリーの十字架が押されている。であるから、神が苛酷な主人であって、まかないところから刈るという非難は不当である。{COL 1329.2}

主人は、悪い僕の不当な非難を別に否まなかった。しかし、この僕の行動はなんの弁解の余地がないことを示している。主人の利益になるように、タラントを増やす方法は、すでに備えられていたのである。「主人は言った、『それなら、わたしの金を銀行に預けておくべきであった。そうしたら、わたしは帰ってきて利子と一緒にわたしの金を返してもらえたであろうに』。」{COL 1329.3}

わたしたちの天の父は、わたしたちが与えられただけの才能を、発揮することをお求めになる。わたしたちには負うことができない重荷を、無理に負わせられることはない。「主はわれらの造られたさまを知り、われらのちりであることを覚えていられるからである」（詩篇103：14）。神がわたしたちにお求めになることは、すべて、恵みによって、わたしたちのなし得ることなのである。{COL 1329.4}

「多く与えられた者からは多く求められ」る（ルカ12：48）。わたしたちのできることから少しでも足りなければ、それに対する責任を負わなければならない。主は、わたしたちにどんな奉仕ができるかを、正確にお計りになる。活用した能力と同様に、活用しな

かった能力も調べられる。わたしたちの才能を正しく用いたならば、到達し得たはずのことに対して、神はその責任を問われる。わたしたちは当然なし得たにもかかわらず、才能を神の栄えのために用いなかったために、なし得なかったことを、さばかれる。自分の魂を失わないまでも、用いなかった才能の結果がどんなものであるかを、永遠にわたって知らされることであろう。なぜなら、得るべきであって得なかったところのすべての知識と才能とは、永遠の損失となるからである。 {COL 1329.5}

しかし、わたしたちが自分を全く神にささげて、神の指導に従うならば、その達成については、神が責任を負ってくださる。わたしたちが、忠実に働くならば、これが成功するかどうかを気にすることを神は望まれない。失敗については、1度でも考えてはならない。わたしたちは、失敗することのないお方と協力しなければならない。 {COL 1329.6}

自分の弱さや無能のことを口にしてはならない。これは、神に対する不信を示し、み言葉を拒むことを示している。重荷についてつぶやいたり、負わせられた責任を拒んだりするならば、それは、主が苛酷であって、能力を与えないで要求すると言っているのと同じことである。 {COL 1329.7}

なまけた僕の精神を、わたしたちは謙遜ということがあるが、真の謙遜は、これとは全く異なったものである。謙遜であるということは、何も知力に欠け、抱負もなく、おく病な気持ちで人生を送り、失敗することを恐れて責任を避けることではない。真の謙遜は、神の力に頼って神の目的を成就することである。 {COL 1329.8}

神はみこころにかなう人々を用いてお働きになる。神は大きな働きをするのに、最もいやしい器をお選びになる。それは、神の力が、人間の弱さによってあらわされるためである。わたしたちは、標準をもっていて、それによって、1つの事を偉大であると言い、他のものを小さいと言うのである。しかし、神は、人間の定規でおはかりにならない。人間が大きいと思うことを、神も大きく思い、人間が小さいと思うことを、神も小さく思わ

れるものと決めてはならない。才能を評価したり、仕事を選んだりすることは、わたしたちのすることではない。わたしたちは、神が負わせてくださった荷を神のために負い、常に神のみ前に出て、安んじているべきである。仕事はなんであっても、真心から喜んでする奉仕を神は喜ばれる。神とともに働く者とされたことを喜び、感謝の心をもって義務を果たすことを、神は喜ばれるのである。{COL 1329.9}

取りあげられたタラント

「さあ、そのタラントをこの者から取りあげて、10タラントを持っている者にやりなさい」という宣言が、なまけた僕に下された。これは、忠実に働いた者に与えられた報いと同じく、最後の審判の時の報いであるだけでなくて、現世においても、徐々に与えられる報いである。霊界も自然界と同じである。用いない能力は弱くなり、衰えてしまう。活動は生命の法則である。「各自が御霊の現れを賜わっている」（Ⅰコリント12：7）。賜物は、他を祝福するために活用するならば増加する。ところがそれを、自己のために閉じ込めてしまえば、減少して遂には取り去られてしまう。自分の受けたものを分け与えることを拒む者は、ついに与えるものがなくなってしまう。これは魂の能力を弱め、ついには滅びにおとしいれてしまう自滅の道である。{COL 1330.1}

利己的で自己中心な生活を送りながら、主と一緒に喜ぶことができると思ってはならない。彼らは無我の愛の喜びにあずかることはできない。彼らは天の宮廷にふさわしくない。天にみなぎっている清い愛の雰囲気を理解することができない。天使たちの声も、立琴の音楽も、彼らには満足を与えない。彼らにとって、天の科学は、1つの解き得ぬなぞである。{COL 1330.2}

大いなる審判の日に、キリストのために働かず、ただ自分のことと、自分を喜ばせることのみを考えて、なんの責任も負わず、浮き草のような生活をした人々は、全地の審判主から悪を行った人々の中に入れられて、同じ宣告を受けるのである。{COL 1330.3}

クリスチャンであると言いながら、神の要求を果たさずそのことを別に悪いことと思わない者が多い。彼らは、神を汚す者、殺人、姦淫を行う者が罰をけるのに値することを知っている。しかし、自分たちは、宗教的集会を楽しみ、福音の説教を聞くことを愛しているから、クリスチャンであると思っている。彼らは自分のことばかりに日を過ごしていたのであるが、この不忠実な僕が「そのタラントをこの者から取りあげよ」という宣告を聞いて驚いたように、彼らも驚くのである。彼らも、ユダヤ人と同じように、祝福を正しく用いないで、自分の楽しみにあててしまった。 {COL 1330.4}

自分は、神のために働く能力がないと言って、クリスチャンの働きをしないことの弁解をする者が多くいる。しかし、神は、彼らをそのような無能力者に造られたのであろうか。決してそうではない。彼らの無能は、自分たちが活動を怠って、それを故意に続けた結果である。「そのタラントをこの者から取りあげよ」という宣告の結果は、すでに彼らの品性の中にあらわれている。タラントをいつまでも用いないでいると、唯一の光である聖霊を消してしまうのである。「この役に立たない僕を外の暗い所に追い出すがよい」という宣告は、彼ら自身が、永遠に決定したことを、天が承認したことを示しているのである。 {COL 1330.5}

第26章 神と人に対する責任

本章は、ルカ6：1～9に基づく {COL 1330.6}

キリストが、この世にこられたのは、俗事の追求が頂点に達した時代であった。人々は、永遠のことをこの世のことの次におき、未来のことを現在のことの次にしていた。彼らは、幻影を実在と思い、実在を幻影であるかのように思い違いしていた。彼らは、信仰によって見えない世界を見なかった。サタンは、この世の物を、何よりも魅惑的で、興味深いもののように見せかけていたので、人々は、サタンの誘惑に心を奪われていた。 {COL 1330.7}

キリストは、このような状態をくつがえすためにこられた。彼は、このように人々を惑わして捕らえていた魔力を解こうとなさった。キリストは、そのお教えの中で、天が人に要求するものと、地が人に要求するものとの関係を明らかにして、人の心を現世のことから転じて、将来のことに向けさせようとなさった。この世のものの追求ではなくて、永遠のための準備をするように、イエスは彼らをお招きになったのである。 {COL 1331.1}

「ある金持のところにひとりの家令がいたが、彼は主人の財産を浪費していると、告げ口をする者があった」と主は言われた。この金持ちは、自分の財産を全部、この僕に任せていた。ところが、彼は忠実ではなかった。そして、主人は、自分の財産がたえず横領されているのに気づいて、彼をやめさせることにして、帳簿の清算を命じたのである。そして、「あなたについて聞いていることがあるが、あれはどうなのか。あなたの会計報告を出しなさい。もう家令をさせて置くわけにはいかないから」と彼は言った。 {COL 1331.2}

解雇されることがわかった家令は、自分の前に3つの道が残されているのを知った。この家令は心の中で思った。「『どうしようか。主人がわたしの職を取り上げようとしてい

る。土を掘るには力がないし、物ごいするのは恥ずかしい。そうだ、わかった。こうしておけば、職をやめさせられる場合、人々がわたしをその家に迎えてくれるだろう。』それから彼は、主人の負債者をひとりびとり呼び出して、初めの人に、『あなたはわたしの主人にどれだけ負債がありますか』と尋ねた。『油100樽です』と答えた。そこで家令が言った、『ここにあなたの証書がある。すぐそこにすわって、50樽と書き変えなさい。』次に、もうひとりに、『あなたの負債はどれだけですか』と尋ねると、『麦100石です』と答えた。これに対して、『ここに、あなたの証書があるが、80石と書き変えなさい』と言った。」 {COL 1331.3}

この不忠実な僕は、他の人々を彼の不正直な行為の仲間に引き入れた。彼は、主人に損害を与えて、その人々に利益を得させたのであるから、このような便益を受けることによって、彼らは、この僕を友人として、彼らの家に迎え入れなければならないはめになった。 {COL 1331.4}

「ところが主人は、この不正な家令の利口なやり方をほめた。」この世の主人は、自分に損害を与えた男の抜け目のないやり方をほめた。しかし、金持ちの賞賛は、神の賞賛ではなかった。 {COL 1331.5}

キリストは、不正な家令をおほめになったのではなくて、ご自分が教えようと望まれた教訓を、人々のよく知っているできごとを例にあげて説明なさったのである。「不正の富を用いてでも、自分のために友だちをつくるがよい。そうすれば、富が無くなった場合、あなたがたを永遠のすまいに迎えてくれるであろう」と言われたのである。 {COL 1331.6}

救い主は、取税人や罪人と交わったために、パリサイ人の非難をお受けになった。しかし、イエスのこの人々に対する関心は、減少せず彼らに対する彼の努力はやまなかった。イエスは、彼らの職業が彼らを誘惑におとしいれていたのをお認めになった。彼らは、悪へのいざないにかこまれていた。悪の道に1歩ふみ込むのは容易なことで、すぐにでも

、大きな不正と極悪な犯罪へと落ちこんでいくのである。キリストは、なんとかして、彼らの心を高い目標と高尚な主義に引き付けようとなさった。不正な家令の話をなさった時に、主が心に思っておられたのは、このことであった。取税人たちの間ではちょうどたとえの中で言われているようなことが起こっていたので、キリストの描写を聞いていると、それが自分たちのことのように彼らには思えた。彼らは心を引かれた。そして、自分たちの間の不正な習慣によっても、霊的真理の教訓を学んだ者が多くあったのである。 {COL 1331.7}

しかしながら、このたとえは、直接弟子たちに向かって語られた。まず真理のパン種が彼らに与えられて、それから、それが他の者に伝えられたのである。 1332キリストの教えの多くは、初めのうち弟子たちにも理解することができなかった。そして、時には、彼の教えが全く忘れ去られたかのように思われた。しかし、弟子たちは、これらの真理を聖霊の力によって、再び思い起こすことができ、日ごとに教会に加えられた新しい改心者たちに、明瞭にそれを伝えたのである。 {COL 1331.8}

また、救い主は、パリサイ人に向かっても語っておられた。彼らもキリストの言葉の力を必ず理解するようになるという希望をお捨てにならなかった。彼らの中にも強い感動を受けた者が多くいた。そして、やがて聖霊の命じるままに真理が語られるのを聞いた時に、多くの者がキリストを信じるようになるのであった。 {COL 1332.1}

パリサイ人たちは、キリストが取税人や罪人と交わっていると非難して、キリストの名声を傷つけようとした。ところが、今度は、キリストがこれらの非難者たちを譴責なさることになった。イエスは、取税人の間で起こったできごとを取り上げて、それによってパリサイ人たちの行動がどんなものであるかを示すとともに、彼らが自分たちの誤りを正す唯一の方法をもお示しになったのである。 {COL 1332.2}

この不正な家令に託された主人の財産は、慈善に用いるためのものであった。ところが、彼は、それを私用に使ってしまった。イスラエル人も、そうであった。神は、アブラ

ハムの子孫をお選びになった。神は強いみ手をもって、彼らをエジプトからあがない出された。神は、世界を祝福するために彼らを神聖な真理の保管者となさった。神は、彼らが光を他に伝えることができるように、生きたみ言葉を彼らにお託しになった。しかし、神の家令は、これらの賜物を自分たちを富ませ、高めるために用いてしまった。パリサイ人たちは、自尊心が強く、自分を義とする心に満たされていたので、神の栄光のために用いるように、神から任せられた財産を乱用してしまった。 {COL 1332.3}

たとえの中の家令は、将来のためになんら用意をしていなかった。彼は他の利益を図るためにゆだねられていた財産を、自分のために費やしてしまった。彼は、ただ現在のことしか考えていなかったのである。もしも、家令の職が取り上げられてしまうならば、彼には、何1つ自分のものと言えるものはなかった。ところが、まだ主人の財産が、彼の手許にあった。そこで、彼は、将来の欠乏に備えて、自分の身の安全をはかるために、その財産を用いようとした。この目的を達成するためには、彼は、新しい計画のもとに働かなければならなかった。彼は自分のためにかき集める代わりに、他に分け与えなければならなかった。このようにしておけば、彼が解雇された時に、迎えてくれる友ができるかもしれないと思った。パリサイ人もそれと同じであった。家令の職が、まもなく、彼らから取り去られて、彼らは将来の備えをしなければならなくなるのであった。彼らも、他人に利益を与えることによってのみ、自分に利益をもたらすことができたのである。彼らも現世において、神の賜物を他の人々に分け与えて、初めて、永遠のために備えることができたのである。 {COL 1332.4}

キリストは、このたとえを語られたあとで、「この世の子らはその時代に対しては、光の子らよりも利口である」といわれた。すなわち、世俗的に賢い人々は、いわゆる神の子供たちが、神に奉仕するよりは、もっと賢く真剣に自分のために働いているということである。キリストの時代には、その通りであった。それは、現代でも同じである。クリスチャンであると言っている多くの人々の生活を見てみるとよい。神は、彼らに技能と能力と感化力をお与えになった。また、神は彼らに金銭をお与えになったが、これは、彼らが

神の協力者となって大いなる贖罪の働きをするためである。神から与えられた賜物は、全部、人類を祝福し、なやむ者、欠乏の中にある人々を助けるために用いるものである。わたしたちは、飢えた者に食べさせ、裸の者に着せ、やもめや孤児の世話をし、苦しむ者やおさえられている者のために奉仕しなければならない。神は、世界中に不幸がゆきわたることをお望みにならなかった。また、ある1人がありあまるぜいたくな生活をする一方、他の人々の子供たちがパンに飢えるようなことは、神のみこころではなかった。実際の生活に必要なもの以上の富は、善を行い人類を祝福するために用いるために、人に託されているのである。「自分の持ち物を売って、施しなさい」（ルカ12：33）。「惜しみなく施し、人に分け与えることを喜び」（Ｉテモテ6：18）、「宴会を催す場合には、貧しい人、障害のある人、足の不自由な人、盲人などを招くがよい」（ルカ14：13）と主は言われたのである。「悪のなわをほどき」「くびきのひもを解き」「しえたげられる者を放ち去らせ」「すべてのくびきを折る」「飢えた者に、あなたのパンを分け与え」「さすらえる貧しい者を、あなたの家に入れ」「裸の者を見て、これに着せ」「苦しむ者の願いを満ち足らせ」（イザヤ58：6、7、10）、「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」（マルコ16：15）。以上の言葉が主の命令である。クリスチャンと称している者の大部分が、このような動きをしているであろうか。{COL 1332.5}

ああ、神の賜物を私用に使っている者が、なんと多いことであろう。また、次から次に家や土地を増やしている者がなんと多いことであろう。快楽のため、食欲を満たすため、ぜいたくな住居や家具や衣服などのために、金銭を費やしている者がなんと多いことであろう。その反面彼らの同胞は、悲惨と犯罪、病気と死の中に取り残されている。無数の者が、憐れみの目も向けられず、同情に満ちた言葉や行為を1つとして受けることもなく、滅び去っているのである。{COL 1333.1}

人々は、神の物を盗んでいるのである。彼らが財産を利己的に使用することは、人類の苦しみを和らげ、魂を救うことによって当然、神にかえっていくべき栄光を、主から奪うことになる。彼らは、神からゆだねられた財産を横領している。「わたしはあなたがた

に近づいて、さばきをなし、……雇人の賃銀をかすめ、やもめと、みなしごとをしえたげ、寄留の他国人を押しのけ」る「者どもにむかって、すみやかにあかしを立てると、万軍の主は言われる」「人は神の物を盗むことをするだろうか。しかしあなたがたはわたしの物を盗んでいる。あなたがたはまた『どうしてわれわれは、あなたの物を盗んでいるのか』と言う。10分の1と、ささげ物をもってである。あなたがたは、のろいをもって、のろわれる。あなたがたすべての国民は、わたしの物を盗んでいるからである」（マラキ3：5、8、9）。「富んでいる人たちよ。よく聞きなさい。……あなたがたの富は朽ち果て、着物はむしばまれ、金銀はさびている。そして、そのさびの毒は、あなたがたの罪を責め、……あなたがたは、終りの時にいるのに、なお宝をたくわえている。」「あなたがたは、地上でおごり暮し、快楽にふけり、」「見よ、あなたがたが労働者たちに畑の刈入れをさせながら、支払わずにいる賃銀が、叫んでいる。そして、刈入れをした人たちの叫び声が、すでに万軍の主の耳に達している」（ヤコブ5：1～3、5、4）。{COL 1333.2}

やがて、すべての者は、そのゆだねられたたまものを引き渡すように要求される。最後の審判の日には、人間の蓄えた富は、彼らにとってなんの価値もなくなる。彼らには、何1つ自分の所有であるといえるものはない。{COL 1333.3}

世の宝をたくわえるために、その一生を送る人々は、この世的な援助を得るために努力した不正な家令ほどにも、彼らの永遠の幸福のために賢く、思慮深く準備をしていない。この世の子らは、その時代に対しては、いわゆる光の子らよりもりこうなのである。{COL 1333.4}

預言者が、大審判の日の幻の中で言ったのは、この人々のことである。「その日、人々は拝むためにみずから造ったしろがねの偶像と、こがねの偶像とを、もぐらもちと、こうもりに投げ与え、岩のほら穴や、がけの裂け目にはいり、主が立って地を脅かされるとき、主の恐るべきみ前と、その威光の輝きとを避ける」（イザヤ2：20、21）。{COL 1333.5}

「不正の富を用いてでも、自分のために友だちをつくるがよい。そうすれば、富が無くなった場合、あなたがたを永遠のすまいに迎えてくれるであろう」とキリストは言われる。神も、キリストも、天使も、すべてが悩み、苦しみ、罪に沈んだ者のために奉仕している。この働きのためにあなた自身をささげ、神の賜物をこの目的のために用いなさい。そうすれば、あなたは、天に住む者の群れに加わることができる。あなたの心は、彼らの心と共鳴し、あなたの品性は、彼らと同じようになることであろう。あなたにとって、これらの永遠の住まいの住民たちは、他国人ではなくなる。地上の万物が過ぎ去る時、天の門衛は、あなたを喜んで迎えることであろう。 {COL 1333.6}

また、他人を祝福するために用いた財産は、報酬をもたらし、正しく用いられた富は、大きな善事をなしとげる。魂がキリストに導かれる。キリストの計画に従って人生を送る者は、この地上で自分が世話をし、犠牲をした人々と、神の宮で会うことであろう。あがなわれた人々は、自分たちの救いのために器となって働いた人々を覚えていて、心から感謝することであろう。忠実に救霊の働きをした者にとって、天はすばらしい所である。 {COL 1334.1}

このたとえの教訓は、すべての者に与えられたものである。すべての者は、キリストを通して与えられた恵みに対して、責任を負わなければならない。一時的な地上の事柄に没頭するには、この人生は、あまりにも厳粛である。永遠で、目に見えない方から、わたしたちが伝えられたことを、他に伝えることを、主は望んでおられる。 {COL 1334.2}

毎年、幾百万とも知れない多くの人々が、警告を受けず救いにもあずからずに、永遠にこの世を去っていく。わたしたちには、それぞれの人生において、時々刻々、魂に接触して彼らを救いに導く機会が与えられている。このような機会は、絶えず来ては去って行く。神は、わたしたちがこのような機会を最善に活用することを望んでおられる。1日、1週、1か月と月日は過ぎていく。それは、働く時が、1日、1週、1か月と減っていること

である。遅くても、あと数年後には「あなたの会計報告を出しなさい」という拒むことのできない声を、聞かなければならないであろう。 {COL 1334.3}

キリストは、すべての者によく考えてみよと仰せになるのである。正直に計算をしなさい。はかりの一方には、永遠の宝、命、真理、天国、そして、救われた魂に対するイエスの喜びなどのすべてを代表しているイエスを置き、向こう側には、世が与え得るあらゆる魅惑物をおいてはかるのである。1つのはかりの一方には、自分の滅びと自分が救い得たはずの魂の滅びとをおき、他の側には、自分とその人々のために与えられる、神の命に等しい命をおいてみよう。この世とそして永遠のために、よく計ってみなさい。あなたがそうして計っているところへ、キリストは、「人が全世界をもうけても、自分の命を損したら、なんの得になろうか」と言われるのである（マルコ8：36）。 {COL 1334.4}

神は、わたしたちが、地上のものよりは、天のものを選ぶことを望んでおられる。また、天に蓄えることができることをもお示しになった。神は、わたしたちの最高の目標に励ましの言葉をかけ、わたしたちの尊い宝を安全に守ってくださるのである。「わたしは人を精金よりも、オフルのこがねよりも少なくする」と主は言われる（イザヤ13：12）。虫がくい、さびがつく富が一掃される時、キリストの僕たちは、彼らが天に積んだ宝と朽ちない富とを楽しむことができるのである。 {COL 1334.5}

キリストにあがなわれた者の友情は、この世のあらゆる友情よりまさったものである。キリストが準備のために行かれた住まいに入る資格を与えられることは、地上のどんなりっぱな宮殿に住む資格よりもまさる。この地のどんな賞賛の言葉よりも、救い主が忠実な僕たちに言われるこの言葉の方がすぐれている。「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」（マタイ25：34）。 {COL 1334.6}

キリストの財産を使い果たしてしまった者にもなお、永遠の富を獲得する機会が与えられている。「与えよ。そうすれば、自分にも与えられるであろう。」「自分のために古

びることのない財布をつくり、盗人も近寄らず、虫も食い破らない天に、尽きることのない宝をたくわえなさい」（ルカ6：38、12：33）。「この世で富んでいる者たちに、命じなさい。……良い行いをし、良いわざに富み、惜しみなく施し、人に分け与えることを喜び、こうして、真のいのちを得るために、未来に備えてよい土台を自分のために築き上げるように、命じなさい」（Ｉテモテ6：17～19）。{COL 1334.7}

　であるから、あなたの財産を、あなたに先だって天に送ることにしよう。あなたの宝を神のみ座のかたわらに蓄えよう。そして、キリストの無尽蔵の富を確保することにしよう。「不正の富を用いてでも、自分のために友だちをつくるがよい。そうすれば、富がなくなった場合、あなたがたを永遠のすまいに迎えてくれるであろう。」{COL 1334.8}

第27章 わたしの隣人とはだれのことですか

本章は、ルカ10：25～37に基づく {COL 1335.1}

ユダヤ人の間では、「わたしの隣り人とはだれのことですか」という問題は、絶えない議論の種であった。彼らは、異邦人やサマリヤ人についてはなんの疑問も持たなかった。彼らは、異国人であり、敵であった。しかし、自国民と社会の各階級の中で、どこに区別を設けるべきであろうか。祭司や律法学者や長老たちは、いったい、だれを隣人とみなすべきであろうか。彼らは、自分たちを清めるために、あれこれと儀式を行って日を送っていた。そして、無知で軽率な群集に接触すると、自分たちの身が汚れて、それを除くためにはめんどうな儀式をしなければならないと、教えていた。彼らは、「汚れた」人々を隣人と呼ばなければならないのであろうか。 {COL 1335.2}

キリストは、この質問に対して、よいサマリヤ人のたとえを語って、お答えになった。わたしたちの隣人は、単に自分の教会の一員であるとか、わたしたちと信仰を同じくする者とかいうのではないことをお教えになった。そこには、人種、皮膚の色、または階級の差別がない。わたしたちの隣人とは、わたしたちの助けを要するすべての人を言うのである。わたしたちの隣人は、敵に出会って傷つけられたすべての魂である。わたしたちの隣人は、神の財産であるすべての人である。 {COL 1335.3}

よいサマリヤ人のたとえは、ある律法学者がキリストに質問したことから、語り出されたものである。キリストが教えておられると、「ある律法学者が現れ、イエスを試みようとして言った、『先生、何をしたら、永遠の生命が受けられましょうか』。」この質問は、パリサイ人たちが、キリストのことばの端をとらえてわなにかけるために、律法学者に言わせたものであったので、彼らは、熱心にイエスの答えに耳を傾けた。ところが、救い主は、議論をしようとはなさらずに、質問した当人に答えをお求めになった。「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどう読むか」とお聞きになった。シナイから与えられた

律法を、イエスは軽視していると、なおもユダヤ人は、イエスを非難した。ところが、主は、救われるかどうかは、神の律法を守ることにあると言われた。{COL 1335.4}

律法学者は、「『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』また、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』とあります」と言った。キリストはそれに答えて、「あなたの答は正しい。そのとおり行いなさい。そうすれば、いのちが得られる」と言われた。{COL 1335.5}

この律法学者は、パリサイ人の立場とその行いに満足していなかった。彼は、聖書の真の意味を悟ろうと願って、研究を続けてきた。彼は、この問題に深い関心を寄せていたので、真剣に「何をすべきでしょうか」と聞いた。彼が律法の要求について答えた時に、彼は、すべての儀式や礼典に関する戒めを省略した。彼は、これらのものを全く無価値なものとして、ただ、すべての律法と預言者とがよって立つところの二大原則をのべたのである。救い主がこの答えを賞賛なさったことは、ラビたちの間におけるキリストの立場を有利に導いた。彼らは、律法の解説者の述べたことを是認なさったイエスを非難することはできなかった。{COL 1335.6}

「そのとおりに行いなさい。そうすれば、いのちが得られる」とキリストは言われた。キリストは、常に、律法は、1つのまとまったものとして神がお与えになったものであることを教えられた。つまり、1つの原則がその全体を貫いているから、1つの戒めを守って、他を破るということは不可能であることを示された。人間の運命は、律法のすべてに従うことによって決定するのである。{COL 1335.7}

キリストは、だれでも、自分の力で律法を守ることができないことを知っておられた。彼は、この律法学者が真理を発見するようになるために、さらに明らかな批判的研究に入るように導こうと望まれた。ただ、キリストの徳と恵みを受けることによってのみ、わたしたちは、律法を守ることができる。罪のためのあがないの供え物を信じることによっ

て、堕落した人間は、全心をもって神を愛し、また自分を愛するように、隣人を愛することができるのである。{COL 1336.1}

律法学者は、始めの4条も、後の6条も守っていないことを知った。{COL 1336.2}

彼は、キリストの厳粛な言葉を聞いて罪を認めたが、自分の罪を告白する代わりに、それを弁護しようとした。真理を認めようとせずに、むしろ、戒めを実行することがどんなに困難なことであるかを示そうと努めた。こうして、彼は、心の感銘をにぶらせ、人々の目の前で自分を弁護しようとした。彼は、自分で答えることができたほどであるから、彼の質問はしなくてもよいものであったことが、救い主の言葉によってわかる。しかし、彼は、もう1つの質問をして、「わたしの隣り人とはだれのことですか」と言った。{COL 1336.3}

再び、キリストは議論に巻き込まれるのを拒まれた。そして、まだ聴衆の記憶に新しい一事件のことを語って、質問にお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った」と、彼は言われた。{COL 1336.4}

エルサレムからエリコへ行く旅人は、ユダヤの荒野の一角を通らなければならなかった。道は、岩かどけわしい谷間を下っていて、強盗が出没し、しばしば暴力行為の行われるところであった。旅人が襲われ、貴重品が全部奪われた上、半殺しの目にあって路傍に横たわっていたのは、ここであった。こうして、彼が倒れているところへ、1人の祭司が通りかかった。彼は、旅人が傷つき、血にまみれて横たわっているのを見たが、なんの助けも与えないで行ってしまった。彼は「向こう側を通って行った。」次に、レビ人が現れた。彼は何が起こったのかを知ろうとする好奇心から、立ち止まって、この被害者を見た。彼は、自分がなんとかしなければならないのを自覚したけれども、それは快い義務ではなかった。この道を通らなければよかった。そうすれば、傷ついた人を見ないですんだの

にと彼は思った。彼はこれを自分には全く無関係な事件であるとして、「向こう側を通って行った。」 {COL 1336.5}

ところが、その同じ道をやって来たサマリヤ人は、この苦しんでいる人を見て、他の2人がしようとしなかったことをした。彼は、やさしく親切に傷ついた人に救いの手をのべた。「彼を見て気の毒に思い、近寄ってきて、その傷にオリブ油とぶどう酒とを注いでほうたいをしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。翌日、デナリ2つを取り出して宿屋の主人に渡し、『この人を見てやってください。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたしが支払います』と言った。」祭司とレビ人は2人とも神を敬っていることを公言してはいたが、サマリヤ人こそ真に悔い改めた人であることを示した。このようなことは、祭司やレビ人にとって不快な仕事であったと同様に、サマリヤ人にとっても不快な仕事であった。しかし、サマリヤ人は、彼の精神と働きが神と一致していることを示したのである。 {COL 1336.6}

キリストは、このたとえの中で、律法の原則を、直接に力強くお教えになった。そして、聴衆がこのような原則を実行していないことを指摘なさった。イエスの言葉は、実に明確であったために、聴衆は、何1つ非難すべきところを見つけることができなかった。この律法学者も何1つ批評するところを見つけることはできなかった。キリストに対する彼の偏見は取りのぞかれた。けれども、彼は、サマリヤ人に対する偏見には打ち勝つことができないで、サマリヤ人と名をあげて答えることはできなかった。キリストが、「この3人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか」とおたずねになった時に、彼は「そ 1337の人に慈悲深い行いをした人です」と答えた。 {COL 1336.7}

「そこでイエスは言われた、『あなたも行って同じようにしなさい』。」困っている人に、同じような親切を示しなさい。そうすることによって、あなたは、律法を全部守っているという証拠を示すことになるのである。 {COL 1337.1}

ユダヤ人とサマリヤ人との間の大きな相違は、宗教的信条の相違、すなわち、真の礼拝とは、なんであるかということにあった。パリサイ人は、サマリヤ人のことを少しもよく言わず苦々しいのろいを彼らに浴びせていた。ユダヤ人とサマリヤ人との間の反感は、実に激しく、キリストがサマリヤの女に水を求められた時など、彼女がそれを非常に不思議に思ったほどであった、彼女は「あなたはユダヤ人でありながら、どうしてサマリヤの女のわたしに、飲ませてくれとおっしゃるのですか」と言った。「これは、ユダヤ人はサマリヤ人と交際していなかったからである」と福音書記者は、っけ加えている（ヨハネ4：9）。また、ユダヤ人が、神殿で殺気だってキリストを石で打とうとして立ち上がった時、「あなたはサマリヤ人で、悪霊に取りつかれていると、わたしたちが言うのは、当然ではないか」と言ったのは、彼らの憎悪をあらわすのに最も適した言葉であった（ヨハネ8：48）。しかしながら、祭司やレビ人は、主が彼らにお命じになった仕事を自分たちは怠りながら、憎み軽べつしているサマリヤ人に、同胞の1人を介抱させたのである。{COL 1337.2}

このサマリヤ人は、「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」という戒めを実行して、彼を非難した人々よりも、彼の方が正しいことを示した。彼は、自分の命を危険にさらしてまで、傷ついた人を、自分の兄弟として介抱した。このサマリヤ人はキリストを代表している。救い主は、人間の愛がとうてい及び得ない愛を表された。彼は、わたしたちが、傷ついて死にひんしていた時に、わたしたちをあわれんでくださった。彼は、天の全軍の愛が一身に注がれていた清い幸福な天に、お留まりにならなかった。彼は、わたしたちの哀れむべき悲惨な姿を見て、それを理解し、人類とご自身とを1つに結びつけられたのである。主は、敵を救うためになくなられたのである。主は、ご自分を殺す者のために祈られた。主は、ご自分の模範を指さしながら、「これらのことを命じるのは、あなたがたが互に愛し合うためである。」「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」と彼の弟子たちに言われるのである（ヨハネ15：17、13：34）。 {COL 1337.3}

祭司とレビ人は、神ご自身がお定めになった神殿で、奉仕するために行った帰り道であった。神殿の奉仕に参加することは、大いに名誉ある特権であった。そして祭司やレビ人は、このような名誉が与えられたのであるから、路傍にたおれている未知の傷ついた人に奉仕することは、自分の品位を下げることだと思った。こうして、彼らが同胞を祝福する神の器となるために、神がお与えになった特別の機会を、彼らは見過ごしてしまった。{COL 1337.4}

今日、同じ間違いをしている者が多い。そのような人々は、自分たちの義務を、はっきりと2つに分けている。第一は、神の律法に定められた、大事なものである。その次は、彼らが小さいと考えている事であって、ここにおいて、「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」という戒めが、無視されている。この方面のことは、彼らの気の向くままに、衝動的に行われている。こうして、品性はゆがめられ、キリスト教は、誤解されているのである。 {COL 1337.5}

苦しんでいる人々に奉仕することは、威厳を損なうことのように考えている人がいる。魂の宮を荒れるにまかせている人々を、無関心と軽べつの目で見る人が多い。また、別の動機から貧者をかえりみない人がある。彼らは、何かりっぱな企てを進展させようと努力していて、それがキリストのために働いていることのように考えている。彼らは、偉大な働きをしているから、貧しい者や困っている者の必要に気を配ることはできないと考える。彼らは、自分たちが、偉大であると考えていることを押し進めるためには、貧しい人々を圧迫さえするのである。彼らは、こうして貧しい人々を困難な苦しい立場におとしいれ、彼らの権利を奪い、その必要をかえりみない。それでいて、彼らは、キリストの事業を押し進めていると考えてい るのであるから、これをみな当然のことと思うのである。{COL 1337.6}

逆境にある兄弟や隣人を助けないで、彼らを苦しむままに放任している者が多い。彼らは、クリスチャンであると言っているから、キリストの代表者とは、このように冷淡で

利己主義なのであろうかと、兄弟や隣人に考えさせてしまう。主の僕たちが主と協力しないために、実は彼らを通して流れ出なければならない神の愛が、彼らの同胞から、著しく遮断されている。また人間の心とくちびるから、大いなる賛美と感謝とが神に返るべきであるのに、それも妨げられている。神の清いみ名に帰すべき栄光が神に帰せられずに奪い去られている。キリストが命をすてて救おうとされたその魂、神がみ国にともない、永遠に神とともに住ませようとされた魂が、神から奪われているのである。 {COL 1338.1}

真理は、わたしたちの実践によって、世界に大きな感化を及ぼさなければならないのに、まだ、ほとんど感化を及ぼしていない。単なる信仰の告白は、世に満ちているが、それらにはなんの価値もない。わたしたちは、キリストの僕であると主張し、神の言葉の中の真理を全部信じると言ってみても、信じることがわたしたちの日常生活の中で行われていないならば、隣人に対してなんの役にも立たない。どんなにりっぱなことを口で言ってみても、わたしたちが、クリスチャンでないならば、自分を救うことも、同胞を救うこともできない。わたしたちの言うすべての言葉よりも、1つの正しい模範が、世界を益するのである。 {COL 1338.2}

キリストの働きは、利己的な行いによってすることはできない。キリストの働きは、圧迫された者と、貧しい者を救う働きである。キリストの弟子であるという者の心の中には、キリストの憐れみの情がなければならない。すなわち、キリストが命をささげてまで救おうとなさったほど高く評価された人々に対して、深い愛を持たなければならない。これらの魂は、わたしたちが神にささげるどんな供え物よりも、はるかに尊いのである。いかにも重大だと思われることに全能力を傾けて、困った人をおろそかにし、他の人の正当な権利を奪うならば、それは、神のお喜びになる奉仕ではないのである。 {COL 1338.3}

聖霊の働きによって魂が清められるということは、キリストの性質を人間の中に植えつけることである。福音を信じることは、生活の中にキリストが宿ることーーすなわち、

生きた活動的な原則が宿ることである。それは、品性によい行いとなってあらわれるキリストの恵みである。福音の原則は、実際の生活のどの方面からも引き離すことはできない。クリスチャンのどんな経験も、どんな働きも、すべてがキリストの生活を表すものでなければならない。 {COL 1338.4}

愛は信心の基礎である。たとえ、口でなんと言おうと、もし、兄弟に対する無我の愛を持たないならば、神に対する純粋の愛を持っていない。しかし、他人を愛そうと努めることによって、この精神を得ることはできない。必要なのは、心の中にキリストの愛が宿ることである。自己がキリストの中にとけこむ時、愛は自然にわいて出る。他を助け、祝福しようとする気持ちが常に内からわき出て、天からの光が心にあふれ、顔に表される時、クリスチャンの品性が完成の域に達するのである。 {COL 1338.5}

キリストが住まれる心に愛が欠乏することはない。神がまずわたしたちを愛してくださったために、わたしたちも神を愛するのであるならば、わたしたちは、キリストが命をお捨てになってまで愛されたすべての人々を愛するようになる。神と接触していながら、人間と接触しないということはできない。宇宙の王座にすわっておられるキリストの中には、神性と人性が結合しているのである。キリストに連なる者は、愛という金の鎖によって、同胞と結ばれているのである。こうして、キリストの憐れみと同情とは、わたしたちの生活にもあらわれてくる。わたしたちは、貧しい者や不幸な者が、わたしたちの所へ連れて来られるまで待たなくなるであろう。そして、他人の悲しみに同情することを、求められることも不要になるであろう。わたしたちが、貧しい者や苦しむ者に奉仕することは、キリストが、あまねくめぐって善を行われたのと同様に、自然にできるのである。 {COL 1338.6}

愛と同情心のある所、他人を祝福し高めようとする心のある所には、神の聖霊の働きがあらわされる。異教主義に閉ざされた所で、聖書にしるされた神の律法も知らず、キリストの名も聞いたことのない人々が、自分たちの命の危険をも顧みないで、神の使者たち

を親切に扱い、保護したことがある。彼らの行動は、神の力の働いたことを示している。聖霊が未開地の人々の心にキリストの恵みを植えつけ、彼らの性質や教育とは全く反対の同情心を呼び起こしたのである。「すべての人を照すまことの光があって、世にきた」とあるが、この光が彼の心を照らした（ヨハネ1：9）。もし彼が、この光に従っていくならば、それは、彼の足を神の国まで導くことであろう。{COL 1339.1}

神の栄光は、倒れた者を起こし、苦しむ者を慰めることにあらわれる。人の心の中にキリストが宿られる所は、どこであっても、キリストが同じようにあらわされる。キリストの宗教が活動する所は、どこにも祝福があふれ、その働く所にはどこにも輝きがみなぎるのである。{COL 1339.2}

神は、国籍、人種、階級の差別をなさらない。神は、全人類の創造者である。すべての人々は、創造によって、1つの家族であり、贖罪によって、1つなのである。キリストは、あらゆるへだての壁をこわし、神殿のどの部屋をも解放するためにこられた。それは、すべての魂が、自由に神に近づくことができるようになるためであった。キリストの愛は、どんな所にでもゆきわたって行くほど、広く深く満ちあふれたものである。それはサタンのまどわしにおちいっていたあわれな魂を、サタンの勢力の下から引き上げて、神のみ座、すなわち約束の虹にかこまれたみ座のそばに、来させるのである。{COL 1339.3}

キリストにあっては、ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もない。すべての者は、キリストの尊い血によって近い者となったのである（ガラテヤ3：28、エペソ2：13）。{COL 1339.4}

いかに宗教的信仰の相違があろうと、人類の苦しみの叫びに耳を傾けて、それに答えなければならない。宗教上の相違が原因となって悪感情が存在する所では、個人的奉仕の行いをすることによって、多くのよい結果が生じる。愛の奉仕は偏見をくだき、魂を神に導くのである。{COL 1339.5}

わたしたちは、他の人々の悲しみや困難や苦難をこちらから早く察して、貴賤貧富の別なく、人々と共に喜びも苦しみも味わわなければならない。「ただで受けたのだから、ただで与えるがよい」と、キリストは言われるのである（マタイ10：8）。わたしたちの周りには、試練にあって、同情の言葉と援助の手を要する気の毒な魂がいる。同情と助けの必要なやもめたちもいる。また、キリストが、神から託された者として受けるように、弟手たちにお命じになった孤児たちもいる。このような人々は、とかく見過ごしにされがちである。彼らは、みすぼらしく、粗野で、みたところ少しも好ましくない人々のようであるかもしれないが、彼らも神の所有なのである。彼らも価をもって買われたのであって、神の目の前には、わたしたちと同じように価値のあるものである。彼らは、神の大家族の一員であるから、クリスチャンは管理者として、彼らの責任を負っているのである。「わたしは、彼らの魂をあなたの手に求める」と、神は言われるのである。 {COL 1339.6}

罪ほどはなはだしく悪いものはないが、罪人をあわれんで助けるのは、わたしたちの務めである。しかし、すべての罪人に同じ方法で接近することはできない。心のかわきをかくしている者が多い。そうした人々には、やさしい言葉や親切な心づかいを示すことによって、大きな助けを与えることができる。また、非常な欠乏の中にありながら、それを知らないでいる者もある。彼らは、自分の魂の恐るべき欠乏を自覚しない。深く罪に沈んで、永遠の世界の実在感を失い、神の像を失い、救うべき魂のあることさえわからない人々が、無数にいるのである。彼らは、神を信じなければ、人をも信用しない。この人々には、己を忘れた親切な行為によってのみ近づくことができる。まず、彼らの肉体的必要を満たさなければならない。彼らに食を与え、体を洗い、人並みの衣服を着せなければならない。彼らが、わたしたちの無我の愛の証拠を見る時に、キリストの愛を信じることがやさしくなるので 1340ある。 {COL 1339.7}

過ちにおちいり、はじと愚かさを感じている人々が多い。彼らは、自分たちの過失や誤りをながめて、絶望するばかりになる。わたしたちは、このような魂をおろそかにして

はならない。流れに逆らって泳ぐ者は、水流の全勢力と戦わなければならない。沈みゆくペテロに長兄イエスの手がさしのべられたように、このような人に助けの手をさしのべることにしよう。希望に満ちた言葉、確信をうながし、愛を目覚めさせる言葉を語ることにしよう。 {COL 1340.1}

あなたに兄弟の愛が必要であったように、心の病になやむ兄弟が、あなたを必要としている。彼は自分と同じように弱かったことのある人の経験を必要とし、彼に同情と助けを与え得る人を必要としている。わたしたちが、自分自身の弱さを知っているということは、困りはてている者を助けるのに役立つはずである。苦しんでいる魂を見たならば、わたしたちが神から与えられた慰めを、分け与えないで通り過ぎてはならないのである。 {COL 1340.2}

人間の思いと心と魂とが、生まれつきのままの性質に勝利するのは、キリストとの交わり、生きた救い主と個人的に接触することによってである。さまよい出た者にむかっては、全能の手が彼をささえていること、またキリストがその無限の人性によって彼をあわれんでおられることを語らなければならない。あわれむことをせず、助けを求める叫びに耳を傾けない律法と権力とを信じるだけでは十分ではない。彼は、温かい手を握り、同情にあふれた心に信頼する必要がある。神が常に彼のそば近くにおられて、憐れみ深い愛をもって、見守っておられることを、彼の心に銘記させなければならない。常に罪を悲しまれる天の父の心、なお差し伸べられている天の父の手、「わたしの保護にたよって、わたしと和らぎをなせ、わたしと和らぎをなせ」という天の父の声などを、彼に考えさせなければならない（イザヤ27：5）。 {COL 1340.3}

この働きにたずさわる時、わたしたちには、目には見えない友がある。傷ついた旅人の世話をしたサマリヤ人のそばには、天の使いたちがいたのである。神のご用をして同胞に奉仕するすべての者のそばにも、天使が立っている。そして、あなたはキリストご自身

の協力を得るのである。キリストは、回復者であられるから、キリストの監督の下に働くならば、大いなる結果を見ることであろう。{COL 1340.4}

わたしたちが、この仕事を忠実にするか否かに、他の人々の幸福ばかりでなくて、わたしたち自身の永遠の運命がかかっている。キリストは、すべて向上することを望む者を高めて、ご自分との交わりに入れようとしておられる。これは、キリストが父と1つであられるように、わたしたちをキリストと1つにするためである。わたしたちを利己主義から救い出すために、苦難や災難にあうことをお許しになる。神は、わたしたちのうちに、神の品性の特徴である同情とやさしさと愛をはぐくもうと望んでおられる。この奉仕の仕事を受け入れることによって、わたしたちは、キリストの学校に入り、神の宮廷にふさわしい者とされる。これを拒むならば、キリストの教えを拒むことであって、彼の前から永遠に離れることを選ぶことになるのである。{COL 1340.5}

「あなたがもし、わたしの務を守るならば、……ここに立っている者どもの中に行き来することを得させる」――神のみ座をとりまく天使たちの間に、あなたを置くと主は言われるのである（ゼカリヤ3：7）。天に住む者たちが地上で行う働きに協力することによって、わたしたちは、天で彼らと交わる準備をしているのである。「救を受け継ぐべき人々に奉仕するため、つかわされた」（ヘブル1：14）み使いたちは、この地上で、「仕えられるためではなく、仕えるため」に生きた人々を喜んで迎えるのである（マタイ20：28）。わたしたちは、この祝福された交わりの中で、永遠の喜びに満ちあふれて、「わたしの隣り人とはだれのことですか」という質問に含まれた、すべてのことを学ぶことができるであろう。{COL 1340.6}

第28章　恵みの報い

本章は、マタイ19：16～30、20：1～16、マルコ10：17～31、ルカ18：18～30に基づく {COL 1341.1}

神の恵みは無代価のものであるという真理を、ユダヤ人は全くといってよいほど、見失っていた。神の恵みは、努力して手に入れるべきものであると、ラビたちは教えていた。彼らは、義人の受ける報いを、自分たちの行いによって得ようと望んだ。こうして彼らの礼拝は、強欲な利益を目的としたものとなった。キリストの弟子でさえ、この精神から全く抜けきることができていなかったので、救い主は機会あるごとに、彼らの誤りを正そうとなさった。ぶどう園で働く労働者のたとえのすぐ前に、1つのできごとが起こった。イエスは、そのことに関連して、正しい原則をお語りになった。 {COL 1341.2}

イエスが道を歩いておられると、1人の若い役人が、イエスのところに走って来た。そして、み前にひざまずいて、うやうやしく言った。「よき師よ、永遠の生命を受けるために、何をしたらよいでしょうか。」 {COL 1341.3}

役人は、キリストを神の子として認めたのではなくて、尊敬すべきラビとして、話しかけたのである。救い主は、「なぜわたしをよき者と言うのか。神ひとりのほかによい者はいない」と言われた。何を根拠にして、わたしをよいというのか、神だけがよい方である。あなたがわたしをそのような者であると認めるならば、わたしを神の子、神の代表者として受けなければならないのである。 {COL 1341.4}

「もし命に入りたいと思うなら、いましめを守りなさい」とイエスは、つけ加えられた。神の品性は、神の戒めの中に表現されている。そして、人間が神との調和を保つためには、神の戒めの原則が、すべての行為の源泉とならなければならない。 {COL 1341.5}

キリストは、戒めが要求することを、少しもゆるやかにはなさらない。絶対に間違う余地のないはっきりした言葉で、永遠の命に入るには、戒めに従わなければならないことをお示しになった。{COL 1341.6}

これは、堕落前のアダムに要求されたのと同じ条件である。主は、エデンの園で人間に要求なさったのと同じ完全な服従と、しみのない義とを今も求めておられるのである。恵みの契約の下で要求されることは、エデンで要求されたものと同様に広いもので、清く、正しく、善である神の戒めとの調和である。{COL 1341.7}

「いましめを守りなさい」との言葉に対して、若者は、「どのいましめですか」とたずねた。彼は、何かの儀式上の戒めであると思ったが、キリストは、シナイ山から与えられた戒めのことを言っておられたのである。彼は、十戒の第2枚目の板からの数か条をあげて、それをまとめて、「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」とお命じになった。{COL 1341.8}

青年はちゅうちょすることなく、「それはみな守ってきました。ほかに何が足りないのでしょう」と答えた。彼の律法に関する考えは、外面的で表面的であった。彼は、人間的な標準から見れば、汚点のない品性を持っていた。彼の外面的生活は、大体において、罪の無いものであった。彼も自分の服従は、非のうちどころのないものであると信じていた。しかし、神と自分の魂との関係が、全く正しいものではないのではないかという、密かな恐れがあった。これが「ほかに何が足りないのでしょう」という質問を彼にさせた。{COL 1341.9}

「もしあなたが完全になりたいと思うなら、帰ってあなたの持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい」と、キリストは言われた。「この言葉を聞いて、青年は悲しみながら立ち去った。たくさんの資産を持っていたからである。」{COL 1341.1]0}

自分を愛する者は、律法を犯す者である。イエスは、このことを青年に示そうと望んで、彼の心の中の利己心をあらわすテストをお与えになったのである。イエスは、彼の品性の病気になっている所をお示しになった。青年は、それ以上、啓発されることを望まなかった。彼は、心に偶像を持っていた。この世が、彼の神であった。彼は戒めを守っていたと公言はしたけれども、すべての戒めの精神と命である原則に欠けていた。彼は、神と人に対する真の愛を持っていなかった。これがないことは、天国に入るにふさわしい者とするすべてを、彼が欠いていたことを示したものであった。彼は、自己を愛し、世の利益を愛していたから、天の原則と調和していなかった。 {COL 1341.1]1}

この若い役人が、イエスのところへ来た時、彼の真実さと熱心さに、救い主は心を引かれた。「イエスは彼に目をとめ、いつくし」まれたのである。主は、この青年が、義の説教者として奉仕する可能性を持っているのをごらんになった。彼は、イエスに従った貧しい漁夫たちをお受けになったのと同様に、この才能あるりっぱな青年をも、喜んでお受けになったことであろう。もしもこの青年が、救霊の働きにその才能をささげたならば、彼はキリストのために勤勉に働いて、成功をおさめる働き人となったことであろう。 {COL 1342.1}

しかし、彼は、まず第一に、弟子となる条件を受けいれなければならなかった。彼は、神に全くおのれをささげなければならなかった。救い主の召しを受けた時に、ヨハネ、ペテロ、マタイおよびその仲間の者は、「いっさいを捨てて立ちあがり、イエスに従ってきた」のである（ルカ5：28）。これと同じ献身が若い役人に要求されたのである。そして、この点において、キリストは、ご自身がなさったよりも大きな犠牲を、ご要求になったのではない。「主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが彼の貧しさによって富む者になるためである」（Ⅱコリント8：9）。青年は、ただキリストのお導きに従いさえすればよかったのである。 {COL 1342.2}

キリストは、青年をながめ、彼の魂を引きつけようと望まれた。主は、彼を祝福の使者として、人々の所へつかわそうと熱望された。捨てるように言われた物の代わりに、キリストは、ご自分との交わりという特権を、この青年に提供なさったのである。「わたしに従ってきなさい」と主は言われた。ペテロ、ヤコブ、ヨハネは、この特権を喜びとみなしたのである。この青年自身も、キリストを尊敬の念を持ってながめた。彼の心は、救い主に引き付けられた。しかし、救い主の自己犠牲の原則を受け入れるまでにはなっていなかった。彼は、イエスを選ぶよりは、富の方を選んだ。彼は、永遠の命を欲したけれども、ただ1つの生きる道である無我の愛を、魂の中に受けいれようとせずに、悲しみつつ、キリストから去っていった。 {COL 1342.3}

青年が離れて行った時、イエスは弟子たちに、「富んでいる者が天国にはいるのは、むずかしいものである」と言われた。この言葉は弟子たちを驚かした。富んでいる者は、天の特別の恵みを受けた者とみなすように、彼らは教えられていた。彼ら自身も、メシヤの王国では、世的な権力と富を受けることを期待していた。もしも、富んでいる者が神の国に入れないとするならば、一体他の人々には、どんな望みがあり得るであろうか。 {COL 1342.4}

「イエスは更に言われた、『子たちよ、神の国にはいるのはなんとむずかしいことであろう。富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい』。すると彼らはますます驚い」た。彼らは、この厳粛な警告の中に、自分たちも含まれていることを自覚した。救い主のこの言葉によって、彼ら自身の心の中に権力と富に対するひそかな願いがあったことが明らかにされた。彼らは心配になって、「それでは、だれが救われることができるのだろう」と叫んだ。「イエスは彼らを見つめて言われた、『人にはできないが、神にはできる。神はなんでもできるからである。』」 {COL 1342.5}

富んでいる者は、富んでいるからといって、天国に入れるのではない。富は、光の内にある聖徒たちの特権にあずかる資格を与えない。何の功績もなくして与えられるキリストの恵みによってのみ、人は、神の都に入ることができるのである。{COL 1342.6}

「あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ」という聖霊の言葉は、貧しい者に対すると同様に富んだ者にも語られたのである（Ⅰコリント6：19、20）。人々がこれを信じる時、彼らの所有物は、神からの委託物とみなされるようになり、神の指示に従って、失われた魂の救いのためや、苦しんでいる人や貧しい人を慰めるために用いられるようになる。人の心は地上の宝に執着するから、こうしたことは人にはできないことである。富にとらえられている魂は、人間の欠乏の叫びを聞く力を失っている。しかし、神には、すべてのことが可能である。{COL 1342.7}

キリストの無比の愛を眺めることによって、利己的な心は、とかされ、和らげられる。パリサイ人サウロと同じように、富んでいる人も、「わたしにとって益であったこれらのものを、キリストのゆえに損と思うようになった。わたしは、更に進んで、わたしの主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえに、いっさいのものを損と思っている」というようになる（ピリピ3：7、8）。その時、彼らは、どんな物でも自分の物とは考えなくなる。彼らは、自分たちを神の数多くの恵みの管理人であると認め、神のためにすべての人の僕となることを喜ぶのである。{COL 1343.1}

救い主の言葉によって受けた心の強い感銘から、まず最初に我に帰ったのはペテロであった。ペテロは、自分と兄弟たちがキリストのために捨てた物のことを満足げに考えた。ペテロは「ごらんなさい、わたしたちはいっさいを捨てて、あなたに従いました」と言った。そして、若い役人に与えられた「そうすれば、天に宝を持つようになろう」という条件つきの約束を思い起こして、ペテロは、自分や兄弟たちがその犠牲の報いとして、何を受けるであろうかとたずねたのである。{COL 1343.2}

救い主の答えは、これらのガリラヤの漁夫たちの心をおどらせた。それは、彼らの最高の夢の栄えある実現を描いたものであった。「よく聞いておくがよい。世が改まって、人の子がその栄光の座につく時には、わたしに従ってきたあなたがたもまた、12の位に座してイスラエルの12の部族をさばくであろう。」イエスはなお続いて、「おおよそ、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、もしくは畑を捨てた者は、その幾倍もを受け、また永遠の生命を受けつぐであろう」と言われた。{COL 1343.3}

しかし、「ついては何がいただけるでしょうか」というペテロの質問は、そのまま改めないでおくならば、弟子たちをキリストの使者とするのにふさわしくない精神、すなわち、雇い人根性をあらわしていた。イエスの愛に引き付けられていたとは言っても、弟子たちは、まだパリサイ主義から完全に解放されていなかった。彼らは、まだ、働きに相当した報いを受けるという考えのもとに働いていた。彼らは、自己高揚と自己満足の精神をいだいて、お互いに比較し合っていた。だれかが、何かの失敗でもすると、他の者は、優越感にひたっていた。{COL 1343.4}

キリストは、弟子たちが、福音の原則を見失うことのないように、神が働き人を扱われる方法と、神が働き人にお求めになる精神が何であるかを、たとえによって説明なさった。{COL 1343.5}

「天国は、ある家の主人が、自分のぶどう園に労働者を雇うために、夜が明けると同時に、出かけて行くようなものである」と主は言われた。職を求める人は市場で待ち、雇い主もそこへ行って、働き人を見いだすというのが、当時の習慣であった。たとえの雇い人は、それぞれ違った時間に出かけて行って、働き人を雇ったと言われている。朝早く雇われた人々は、一定の賃銀で働くことを約束した。あとから雇われた者は、賃銀を主人の考えに一任した。{COL 1343.6}

「さて、夕方になって、ぶどう園の主人は管理人に言った、『労働者たちを呼びなさい。そして、最後にきた人々からはじめて順々に最初にきた人々にわたるように、賃銀を

払ってやりなさい』。そこで、5時ごろに雇われた人々がきて、それぞれ1デナリずつもらった。ところが、最初の人々がきて、もっと多くもらえるだろうと思っていたのに、彼らも1デナリずつもらっただけであった。」 {COL 1343.7}

ぶどう園の働き人に対する主人の扱い方は、神が人類家族を扱われる方法を代表している。これは一般に人間の間で行われているやり方とは反対である。この世の事業においては、報酬は完成した仕事の量に応じて与えられる。労働者は、自分の働いた分だけを受けることを期待する。しかし、このたとえの中では、キリストは、この世の国ではなくてご自分の国の原則を説明された。主は、どんな人間の標準にも支配されない。「わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっている……天が地よりも高いように、わが道は、あなたがたの道よりも高く、わが思いは、あなたがたの思いよりも高い」と、主は言われる（イザヤ55：8、9）。 {COL 1343.8}

このたとえで、最初の労働者は、一定の賃銀で働く約束をし、定まった額をもらい、それ以上何ももらわなかった。後で雇われた人々は、「相当な賃銀を払うから」という主人の約束を信じた。彼らは賃銀について、何の質問もしないで、主人を信頼していることを示した。彼らは、主人の正当なことと公平なこととを信じた。そして、彼らは働きの量によらないで、主人の情け深い気持ちによって報われたのである。 {COL 1344.1}

そのように、神は、わたしたちが、不信心な者を義とされる神を、信頼するように望んでおられる。神の報いは、わたしたちの功績によるのではなくて、「わたしたちの主キリスト・イエスにあって実現された」神ご自身の目的に従って与えられるのである（エペソ3：11）。「わたしたちの行った義のわざによってではなく、ただ神のあわれみによって、……わたしたちは救われるのである」（テトス3：5、6）。そして、神を信頼する者のために、神は「わたしたちが求めまた思うところのいっさいを、はるかに越えて」かなえてくださるのである（エペソ3：20）。 {COL 1344.2}

神の前に価値があるのは、なしとげた働きの量や目に見える結果などではなくて、働きをした精神である。夕方の5時にぶどう園に来た労働者は、働く機会が与えられたことを感謝した。彼らの心は、彼らをやとってくれた人に対する感謝で一杯であった。そして、その日の終わりに、主人が彼らに1日分の賃銀を払った時、彼らはたいへん驚いた。彼らは、そのような賃銀をかせがなかったことを知っていた。雇い主の顔に表された親切心を見て、彼らの心は喜びにあふれたのである。彼らは、主人の親切と分にあまる報酬とを、いつまでも忘れることはできなかった。自分の無価値なことを知りながら、5時になって、神のぶどう園に入った罪人もこれと同じである。彼の奉仕の時間は短く、報酬を受ける価値のないことを感じるのであるが、自分のような者でさえ、神が受けいれてくださったことに大きな喜びを感じている。彼は、謙遜と信頼の念をもって働き、キリストと共に働く特権を感謝しているのである。神は、このような精神を嘉納なさるのである。 {COL 1344.3}

報酬のことは全く神におまかせして安んじていることを、主はわたしたちに望まれる。キリストが魂に宿られると、報酬のことは、第一の関心事ではなくなる。それがわたしたちの奉仕の動機ではない。わたしたちは、第二義的な意味で、報酬に関心を持つべきは当然のことである。神は、わたしたちが、約束の祝福を感謝することを望んでおられる。しかし、神は、わたしたちが報酬を熱心に求めたり、また、すべての義務に対して報酬を受けるべきであると思うことを、お望みにならない。わたしたちは、報酬を受けることよりはむしろ、報酬のことは、全く度外視して、正しいことを行うように心がけなければならない。神と同胞への愛が、わたしたちの動機でなければならない。 {COL 1344.4}

このたとえは、最初に働きへの召しを受けながら、主のぶどう園に入らなかった人々を容赦しているわけではない。主人が5時ごろ市場へ行って、働きのない人々を見た時、「なぜ、何もしないで、1日中ここに立っていたのか」と尋ねた。すると、彼らは、「だれもわたしたちを雇ってくれませんから」と答えた。夕方、雇われた者はだれも、朝にはいなかった人々であった。彼らは、召しを拒んだのではなかった。拒んで後に悔い改める

のは結構なことであるが、憐れみ深い最初の召しを軽んじることは安全ではない。{COL 1344.5}

ぶどう園の労働者が、「それぞれ1デナリ」ずつもらった時、朝早く仕事を始めた人々は立腹した。自分たちは、12時間も働いたではないか。夕方涼しくなってから、1時間しか働かなかった者よりも、多く与えられるのが当然ではないか、と彼らは考えたのである。「この最後の者たちは1時間しか働かなかったのに、あなたは1日じゅう、労苦と暑さを辛抱したわたしたちと同じ扱いをなさいました」と、彼らは言った。{COL 1344.6}

そこで主人は彼らの1人に答えて言った、「友よ、わたしはあなたに対して不正をしてはいない。あなたはわたしと1デナリの約束をしたではないか。自分の賃銀をもらって行きなさい。わたしは、この最後の者にもあなたと同様に払ってやりたいのだ。自分の物を自分がしたいようにするのは、当りまえではないか。それともわたしが気前よくしているので、ねたましく思うのか。」{COL 1344.7}

「このように、あとの者は先になり、先の者はあとになるであろう。」{COL 1345.1}

たとえの最初から働いた労働者は、自分たちの働いたことを理由にして、他の者よりは優遇されることを要求する人々を表している。彼らは、自己賞賛の精神をもって仕事をし、克己と犠牲の精神をもってはしないのである。彼らは、一生の間神に仕えると公言したことであろう。困難、欠乏、試練には、だれよりも進んで耐えたことであろう。そして、そのために、彼らは、大きな報酬に値する者であると考える。彼らは、キリストと共に働く特権よりは、報酬のことを考えるのである。彼らは、その労苦と犠牲とによって、他の人々よりも栄誉を受ける資格があると思うのであるが、この要求が認められないために、腹を立てるのである。もしも彼らが、愛と信頼の精神をもって働いたのであれば、彼らは続いて先頭に立ったはずであったが、怒りっぽい、不平を鳴らす性質は、非キリスト的で、信頼するに足りないことを明らかにした。彼らは、自己を他よりも先にし、神を信頼

せず、兄弟たちをねたみ、うらやむ精神をあらわした。主の慈愛と寛大さは、ただ彼らのつぶやきの材料となるに過ぎなかった。こうして、彼らは、彼らの魂と神との間になんの関係もないことを示した。彼らは、偉大な働き人なる主と共に働く喜びを知らないのである。 {COL 1345.2}

狭量で自分のことばかりを考える精神ほど、神にきらわれるものはない。神は、このような精神をあらわす者と共に働くことはできない。彼らは、聖霊の働きに対して無感覚である。 {COL 1345.3}

ユダヤ人は、最初に主のぶどう園に召された者であった。そのために、彼らは、高慢で自らを義としていた。彼らは、自分たちの長年の奉仕の結果として、他の人以上に大きな報酬を受ける資格があると思った。神の事柄に関して、異邦人もユダヤ人と同じ特権にあずかることができることをほのめかすことほど、ユダヤ人を怒らせるものはなかった。 {COL 1345.4}

キリストは、最初に主に召された弟子たちに向かって、彼らの間では、このような悪感情をいだいてはならないと警告なさった。イエスは、教会の弱点とのろいとなるのは、自己を義とする精神であることを認められた。とかく、人間は、天国に入るために、自分たちで何かの行いをすることができると考える。また、幾分かの進歩をするならば、主が来て助けてくださると思いやすい。こうして、自己を高め、イエスのお姿はあらわされない。わずかの進歩しかしないのに、高慢になって、優越感をいだく者が多い。彼らは、人の賞賛を求め、自分が最も重要視されないと、人をねたむのである。キリストは、こうした危険から、弟子たちを守ろうとなさった。 {COL 1345.5}

自分の功績を誇ることは、すべて見当違いである。「知恵ある人はその知恵を誇ってはならない。力ある人はその力を誇ってはならない。富める者はその富を誇ってはならない。誇る者はこれを誇とせよ。すなわち、さとくあって、わたしを知っていること、わたしが主であって、地に、いつくしみと公平と正義を行っている者であることを知ることが

それである。わたしはこれらの事を喜ぶと、主は言われる」（エレミヤ9：23、24）。{COL 1345.6}

報酬は、働きによるものではなくて、全く恵みによるものである。それはだれも誇る者がないためである。「それでは、肉によるわたしたちの先祖アブラハムの場合については、なんと言ったらよいか。もしアブラハムが、その行いによって義とされたのであれば、彼は誇ることができよう。しかし、神のみまえでは、できない。なぜなら、聖書はなんと言っているか、『アブラハムは神を信じた。それによって、彼は義と認められた』とある。いったい、働く人に対する報酬は、恩恵としてではなく、当然の支払いとして認められる。しかし、働きはなくても、不信心な者を義とするかたを信じる人は、その信仰が義と認められるのである」（ローマ4：1～5）。であるから、他人よりも自分をすぐれた者であると思ったり、他人に対してつぶやいたりする理由はない。だれも他の人以上の特権が与えられていないし、当然の権利として報酬を要求することもできないのである。{COL 1345.7}

先のものも後のものも共に、大きな永遠の報酬にあずかるのであるから、先のものは、後のものを喜んで迎えるべきである。他の人の報酬のことについてつぶやく者は、自分自身が、ただ恵みだけによって救われたことを忘れている。この労働者のたとえは、すべてのしっとと邪推とを非難している。愛は、真理を喜び、うらみがましい比較を試みない。愛をもっている者は、ただキリストのうるわしさと自分の不完全な品性とを比較するだけである。{COL 1346.1}

このたとえは、すべての働き人に対する警告である。たとえ、奉仕の期間がどんなに長く、どんなに労苦を重ねても、兄弟に対する愛がなく、神の前に謙遜がないならば、彼らは無に等しいのである。自己に王座を占めさせることの中に、宗教はない。自分に栄光を帰すことを目当てにする者は、キリストのために力ある働きを行わせる唯一のものであ

る神の恵みに、欠乏していることを見いだすことであろう。高慢と自己満足にふけると、必ず、働きは損なわれるのである。 {COL 1346.2}

わたしたちの働きを神に受け入れられるものにするのは、働きの時間の長さではなくて、働きを喜んで、忠実にする精神である。わたしたちのすべての働きにおいて、自己を全く降伏させることが要求されている。真心から、おのれを忘れて行った最も小さな義務は、利己心に汚された最も大きな働きよりも、神に喜ばれるのである。神は、わたしたちが、どれほどキリストの精神を抱いているか、また、わたしたちの仕事がどれほどキリストのみ姿をあらわしているかをごらんになる。神は、仕事の量よりも、わたしたちの仕事に対する愛と忠実さの方を尊重されるのである。 {COL 1346.3}

利己心が死に、首位を争う心が消え、心に感謝が満ち、愛が生活をかぐわしいものとする、その時こそ、キリストが魂のうちに宿り、わたしたちは、神と共に働く者として認められるのである。 {COL 1346.4}

働きは、どんなに困難であっても、真の働き人は、それを重荷とは思わない。彼らは喜んで自分自身を使いつくそうとするのである。しかし、これは、喜びにあふれて行う楽しい仕事なのである。神にある喜びは、イエス・キリストによって表されている。彼らの喜びは、イエスの前におかれた喜び、つまり、「わたしをつかわされたかたのみこころを行い、そのみわざをなし遂げることである」（ヨハネ4：34）。彼らは、栄光の主と共に働いている。この自覚は、あらゆる労苦を楽しいものにし、意志を強め、何か起こっても、心を支える。彼らは、キリストの苦しみにあずかって気高くされ、無我の精神をいだいて働き、キリストの思いやりの精神をもち、キリストと協力してご用にあたることによって、いよいよ主の喜びを満ちあふれさせ、主の尊いみ名にほまれと賛美とを帰するのである。 {COL 1346.5}

これが神を真に礼拝する精神である。この精神が欠けているために、先と思われる多くの人が後になり、この精神を持っている人は、後と思われても、先になるのである。{COL 1346.6}

キリストに自分たちをささげはしたものの、まだ、主のご用のために大きな仕事をしたり、大きな犠牲をする機会を得ない人々がたくさんいる。このような人々は、神が一番お喜びになることは、必ずしも、殉教者の自己犠牲でないことを知って、慰めを得るべきである。天の記録の最高位に立つのは、必ずしも、日ごとに危険と死に当面する宣教師であるとは限らないのである。その私生活においてクリスチャンである者、日ごとの自己犠牲において、心の真実さと純潔において、ののしられても柔和なことにおいて、信仰と敬虔において、小さいことに忠実なことにおいて、家庭生活において、キリストの品性を表す者、このような人は、世界的に名高い宣教師や殉教者以上に、神の前には尊いのである。 {COL 1346.7}

品性を評価するにあたって、神と人との標準は、なんと大きな相違があることであろう。世の中や親しい友人さえも知らない、家庭内や心のなかの誘惑、数々の誘惑に打ち勝ったことなどを、神はごらんになる。自己の弱さを知って、謙遜にしていること、1つの悪い思いでさえ、心から悔い改めることなどを、神はごらんになる。また、神は、ご用のために心から奉仕する人をごらんになる。自己とのはげしい戦い、そして遂に、その戦いに勝利したことなども注目なさるのである。これらのすべてを、神が知っておられ天使も知っている。主をおそれ、主の名をおぼえる者のために、主の前に記憶の書がかかれている。 {COL 1346.8}

学識があるとか、地位があるとか、または、人の数とか、才能の数とか、人間の意志の力とかに、成功の秘訣があるのではない。わたしたちは、自分の無力を感じて、キリストを瞑想すべきである。そうするならば、すべての力の力であり、すべての思いの思いで

あるキリストの助けによって、喜んで従っていく人々は、勝利から勝利へと進むのである。 {COL 1347.1}

わたしたちの働きは、どんなに短く、またどんなに卑しいものであっても、単純な信仰をもって、キリストに従っていくならば、必ず報酬を受けることができる。いかに偉大で賢明な人々でさえも、得ることができなかったものを、最も弱く卑しい者が受けることができるのである。天の黄金の門は、自己を高める者のためには開かれない。また、高慢な心の者にもあげられない。しかし、永遠の門は、小さな子供のふるえる手が触れた時に広く開かれるのである。単純な信仰と愛とをもって神のために働いた者の受ける恵みの報酬は、実に祝福されたものである。 {COL 1347.2}

第29章　花婿を迎える準備

本章は、マタイ25：1～13に基づく {COL 1347.3}

キリストは、弟子たちと一緒にオリブ山に座しておられる。夕日は、山のかなたに沈み、夕やみのとばりが空をおおっている。すぐ目の前には、何かの祝い事でもあるのか、あかあかとあかりが輝いている家がある。窓から流れ出る光と、付近に待っている人々は、やがて、婚礼の行列が現れるしるしである。東洋では、婚礼が夜、行われるところが多い。花婿は、花嫁を迎えに行って自分の家まで連れてくる。婚礼の行列は、たいまつをともして、花嫁の実家から、招かれた客のために宴会の用意がしてある花婿の家まで行く。キリストがごらんになった光景の中には、婚礼の行列が到着するのを待って、それに加わろうとしている人々がいる。 {COL 1347.4}

花嫁の家の近くに、白い着物をまとった10人のおとめがいる。各自は、火のついたあかりと、油を入れる器を持っている。それぞれ花婿が現れるのを今か今かと待っている。しかし行列はなかなか現れない。何時間も経過する。待っていたおとめたちは、疲れて眠ってしまう。すると夜中に「さあ、花婿だ、迎えに出なさい」と呼ぶ声がする。彼らは急に目を覚まして、起き上がる。見ると行列は、たいまつをあかあかとたき、楽の音も楽しく近づいて来る。彼らは、新郎の声も、新婦の声も聞く。10人のおとめたちは、それぞれのあかりを整えて、急いで出かけようとする。ところが、5人は、器に油を入れるのを怠った。彼らはこんなに遅れるとは思っていなかった。彼らには、万一の場合の用意がなかった。彼らは、あわてて、思慮深い女たちに、「あなたがたの油をわたしたちにわけてください。わたしたちのあかりが消えかかっていますから」とたのむ。しかし、待っていた5人は、あかりを整え、器に持っていた油をともしびに入れてしまった。余分の油はない。「わたしたちとあなたがたとに足りるだけは、多分ないでしょう。店に行って、あなたがたの分をお買いになる方がよいでしょう」と彼らは答える。 {COL 1347.5}

彼らが買いに行っているうちに、行列は進んで行き、彼らを置いて行ってしまった。ともしたあかりを持った5人は、列に加わり、婚礼の行列と共に家に入り、戸は閉ざされた。思慮の浅い女たちが、婚宴の場に着いた時には、思いがけなくも入場を拒まれた。彼らは婚宴の主から、「わたしはあなたがたを知らない」と言われた。彼らは、暗い夜の寂しい通りに取り残された。{COL 1347.6}

キリストは、花婿を待っている人々をごらんになりながら、10人のおとめの話を弟子たちに語られた。キリストは彼らの経験によって、キリストの再臨直前の教会の経験を説明なさった。{COL 1347.7}

二種のおとめたちが待っていたことは、主を待望すると公言する人々も、二種あることを示している。彼らは純粋な信仰を表明するので、おとめと呼ばれている。あかりは、神の言葉を代表している。「あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光です」と詩篇記者は言っている（詩篇119：105）。油は、聖霊の象徴である。聖霊は、ゼカリヤの預言の中に次のように表されている。「わたしと語った天の使がまた来て、わたしを呼びさました。わたしは眠りから呼びさまされた人のようであった。彼がわたしに向かって『何を見るか』と言ったので、わたしは言った、『わたしが見ていると、すべて金で造られた燭台が1つあって、その上に油を入れる器があり、また燭台の上に7つのともしび皿があり、そのともしび皿は燭台の上にあって、これにおのおの7本ずつの管があります。また燭台のかたわらに、オリブの木が2本あって、1本は油をいれる器の右にあり、1本はその左にあります』。わたしはまたわたしと語る天の使に言った、『わが主よ、これらはなんですか』。……すると彼はわたしに言った、『ゼルバベルに、主がお告げになる言葉はこれです。万軍の主は仰せられる、これは権勢によらず、能力によらず、わたしの霊によるのである。』……わたしはまた彼に尋ねて、『燭台の左右にある、この2本のオリブの木はなんですか』と言い、重ねてまた『この2本の金の管によって、油をそれから注ぎ出すオリブの2枝はなんですか』と言うと、……すると彼は言った、『これらはふたりの油

そそがれた者で、全地の主のかたわらに立つ者です』」（ゼカリヤ4：1～14）。{COL 1348.1}

金の油は、2本のオリブの木から、金の管によって燭台の上の油を入れる器にいれられ、そこからともしび皿に注がれて聖所の中を照らした。そのように、神のみ前に立つ聖なる者から、神のご用に献身した人間という器に、聖霊が注がれるのである。これら2人の油注がれた者の役目は、天からの恵みを神の民に与えることである。この恵みだけが神のみ言葉を、足のともしび、また、道の光とすることができる。「万軍の主は仰せられる、これは権勢によらず能力によらず、わたしの霊によるのである」（ゼカリヤ4：6）。{COL 1348.2}

たとえのなかで、10人のおとめは、みな、花婿を迎えに出た。だれもがあかりと油の器をもっていた。しばらくの間は、彼らの間になんの相違も見られなかった。キリスト再臨直前の教会もその通りである。すべての者が聖書の知識を持っている。すべての者がキリストの再臨の近づいたことを聞き、確信をもって彼の出現を待つのである。しかし、たとえにあったように、現在も同じである。待つ時間が長引いて信仰が試みられる。そして、「さあ、花婿だ、迎えに出なさい」と呼ぶ声がした時、準備のできていない者が多い。彼らは、あかりと共に、器の中に油を持っていない。彼らは聖霊に欠けているのである。{COL 1348.3}

神の聖霊がないならば、どんなにみ言葉の知識があっても役に立たない。聖霊を伴わない真理の理論は、魂を生かすことも、心を清めることもできない。聖書の戒めや約束をどんなによく知っていても、神の霊がその真理を心に深く刻みこませなければ、品性は変えられない。聖霊によって、目が開かれるのでないならば、人は真理と誤りとを見分けることができず、サタンの巧妙な誘惑におちいってしまう。{COL 1348.4}

思慮の浅い女たちによって代表されている種類の人々は、偽善者ではない。彼らは、真理に関心をもち、真理を擁護し、真理を信じる人々に引き付けられてはいるが、聖霊の

働きに自分自身をゆだねていないのである。彼らは、岩なるキリスト・イエスの上に落ちて、彼らの古い性質がくだかれていない。この種の人々はまた、石地の聴衆とも言われている。彼らは喜んでみ言葉を受けいれるが、その原則をかみしめて自分のものとはしないのである。その感化が永続しない。聖霊は、人が心の中に新しい性質が植えつけられるのを望んで、同意するのに応じて、人の心にお働きになるのである。ところが、思慮の浅い女によって代表されている人々は、表面的な働きに満足している。彼らは、神を知らない。 {COL 1348.5}

彼らは、神の品性を学んでいない。神と交わって 1349いない。であるから、彼らはいかに神に信頼し、ながめ、生きるべきかを知らないのである。彼らの神への奉仕は、形式化してしまう。「彼らは民が来るようにあなたの所に来、わたしの民のようにあなたの前に座して、あなたの言葉を聞く。しかし彼らはそれを行わない。彼らは口先では多くの愛を現すが、その心は利におもむいている」（エゼキエル33：31）。使徒パウロもこれが、キリストの再臨直前に住む人々の特徴であると言っている。「終りの時には、苦難の時代が来る。その時、人々は自分を愛する者、……神よりも快楽を愛する者、信心深い様子をしながらその実を捨てる者となるであろう」（Ⅱテモテ3：1～5）。 {COL 1348.6}

この種の人々は、危険な時に平和、無事と叫ぶ武々である。彼らは、安泰の夢をむさぼって、危険を感じない。しかし、その惰眠から驚いてめざめて、自分の欠乏に気づくと、その足りないところを他人に補ってもらおうとする。ところが、霊的なことにおいて、だれも他人の欠乏を補うことはできない。神の恵みは、すべての魂に豊かに与えられた。「かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい」という福音の使命はすでに伝えられた（黙示録22：17）。品性は譲渡することができない。だれも他の人に代わって信じることはできない。他の人に代わって、聖霊を受けることもできない。聖霊の働きの実である品性を、人に分与することはできない。「主なる神は言われる、わたしは生きている、たといノア、ダニエル、ヨブがそこにいても

、彼らはそのむすこ娘を救うことができない。ただその義によって自分の命を救いうるのみである」（エゼキエル14：20）。{COL 1349.1}

品性がわかるのは、危機においてである。「さあ花婿だ、迎えに出なさい」との熱心な叫びが声高々と真夜中にあがって、眠っていたおとめたちが目をさました時に、だれがその時のための用意をしていたかがわかる。両方とも不意におそわれたのであったが、一方には、非常の場合の用意があって、他方にはその用意がなかったのである。そのように、今日でも、何か急に予期しない災害とか何か死に当面するようなできごとの時に、神の約束に真の信仰をおいているかどうかがわかるのである。また、魂が、恵みに支えられているかどうかがわかる。恵みの時の終わりに、最後の大きなテストが来るのであるが、その時では、魂の必要を満たすのにはおそすぎる。{COL 1349.2}

10人のおとめたちは、この地上歴史の夕暮れ時に待っていた。すべての者は、クリスチャンであると言っていた。すべての者は招きを受け、名を持ち、あかりを持ち、神に奉仕をしていると公言していた。すべての者は、見たところ、主の現れを待っているように思えた。しかし、5人は、用意がなかった。彼らは、あわてふためき、ついに婚宴に列することができなかった。{COL 1349.3}

最後の日に、多くの者はキリストの国に入れられることを要求して、「わたしたちはあなたとご一緒に飲み食いしました。また、あなたはわたしたちの大通りで教えてくださいました。」「主よ、主よ、わたしたちはあなたの名によって預言したではありませんか。また、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって多くの力あるわざを行ったではありませんか」と言う。しかし、それに対して、「あなたがたがどこからきた人なのか、わたしは知らない。みんな行ってしまえ」と、言われるのである（ルカ13：26、27、マタイ7：22）。彼らは、この地上の生涯において、キリストとの交わりに入っていなかった。であるから、彼らは、天の言葉を知らず、天の喜びを味わうことができない。「いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知っていようか。そ

れと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない」（Ｉコリント2：11）。 {COL 1349.4}

「わたしはあなたがたを知らない」という運命の宣告ほど、人の耳に悲しくひびく言葉はない。あなたがなおざりにした霊の交わりこそ、婚宴の席の楽しげな群れの中に、あなたを加わらせるところの唯一のものであった。その場にあなたは加わることはできない。その光は、盲目になった目には見えず、その音楽は、まひした耳には聞こえない。世俗のためにまひした心には、その愛も喜びも、楽しいものとは思われない。人は、自分自身を天との交わりにふさわしくない 者にすることによって、天から除外されるのである。 {COL 1349.5}

「さあ、花婿だ」という叫びを聞いて目を覚まし、それから油のきれたあかりに油を補って、主を迎える用意をすることはできない。今、キリストとかけ離れた生活をしていながら、天ではキリストとの交わりにふさわしい者となることはできない。 {COL 1350.1}

たとえの中で、思慮深い女たちは、あかりとともに、器の中に油を持っていた。あかりは、彼女たちが待っていた夜の間、あかあかと燃え続けた。それは、花婿を祝う光を、いよいよ輝かしくしたのである。その光は、暗黒の中に輝いて、花婿の家と婚宴の場所への道を照らしたのである。 {COL 1350.2}

そのように、キリストの弟子たちは、世界の暗黒に光を輝かさなければならない。神の言葉は、聖霊の働きによってそれを受けいれる人の心を変える光になる。人々の心に、み言葉の原則を植えつけることによって、聖霊は、彼らの心の中に神の性質を芽生えさせる。神の栄光の光、すなわち、神の品性が、神に従う者の中に輝き出なければならない。こうして、彼らは、神に栄えを帰し、花婿の家、すなわち神の都と小羊の婚宴への道を照らすのである。 {COL 1350.3}

花婿が来たのは、真夜中であった。――最も暗い時であった。そのように、キリストがおいでになるのも、この地上歴史の最も暗黒の時である。ノアやロトの時代の状態は、人の子の来られる直前の世界の状態をあらわしていた。聖書は、この時のことをさして、サタンが全力を傾け、「あらゆる不義の惑わし」をもって働くと言っている（Ⅱテサロニケ2：9、10）。この最後の時代に暗黒、様々の誤り、異端、まどわしなどが急速に増加したことを見ても明らかにサタンが働いていることを知ることができる。サタンは、ただ世俗の人々を捕らえるばかりでなくて、わたしたちの主、イエス・キリストの教会であると称しているものをもあざむいている。大背教は、一寸先も見えない真夜中の暗黒のようになることであろう。これは、神の民によっては、試練の夜、嘆きの夜、真理のために迫害を受ける夜となる。しかし、その暗黒の夜から、神の光が輝くのである。 {COL 1350.4}

神は「やみの中から光」が照りいでるようになさった（Ⅱコリント4：6）。「地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた。神は『光あれ』と言われた。すると光があった」（創世記1：2、3）。そのように霊的暗黒の夜に、神は「光あれ」と仰せになる。神の民には、「起きよ、光を放て。あなたの光が臨み、主の栄光があなたの上にのぼったから」と言われる（イザヤ60：1）。 {COL 1350.5}

「見よ、暗きは地をおおい、やみはもろもろの民をおおう。しかし、あなたの上には主が朝日のごとくのぼられ、主の栄光があなたの上にあらわれる」（イザヤ60：2） {COL 1350.6}

世界は、神に関する誤った解釈の暗黒におおわれている。人々は、神の品性の知識を見失い、それを誤解し、誤って理解している。この時にあたって、神からの使命、よき感化を与え、救いの力をもった使命を宣言しなければならない。神の品性を明らかにしなければならない。世界の暗黒の中に、神の栄光の光、恵みと憐れみと真理の光が輝かなければならない。 {COL 1350.7}

預言者イザヤは、この働きのことを次のように述べている。「よきおとずれをシオンに伝える者よ、高い山にのぼれ。よきおとずれをエルサレムに伝える者よ、強く声をあげよ、声をあげて恐れるな。ユダのもろもろの町に言え、『あなたがたの神を見よ』と。見よ、主なる神は大能をもってこられ、その腕は世を治める。見よ、その報いは主と共にあり、そのはたらきの報いはそのみ前にある」（イザヤ40：9、10）。{COL 1350.8}

花婿を待ち望んでいる者は、「あなたがたの神を見よ」と、人々に言わなければならない。憐れみに満ちた最後の光、世界に伝えるべき最後の憐れみの使命は、神の愛の啓示である。神の子らは、神の栄光をあらわさなければならない。彼らは、その生活と品性において、神の恵みが彼らのためにどんなことをなしたかを表さなければならない。{COL 1350.9}

義の太陽の光はよい行いーー真の言葉、清い行いなどによって、輝き出なければならない。{COL 1350.1]0}

父の栄光の輝きであられるキリストは、世の光として、この世界に来られた。彼は、人々に神をあらわすために来られた。そして、キリストのことについて、「神はナザレのイエスに聖霊と力とを注がれました。よい働きをしながら……巡回されました」と、記されている（使徒行伝10：38）。また、ナザレの会堂で、彼は言われた。「主の御霊がわたしに宿っている。貧しい人々に福音を宣べ伝えさせるために、わたしを聖別してくださったからである。主はわたしをつかわして、囚人が解放され、盲人の目が開かれることを告げ知らせ、打ちひしがれている者に自由を得させ、主のめぐみの年を告げ知らせるのである」（ルカ4：18、19）。主は、弟子たちに、このような働きをするように、お命じになった。「あなたがたは世の光である。」「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい」と言われた（マタイ5：14、16）。{COL 1350.1]1}

預言者イザヤも、この事について、次のように述べている。「また飢えた者に、あなたのパンを分け与え、さすらえる貧しい者を、あなたの家に入れ、裸の者を見て、これに着せ、自分の骨肉に身を隠さないなどの事ではないか。そうすれば、あなたの光が暁のようにあらわれ出て、あなたは、すみやかにいやされ、あなたの義はあなたの前に行き、主の栄光はあなたのしんがりとなる」（イザヤ58：7、8）。{COL 1351.1}

このようにして、霊的暗黒の夜に、神の栄光が教会を通して輝き出て、失望した者を励まし、悲しむ者を慰めなければならない。{COL 1351.2}

わたしたちのあたり一面に、世の人々の悲しい叫びが聞こえる。どちらを向いても、欠乏と困窮に陥っている者がいる。人生の困難や悲惨を和らげ、救うことが、わたしたちの務めである。{COL 1351.3}

実際的な行為は、単なる説教以上に、はるかに効果がある。わたしたちは、飢えた者に食を与え、裸の者に着せ、家なき者に宿を与えなければならない。いや、それ以上のことをするように命ぜられている。魂の欠乏を満たすことができるのは、キリストの愛だけである。もし、キリストがわたしたちの中に宿っておられるならば、心は神からの同情と、キリストのような熱烈な愛の泉がせきを切ってわき出ることであろう。{COL 1351.4}

神は、わたしたちが、困っている人々に、贈り物をするだけでなくて、快活な顔をして希望にあふれた言葉を語り、愛のこもった親切な握手をすることを求めておられる。キリストは、病人をおいやしになった時に、人々の上に手をおかれた。そのように、わたしたちも助けようとする人々に近く接触しなければならないのである。{COL 1351.5}

世の中には、希望を失っている者が多い。彼らに、太陽の光を取りもどしてやろう。勇気のくじけた者が多い。彼らに、励ましの言葉を語り、彼らのために祈りをささげよう。{COL 1351.6}

命のパンが必要な者もある。彼らには、聖書を読んで聞かせよう。地上の医者や薬ではいやされない心の病に苦しんでいる者もある。わたしたちは、そのような人のために祈り、イエスの所へ連れて来よう。そして、ギレアデには、乳香があり、そこに医者がいることを知らせよう。 {COL 1351.7}

光は祝福である。それは、恩を知らず、神聖を汚す、腐敗した世界に、おしみなく宝を注ぎ出す普遍的祝福である。義の太陽の光もこれと同じである。全地は、罪と悲しみと痛みという暗黒に包まれているから、神の愛の知識によって照らされなければならない。天のみ座から輝く光は、宗派、階級、地位のいかんを問わず、どの人からも除外されてはならない。 {COL 1351.8}

希望と憐れみの使命は、地の果てまでのべ伝えるべきものである。望む者はだれでも、手を伸ばして神の力を自分のものとし、神と和らぎ、平和を得ることができる。異教徒も暗黒に閉ざされている必要はない。輝かしい義の太陽の光の前では、やみは消え去らねばならない。よみの力は、打ち破られたのである。 {COL 1351.9}

しかし、自分が与えられていないものを、他に分け与えることは、だれにもできない。人間は、神の働きにおいて、何1つ自分で造り出すことはできない。だれでも、自分の力によって、神のために光を掲げる者となることはできない。天からの使者が金の油を金の管に入れ、その油が金の器から聖所の燈台に流 1352れ込んでいくことによって、光があかあかと輝いたのである。人間も神の愛が絶えず注がれることによって、光を放つことができる。すべて、信仰によって、神と結合した者の心には、愛という金の油が豊かに流れ込んで、よい行いや、神に対する真心からの奉仕となって輝きでるのである。 {COL 1351.1]0}

聖霊という大きな無限の賜物の中には、天のすべての資源が含まれている。神の恵みの富が、地上の人々に流れないのは、神の側に何か制限があるためではない。喜んで受けさえするならば、だれでも聖霊に満たされるのである。 {COL 1352.1}

神の恵みの富、はかり知ることのできないキリストの富を、世界に伝えるための神の生きた通路になるという特権は、だれにでも与えられている。キリストは、他の何ものにもまして、キリストのみ霊と品性とを世界に代表する器があらわれるのを望んでおられる。人間によって救い主の愛があらわされることほど、世界が求めているものはない。人の心に喜びと祝福を与える清い油を注ぐことができる管を、全天は待っているのである。{COL 1352.2}

教会が世の光であるイエスの光を受け、インマヌエルの栄光に輝き、全く変えられた体となることができるように、キリストはあらゆる準備をなさった。彼は、すべてのクリスチャンが光と平和の霊的雰囲気に包まれることを望んでおられる。そして、わたしたちがキリストご自身の喜びを、わたしたちの生活の中にあらわすことを願っておられるのである。{COL 1352.3}

み霊の内住は、天の愛があふれ出ることによってわかる。神の満ちた徳は、献身した代表者を通して流れ出て、人々に与えられるのである。{COL 1352.4}

義の太陽は「その翼には、いやす力を」備えている（マラキ4：2）。そのように、真の弟子からは、だれからでも、生命と勇気と援助と真のいやしを与える感化が発散するのである。{COL 1352.5}

キリスト教は、ただ罪の赦しを与えるだけではない。それは、まずわたしたちの罪を取り去って、その空いた所を、聖霊の徳で満たすのである。これは、神の光を受けて、神にあって喜ぶことである。自己を全くむなしくして、絶えず、キリストの臨在の祝福を受けることである。キリストが魂を支配なさる時に、そこには、純潔と、罪からの自由がある。福音の計画の栄光と、その満ち満ちた完全さとが生活の中に完成されるのである。救い主を受け入れることによって、完全な平和、完全な愛、完全な確証の喜びを味わうことができる。神が確かにみ子を世の救い主として、世界に送られた証拠として、わたしたち

の生活の中に、キリストの品性の美とかぐわしさがあらわれるのである。 {COL 1352.6}

キリストは弟子たちに光を輝かすように努力せよと、お命じにならなかった。ただあなたがたの光を輝かしなさいと言われただけであった。もし、キリストの恵みを受けているのであれば、光はあなたのうちにある。障害物を取り除くならば、主の栄光は、あらわれるのである。光は暗黒の中に輝き出て、やみを追いやってしまう。こうしてあなたは自分の感化の及ぶ範囲で、光を輝かさずにはおられない。 {COL 1352.7}

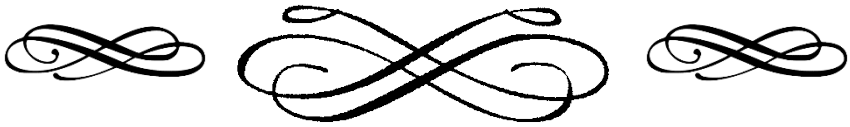
人間の姿の中にキリストご自身の栄光があらわれることは、天と人間との間を非常に近いものにするのであって、キリストの宿られるすべての魂の中に神の宮の栄光が見られるようになる。そして、内住のキリストの栄光に、人々は捕らえられるのである。こうして神に導かれた多くの魂の賛美と感謝とは、潮のごとくに、偉大な与え主なる神に栄えを帰すのである。 {COL 1352.8}

「起きよ、光を放て。あなたの光が臨み、主の栄光があなたの上にのぼったから」（イザヤ60：1）。この使命は、花婿を迎えに出る人々に与えられている。キリストは、力と大いなる栄光をもって来られる。彼は、ご自分の栄光と父の栄光とをもって来られる。彼は、すべての聖天使を率いて来られる。全世界が暗黒に閉ざされている時に、聖徒たちの住居にはどこにも光がある。彼らは、キリストが再びおいでになる最初の光をとらえるのである。主は、輝く栄光に包まれておられる。そしてあがない主なるキリストは、お仕えするすべての者の賛美をお受けになる。悪者は、み前から逃れ去るけれども、キリストに従った者は、喜びにあふれる。家長ヨブは、はるかに、キリスト再臨の時をながめて、「しかもわたしの味方として見るであろう。わたしの見る者はこれ以外のものではない」と言った（ヨブ19：27）。

キリストに忠実に従った人々にとって、キリストは日ごとの伴侶、親しい友であった。彼らは、神との密接な接触、絶えざる交わりを保ってきた。彼らの上に、主の栄光がの

ぼった。イエス・キリストのみ顔にあらわれた神の栄光の知識の光が、彼らの中に反映したのである。今彼らは、荘厳な王の大いなる輝きと栄光に浴して喜ぶのである。彼らは、心に天を持っているから、天との交わりに入る準備ができているのである。 {COL 1352.9}

彼らは、輝く義の太陽の光を受けて、頭をもたげ、彼らのあがないの近づいたことを喜ぶのである。彼らは、花婿を迎えて、「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる」と言うのである（イザヤ25：9）。 {COL 1353.1}

「わたしはまた、大群衆の声、多くの水の音、また激しい雷鳴のようなものを聞いた。それはこう言った、『ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、王なる支配者であられる。わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花嫁はその用意をしたからである。……』それから、御使はわたしに言った、『書きしるせ。小羊の婚宴に招かれた者は、さいわいである。』」「小羊は、主の主、王の王である……。また、小羊と共にいる召された、選ばれた、忠実な者たちも、勝利を得る」（黙示録19：6～9、17：14）。 {COL 1353.2}

終わりを見越して